
ランスIF 二人の英雄

散々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランスIF 二人の英雄

【Nコード】

N5750X

【作者名】

散々

【あらすじ】

本来ならばランスに出会う前に死ぬはずの運命であった、英雄候補であるオリ主。その彼の生存によって、物語はどのように変化していくのか…という感じの作品です。Rance1からのスタートです。

プロローグ（前書き）

原作リスペクトで行きたいと思います。

オリ主以外のオリはモブ以外無し、主人公は現状チートという程強くはありません。

プロローグ

一つの大陸があつた。魂の集合体である存在が、自らの暇つぶしのために創造した大陸。その存在は三体の神を創り出し、大陸の管理をさせた。悲劇と混乱の鑑賞を愉悦とする主を退屈させぬよう、三体の神は争いが永遠に続くようバランスを考え、長い時を掛け世界を構築していった。

魔王…モンスター…ドラゴン…そして人類…

優秀すぎたドラゴンの存在を反省して想像された人類はこの混乱の時代を生き抜くには余りにも弱く、長きに渡り魔王やモンスターといった強大な存在に蹂躪され続けることとなる。

人類誕生から約3500年…

人類は滅びてはいなかった。高い繁殖力によりその数を増し、知識により武器を生み出し、他の種族に対抗する力を身につけていた。長く魔人の奴隷とされていた暗黒の時代も存在するが、第6代魔王ガイの時代に奴隷から解放されることとなり、各地に国が誕生する。ヘルマン・リーザス・ゼスの三大国だ。これに古くから存在する「APAN」と多くの自由都市の間で、人類同士の争いが長く続くこととなる。魔王ガイの死と、それによる魔人進行からなる地獄が目前に迫っていることも知らずに…

GI1006

- 大陸北西部 とある森中 -

「はあっ…はあっ…」

その男は森の中を彷徨っていた。身につけている鎧はひび割れ、既に防具としての役割は果たしていない。身体中に傷を負っているが、一際目立つのはその胸の傷。モンスターに付けられたのである。その傷の深さから鑑みるに、おそらく…長くはない。

「15年か…流石にもう少し長く生きたかった…かな…」

自らも死期を悟っているであろう。そう男は呟いたとほぼ同時に、背後で物音がする。

「さて…最後まで楽に殺して欲しいものだが…」

自分を殺すであろう相手を確認するため、男は振り返る。

本来、男はここで死ぬ運命にあった。多くの平行世界の歴史の中で、GI1006年以降まで男が生き延びたことはない。

「人間…？ なぜこのようなところに…？」

そこに立っていたのは美しき女性であった。しかし、その存在は人間ではない。魔人。人類を蹂躪する存在が、そこに立っていた。

それは創造神の悪戯か。本来ここで死ぬべき運命であった人間が、仇敵とも呼べる魔人との邂逅により、生き延びることとなる。それは即ち、これより後に起こる人類と魔人の戦争に、多くの平行世界

の中で初めてその男が携わることとなるのだ。

-そして10年の時が流れる-

破壊と混乱の時代…

時代は英雄をもとめていた…

時代がもとめる資質を備えた人物は二人…

だが…

その英雄たる資質を備えた人物の一人は…

とつても自分勝手に

とつてもスケベで

とつても乱暴で

とても正義とは思えない男だった。

そしてもう一人は…

これは二人の英雄の物語である。

第1話 出会い

LP0001 7月

- 自由都市アイス -

「今回はこの仕事を引き受けて貰いたい」

とあるギルドビルの一室にある部屋で、男二人が仕事の話をしていった。話を切り出した男の歳は40才後半から50才というところだろうが、成金のような服を身につけ、葉巻に火を付けようとしている。この男の名前はキース・ゴールド、このキースギルドのマスターである。

「そろそろ、お前も結婚したらどうだ。なんなら俺がいい女を紹介してやってもいいぜ」

「ふん、くだらないことを言っていないでさっさと仕事の話をしろ」

それに答えたもう一人の男。薄手のプレートメイルとマントを身にまとい、ふてぶてしい態度で佇んでいる。彼の名はランス、キースギルドに所属する戦士にして英雄たる資質を備えた人物の一人だ。しかし、彼の行動理念は「全ては俺様のために」というものであり、美女とは犯してもHし、邪魔する奴は皆殺しという、とても英雄とは呼べぬものであった。ただ、その実力は本物であり、いつしか彼は一部の冒険者からは鬼畜戦士という通り名で呼ばれるようになっていた。

「せっかちな野郎だな。まあいい、この写真を見てくれ」

そう言い、白い封筒から取り出した写真には白いドレスを着た赤い髪の美しい娘と、青いドレスを着た黒い髪の娘が写っていた。

「ほー、なかなか可愛い娘たちじゃないか。グッドだ！」

「この娘たちを見つけ出して保護して貰いたい」

「なんだ、人捜しか。何者なんだ」

聞けば、赤い髪の娘はブラン家の次女で名をヒカリ、黒い髪の娘はファン家の長女で名をグアンというらしい。どちらも名家のお嬢様だ。

「ヒカリの方は3週間前パリス学園に通っていて行方不明になったそうだ。グアンは彼女のルームメイトで、ヒカリを自分で見つけ出すと息巻いていたそうだが、こちらも1週間前から行方不明だ。どちらも身代金の要求はない」

「ふむ、営利誘拐では無いのか。まあ、とにかく助け出せばいいんだろう？報酬は？」

「聞いて驚け、1人救出で20000GOLD、2人で40000GOLDだ！」

「なんだと！破格値じゃないか！どうしたんだ？」

ランスが驚くのも無理はない。普通、この程度の依頼なら1人1000〜2000GOLDが相場になる。それが10倍もの報酬が提示されたのだ。俄然やる気も湧いてくる。

「それだけ大事な娘たちなんだろう」

「がはははは！俺様にまかせておけ、すぐに解決してやる。じゃあな」

「それとグアンの方は…行っちゃったよ。まあ持って行った資料を読めばすぐに気がつくだろう…」

キースギルドを後にし、アジトである貸家へと帰る。そこで受け取った資料に目を通し、情報を整理する。普段であればこんな真面目に取りかかるようなランスではないが、何せ報酬が報酬だ。その上美女のおまけ付き。ここで俺様がかつこよく助け出せば、感動の余り簡単に股を開いてくれるかもしれない。いや間違はなく開く、などと真面目な顔でとんでもないことを平然と考えていると、部屋の奥から女性が現れる。

「ランス様、お茶が入りました」

お茶を持って現れたこの娘はシイル・プラインという。特徴的なピンクのもこもこ髪で、露出の高い白い装束を身につけている。今から3ヶ月ほど前に奴隷商人から15000GOLDで買い取った魔法使いだ。彼女には特殊な魔法が掛けられており、ランスの命令には絶対服従である。

「あの…次のお仕事、決まったのですか？」

「人捜しをする事になった」

簡潔に答え、ランスは資料の続きを読む。邪魔としては悪いと思いい、シイルは机の上にお茶を置き、部屋から退出しようとしたが、それはランスの声によって阻まれる。

「なんだと！グアンちゃんはジオの町近辺の洞窟をアジトにしている盗賊団と一緒にいたという目撃情報があるじゃないか！キースの野郎、大事なことを言い忘れやがって！」

「お、落ち着いてくださいランス様」

話の途中でさっさと切り上げた自分の失態は棚に上げ憤慨するラ

ンス。しかし、ランスがここまで怒るのにも訳がある。一つは現在ランス家の貯蓄は底をついており、是が非でもこの報酬は手に入れないといけないのだ。そして、もう一つはキースギルドの方針である。何もこの依頼はランスだけが受けたものではない。希望者が多ければ早い者勝ちというギルド方針であるため、手を付けるのが遅れば他の請負人にみすみす40000GOLDを横取りされかねない。

「急いで準備をしろ、シイル！すぐに出発するぞ！」

「はい、ランス様」

キースに文句を言って無理矢理うしバス代を出させ、ジオの町へと向かう。まだこの依頼を受けたものは少ないはず。今なら一番乗り確実だ。

「がはははは！40000GOLDと美女二人の身体はどっちも俺様のものだ！」

- 自由都市ジオ近辺の洞窟 盗賊のアジト内 -

「へっへっへ、今日も楽しませて貰おうかな」

「もう…家に帰してください…」

「まーだそんなこと言ってるのか？お前はもう一生俺たちの奴隷なんだよ！」

洞窟の奥には捕らえられ、さんざん汚されぬいたグアンと、いかにもな盗賊が二人。本来はもう少し盗賊の人数が多いのだが、他の盗賊たちは今外に出払っているため、アジトには三人だけだ。

自分にもこの男は向かってくるだろう。短剣を腰から抜き、目の前に立つ男に向かい声を荒げる。

「てめえ…なにもんだっ！ぶち殺されてーのか！」

「名乗る必要があるのか？…今から死ぬ奴に」

- 盗賊のアジト入り口 -

「ふんっ、手間取らせやがって。ここがアジトで間違いなさそうだな」

洞窟の前にはランスとシル、そして先ほどまで盗賊だった肉塊がらつ。ランスたちは運のいいことにアジトに戻る盗賊たちを偶然目にし、うしバスを途中下車してついできたのだ。そしてアジトの前についたと同時に用済みとばかりに後ろから不意打ちを仕掛けた。何人かには反撃してくるが、こんな盗賊に手こずるランスではない。みるみるうちに全員を皆殺しにした。

「さーて、グアンちゃんを俺様がかっこよく助けて一発やらせてもらおう」

「待ってくださいランス様、洞窟の中から誰か出てきます」

「んっ？…なんだとおおお！」

洞窟から出てきたのは二人。薄手の鎧とロングソードを装備した、どこからどう見ても冒険者である黒髪の男。両腕でグアンを抱えている。助かって気が抜けてしまったのだろうか、気を失っている。

「ま…間に合わなかった…」

「ん？おたくらは…なるほど、俺同様、依頼を受けた冒険者か。殺す直前に仲間が帰ってくるとか言っていたから警戒していたが、あんたらが片付けてくれたのか」

「あ、はい、そうです。私はシイルといいます。こちらはランス様で、私のご主人様になります」

グアンを抱えた男はそうランスとシイルに向かって話しかけるが、ランスは何かを考え込んで返事をしない。訝しげにランスを見ると、考えがまとまったのか、ランスがしゃべり出した。

「よし、殺そう。そうすれば金も美女も俺様のものだ。我ながらグッドアイデアだな、がはははは！」

「いきなりとんでもないことを言うな、あんたの主人は…」

「むっ、何を勝手に馴れ馴れしく人の奴隷に話しかけているんだ貴様」

「ランス様…一応自己紹介は済ませました…」

「なんだと、勝手なことをするなシイル、ええい、こうしてやる！」

「ひんひん…痛いですが、ランス様…」

両拳でシイルの頭をぐりぐりとし始める。余りにも理不尽な光景である。

「一応ほとんどの盗賊を片付けてくれた礼に、報酬を分けてやってもいいと思っではいたんだがな…」

「なに？それを早く言え。なかなか下僕として見所のある奴じゃないか。分けると言わず全部寄越してしまってもいいんだぞ？」

シイルを解放し、ランスはまだ名も知らぬ冒険者に向き直る。

「ふふっ、おもしろい奴だな、あんた」

「で、貴様の名前はなんというのだ？男の名前など覚える気はないが、こつちだけ名乗っているのは気に食わん」

「ああ、名乗りが遅れたな、すまなかつた」

それは、本来ならあり得ぬ出会い。世界の理から外れた男たちの邂逅。この出会いが人類同士、果ては魔人との争いに終止符を打ち始まりであったことを、このときはまだ誰も知らなかった。

「俺の名はルーク。キースギルド所属の冒険者だ」

第1話 出会い（後書き）

「人物」

ルーク・グラント（オリ主）

LV 45 / 200

技能 剣戦闘LV2 対結界LV2 冒険LV1

キースギルド所属の冒険者。歳は25才でランスの7つ上。本作の主人公の一人で、英雄候補。GI1006年に行方不明となるが、GI1015年にキースギルドに戻ってきてキースを驚かせた。その間の動向は謎に包まれている。

ランス

LV 10 /

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV1 冒険LV1

キースギルド所属の冒険者。本編の主人公にして、本作の主人公の一人。英雄候補。才能限界に上限が無く、世界のバグとされている。

シイル・プライン

LV 13 / 35

技能 魔法LV1 神魔法LV1

ランスの奴隷の魔法使い。ランスのベストパートナー。

「技能」

対結界（オリ技能）

結界を無効化する。LV1で魔法結界などの人類の生み出した結界を、LV2で魔人の無敵結界をも無効化し、直接ダメージを与えることができる。魔剣力オスや聖刀日光と違い、効果は本人のみで

周りの人間がダメージを与えられるようにはならない。ランスの才能限界同様世界のバグであり、ルークのみが保有する技能である。

第2話 奇妙な協力関係

・ジオの街 酒場・

街の外れにある小さな酒場。そこそこに繁盛しているようで、店内には多くの冒険者たちがいた。冒険の成果を喜び合うもの、静かに飲むもの、酔いが回って口論を始めるもの、酒場の風景としてはよくあるものだろう。その酒場の奥のテーブルにランスたちはいた。

「おごつて貰うのはいいが、分け前はまた別だぞ。わかっているな」
「わかってるって。人の好意は素直に受け取るもんだぞ」

水割りを片手にランスがルークに念を押す。ここの払いは全額ルーク持ちだ。先の礼も兼ねてというのが一つ、一応ギルドの先輩だからというのがもう一つの理由だ。

「しかし酒はまあまあだが、料理が不味いな。こんなに不味いへんでろばなど俺様は認めん」

「酒場の料理なんてこんなもんだろ。ほれ、シイルちゃんも遠慮せずにご飯を」

「すいません、いただきます」

奢りでありながら文句ばかりのランスに呆れながら、ウォッカを一口飲み、シイルにはあんを勧める。

「で、仕事の話に戻ろうか。グアンちゃんから聞いた話だと、ヒカリちゃんをさらったのは女忍者だったらしい。深夜にシャワーを浴びていたところを襲われたとのことだ」

「女忍者ねえ…そんなもんがまたいたのか」

「まあ大陸にいるのは珍しいな。JAPANではいまだに多く存在するようだが」

グアンは酒場の近くにある宿で寝かせている。宿に運んだあたりで一度目を覚まし、誘拐時の状況をルークに話してくれたのだ。その後は疲労からか、すぐにまた眠り込んでしまった。

「ヒカリちゃんとグアンちゃんの誘拐は全くの無関係だな。一人救出出来たのはめでたいが、ヒカリちゃんの件は情報を集める必要があるな」

「忍者が犯人などたいした手がかりにもならんぞ、まったく…」

「とりあえず俺はグアンちゃんをリーザスに送り届けて、その後はリーザスで情報収集をするつもりだ。そっちはどうするんだ」

「ふむ…シイル、お前パリス学園に入学して情報を集める」

「えっ、学校に行かせてもらえるのですか？」

「ふっ…」

急に話を振られたシイルはよくわからない返事をする。しっかりしていると思っていたが、思ったより天然なのか？と考え、ルークは少し笑ってしまった。

「ばか、情報を集めるんだよ、情報を。ヒカリちゃんと親しかった友達などを中心に調べる」

「はい、わかりました」

「がはははは、グアンちゃんの分の20000GOLDは山分けになっちゃったが、もう20000GOLDは必ず俺様が全部もらうぞー！」

「まったく、いつから分け前が半分になったんだ…で、ものは相談なんだが、この事件お互いに協力し合わないか？」

「は？いきなり何を言い出すんだ？俺様は男と協力し合う気はないぞ」

「いや、こちらとしては早く救出して親御さんを安心させてあげたくてな。それにそちらは知らないだろうが、この案件いつも以上に急ぐ必要があるぞ」

きっぱりと協力の申し出を断ったランスに対し、ルークは意味深なことを言い出す。

「どういづことですか？」

「ええい、もつたいぶらずにさっさと急がなきゃいけない理由を話せ！」

協力する気のなかったランスも話の内容は気になったのか、飲み干したグラスを机に強く置き、声を荒げる。

「いや、俺が仕事を受けた段階でラークとノアもこの案件に興味を持っていて話をキースがしてな。今の仕事が片付いたら間違いない乗り込んでくるぞ」

「げっ、あいつらか…ノアさんはかわいいから許すが、あの野郎弱いくせに調子に乗りやがって…」

ランスが嫌な顔をするのも無理はない。ラーク&ノアといえは美男美女コンビとして有名な冒険者で、今までにいくつもの困難な事件を解決してきた強者だ。キースギルド所属の冒険者の中ではトップクラスに名前が売れており、彼らがこの案件を引き受けたら20000GOLDとヒカリちゃんGETTの計画に暗雲が立ちこめる。

「むむむむむ…」

「報酬は5：5。お互いにいい提案だと思うがね？」

いつもならば、どうせ俺様が一番に解決すると断っていただろう。しかし、今は本格的に金がないのだ。先の分け前を無理矢理折半に持ち込んだが、10000GOLDでは借りている金を返したら、しばらく遊んで暮らすには心許ない。やはり最低でも20000GOLDは欲しい。それに…

「ぐぬぬぬ…そうだな、今回だけは協力してやらんこともない。ただし、報酬は7：3だ！こっちは2人だからな」

「オーケー。6000GOLDでも破格だし、別にいいぜ。これからしばらくは協力関係だな。仲良くしようぜ」

「よろしく願います」

「ふん、男と仲良くする気などないわ」

シイルが返事をする横で、追加できた水割りを飲みながら悪態をつく。ルークは両の手のひらを上にし、やれやれといった姿を取るが、シイルは内心珍しいこともあるものだと思っていた。いくら時間もお金もないとはいえ、あのランス様が男性と組むなんて…と。

ランス自身気づいていなかったが、先の理由以外にもう一つ組んだ理由が存在していた。ランスは、ルークの雰囲気はどこか懐かしさを感じていたのだ。同じギルドに所属していながら顔を合わせるのとはこれが初めてで、そんなことがあり得るはずがないのに、以前に感じたことのあるような懐かしさ。その理由をランスとルークが知るの、かなり先のこととなる…

1 週間後

- リーザス城下町 -

シイルは途中入学の審査に楽々合格し、パリス学園への潜入に成功した。ルークはグアンを家族の元に送り届け、リーザスで情報収集を続けている。そしてランスは二人から遅れること1週間、パリス学園がある王都リーザス城へと到着していた。協力関係だとばれないようにするためである。まずランスが目指したのはパリス学園潜入調査をしているシイルから情報を聞く手はずとなっているからだ。パリス学園に到着すると、裏口に回った。女子校なので見つかると面倒だからだ。

「シイル…」

裏口に到着すると、ランスは横にいる人にも聞こえないような小さな声でシイルを呼ぶ。3分ほどでシイルが白い学生服を着て現れた。あのような小声でも呼び出せたのは、初級魔法であるリーダーのおかげである。本来相手の考えていることを読む魔法だが、応用すればこのような使い方も出来るのだ。

「お待たせしました」

「遅いぞばか。で、何かわかったか？」

「ヒカリさんですが、学園長のミンミン先生から特別生徒にされていた優秀な生徒さんだったみたいですよ」

「ふーん、他には？」

「その他は、なにも」

「使えん」

「すみません：あ、私もミンミン先生から特別生徒にもらったんですよ」

ランスは嬉しそうに話すシイルを見る。こうして見ると白い服が中々に似合っていてかわいいかもしれない。

「あ、ランス様、この服中々似合っていると思いませんか？」
「似合わねえよ、ばか。とりあえずその茂みでやるぞ」

有無を言わず茂みに連れ込むランス。1週間女を抱いていなか
ったため相当溜まっていたらしい。

「グツドだ」

「ひどいです、ランス様…」

「しっかり調査しておけよ」

一発抜いてすっきりしたのか、ランスはパリス学園を後にし、中
央公園へ向かう。今度はここでルークと落ち合う約束になっている
からだ。

「ちっ…少し早く着きすぎたか。ルークの奴、気を利かせて早く来
ておけてんだ」

「あの…」

声を掛けられ振り向くと、買い物かごを両手に重そうに抱えた娘
が立っていた。

「なんのようだ？」

「おサイフを無くしてしまったの。一緒に捜して貰えませんか？」

見れば中々にかわいい娘である。良い事を思いついたと、いやら
しい顔をしながら返事をする。

「捜してやってもいいが、報酬は？」

「へ？」

「こっちはプロなんでな。報酬がないと働かんぞ。ああ、あんたの身体でもいいな」

サイフ捜しにずいぶん大げさなことを言うものである。

「そ…そんな……わかりました…」

顔を真っ赤にしながら、娘は小さな声で言った。これは楽しみだと笑みを浮かべ、どこでサイフを落としたのかを問う。

「あの…この公園なんです」

ランスは公園をぐるりと見渡す。あまり大きな公園でなく、開けた場所でもあるため、サイフが落ちていれはすぐに目につくはずだが、見当たらない。

「見当たらんぞ。もう取られたんじゃないのか？」

ランスが振り返ると、そこにいたのはさつきまでの娘だが、服がさつきまでとは違う。黒装束に身を包み、手にはくないとランスのサイフを持っていた。

「ええ、サイフは見つかったわ。ありがとう」

「お、俺様のサイフ…」

「この件からは、手を引いた方がいいわよ。死にたくなければね」

「自分から姿を現してくれるとはな、ずいぶんと優しい誘拐犯さんなこつて」

突然の声に娘が振り返ると、くないが弾かれ、手に持っていたサ

イフも奪われてしまう。

「これは返して貰うぜ」

「くっ…」

娘は懐から煙り玉を出し、地面に投げる。娘の姿を煙が包み、煙がはれる頃には娘の姿は風のように消えてしまっていた。

「おお、ルーク！助かったぞ。まあ俺様一人でもちゃちゃっと取り返せたがな」

「まあ、そういうことにしておいてやるよ」

「しかしあの女、次にあつたら絶対に犯してやる！」

出し抜かれたのが相当腹に立ったのか、声を荒げるランス。サイフをランスに返し、ルークはベンチに腰掛ける。

「で、何か手がかりはわかったのか？これで何もわからなかったとか言ったら、報酬は9：1になるぞ」

「勝手なことを…一応有力な情報を手に入れたが…この案件、俺らの想像以上にやっかいなものかもしれん」

「どついうことだ？」

日が落ち、辺りが暗くなってくる。そのせいなのか、あるいは別の理由からか、ルークの表情が暗くなる。

「俺が手に入れたのは、ヒカリちゃんと思わしき女性がリーザス城に連れて行かれるのを見たという情報だ。この案件、リーザスのお偉いさんが関わっているな」

第2話 奇妙な協力関係（後書き）

「人物」

ラーク

LV 18 / 35

技能 剣戦闘 LV1

キースギルド所属の冒険者。コンビを組むノアと共に多くの依頼を解決させてきた有名な冒険者である。

ノア・セーリング

LV 15 / 33

技能 神魔法 LV1

キースギルド所属の冒険者。コンビを組むラークと共に多くの依頼を解決させてきた有名な冒険者である。

キース・ゴールド

アイスの街にあるキースギルドの主。ごつい見た目と違い、その経営手腕は本物である。ランスやラークの過去を知っている数少ない人物である。

グアン・ファン・ユーリイ（オリモブ）

ヒカリのルームメイト。原作では名無しで、誘拐事件にも巻き込まれない。名前はアリスソフト作品の「零式」より。ファンの方、すいません。

女忍者

いったい何者なんだ…

「技能」

戦闘

その武器での戦闘を得意とする才能。

魔法

攻撃魔法や補助魔法といった魔法を使う才能。

神魔法

回復魔法や浄化魔法を使う才能。

「料理／食材」

へんでろば

シチューのような料理。ランスの好物。

うはぁん

高級果物。

ウオツカ

ヘルマン国の地酒。アルコール度数が高い。

第3話 後に語られる出来事

- リーザス城下町 -

「だから、通行手形を持たない方はお通しできません」
「ええい、いいからさっさと通せ」

ランスは今リーザス城の前にいた。昨日ルークからリーザス城の中にいる可能性が高いという情報を聞いたため、朝から城の中に無理に入ろうとしているのだ。

「それ以上すると捕まえて牢獄に入れますよ」
「げっ… とりあえず戦略的撤退だ！」

その場から逃げ出すと公園でルークと落ち合う。ルークの方はというと、通行手形を手に入れる手段がないか朝から情報収集をしていたのだ。

「強行突破は無理だな。そっちの方は何か手は見つかったか」
「そうだな… それにしても疲れがとれん。若干風邪気味だし。昨晩は誰かさんのせいで街の外で野宿することになったからな」

そう、昨晩二人は街の外で野宿をしていた。それというのはランスが昨晩、一人で宿を切り盛りしているJAPAN出身の奈美という娘に襲いかかり、宿を追い出されてしまったためだ。因みに奈美は柔道五段の持ち主で、ランスはあっさりと投げ飛ばされてしまい、結局手は出せなかった。

「ふん、あれは俺様のせいじゃない。お前が「JAPAN出身…まさか忍者では…」とか呟くから確かめようとしただけだ」

「…記憶にないな」

「嘘付け！」

思いつきり目をそらしながら答えては、ランスじゃなくてもそう言いたくなる。

「まあ昨晚のことは置いておいて、話を戻そう」

「お・ま・え・が、始めたんだろぅが！」

「…通行手形は中々持つている人物が少ないみたいでな、どうやら城下町の住民だと酒場のマスターが持つているらしい」

「なんだ、それなら話は早いな」

「…いい加減ランスの行動パターンも読めてきたが、一応聞いておこう。どうするつもりだ？」

「サクツと殺して奪えばいい。うむ、さすが俺様」

「予想通り過ぎて涙が出てきたよ。まあ、殺すのは別にして、とりあえず酒場に向かうか」

城下町の端にある酒場「ぱとらっしゅ」に向かう。途中買物していたシルと出会い、真面目に潜入調査しろというランスの雷が落ちていた。シルは学園長の頼みと一言かけていたが、問答無用でぐりぐりのお仕置きを受けていた。さすがに不憫である。

酒場に到着し、中に入ると、客は余りおらず、店の中に辛気くさい空気が漂っていた。

「なんだ？ 繁盛しておらんではないか。これなら殺しても誰からも文句は出ないな」

「文句が出ないかは知らんが、この空気はあのマスターのせいだな。明らかに負のオーラを出している。おかしいな…以前にもこの店は

来たことがあるが、もつと剛胆な性格だったと思ったが…」

二人はカウンターに座り、酒を注文する。ランスが今にも斬りかかってしまいそうなので、どのように話を切り出そうか早急に考える必要があるな、とルークが考えていると、幸いなことにマスターの方から話しかけてきた。

「見た目から察するに、あんたら強い戦士なんだろう？少し頼みがあるんだが…」

「ふん、ゆつとくが俺様は安くな」
「どういう要件だ？」
「…おいつ」

せつかくマスターと仲良くなる切っ掛けを自らぶち壊しにしてしまいそうだったので、ランスの発言を遮ってルークは聞き返す。ランスは不満そうだ。

「俺の娘が盗賊にさらわれちまったんだ。救い出して欲しい」

不満そうであったランスが急に真面目な顔になり、口を開く。

「その娘…美人か？」

「全然関係ないよな、今」

「親の俺が言うのもなんだが美人だ」

「答えるなよ、おやじ…しかも親バカかよ…」

ルークの頭が痛くなってきたのは酒のせいではないだろう。風邪が悪化しなければいいが。

「がはははは、ならこの俺様と下僕その1に任せておけ。大船に乗ったつもりでいろ」

「誰が下僕だ。盗賊の目撃情報なら情報屋の娘から今朝聞いたぞ。」

第3地区の外れだ」

「よし、早速向かってサクツと救出だ！」

「ありがとう、頼んだぞ。ただ報酬はあまり多くは払えなくてな…
800GOLDで頼む」

「いや、500GOLDで良い。その代わり通行手形を譲ってくれないか？」

「ん？あんなもんでいいなら良いぜ。最近は何事にも行かないしな」

これで娘さえ救えば通行手形が手に入る。殺すことにならなくて良かったとルークはほっとする。ランスも美人の娘と聞いて俄然やる気だ。殺そうとしていたことなど、もう忘れていよう。

・リーザス城下町近辺の洞窟 盗賊団のアジト・

「最近似たような洞窟を拠点にした盗賊を倒したような気が…何か関係あるのか？」

「何ぶつぶつ言ってるやがる。お前の独り言は二度と信じんぞ。ここがアジトだな。早速入るぞ…なんだ！？生意気にも結界なんぞ張りやがって、これじゃあ入れないじゃないか！」

ランスが喚く横をすり抜け、ルークは結界に触れる。すると結界はルークに対して無効化されたため、ルークは何事もなかったように結界を抜ける。

「なんだ？なぜお前は入れているんだ？」

「ああ、結界を無効化して入っただけだよ」

「なんだ、お前そんな器用な魔法も使えたのか。では俺様も入ると

するか」

魔法という訳ではないんだが…まあ説明も面倒だしいいか、とルークは自らの結界無効化能力の説明を放棄する。というのも、そもそもルーク自身もこの能力に関してよくわかっていないからだ。防御結界や魔法結界を無視できるな！、便利だな！、程度の認識だ。

「って、入れんではないか！」

「無効化したのは俺だけだからな。結界事態はまだ残ってるから、ランスは入れないぞ」

「ズルだぞ、貴様！これでは美人の女の子を助けられんではないか！俺様も入れろー！」

「大声で騒ぐな、気づかれるだろ…は…はくしょん！！！」

「明らかに俺様の声よりお前のくしゃみの方がでかいだろうが！！！」

ゴゴゴゴゴゴ…

風邪気味のルークがくしゃみをすると同時にアジトに掛かっていた魔法結界が解ける。さすがに呆然とする二人。

「…まさかくしゃみで結界を無効化するとは。俺様が爆裂くしゃみと名付けてやるう」

「違うから。どう考えても偶然くしゃみが結界解除の合い言葉だっただけだから」

随分不用心な結界である。まあ盗賊は深く考えていなかったのだろう。意気揚々と洞窟の中に入っていく二人。洞窟内にはいたるところに燭台が立っており、思ったよりも明るく歩きやすくなっていった。思ったよりもちゃんとした組織かもしれない。そうルークが考

「むう…特に何も見当たらん。そつちはそうだ？」

「俺様の方も見当たらん。ええい、厄介なことしやがって。絶対に皆殺しだ！」

「おや、盗賊以外のお客さんは珍しいね？」

と、背後から声を掛けられ二人は身構える。ランスとルークという一流の冒険者が、声を掛けられる直前まで全く気配に気がつかなかったのだ。何者だ…ルークの頬に汗が流れる。振り返るとそこにいたのは壁に埋め込まれた赤い髪のおっさんであった。

「焦らせやがって。なんだ貴様は？壁の中にいるとか変態か？」

「僕の名前はブリティシユ。好きで壁の中にいる訳じゃないよ。ここから出して貰えると嬉しいな！」

「結界とは違うな。呪いの類か…？だとしたら出す手段を持ち合わせていないな…」

「そんな…」

後の歴史に刻まれる出会いとは、得てしてこのようなものである。ブリティシユも、ランスも、そしてルークもそれを知る由もないが、この出会いは後に人々の間で語り告がれ、教科書にも載るような出来事となる。

LP0001 8月 二人の英雄がかつての英雄と出会う…と。

第3話 後に語られる出来事（後書き）

「人物」

ブリティシユ

LV 50 / 100

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV2

リーザスの近くにある盗賊団の洞窟の壁に埋め込まれている男。その正体は、今より1500年ほど前にエターナルヒーローと呼ばれるパーティーを率いたリーダーであり、英雄と呼ばれていた。魔法使いシンの禁呪を受け、壁に埋め込まれる。新陳代謝が殆ど無くされており、そのために長寿となる。壁の中での長い年月を経て精神を病み、かつて英雄と呼ばれていた頃の面影はない。

堀川奈美

リーザス城下町の宿「あいくくりむ」を一人で切り盛りする苦勞人。柔道五段。

ムララ

かぎりない明日戦闘団の構成員。本編ではランスが初めて戦う中ボス的な扱い。しかし、洞窟内を歩いているいもむしDXより弱かったりする。

「技」

リーダー

対象の思考や情報を読む初步魔法。複雑な思考やシールドをさせていると読むことが出来ない。

「その他」

エターナルヒーロー

1500年前に魔王ジル討伐のために集まったパーティー。過去から現在に至るまで、これほどの者たちで構成されたチームは無かつたという。構成員は戦士ブリティシユ、魔法使いホ・ラガ、神官カフェ、侍日光、盗賊力オスの五人である。GL0533年、その消息を絶つ。

GOLD

この世界の通貨単位。1GOLDは約100円。モンスターの間では、キラキラ光ってきれいなこれを多く持っている幸せになれるという伝説があり、モンスター同士で取り合っており、強いモンスターほど多くのGOLDを持っている。

年号

創世記

Kukuu0001}2014 魔王ククルククルの時代

AV0001}0721 魔王アベルの時代

SS0001}0500 魔王スラルの時代

NC0001}0960 魔王ナイチサの時代

GL0001}1004 魔王ジルの時代

GI0001}1015 魔王ガイの時代

LP0001} 魔王リトルプリンセスの時代

第4話 決戦！かぎりない明日戦闘団

- 盗賊団アジト 最奥の部屋 -

「ふへへへ、おら、もっと良い声を上げな」

「いや…もうやめて…」

部屋の中では40才前後と思われる男が少女を犯していた。この男が盗賊たちのリーダー、名をライハルトと言う。周りには部下と思われる盗賊が五人。その内の四人も他の少女たちを犯している最中であつた。その光景を若干冷やかな目で見ているのは、盗賊団唯一の女性構成員だ。

「これだから盗賊家業はやめられねえな。お前らも楽しんでるか？」

「ええ、最高ですぜリーダー。かぎりない明日戦闘団に入って良かったですぜ」

「…何が最高なもんか。貧しい人たちに盗んだものを分け与える正義の盗賊団だと言われて入ってみれば、中身はただの下衆な盗賊団。さっさと抜きたいが、感じているのかしっかりとあたしの行動を見張ってやがる…」

女盗賊が不満そうにしているのを無視し、他の盗賊はご機嫌に話し合う。

「そうだな、俺の作ったこのかぎりない明日戦闘団は最高だ！その内せかいを股に掛けるぜ！」

「おお、さすがですぜ、リーダー！」

「残念だがそんな日は永久に来ないな」

部屋の入り口から声を掛けられ、全員が入り口の方を見る。そこに立っていたのは戦士二人。ランスとルークだ。二人はプリティシユを解放する手段がなかったため、ひとまず彼と別れたのだ。その際、いつか必ず助けに来るとルークが約束すると、プリティシユは感謝し、階段の結界を無効化する靴の場所を教えてくれたのだった。靴は一足しかなかったが、ルークは自分で無効化できるため、こうして奥の部屋までたどり着いたのだった。

「なんだてめえら、どうやってここまで来た！」

「答える必要はないな。その娘たちを解放して貰おうか」

「面白いことを言うな。俺の機嫌のいい内にさっさと帰りな」

ルークは部屋を見回す。捕まっている娘は一人ではなかった。中にはまだ年端もいかない少女もいた。そのような少女も盗賊たちはお構いなしようで、部下の一人が調度犯している最中だった。そのことに静かに怒りを燃やす。

「まあ…こいつらに生きている資格は…ないな」

「当たり前だ。世界中の美女は全て俺様のものだ。あの少女も将来的には美人になっただろうに…むかむか」

「調子に乗るなよ、やっちまえてめえら!!!」

そうリーダーが声を上げると、近くに控えていた部下たちが襲いかかってきた。

「俺様はあのリーダーを殺る。雑魚は任せたぞ」

「ボス一人と部下五人…さり気なく楽な方を選びやがって…しっかりと殺せよ」

「当たり前だ、お前の方はちゃんとあの女盗賊だけは生かせよ。中々に美人だからな」
「善処する」

そう返事をし、ルークは部下五人と対峙する。部屋の中にいた場所が悪く、部下はリーダーに向かうランスの間に割ってはいることは出来なかった。一対一と五対一の構図が完成する。

「バカが、五対一で勝てると思っているのか？」

「随分無謀な男もいたもんだね。悪いけど死んで貰うよ」

「ご心配どうも。が、複数人を相手にするのは割と得意でな」

部下の中に魔法使いと思われる者がいなかったことに内心ほっとする。負けはしないだろうが、やはり戦いつらくはなるからだ。入り口や階段の結界はどこかで盗んできた魔法製品で張ったのだろう。そう考えながら、ルークはロングソードを逆手に持ち、腰を少し落とす。盗賊たちは何かする気かと身構えるが、まだ振り抜いたところで当たる距離ではない。そのまま突っ込んでくる気だろうか、と女盗賊は考えていると予想外の事が起きた。ルークはそのまま剣を左から右に横払いで振り切ったのだ。当然剣は空を切る。

「なんだあ、射程もわからねえ素人か？」

「恐怖の余り訳わからなくなってるんじゃないかねえか？」

「なるほどな。ぎやはははは…ん？」

大声で笑っていた男は不意に違和感を覚え、自分の身体を見る。おかしい。なぜ俺の上半身と下半身がずれ…。男の意識はそこで永久に途絶えた。周りの盗賊たちの目が、驚愕で大きく開かれる。

「……なっ！……！！！！」「……」

「…真空斬」

自らの放った技の名前を良い、再び構える。今の男を一番先に殺したのにも理由がある。他の盗賊は短剣装備だが、この相手だけ斧を装備していたのだ。二発目の準備をしているのを察し、盗賊たちから血の気が引く。

「あれを使わせるな！突っ込めー！！」

「ふん、技を放つ手間が省けたな」

焦った盗賊たちが迫ってくるのを見て、ルークは素早く真空斬の構えを解き、初めに迫ってきた盗賊を斬り伏せる。長剣と短剣だ、リーチの差がありすぎる。その盗賊は何も出来ないまま倒れ込む。正面の男が倒れきるとほぼ同時に、左右から二人目の男盗賊と女盗賊が攻撃を仕掛けてくる。男盗賊の短剣を剣で防ぎ、女盗賊の攻撃は肩だけで避けながら、彼女の腹に蹴りを入れる。

「がっ…」

女盗賊が倒れ込む際、その手に持っていた短剣を左手で奪い取ると、右の男盗賊に向かって斬りつける。頸動脈を捕らえたようで、ぐあ…と声にならない声を上げながら、血飛沫を上げそのまま崩れ落ちる。

「くっ…くそっ…！！」

他の三人と違い、命令するだけで自分は襲いかかってこなかった盗賊がいた。ルークは知らないが、この男が副リーダーだったのだ。典型的な上から命令するだけの臆病で無能な男。ようやく腰から短剣を抜き、身構えるが…

「遅い！」

盗賊が気づいた時には既に目の前に短剣が迫って来ていた。ルークが左手に持っていた短剣を投げたのだ。その刃はそのまま盗賊の額に突き刺さり、その手から腰から抜いたばかりの短剣がこぼれ落ちる。

「ぐっ…命乞いはしない。殺せ…」

腹を押さえながら倒れ込んでいる女盗賊が呻く。

「悪いが殺すつもりはない。あんただけさっきの反吐が出る乱交に参加していなかったからな。女…というのもあるだろうが、あいつらを見る目が明らかに下衆を見る目だった」

「それだけの理由かい？一応あたしも盗賊だよ。ある程度の悪行はしてきている」

「別に時代が時代だからな。盗賊それ全てを否定する気はない。俺ら冒険者も、一歩間違えれば似たようなものだからな」

独自の考えを女盗賊に向かってしゃべると、ふと目を細め若干のさつきを含めた口調になる。

「もちろん…彼女たちの解放を邪魔しようとするなら別だがな」

「いや…邪魔する気はないよ。あたしらの負けだし、ああいった誘拐は正直不本意だった」

「良識があるようでこちらも助かる」

「名前…聞いても良いかい…？」

「ルークだ。あんたは？」

「シャイラ…シャイラ・レスだ」

「良い名前だ。そういえば、ランスはどうしたかな」

目の前の戦いに集中していたルークもシャイラも、ランスとリーダーの戦いに気を向けていなかった。二人が戦っていた方向を見ると、盗賊団のリーダーであるライハルトは既に床に倒れ伏し、命ない肉塊となっていた。その少し奥でランスは先ほどまでライハルトに犯されていた少女を無理矢理犯していた。

「お前なにしてんだーっ！！」

「見てわかるだろう、ナニだ！がはは、グツドだ」

「うつつ、助かったと思ったのに…」

「何を言う。しっかりと助かっているではないか。これはその分の報酬だ」

「無理矢理報酬を貰うな。さて、娘たちを解放しないと。酒場の親父の娘さんも捜さない」と

「あっ…それなら、私とその娘です…んっ…」

「おお、君があのお親父の娘か。確かに言うとおりの美女ではないか、がはは」

偶然にもランスが犯していた少女が酒場の娘だった。名前はパルプテックス。あの親父、どんなネーミングセンスだ。ランスがお楽しみの間、他の娘たちの鎖を解き、ようやく事を終えてランスから解放されたパルプテックスも加えてリーザスに戻ることにした。

「俺は彼女たちを連れて先に戻るが…何でこの洞窟に残るんだ、ランス？」

「ふっ…少しやり残したことがあってな。案内に彼女を置いておいてくれればいい。後で向かうから酒場で待っている」

「まあ案内くらいいいけどな…だがこのアジトはたいしたもの置いてねーぜ」

ランスはシャイラを指し、シャイラがそれに答える。娘たちを早く家まで送り届けてあげたいという思いから、ルークは特にその内容は聞き返さず、先にリーザスへと向かう。結論から言うと、ルークとシャイラは見誤っていた。ランスの性欲をだ。ランスと二人で残ることの危険性は考えていたが、先ほどまでパルプテックスを犯していたのだ、まさかな…と。ルークが洞窟から出ていったのを見送ると、ランスの目が怪しく光る。

・リーザス城下町 酒場「ぱとらっしゅ」・

「あんたらなら娘を救ってくれると信じていたよ、ありがとう」

「もう一杯どうぞ。このブランディ、おいしいのよ」

「確かに飲みやすいな」

カウンターでルークは親娘と会話しながらランスを待っている。助けてくれたお礼の通行手形は先ほど貰い、今飲んでいる酒もサービスだ。

「あんたを気にいつちまった。どうだ、俺の娘を貰ってくれないか？」

「もう、お父さんたら…変なこと言わないで」

冒険者をやっているればこの手の話はたまに出る。慣れたように断りの言葉を入れようとするルークだが…

「それに私…ランスさんの方が…」

さすがに今の発言にはへこんだ。おかしい。さっきまでの洞窟での流れのどこにランスに惚れる要素があった。納得がいかない顔で酒を飲んでいるとようやくランスが到着した。

「あ、ランスさん。先ほどはありがとうございました」

「がははは。何、パルプテックスちゃんもグッドだったぞ」

「ぽっ…」

「遅かったな。洞窟でいったい何をしていたんだ？」

ルークは顔を赤らめるパルプテックスに対し、「ぽっ…じゃねーだろ！」と心の中で突っ込みながらランスに問う。

「決まっているだろう、ナニだ！」

「…はっ？」

「シャイラちゃんの身体はグッドだったぞ。おっぱいもでかったし。がはは」

「ちょっと待て…まさか、やり残した事ってというのは…」

「ああ、シャイラちゃんを抱いていなかったからな。涙を流して喜んでいただぞ」

「どう考えても歓喜の涙じゃないだろ、それは！」

「まあ別れ際に「必ずいつかぶっ殺してやる」とは言ってたがな」

「超恨まれてるじゃねーか！」

頭を抱えるルーク。せつかく円満に終わったと思っていたのに、と嘆いていると…

「因みにお前も含まれてたぞ。先に帰ったルークの野郎も絶対殺す！」とか言ってたし」

「理不尽だ！！」

酒場にルークの声が悲しく響いた。

第4話 決戦！かぎりない明日戦闘団（後書き）

「人物」

ライハルト

LV 7 / 1 2

技能 シーフLV1

かぎりない明日戦闘団リーダー。装備は大鎌。本編では一応初ボスに当たるが、まず負ける相手ではない。

シャイラ・レス（オリモブ）

LV 3 / 2 5

技能 剣戦闘LV1 シーフLV1

かぎりない明日戦闘団の女盗賊にして唯一の生き残り。本編では名無しの女盗賊で、本作同様再登場フラグとも思える言葉を発して去るが、その後22年間音沙汰がない。きっともう出ない。名前はアリスソフト作品の「大番長」より。本作での再登場の予定は一応あり。ファミリーネームを変えたことにはきつと意味がある。

パルプテックス

リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」店主の娘。ランスに好意を抱く。

「ぱとらっしゅ」の親父

リーザス城下町の酒場「ぱとらっしゅ」の店主。意味もなく飲み代を無料にしたりと随分気っぷの良い親父だが、ネーミングセンスはない。

「技能」

シーフ

盗賊としての才能。手癖の悪さともいえる。

「技」

真空斬（オリ技）

使用者 ルーク

剣に溜めた闘気を相手へ飛ばす必殺剣。威力は普通の斬撃と変わらず、ある程度の実力者ならその軌道を読み防ぐことは出来る。風邪気味じゃなく、しっかりと集中できれば連発も可能。後衛にも攻撃できるため、ルークはこの技を重宝している。

「料理／食材」

ブランデー

ポピュラーな酒。よく使われるブランデー表記でないのはアリスソフトのこだわりと言えるだろう。「ぱすちゃこ」ではブランデー表記だった気もするが。

「その他」

かぎりない明日戦闘団

リーザス近辺で活動をする盗賊団。ランスとルークの活躍で壊滅した。

第5話 恐怖

・リーザス城下町 パリス学園・

「という訳で俺様たちはこれからリーザス城に入る。しっかりと調査を続けていろよ」

「はい、わかりましたランス様」

パリス学園の裏口でランスとシイルとルークの三人が落ち合っていた。お互いの情報の確認と今後の動き方を決めているところだ。

「しかし…まさかヒカリちゃんが初めてではないとはな…」

「そのようです。パリス学園ではこの4年間、毎年生徒が1人行方不明になっていました」

「学園の教師が怪しいな、その辺はしっかりと調べたのか？」

「はい、悪いとは思いましたが一応リーダーの魔法で心を読ませていただいたのですが…特にこれといって情報はありませんでした」

「深いところまで読み取れる魔法ではないからな…潔白と決まったわけではないが…」

「あ、一つ気になることがあります」

「なんだ？さつさと言え」

「生徒で一人だけ心を読めなかった女性がいるんです。恐らくシールドの魔法を掛けているのだと思います」

「普通のお嬢様生徒がか？用心のために親がやった可能性もあるが怪しいな。良い情報だぞ、シイルちゃん」

「えへへ…」

「よし、シイル。その生徒をマークしろ」

「わかりました。ランス様とルークさんもお気をつけて」

「ああ、ありがとう」

シルと別れ、二人はリーザス城へと向かった。

- リーザス城 -

ルークは驚いていた。ランスの強運にだ。門番に通行手形を見せると中に入れて貰えたので、まずは城に併設されているカジノに入ると、そこで「牢屋にどこから来たのかわからない女性が捕まっている」という情報を聞きだした。その情報を確かめるため、二人はリーザス城に潜入していた。どう牢屋に潜入したものかとルークが真剣に考えている横で、ランスはリーザス城のメイドたちを犯しているだけだった。が、その行動が全て良い方向に行くのだ。掃除をしているメイドを犯せば城の奥に入れるようになる鍵が手に入り、こっそりパンを盗んでいたメイドを犯せば牢屋の鍵が手に入るのだ。こいつは天から愛されている、と真面目に牢屋への潜入を考えていた自分が馬鹿らしくなってきた。いや、だが牢屋の鍵を手に入れた方がいいが、牢番が必ずいるはず。見つければ潜入していることがバレてしまう…どうしたものか。

「何ぐずぐずしている。さっさと行くぞ」

「おい、間違いなく牢番に見つかるぞ。考えなしに突っ込むな！」

ランスは何も考えずに牢屋がある部屋の扉を開けてしまった。焦るルークだが、その目に入ってきたのは居眠りをしている女性牢番だった。

「なんか…どうでもよくなってきたな…」

「訳の分からんこと言っていないで行くぞ」

牢番の横を通り、鍵を使って牢を開けるとそこには一人の少女がいた。髪の色は青く、ヒカリではない。

「大丈夫か？君の名前は？」

「…ユキ・デルです…」

「なぜ牢獄に捕まっているんだ？何かしたのか？」

「…王女様に…無理矢理…」

「王女だと？王女が君をこんなところに入れたのか？」

「…すみません、忘れてください…そうでないと、また私…」

そう言っただけで黙り込んでしまうユキ。その瞳はすでに人生を諦めてしまっているように見えた。助け出してあげたいところだが、鎖につながれており簡単には連れ出せない。それに、ここで鎖を斬って助けてしまうと潜入がばれてしまい、今後動きにくくなってしまふ。因みにランスが犯したメイドたちはなぜか二人とも報告する気はないようだった。納得がいかん。

「すまない…今の俺たちは君を助けることが出来ない。少しだけ待っていてくれ、必ず君を解放してみせる」

「がはははは、俺様に任せておけ！」

「…」

牢を後にする二人。部屋を出る直前、牢番が目を覚ましたようだが、「なんだあー…勝手に入ってきてきちゃ駄目じゃんだよー…」とか明らかに寝ぼけていたので無視した。

「まさか王女が誘拐に関わっているとはな…本格的にやばい案件だな」

「これでは20000GOLDでも割に合わんな。うむ、救出した

ら報酬を釣り上げよう」

「って言いながら部屋に勝手に入るな。誰かいたらどうするんだ！」

またもランスが勝手に行動してしまう。目の前の部屋の扉を勝手に開けてしまい、運の悪いことに部屋にいた女性に見つかってしまった。

「誰、健太郎くん？あれ、違う人みたい」

瞬間、ルークは全身の毛穴から汗が吹き出すのを感じた。そこにいたのはピンクの髪のおとなしそうな少女。どこからどう見ても普通の女の子で、ルーク自身なぜ彼女にここまでの畏怖を抱くのがわからなかった。しかし、確かに感じる。コイツは…やばい…

「じーっ」

「がはは、俺様がそんなに美男子だからって、そう見つめるな」

「健太郎君のほうがかっこいいもん。それで、おじさんたち誰？」

「おじっ…」

ランスはルークの異変に気づかず、普通に少女と話を続ける。

「がはは、君はかわいいな。とぉー」

「きゃっ！」

唐突にランスが少女のスカートをめくる。白いパンツがあらわになり、ランスはご満悦だ。少女は恥ずかしそうに顔を真っ赤にしてる。

「えっちー！」

少女の叫びと同時に、ルークは頭に浮かんだのは死のイメージ。その直後、二人を突風が襲い、部屋の外に叩き出された。壁に打ち付けられる二人。特に大きなダメージはないが、突風が起こった理由がわからず、ランスが呆然としている。

「いててて、今のはいったい何だ？」

「ランス…行くぞ…彼女に、それ以上構うな…」

「おい、勝手に行こうとするな。ええい、こら、待て！」

ルークがこの場を立ち去ろうとすると、ランスは文句を言うが、さっきの突風が多少気に掛かってはいたのが、素直に後についてくる。

「（今は、少しでも早くあの少女から離れなければ…なんなんだ、アレは…）」

・リーザス城 カジノ・

「がはははは、赤の5番で大当たりだ！さあ、脱いで貰おうか、葉月ちゃん」

「あーん、おかあさーん」

がむしゃらにあの場を立ち去って、二人はカジノに来ていた。ランスはのんきに奥で脱衣ルーレットをやっている。エロい顔をした男どもがその様子を眺めていて、ちよつとした人ばかりが出来てしまっていた。

「（ふう…ようやく落ち着いたな…なんだったんだ、あれは…以前

にあの森で彼女の实力を見せて貰った時にもあんな恐怖は感じなかったぞ……」

ルークは心を落ち着けながら、かつての森での生活を思い出す。彼女は元気になっているだろうか……。すると、不意にカジノの店員が話しかけてきた。青い髪の美しい女性だ。

「お客様、先程から顔色が悪かったですが大丈夫ですか？」

「ああ、心配掛けてすまない。大丈夫だ……ん？失礼だがお名前を聞いても良いかな？」

「ふふ、新手のナンパですか？アキ・デルと言います」

「デル……やはりそうか。もしかして、ユキと言うのは君の近親者か何かかな？」

「……！あなた、ユキ姉さんを知っているの？ユキ姉さんはどうなったの？」

「ああ。気持ちはわかるが、少し落ち着いて聞いてくれ。彼女は牢屋に捕まっていた」

「そう……まだ牢にいたのね……早く保釈金を稼いで助け出してあげないと……」

今にも泣き出しそうな顔をしながら、アキは呟く。

「いったい何があったんだ？彼女はなぜ捕まっている？」

「姉さんは何もしていないのに、王女様に反乱を企てたとして捕まってしまったの。姉さんが……姉さんがそんなことをするはずがない……！」

彼女の悲痛な叫びを聞いて、ルークは一つの決意をする。アキは懐から石を取り出し、ルークに手渡す。

「もし…ユキ姉さんのもう一度会つのなら…これを渡していただ
けませんか？」

「これは？」

「私たちの家に代々伝わるやすらぎの石です。この石が…少しでも
姉さんの心をやすらげてくれれば…」

「…任された。必ず姉さんに渡しておくよ」

「ありがとうございます。それと、これは少ないですお礼です」

アキはサイフからGOLDを出そうとするが、ルークはそれを制
止する。

「それは貰えないな…それと、保釈金を稼ぐためとはいえ無理に働
きすぎては駄目だぞ」

「でも…少しでも早く姉さんを助け出してあげないと…」

そう言い残し去ろうとするルークに、アキは小さい声で反論する。
それを聞いて、ルークは彼女に一度だけ振り返り、口を開く。

「大丈夫、姉さんはもうすぐ帰ってくるよ。約束する」

騒がしいカジノの中で、ルークのその力強い言葉が、アキの心に
大きく響いた。

・リーザス城 客間・

その少女は椅子に腰掛け、足をぷらぷらとさせながら、愛しの彼
がはんばーを買って戻ってくるのを待っていた。頭に浮かぶの
は先ほどのおじさん二人組。スカートをめくられたのは口大きいお

じさんだったが、彼女が今考えているのはその奥にいた黒髪の顔の整ったおじさんのほうであった。

「あのおじさん…初めて見る人だね。なんかいやな感じがしたな…。なんだろう?」

そう独りごちる。ルークほどではないが、彼女も何かを感じていたのだろう。

「んー、そろそろリーザスからも離れなきゃだめかな…。結構この国好きだったんだけどな…。健太郎君が戻ってきたら相談してみよつと」

そう自分の中で決意したところでお腹が鳴る。はんばーがーはまだかな、お腹すいたな、と悲しそうな顔をする彼女は、やはりどこからどう見ても普通の少女にしか見えない。彼女の名は来水美樹。しかし、彼女にはもう一つ名前がある。その名を…

「あーあ…魔王になんか…なりたくないのに…」

魔王リトルプリンセス

第5話 恐怖（後書き）

「人物」

来水美樹

LV 1 /

技能 魔王LV1

現在の魔王。魔王名は「リトルプリンセス」。元々は異世界で暮らす中学二年生だったが、先代魔王ガイにこの世界に連れてこられ、魔王にされる。魔王になりたくない彼女は、追ってきた恋人の小川健太郎と共に、大陸中を逃げ回っている。

ユキ・デル

謀反の冤罪を掛けられ、投獄された女性。投獄前は妹と一緒にパン屋をやっていた。

アキ・デル

姉の保釈金を稼ぐためにカジノで働く女性。勝ち気な見た目とは裏腹に、姉思いの優しい女性。ランスクエストに出なくて泣いたのは筆者だけではないはず。デル姉妹大好きです。

甲州院葉月

リーザス城カジノ店員。脱衣ルーレット担当。的中率1/10で
配当3.6倍。

お掃除メイド

リーザス城メイド。お掃除に情熱を掛けている。

パン盗みメイド

リーザス城メイド。手癖が悪く、常にパンを盗んでいる。お掃除

メイドと共に、ランスクエストにて22年ぶりの再登場を果たす。
CG出た瞬間に喚起でうおおお！と叫んだのはきつと筆者だけ。

リーザス城門番

通行証をチエックする女の子門番。ちゃんと仕事しているほう。

リーザス城牢番

牢屋を見張る女の子兵士。仕事していないほう。牢番エ…

「技能」

魔王

魔王のみが保有する技能。二級神をも上回る力を手にする。

「アイテム」

やすらぎの石

持っている心がやすらぐ。没落貴族であるデル家に代々伝わる家宝。

「料理／食材」

はんばーがー

美樹が健太郎にパシらせていた料理。

第6話 トーナメント

・リーザス城 牢屋・

その女性は、城を出ることを既に諦めていた。身に覚えのない罪で投獄され、王女に汚されぬいた。余計なことをしゃべれば殺すとも言われた。その彼女の心を未だに繋ぎ止めていたものは、かわいい妹の存在であった。アキに…出来ることならもう一度会いたい…ギイツ、と牢のドアが開く。ああ、また王女が来たのであるうか。そういえばさつきは見かけない男が二人ほど来ていたが、あれはなんだっただろうか。既に誰と話したのかさえおぼつかなくなってきたしまっている。

「どなた…ですか…」

「ただの冒険者さ。妹のアキさんから頼まれたものを届けに来た」
「えっ…」

アキという言葉にぼやけていた意識を取り戻す。よく見れば、先ほども来た二人の冒険者がそこに立っていた。

「アキに…会ったんですか…」

「ああ、これが妹さんからの預かりものだ。受け取ってくれ」

ユキはやすらぎの石を受け取る。ぐちゃぐちゃに汚されていた心が、落ち着きを取り戻していく。涙が流れるのを止められない。

「アキ…ありがとう…」

ふと、冒険者が後ろにいたもう一人の男に声を掛ける。

「ランス…先に謝っておく…すまん」
「ん？」

言っやいなや、冒険者は持っていた剣を振り抜いた。ユキの足に繋がれていた鎖を叩き壊したのだ。

「えっ…どうして…」

「「ぱとらっしゅ」という酒場は分かるな？その親父に既に話を通してある。二、三日の間そこに隠れていてくれ」

突然の出来事に思考が追いつかない。この人は私を助けてくれたのか。なぜそんなことをする。それに、私が抜け出せば城は大騒ぎになる。

「大丈夫。大騒ぎにはならないし、すぐにまた妹さんとも暮らせるようになる」

「どうして…ですか…」

「すぐに…全てを終わらせるから」

そう言って優しく手を引いて立ち上がらせてくれる。まともに歩くのは久しぶりなため、足下がおぼつかない私を見て、そっと肩を貸してくれる。

「さあ、行こう」

「お名前…聞かせていただいてもいいですか…？」

「ルークだ。妹さんと仲良くな」

・リーザス城 コロシウム・

「悪かったな…これで後は動きにくくなる」

「ん？ユキちゃんが助かったんだ、何も問題はあるまい。がはは」

そう言っただけで笑い飛ばすランス。器がでない、とルークはランスを少し見直していた。同時にランスもルークの思わぬ熱い一面が見られ、少しルークの見方を変えていた。

「ああ、つまらないわ、みんな弱い人ばかりで！」

不意にそんな言葉が聞こえてきた。声のした方向を見ると、黄金の鎧をつけた女戦士がいた。

「最近の男はだらしないわね。闘ってもまるで張り合いがない」

「おい貴様、少しばかり生意気だぞ！俺様がお仕置きしてやるうか？」

女の発言に気を悪くしたランスは、怒り心頭で女戦士に突っかかっていく。

「あら？あなたなら私に勝てるって言うの？」

「その通りだ」

「自信満々なのね。それなら、このコロシウムで私と勝負しない？あなたのその自信、打ち砕いてあげるわ」

「むかむか、いいだろう！ただし、俺様が勝ったらやらせてもらうぞ！」

「私が負けるわけないけど、勝ったらね」

「よーし、その身体もらった！」

「ふっ…戦いは明日のトーナメントで。しっかりと申し込んでおき

なさいよ。楽しみにしているわ」

「ふん、身体をきれいにして待っているんだな。そういえば貴様の名前は？」

「ユラン・ミラージュ、このコロシアムのチャンピオンさ！」

・リーザス城下町 酒場「ぱとらっしゅ」・

「へー、それでランスさんは明日のトーナメントに出ることになったんですね」

「ああ、今受付に行っている」

ルークはパルプテックスと話しながら、酒を飲んでいる。トーナメントの申し込み時間に時間が掛かりそうだったので、ランスを置いて先に酒場に来ていたのだ。

「親父さん、悪かったな…無理を言って…」

「なに、良いつて事よ！パン屋のユキちゃんを救ってくれたんだからな！二、三日と言わず一生住み着いてくれてもいいくらいだぜ」「そうですよ、気になさらないでください。ユキさんは私の部屋で寝ています。よっぽど安心したんでしょうね。気持ち…少しですが分かりますし…」

この親娘は本当にいい人たちだ。言葉にするとまた何か言われてしまうので、心の中で感謝をしていると、申し込みを終えたランスがやってきた。

「がはははは、申し込み完了だ！これで明日の試合に参加できるぞ」

「お疲れ様です。どうぞ、まずは一杯」

「おう、ありがとうなパルプテックスちゃん」

「ぼっ…」

もうこの状況になれてしまったルークは特に突っ込まず、酒の追加を親父さんに頼む。考えるのは明日、自分がどう動くかだ。ランスがトーナメントに出ている間、自分だけ何もしないわけにはいかない。しかし、城に潜り込むのももう無理だろう。

「でも…ユランさんは強敵ですよ？大丈夫ですか？」

「そうだな、本人が望めばリーザス軍の副将くらいにだったら十分なれるって評判だしな」

「ふん、俺様の相手ではないわ」

「そうですね、ランスさんは無敵ですものね！」

「がはははは！！」

「あんまりつけあがらせないでくれ、足下救われるから…」

「ユランの必殺技は幻夢剣っていつてな、ありやすげー技だぜ。でも以前酒場で飲んでた奴が、ヒララレモンを鎧に塗っておけば滑って当たらないとか言っていたような」

「む、それは本当だろうな？親父、ヒララレモンをよこせ」

「相手ではないと言っておきながら万全を期す。戦士の鏡ですね、ランスさん！」

「もう勝手にやっててくれ…」

パルプテックスに煽られてどんちゃん騒ぎを始めたランスを見て、さすがにルークは呆れる。器がでかいんじゃないかと、何も考えてないんだな、多分。

「明日の試合に控えて早めに寝ておけよ。で、俺は明日もう一度城下町で聞き込みをしようと思っている」

「ん？何を訳の分からんことを言ってるんだ？」

「は？」

「明日はお前もトーナメントに参加だぞ。定員が32人で俺様が31人目だったから、気を利かせて申し込んでおいたぞ。感謝しろ」
「何勝手なことしてくれてんだ！！」

・深夜 リーザス城 とある部屋 ・

「…ユキの動向は？」

「…まだわかっていません」

「…あの牢番はクビにしておきなさい。ユキと侵入者を急いで捜すこと。いいわね」

「…はっ！」

「…ふふ、誰に喧嘩を売ったか教えてあげないとね」

・翌日 リーザス城 コロシウム ・

「ふんっ！」

「なぜだ…なぜハニワ神は私を見捨て…ぐふっ」

「それまで！ルーク選手の勝利です。ハニーフラッシュの使い手であるおたま男選手を破り、堂々の準決勝進出です！」

司会者がそう言うつと観客席から歓声が沸く。これで準決勝へと駒を進めた選手は三人。ランス、ユラン、そしてルークだ。ルークは出場者用の観覧席に戻っていく。

「ふん、時間を掛けすぎだ！退屈でしかたなかったぞ」
「劳いの言葉くらいかけられんのか」

戻るやいなや文句を言ってくるランス。ランスは一回戦でサイボーグ戦士であるフブリ・松下を、二回戦でくぐつ伯爵を、そして先ほど巨人のこんごを破り一足先に準決勝行きを決めていた。

「その退屈はすぐに終わるさ。次は私とだからね」
「ふん、もうすぐ貴様は俺の女だ」

ユランが話しかけてくる。彼女も危なげなく準決勝行きを決め、次のランスの対戦相手だ。ルークは会場に視線を戻す。今は準々決勝最終試合の最中で、赤髪の男剣士と赤髪の男武闘家が闘っていた。

「次の俺の相手は武闘家かな」
「まあそうなるだろうね。あっちの若い坊やとはモノが違うよ」

そう話しているとほぼ同時に武闘家の拳が剣士の顎に入り、武闘家の勝利が決まった。

「それまで！アジマフ選手、惜しくもここで敗退です！遂に残すところはあと三戦、果たして誰が優勝という名誉とリーザス軍武将とのエキシビジョンマッチの権利を得るのでしょうか？司会は私、シユリ・セイハジユウ・ナガサキが引き続きお送りします」

会場がまたも沸き立つ。どうやら貰えるのは名誉と挑戦権だけで優勝賞品はないらしい。名誉や挑戦権などどうでもいいルークは先ほどまで棄権しようかとも思っていたのだが、今の武闘家を見て心変わりしていた。あいつと…手合わせしてみたいな、と。

「我らが偉大なチャンピオン、ユラン選手か？」

「あの巨人のこんご選手すらねじ伏せた剛剣の使い手、ランス選手か？」

「華麗な剣技でここまで無傷で勝ち上がった柔剣の使い手、ルーク選手か？」

「あるいは…」

司会者の女性が会場をさらに盛り上げる。それに呼応するように、会場は興奮のるつぼと化している。そのとき、先ほど勝ち上がった武闘家が部屋に戻ってきてルークと目が合う。挑発しているわけではないが、その目が互いに語っている。負ける気はないと。

「大陸を旅する武闘家、アレキサンダー選手か？準決勝、まもなく始まります！」

第6話 トーナメント（後書き）

「人物」

フブリ・松下

トーナメント出場者。身体全体の内、60パーセントが機械化しているサイボーグ戦士。

くぐつ伯爵

トーナメント出場者。脳をえぐるのが最高の楽しみという、恐ろしい男。

こんじ

トーナメント出場者。トロール殺しの巨人で、身長は2メートル60。

おたま男

トーナメント出場者。なぜか人間なのにハニーフラッシュを使える。

アジマフ・ラキ（オリモブ）

トーナメント出場者。準々決勝でアレキサンダーに敗れた若き戦士。名前はアリスソフト作品の「闘神都市？」より。

シュリ・セイハジユウ・ナガサキ（オリモブ）

コロシアムの受付兼司会者。大会と言えばこの人。年齢は不明。名前はアリスソフト作品の「闘神都市」シリーズより。

「技」

ハニーフラッシュ

使用者 ハニー族 おたま男

ハニー族が顔の穴から放つ衝撃波。防御力無視、絶対命中という厄介な技。

「料理/食材」

ヒララレモン

柑橘系の果物。別名ヒラミレモン。日常的に料理によく使われるが、値段は高価。一つ2000GOLDが相場。

第7話 惹かれあう強者たち

・リーザス城 コロシウム・

「はっ、想像以上だよ！私の剣をここまで防いだ男は初めてだ！」

「ふん、当然だ。ええい、俺様の攻撃を避けるんじゃない！」
「嫌なこつたね！」

舞台では準々決勝までとはレベルの違う攻防が繰り広げられていた。金属が衝突し、火花を散らす。ユランは絶え間なく攻撃を仕掛け、手数が多さでランスを圧倒する。一見、ユランが圧倒的優勢にも見える。我らがチャンピオンの優勢を感じ、観客たちは大いに盛り上がる。

「ユラン選手、攻め続ける！ランス選手もそれをギリギリで捌き、なんとか持ち答えています！この状況をどう見ますか？」

実況席のシュリが隣に解説にやってきていたリーザス兵に問いかける。彼が優勝した選手とエキシビジョンを行う予定の兵士だ。髪の色は金、美男子という言葉がピッタリなほど整った顔立ちをしている。

「そうですね：一見押しているのはユラン選手のようにも見えますが：優勢なのはランス選手の方ですね」

「えっ！主導権を握っているのはユラン選手のように見えますが？」
「確かに手数で押しているようにも見えますが、その実攻撃は全て防がれています。一撃たりともランス選手に届いていません。ユラン選手の素早い攻撃を見切る動体視力、そして攻撃の先読みをする

戦士としての勘。申し分ないですね。それに…」

解説の男が言いかけた瞬間、ランスが動く。ユランの連撃の中、一瞬の隙を見つけて剣を振り下ろす。不意を突かれた形になるユランだが、すんでのところで攻撃を躲し、バックステップで距離を置く。ランスの攻撃は地面に当たる。

「むかむか、避けるな卑怯者！」

「（ふざけるんじゃないよ、なんだこのでたらめな威力は）」

ユランが文句を言いたくなるのも無理はない。今の一撃で地面が大きく抉れているのだ。

「ご覧の通り、ランス選手の攻撃は剛剣。もし命中してしまえば、おそらく一撃でユラン選手はリングに倒れるでしょう。ユラン選手はいつ、どこからでも逆転負けの可能性がある。精神的にかなりの負担となりますね」

「なるほど…参考になります。手数 of ユラン選手か、一撃のランス選手か？どちらがこの勝負を制するのでしょうか！」

再びユランが連撃を仕掛け、それをランスが捌く形となる。が、どうしてもユランが攻めあぐねる。互いに決め手に欠ける状態が続く中、先に動いたのはユランであった。ランスの攻撃のパターンを読み取り、避けた直後に下がるのではなく前に出たのだ。

「おおっと、ユラン選手、あの剣の軌道は…！」

このコロシムに通うモノならば誰しもが知っている。チャンピオン、ユランの必殺剣。コロシムで多少強かった対戦相手も、全てこの剣の前に倒れてきた。剣の軌道が妖しくも美しく流れる。観

客も、そして目の前に対峙するランスも、その剣の軌道を目で追っ
てしまう。

「（認めよう…あなたは私より強いよ…）」

この技にはユラン以外誰も知らない隠された効果がある。今まで
放った相手は、そのほとんどが格下であったため知られずにいた効
果。それは、自分よりも格上の相手に放った場合、その威力が増す
のだ。それも、格段に。

「（だからこそ、あんたはこの技で敗れることになる！）」

・その軌道、正に夢幻の如し…・

「幻夢剣!!!」

一閃。流れるような動きをしていた剣が、恐るべき早さでランス
の身体に迫る。ランスは反応できていない。その場にほとんどのモ
ノがユランの勝ちを確信した。確信していなかったのは二人。ラン
スの目を見て、何かあると感じた解説の男と、種明かしを知ってい
るルークだ。ユランの剣がランスの鎧に到達した瞬間、その軌道が
曲がる。鎧が滑るのだ。

「なんだって!」

「がはははは、幻夢剣破れたり!」

そう、昨日「ぱとらっしゅ」の親父から聞いていた幻夢剣の破り
方を実行したのだ。朝の内にパティという女の子が経営しているア
イテム屋でヒララレモンを買い、この試合直前に鎧に塗りたくって
いた。攻撃を食らえばユランにばれる可能性があったため、ここま

で必死に捌いてきたのだ。そして頃合いを見計らって若干の隙を見せる。ワンパターンな攻撃がそれだ。

「まさか…誘われたのか!？」

「がはははは、気がつくのがちょっと遅かったな!」

ランスは剣を両手持ちし、頭上からがむしやりに振り下ろす。

「ランスアタアアック!!」

しかし、その軌道はユランではなく、その目の前の地面に振り下ろされる。地面には昨程までとは比べものにならない大きな穴が開く。まさか…外したのか、とユランは思うがそうではない。これはランスの情けか、はたまたこれから抱く女を傷つけたくなかったのか。直後ユランを衝撃波が襲う。とてつもない威力に鎧は崩れ、吹き飛ばされるユラン。発生源はランスアタックが振り下ろされた地面だ。

「(近くにいた衝撃だけでこの威力とは…直撃していたら今頃私は…)」

吹き飛ばされながらそんなことを考える。地面に叩きつけられ、目を開くと目の前に剣を向けるランスが立っていた。

「どうだ、俺様は強いだろう?」

「そうだね…幻夢剣を破る奴が、アリオス以外にもいるとはね…」

「ふっ、負けを認めるな?ユラン」

「ああ…あんたの勝ちだよ、ランス」

そうユランが宣言する。ユランが負けたことにショックを隠せな

い観客も多いが、目の前のこの凄い技を見せられれば納得するしかない。

「それまで！勝者、ランス選手！決勝進出決定です！」

うおおおお！大歓声上がる。そんな中、少し違うことを考えている男がいた。ルークだ。

「（あの技…よく似ている…ふつ、考えすぎだな…）」

ランスとユランの試合から十分後、会場に開いた穴の整備などが終わり、準決勝二回戦の開始となる。ルークとアレキサンダーが会場に呼ばれる。

「さあ、興奮冷めやらぬ中二回戦です！ルーク選手とアレキサンダー選手、ランス選手への挑戦権を勝ち取るのはどっちだ！試合、開始です！！」

シュリが宣言するとお互いに構える。お互いに間合いを計った後、先に攻撃を仕掛けたのはアレキサンダーだ。

「この試合はどう見ますか？」

「そうですね…申し訳ないですが、相手にならないでしょうね」

「へ？」

予想外の返答に戸惑うシュリだが、ほぼ同時に歓声が沸く。見れば、状況は余りにも一方的。攻め立てているのはアレキサンダー。それをルークが紙一重で躲す。状況的には先ほどのランス対ユランとよく似ているが、ルークは剣で捌くのではなく、その体術だけで

全ての攻撃を躲しているのだ。それだけではない。アレキサンダーに少しでも隙があれば、拳や蹴りをカウンターで入れるのだ。これではどちらが格闘家なのか分かったものではない。

「ご覧の通り、現在立っているレベルが違いすぎます。アレキサンダー選手も素晴らしい才能の持ち主ですが、相手が悪すぎる」

「ではなぜすぐに決着を付けないのでしょうか？ ルーク選手は剣をほとんど使っていませんか？」

「分かりかねます。無駄にいたぶるような選手でもないと思うのですが…」

一番困惑していたのは解説や観客ではない。対戦相手のアレキサンダーだ。遊ばれている訳ではない。これでは稽古だ。それは、大陸を武者修行し、己の力にある程度の自信があつたアレキサンダーにとっては侮辱とも感じられていた。だがどうあがいてもその拳がルークに届かない。もどかしい思いを抱きながら、まだ仕留める気がないルークの戦い方を逆に利用させて貰う。修行中に編み出した渾身の一撃を何としても決めるのだ。

「ルーク選手…確かに…あなたは強い…」

「まあな、悪いがあんたとはレベルが違いすぎる」

「だが…こちらにも意地がある！」

空気が変わる。アレキサンダーの拳を闘気のようなものが覆う。

「全力の拳を叩き込んでこい！次は避けん！」

「！？…その油断が…命取りだ！！」

アレキサンダーが拳を放つ。アレキサンダーは特に技の名前などに拘る人物ではなく、その技を編み出した際、相手モンスターの装

甲ごと破壊したことから、単純にそう呼んでいる。

「この一撃がこの試合の分水嶺…装甲破壊パンチ!!」

その一撃をルークは剣で受ける。が、拳はルークの剣を叩き折り、その刃が宙を舞った。この拳、届いた…アレキサンダーの集中が一瞬切れる。だがルークは動揺することもなく、既に次の行動に移っていた。宙を舞う刃を左手で掴み、右手でアレキサンダーの顔面を掴み押し倒す。一瞬の間にルークがアレキサンダーの上に馬乗りになり、刃をその首に突きつけていた。その動きを目で追いきれなかった観客も、目の前の現状に息をのむ。既に決着が付いているであろう状況の中、アレキサンダーが口を開く。その瞳には涙。

「私は…私自身を許せない…」

「理由を…聞いても良いか？」

「拳が届いた瞬間…私の心は満ち、集中を欠いてしまった…武闘家としてあるまじき恥だ…」

「ああ…それがあんたの敗因だ」

「…まいった」

アレキサンダーのギブアップ宣言が会場に響き、静かになっていた観客も、熱気を取り戻し、歓声を上げる。

「それまで！勝者ルーク選手！決勝進出決定です！」

宣言されると同時にルークはアレキサンダーから離れ、控え室に引き返そうとするが、後ろから声を掛けられる。

「ルーク殿！もしまた…どこかで巡り会ったら…手合わせしていただけませんか！」

「いいぜ。その腕、鍛え上げておけ、アレキサンダー」

そう背中越しに返事をし、奥へと下がっていく。アレキサンダーは自らの拳を見つめ、決意をする。

「（また一から鍛え直しだな…）」

帰りながらルークは先ほどの戦い方に自ら苦笑する。あのような相手を侮辱するような戦い方は本意ではなかった。しかし、せつかく見つけたダイヤの原石。あの程度の実力で満足してしまつては困るのだ。強者を多くしておく必要がある…後に控える、人類の存亡を掛けた大戦のために…

二十分のインターバルを置き、遂に決勝の幕が上がる。観客のボルテージは最高潮だ。

「皆様、大変長らくお待たせしました。いよいよ決勝戦です！果たして栄冠を手にするのはどちらなのか？それでは、ランス選手、ルーク選手、入場してください！」

うおおおおつ！と観客席から地鳴りのような歓声が沸く。が、なぜか二人とも出てこない。観客席からだんだんと不安そうな声がかかる。シュリも二人が出ないことに戸惑っていると、控え室整備の女性従業員パニイが慌てた様子で掛けてくる。

「た、大変ですシュリさん。部屋にこんな置き手紙が…」

「置き手紙？一体何が…」

シュリが手紙に目を通すと恐ろしいことが書いてあった。

・ユランちゃんと一発やってくるので棄権するぞ　がはは　byラ
ンス様・

・涼しい顔装っていたけど正直剣が折れると思わなかった　戦えま
せん　byルーク・

「これを…発表しろと言うのですか…」

「でも…いつまでもお客様を待たせるわけにも…」

絶望の表情に変わる二人。いつ決勝が始まるんだとヤジが飛び交
う。

「…エキシビションが中止になったことを、あの方にもお伝えしな
ければいけないのでここはまかせます！」

「そ、そんな！ずるいですよ、シユリさん！」

「大丈夫、パニイさん、あなたならやれるわ！じゃあ、頑張っ
て！」

「ま、待ってくださいああい」

・リーザス城　コロシウム　VIPルーム・

「とうわけ、エキシビションが中止になってしまったんです。
無理を言っつて解説とエキシビションを引き受けていただいたのに、
本当に申し訳ありません」

「いえ、いいんですよ。しかしお二人ともいなくなってしまうとは
…少し残念ですね…」

シユリから報告を受け、先ほどまで共に解説をしていた男はエキ

シビションは残念そうに口を開く。既にエキシビションに備えて甲冑に身を包んでいるところだった。その整った顔は「忠」の文字が入ったヘルメットに隠されていた。

「残念？リック將軍はあの二人と闘いたかったんですか？」

男の名はリック・アディスン。リーザス赤の軍の將軍にして、世界にその名が知れ渡っているリーザス最強の戦士。

「ええ…ですが、いずれまた会う機会もあるでしょう」

「え？それはどうしてでしょうか？」

「あれ程の強者です。いずれ、どこかの戦場で出会いますよ…必ず」

それは同じ強者であるからこそその勘であろうか。まだ誰も知り得ぬ事ではあるが、リックの予想は見事に的中する。これより約八ヶ月後、ランス、ルーク、リックの三人は、肩を並べ、このリーザスで魔人と死闘を繰り広げることになる。

「お客様、物を…物を投げないでくださああああい」

哀れ、パニーさん。

第7話 惹かれあう強者たち（後書き）

「人物」

リック・アデイスン

LV 38 / 70

技能 剣戦闘LV2

リーザス赤の軍将軍。将軍就任の最年少記録を更新し、就任一年目でヘルマン一個軍をたつた一人で撤退させるといふ活躍を見せ、他国からは「リーザスの赤い死神」の異名で恐れられている。人類最強クラスの剣士。

ユラン・ミラージュ

LV 14 / 27

技能 剣戦闘LV2

コロシアムのチャンピオン。軍には所属していないが、その実力は本物である。これより数ヶ月ほど前、勇者アリオス・テオマンと共にとある奴隷商人を壊滅させている。

アレキサンダー

LV 12 / 77

技能 格闘LV2

修行のため世界を回る武闘家。非凡な才能を持ち合わせており、鍛え上げれば人類最強クラスにもなり得る人物である。ルークに敗れ、一から鍛え直すことを誓う。彼も間違いなく強者、いずれまた巡り会うだろう。

パティ

リーザス城下町のアイテム屋「ちゃん」で働いている女の子。一年中下着姿。

夢色・パニイ（オリモブ）

コロシアムの整備員。不憫。名前はアリスソフト作品の「闘神都市？」より。

「技」

ランスアタック

使用者 ランス

ランスの必殺技。剣を両手持ちし、頭上から渾身の力で振り下ろす。直撃すればもちろんのこと、周りに発生する衝撃波を食らっても大ダメージを受ける。

幻夢剣

使用者 ユラン・ミラージュ

ユランの必殺技。集中力を必要とするため、連発することは出来ないが、軌道が読みにくく、躲すことは困難である。また、格上相手には威力が2倍以上になる。ヒララレモンの汁で滑るとい弱点を持つ。

装甲破壊パンチ

使用者 アレキサンダー

アレキサンダーの必殺技。拳を闘気で覆い、渾身の力で相手に放つ。その威力は相手の装甲ごと身体を破壊する程である。

第8話 牽制

・リーザス城 コロシナム外・

「で、ユランとお楽しみで俺の試合は見ていなかったと」

「がはは、当然だ。誰が男同士のむさくるしい試合など見ていられるか。抱いてるときのユランちゃんはかわいかったぞ。普段とギヤップがあつてだな……」

「聞く気はない。興味もない。」

「何だ、インポか？男として終わっているな、がはは」

「違っわ！」

決勝戦をバツクれたルークは会場を出たところでランスと落ち合った。あちらも調度ユランとの情事を済ませたところだったらしい。今後の方針を話し合うため、酒場に向かおうとしていた二人に後ろから声が掛かる。

「すみません。少しお時間をいただけますか？」

振り返り、声を掛けてきた女性を見る。白い薄手のローブを身につけた美しい緑髪の女性。高級そうな服装を見るに、王宮関係者であろうか。

「お、美人ではないか」

「私は、王女様の侍女をしているマリスといいます。先ほどのトーナメント、たいへん見事な腕前でした」

「で、その侍女さんが俺たちに何のようだ？」

「王女様が貴方様方のお力をぜひお借りしたいと言われておられます」

なんとという幸運。王女の調査が困難になってしまったと思っていた矢先に、あちらの方からわざわざ近づいてきてくれるとは。切っ掛けはランスが勝手に申し込んだトーナメントということを考える
と、やはりこの男、天に愛されている。

「王女様と言うからには美女なんだろうな？」

「それはもう。あれ程の美しさを兼ね備えた方を私は知りません」

「がはははは、では話を聞こう」

「そうだな、こちらも異存はない」

「それでは案内させて頂きます。私に付いてきてください」

・リーザス城 王女の間・

「はじめまして。冒険者の方なのでご存じないかもしれませんが、私はこの国の王女、リア・パラパラ・リーザスと言います」

そう言っただけ挨拶をしてきたのは優しそうな女性。とてもユキを冤罪で投獄したり、誘拐に関わっているような人物には見えない。

「お初お目に掛かる。私はギルドに所属している冒険者で、名をルークと申します」

「そして俺様が英雄ランス様だ！王女様は可憐だな、100点だ！」

王女様相手にとんでもない挨拶をかますランスだが、それを笑顔で許容する王女。侍女のマリスは無表情で王女の後ろに控えている。

「あなたたちの強さを見込んで一つ頼みがあります。私の大事な魅

力の指輪が妃円屋敷の悪霊に奪われてしまったのです。あなたたちには、その屋敷に行つて悪霊を退治し、指輪を取り返して貰いたいです」

「王宮の兵士ではなく、なぜ私たちに？」

「それは、この頼みは私の個人的な理由からなるものであるため、王宮の兵士を動かすことは出来ないのです」

「なるほど、そこで強くてかっこいい俺様他一名に頼みに来たわけだな！見返りは？なんなら王女様の処じ」何がいただけるのでしょうか？」

不敬罪で首が飛びかねない発言をしようとしたランスの言葉を遮り、ルークが聞き返す。ふ、と場の空気が変わった。緊迫感が増す。

「…あなたたちは、ヒカリって娘を捜しているのでしょうか？その娘に関する情報を提供しましょう」

「…どうして私たちがヒカリという娘を捜していると知っているのでしょうか？」

確かにルークはリーザ城下町で聞き込みを一週間ほど続けた。しかしそこはルークもプロ。足の付くような聞き込みはしていない。ルークの問いに、これまで無言で後ろに控えていたマリスが薄く目を開け、静かに答える。

「…我が国の情報網は完璧です」

「…なるほど、大した情報網だ。忍者でも雇っているのでしょうかね？」

「さて…そのような存在が、大陸にいるのでしょうかね…？」

牽制しあうルークとマリス。一瞬の静寂が訪れるが、ランスがそれをすぐに破る。

「わかった、引き受けよう。ヒカリの情報は頼んだぞ」

「ありがとうございます。妃円屋敷の鍵は情報屋の娘が持っていますので、屋敷に行く前に受け取っていただけます」

「了解しました。それではこれで失礼させていただきます」

一礼をし、ランスは先に部屋を後にする。続いてルークも部屋から出ようとするが、後ろから王女が問いかけてきた。

「…それと…ユキ、という娘の居所をご存じありませんか？」

「…はて、そんなことは冒険者風情ではなく、後ろの侍女に聞いた方がよいのではないでしょうか？この国の情報網は完璧のようですからね」

ルークの挑発にマリスは表情一つ変えず、リアは妖しく微笑む。誘拐に関わっている人物に見えないと思っただが、前言撤回だ。間違いない、こいつらが犯人だ。

- リーザス城下町 情報屋 -

ひとまずランスとルークは二手に分かれた。ルークは情報屋で鍵を買い、ランスは折れてしまったルークの剣を買いに行き、妃円屋敷の前で落ち合う手はずとなっている。パシリのような仕事にランスは難色を示したが、600GOLD手渡し、余った金で好きなものを買っていいと言ったら喜んで武器屋に向かった。武器を自分が買い、ランスに鍵を取りに来させるのが本来望ましい行動だろうが、ルークが情報屋に来たのは訳があった。彼女をランスに会わせるのは危険だ。情報収集をしている際に出会ったその女性は、とても美

しかつた。が、他人に心を開かない。理由はその足にある。ほとんど動かすことが出来ず、車いすでの生活を余儀なくされている。そんな彼女とランスを会わせるのは、ライオンの檻に野ウサギを入れるようなものだ。

「あ…いらつしゃい、ルークさん…」

彼女の名前は朝狗羅由真。ルークが初めてこの情報屋を訪れた際、彼女は心ない冒険者に暴行される直前にあった。ルークはその冒険者をその場で斬り捨て、由真を救っていた。そのこともあり、彼女はルークにだけは若干心を開いていた。

「事情は分かっています。こちらが鍵です」

「流石は優秀な情報屋、耳が早いな」

「いえ…私をもっと早く気がついていれば…お気づきかもしれませんが、事件の犯人は…」

「待った。それ以上はいけない。どこで聞かれているか分からないからね」

言いかける由真をルークは制止する。敵は強大、彼女を巻き込むわけにはいかない。

「…お気遣いありがとうございます…お気を付けて」

「ああ、ありがとう。事件が終わったら、また寄らせて貰うよ」

情報屋を出たルークはついでに正面のレベル屋に足を運ぶ。

「ようこそレベル屋へ。儀式を行わせて貰います」

「ああ、よろしく頼む」

水晶玉に電流が走り、レベルアップの儀式が行われる。彼女の名前はウイリス。優秀なレベル屋で、今度レベル神への昇進試験を受けるらしい。因みに彼氏持ちである。

「…駄目ですね、経験値が不足しています」

「そうか、手間を掛けた」

「ルークさんは既にかなりのレベルですからね。これだけ高い人は滅多にいないですよ」

「ありがとう、それでは邪魔をした」

「あ、ルークさん。今つて外は晴れていますか？」

「ん？快晴だが、どうかしたのか？」

「今日この後彼とデートなんです」

職務中だぞ、この野郎。お幸せに。

・リーザス城下町 妃円屋敷・

「遅かったな」

約束の時間よりかなり遅れてランスがやってきた。武器屋方面には特にこれと言って足止めを食いそうな施設はなかったはずだが。

「がはは、武器屋のミリちゃんと一発やってきたからな」

「人を待たせて置いて…まあ予想通りだが…」

やはり情報屋に向かわせなくてよかった。ますます由真が人間不信になってしまう。

「とりあえず買って来た剣を渡してくれ。流石に丸腰では、悪霊がいるらしいこの屋敷では危ないんでな」

「ほれ」

ランスが買って来た剣をルークに手渡す。ルークは受け取るが、その刀身に違和感を覚える。刃がぶるぶると震えている変わった剣。こんなもので敵が斬れるのだろうか。

「ランス：俺の記憶が正しければ、これはあの店で一番安い剣じゃないか？」

ここでルークはランスの装備が大きく変わっていることに気がつく。どれも一流の冒険者が身につけるような良質の装備である。

「さすがリーザス、中々に良い武器を売っているな。その剣とこの一式でぴったり600GOLDだったぞ。がはは」

「金返せ、この野郎っ!!」

「馬鹿言つな！貴様のものは俺様のもの、俺様のものも当然俺様のものだ!!!」

口喧嘩をしながら妃円屋敷へ入る二人。すると、今入ってきた扉が勝手に閉まり、どこからともなく悲しげな女性の声が響く。

「…ようこそ妃円屋敷へ。貴方もあの王女の部下かしら…?」

なるほど、これが悪霊か。一筋縄ではいきそうにないな。

第8話 牽制（後書き）

「人物」

リア・パラパラ・リーザス

LV 3 / 20

技能 なし

リーザス国王女。美しい容姿の裏に影を持つ。政治家としても非常に優秀であり、野心家で、既に実の両親である現国王と女王を隠居させる計画も密かに進めている。生まれてこの方人に怒られたことがない温室育ち。誘拐事件の犯人最有力候補。というか間違いない犯人。

マリス・アマリス

LV 25 / 67

技能 魔法LV2 剣戦闘LV1

リーザス国筆頭侍女。事実上リーザスの政治を司っているとさえ言われる影の実力者。戦闘能力も非常に高く、その才能はリーザス最強剣士リックに次ぐが、自ら前線に立つことはほとんどなく、常にリアの側を離れないようにしている。リアを溺愛。

ウイリス

リーザス城下町のレベル屋で働く女性。年下の彼氏とはラブラブ。本編では1の時点では名無しの女性であった。その後、現在までに6作品に登場。大出世である。

ミリー・リンクル

リーザス城下町の武器屋「PONN」の女性店員。自殺願望あり。

朝狗羅由真（オリモブ）

リーザス城下町の情報屋「NET」のオペレーター。コンピューターを使う優秀な情報屋であり、本編では名無しの女性。名前はアリスソフト作品の「大番長」より。情報戦といえば彼女。

「装備品」

えくすかりば

ランスが購入。伝説の聖なる剣の量産品。200GOLD。

ごっずアーマ

ランスが購入。特殊な金属で作られた高級な鎧。200GOLD。

めでうさの盾

ランスが購入。鏡で出来た優秀な盾。180GOLD。

ぶるぶるの剣

ルークが購入（不本意）。ぶるぶる震えて敵に打撃を与える剣。200GOLD。これでピッタリ600GOLD。因みに本編でも本当にこの値段である。

「アイテム」

魅力の指輪

リアの私物。その名前から魅力が上がると思われるが、多分ただの指輪。

第9話 妃円屋敷の幽霊

・リーザス城下町 妃円屋敷・

「とりあえず二手に分かれて探索しよう」

そうランスに提案するルーク。中々に広い屋敷、わざわざ男二人肩寄せ合って一緒に探索する理由はない。

「うむ、しっかり働けよ」

「何いきなりロビーの椅子に腰掛けてるんだ！そっちも捜すんだよ！」

洪るランスを無理矢理立たせて西にある広間や倉庫の探索に向かわせる。ルークは東にある食堂や厨房、応接間を担当する。厨房を調べているとき、一つのメモ帳を見つけた。悪霊が住み着く前、ここに勤めていた料理人が書いたものらしい。パラパラと中身を確認していくと、気になる一文を発見した。

・王女様のお食事の注意・

「この屋敷には王女が住んでいた…？」

ガタツ、と後ろから物音がし、振り返ると四匹のさげび男がこちらに迫ってきていた。ルークは目の前まで来ていた一匹に斬りつけるが、一撃で倒せない。相手が霊体系のモンスターで物理攻撃が効きにくいというのもあるが、やはり剣が悪い。厨房は狭く、戦い辛かったため、隣の応接間までひとまず移動する。部屋に入った瞬間、暖炉の奥の光る何かが目に入る。どうやら剣のようだ。手に取ろう

としたところに二匹目のさげび男が迫ってきたため、その剣で振り抜くと、さげび男が真つ二つになり消滅した。

「この剣は… 火事場泥棒みたいで申し訳ないが、使わせて貰おう」

残りの二匹も一撃の下に粉碎する。中々の業物。誰も住んでいない幽霊屋敷に置いておくのは勿体ないおばけが出てしまうと考えたルークは、とりあえず頂いておくことにする。冒険者とはこんなものだ。暖炉の奥には代わりにぶるぶるの剣を備えておく。

「何か手がかりはあったか？む、なんだその剣は？俺様に寄越せ！」
「俺の金で新しい剣買ったばかりだろうが！」

ロビーに戻ると西の探索を終えたランスがいた。いきなりたかられるルーク。

「そうだな… この屋敷に王女が住んでいた可能性が高いということくらいだな」

「ふん、使えんな。俺様は倉庫で変な映像を見たぞ。いきなり突風が吹いて、目を開けたら女の子が三角木馬に乗せられて拷問を受けていた。話しかけたらすぐに消えてしまったがな」

「拷問を受けていた女の子… この屋敷の幽霊と関係がありそうだな」
「それとこんなものも見つけたぞ」

ランスが手に持っていたのは、日記帳であった。ルークはそれを受け取り、ページを開く。日記の最後のページには、美しい字体でこう書かれていた。

・また今夜も地獄の時間が始まる。何度死のうと思ったかわからない。でも… 夜9時から11時までの間、この時間が私の地獄の時間

「これを読んで俺様はこの屋敷の謎に気がついてしまった！どうだ、分かるか？」

「はて…特に新しい情報はない気がするが？」

「ふっ…これが英雄と凡人の差だな。あれを見ろ！」

ランスが指指した先には壊れた柱時計が置いてあった。その時間は10時25分で止まっている。

「この屋敷の時計は10時25分で止まっている。このせいで彼女は死んでも拷問から抜けられないのだろう。つまり、あの時計の時間をずらせば、悪霊はきれいさっぱり消えるというわけだ。がはは！」

「そんな単純な…別にこの屋敷の時計があれ一つという訳でもあるまいに」

「言ったな！ではあの時計で解決したら報酬の分け前は8：2だぞ！」

「関係なかったら6：4な。やれやれ」

呆れるルークをよそに、ランスは時計の時間を12時25分にずらす。何も起こる訳が…と思った矢先、屋敷を覆っていた邪悪な気配がきれいさっぱり消えてしまった。更には奥の厨房の方から大きな音がする。

「なん…だと…」

「がはははは、16000GOLDゲットだ！」

ランスは意気揚々と、ルークはショックを隠しきれない様子で音のした厨房に向かう。すると、地下室への階段が新しく出来ていた。

「おやおや、厨房を散策していながらこんなものも見つけられなか

った冒険者がいるのだな。情けない奴だ、顔を見てみたい。これは分け前が9：1まで有り得るな」

もはやぐうの音も出ない。正反対のテンションで二人は階段を下りていくと、部屋の中央には悲しげな顔で少女が立っていた。その身体は青みがかって若干透けている。

「おお、あの娘だ！さっき俺様が見た拷問を受けていた娘だ」

「彼女がこの屋敷の幽霊か」

「ありがとうございます…あなたたちのお陰で私は地獄の時間から解放されました」

「聞いたか？やはり時間だ、がはは！それじゃあ魅力の指輪を返してくれるか？」

勝ち誇るランスがそう言うと、彼女の周りの光が一瞬暗くなり、彼女は黙り込んだ。

「あの指輪だけは返すことは出来ません」

「なぜ？」

「それは…」

「君を死に追いやったのが…その持ち主だからか？」

ルークの問いに静かに頷き、自分の身に起こったことを語り始める。

「私の名前はラベンダー、パリス学園の生徒です。私がパリス学園に入学したのは二年前でした。そのときの私は、あの学校の真の姿を知りませんでした。学園長のミンミン先生から優秀生徒に任命されてから一週間後、眠り薬を飲まされて…」

「やはり学園もグル…か…」

「気がつくとも王女様の目の前にいました。王女様は私をペットにすると言って…それからこの屋敷に隔離されて毎日、毎日…」

「この地下室で拷問を受けていたわけだな」

「あの王女様は残忍です。私の前にペットにしていたメイドの女性は、狂い死んでしまったから残念だったと、笑いながら話していました。私に残されたのは、自分から命を絶つことだけでした…」

「それでせめてもの復讐に指輪を奪ったというわけだな」

「はい…王女様が憎い…」

小さな唇を噛みしめながら彼女は言った。その目には涙が浮かぶ。

「こうしている間にも、また他の女の子が王女様の餌食になっていると思います」

「それが…ヒカリちゃんか…」

「わかった。俺様が王女を懲らしめてあげよう。それで、君は安心できるかい」

「!?!?…ありがとう!」

ランスは彼女に抱きつかれる。ランスの腕に、無いはずの質量が少しだけ伝わってくる。彼女はランスの胸で泣きじゃくった。それを静かに見守るルーク。

「絶対に王女様を止めてくださいね。そうしてくれなかったら、化けて出ちゃうから」

「任せろ。まあランダーちゃんみたいなかわいい子だったら、化けて出てくれて構わんがな。がはは!」

悪戯っぽく言う彼女に対し、ランスが笑いながらそう返すと、彼女は微笑みながら、その身体を少しずつ消していった。どうやら成仏したらしい。後には、彼女が王女から盗んだ魅力の指輪が床に落

ちているだけであつた。ランスはそれを拾い、懐へとしまう。

「随分と無茶な約束をしたな。王女を懲らしめるとは…大国リーザスを敵に回すつもりか？」

「ふん、関係ないな。悪い娘はお仕置きしてやるのがいい男の勤めだ」

「ただではすまんぞ？」

「ユキちゃんを牢から逃がした奴が何を言ってるんだかな」

ランスはルークを見る。知らないものが見れば、ランスの顔はいつも通りの笑い顔であつた。だが、ルークの見解は違う。ランスは今、戦士の顔つきになっていた。

「ルーク、とつくにお前もリーザスを敵に回す覚悟は出来ているんだろう？」

「当然だ。あの王女、野放しには出来ん」

ランスが初めてルークの名前を呼ぶ。それに気がついていたかは定かではないが、ルークも戦士の顔つきになり、ランスに笑い返す。二人は肩を並べて、屋敷から出て行った。

・リーザス城下町 パリス学園・

「シイルさん、少し話があるのだけど、ちょっといいかしら？」

シイルにクラスメイトのセラが話しかけてきた。以前ランスに報告していた、思考をシールドの魔法でガードし、考えを読み取ることが出来なかつた生徒だ。要注意人物としてマークしていたが、特

に怪しいそぶりは見せておらず、心配のしすぎかとシイルは思い始めているところであった。

「はい、なんでしょうか？」

シイルが振り向いた瞬間、腹部に衝撃が走る。

「えっ…？」

「おやすみ、シイルさん」

倒れていくシイル。だんだんと意識が遠のいていった。

「（ランスさま…ま…）」

それを抱き留めるセラ。彼女の正体は、リア王女の侍女、マリスであった。

第9話 妃円屋敷の幽霊（後書き）

「人物」

ラベンダー

妃円屋敷に出没する幽霊。かつてリア王女に度重なる拷問を受け、自ら命を絶った少女。ランスの腕の中で成仏する。

ラベンダーの前任のメイド（半オリモブ）

ラベンダーの前に拷問を受けて死んだ少女。彼女もこれより数年後、リーザス城に悪霊として出没するようになる。自分の拷問の姿を見せて兵士を怖がらせようとするが、Hな映像であるため男性兵士を喜ばせているだけである。出番はランスクエスト本編で。地下で拷問を受けていたと書いてあったから、おそらく妃円屋敷の被害者。

セラ

パリス学園に通う生徒。その正体はマリス・アマリリス23才。色々な意味で恐ろしい変装である。学園の生徒はきつと見て見ぬふりをしてくれていたのだろう。

「モンスター」

さげび男

アンデッド系。赤いもやが集まって出来たような顔だけのモンスター。物理攻撃が効きづらく、EXPを奪うというような嫌らしい攻撃も仕掛けてくる。

「技」

シールド

リーダーから思考を守る初級魔法。ある程度の魔法使いなら用心のために極力掛けるようにしておく。

「装備品」

妃円の剣

妃円屋敷に隠されていた業物の剣。盾と鎧も存在するが、二人は発見できなかった。

第10話 ここより変わるリーザスの物語

・リーザス城 城門前・

ランスが城門前までやってくる。門番に通行手形を見せて城の中に入ろうとすると、マリスが門から出てきてランスを出迎える。

「ランス様、指輪は手に入れられたみたいですね」

「耳が早いな。手に入れたのはついさっきだぞ」

「リーザスの情報網は完璧ですから。さあ、どうぞこちらへ」

「うむ、案内を頼む」

そう言っつて案内をしようとするマリスだが、その歩みを止める。

「ところで…ルーク様はどちらへ？」

「指輪を手に入れたのは知っているのに、それは知らんのだな。少し寄るところがあるから、先に俺様だけやってきたのだ」

そう、今この場にいるのはランスのみで、ルークの姿はない。ランスが説明をするとマリスは納得したようで、王女の間へ案内するため、再びランスの少し前を歩き始めた。後に付いていくランスだが、ふと違和感を覚える。

「おかしいな…来るのは二回目だが、こんな道だったか？」

「王女様の部屋までは特殊な結界が張ってあって、私の案内無しでは何者も侵入できません」

「戦士ランス様、無事に悪霊から魅力の指輪を奪い返していただけましたか？」

部屋に到着したランスに、王女はそう話しかけてきた。マリスは既に王女の後ろに控えている。ランスは先ほど拾った指輪を懐から取り出す。

「これの事か？」

「本当に取り返してくれたのですね。ではその指輪をこちらに……」

「その前に聞いておきたいことがある。屋敷にいた幽霊は、ラベンダーという美少女だった。知っているか？」

言いかけた王女の言葉をランスが遮る。王女は困惑の表情を見せて黙り込んだが、すぐに元の笑顔に戻っていった。

「知りませんわ」

「ふん、まあいい。で、ヒカリちゃんの情報はどうなった？」

「そうでした……マリス、ヒカリをここに」

王女が指示すると、マリスは一度カーテンの後ろに下がる。しばらくの後、カーテンの奥から再び姿を現すと、その横には両手を縛られた少女を連れていた。写真で見ていた少女で間違いない、彼女がヒカリだ。

「ランス様、これがあなたたちお探しのヒカリ嬢ね？」

「ふん、やはりそう言う事か。ラベンダーちゃんの話は正しかったようだな。この変態レス王女め」

ランスがそう言うと、静かに控えていたマリスがカツと目を開き、

声を荒げる。

「口を慎みなさい！リア王女に対し、何という事を！」

「残念だけどヒカリは私のかわいいペット。返すことはできないわ。知りすぎてしまったあなたたちもね…もう一人はこの場にいないみたいだけど、どうせ後からのこのことやってくることでしょう。そのときはマリス、ここまで案内して差し上げなさい。目の前でゆっくりといたぶってあげるわ」

そう言い放つ王女。それに対し、素直に返答するマリス。国の上層部にいるものは、得てしてこのような歪みを持ち合わせているものである。それは、リーザスと並び立つ二つの大国、魔法大国ゼスと軍事大国ヘルマンにも言えることである。その歪みがランスとルクの前に立ちはだかるのはもう少し先の話となる。

「がはは、本性を見せたな。ならば力づくで返して貰うまでだ。ついでにレズ王女様にもお仕置きだ！」

王女に飛びかかるうとするランスだが、急に後ろに気配を感じた。振り返ろうとしたランスの首に、細いひものようなものが巻き付く。

「なに！」

後ろから現れた黒装束の娘は、ランスの首に絡ませたひもを締め上げる。もがくランスだが、ひもは外れない。このままでは窒息死してしまう。

「お前は…あのときの公園の…（うぐっ…やばい、このままでは…）」

以前に公園でサイフを盗もうとした女忍者であると気がつく。そうこうしている間に紐は食い込みを増し、ランスの顔がだんだんと青ざめてくる。ランスの意識が無くなりかけてきたそのとき、聞き慣れた声が部屋に響いた。

「マジックミサイル！」

部屋の外から炎の塊が飛んできて、ランスの首を絞めていた女忍者を吹き飛ばし、ランスの首のひもが緩む。間一髪で事なきを得たランス。

「ランス様！大丈夫ですか！？いたいいたいなの、とんでけーっ！」

シイルがランスに駆け寄り、ヒーリングの呪文を唱えると、ランスの首に出来ていたアザが消え、息苦しさがなくなっていく。

「げほっげほっ、助けに来るならもっと早く来い、バカ」

「なぜこの娘がここに！？隣の部屋に縛っていたはず！」

そう、シイルは王女の次のペット候補兼、いざというときの人質として捕らえられていたのだ。そのシイルがなぜここに…困惑するマリス。

「理由は簡単。俺が助け出しただけだ」

シイルの後ろから声がする。この場にいなかったもう一人の戦士、ルークだ。

「なぜあなたがここに…」

「以前シイルちゃんが優秀生徒になったと聞いていたのを思い出し

てな。ラベンダーも任命された後に誘拐されたと言っていたから様子を見に行ってみれば、既に誘拐された後。流石に焦ったぞ。まあミンミン学園長を拷問したら、あんたが連れて行ったことをすぐに白状したかな。それでこうして助けに来たわけだ。わかったかい？完璧な情報網を持つリーザスの侍女さん」

「あの学園長…処刑ね」

王女が冷たく言い放つ。後ろに控えていたマリスは、今は王女を守るように前に立ち、ルークに対し、再び問う。

「なるほど…ですが一番聞きたいのはそこではありません。なぜ結界を突破できたのですか！？あなたは魔法使いではないでしょうに！」

なるほど、とルークはマリスの疑問に頷く。確かに普通の戦士であつたなら、あの高度な結界を突破することは不可能だっただろう。しかし、今この場にいる男は…

「誤算だつたな。あの程度の結界、俺には何の意味も持たんぞ」

「くっ…」

結局なぜ結界が破れたのかは分からないマリスだが、現実問題としてルークが今ここにいる。状況の悪さから、額に汗が流れる。その状況を察してか、女忍者がルークとランスの前に立ちふさがる。

「リア様、マリス様、ここはお任せを」

その言葉を受け、王女とマリスは部屋の奥に下がり床を持ち上げる。そこには逃亡用の隠し階段があつた。地下へと逃げる二人。

「シイル、あそこで倒れているヒカリちゃんの治療をしておけ。ルーク、この場は任せた。俺様は王女を追う。あの王女に説教してやらんとな！」

真面目な顔つきで指示を出すランス。その表情はお仕置きと称して飛びかかるうとしていたときの顔とは違う。その顔を見てルークはそれに答える。

「了解だ。あの王女に世間の厳しさを教えてやれ！」
「簡単に行かせると思わないですよ！」

ランスに対して手裏剣を投げつける女忍者。が、一瞬でランスと女忍者の間に割り込んだルークに、全てはたき落とされる。

「行け！ランス！」
「がはは、俺様に任せておけ！」

そう言い、王女たちを追って地下への階段を下りていくランス。それを追おうとする女忍者だが、ルークに阻まれる。先ほどまでと立場が逆転した。

「さて…ランスが王女の説教係なら、俺はあんたに説教することに
するかな」

「説教ですって！？ふざけたことを…死んで貰うわ！」

女忍者は言うど、手裏剣を放つ。それを全てはたき落とすが、目の前から女忍者が消えていた。いや、消えたのではない、飛んだのだ。両手にくないを持ち、空中からルークに迫る。

「死ね！」

「そんな無防備に空中に飛び上がるとは…」

ルークはそう言いながら腰を沈め構える。そして素早く剣を左下から右上に振り切る。発生した真空波が女忍者に直撃する。

「真空斬、手加減版」

「ぐえっ！」

女の子が出してはいけないような声を出して、女忍者が吹き飛ばす壁に激突し、一瞬意識が飛びかけるが、頭を振り立ち上がる。が、それを阻むように首に刃が突きつけられる。

「戦い方がまるで素人だ…隠密要員であって、戦闘は場数を踏んでいないようだな」

「くっ…バカにして…」

懐から手裏剣を取り出そうとするが、一瞬殺気を込められ、「ひっ…」と声を出して手裏剣を取りこぼす。やはり場数はあまり踏んでいないようだ。

「少し…聞きたいことがある」

「何よ…拷問されたって、リア様のことは話したりしないわ」

そう言い放つ女忍者に対し、ルークは予想外の行動に出る。首に突きつけていた剣を下げたのだ。困惑する女忍者。

「王女の事が聞きたいわけではない。あんたの意見を聞きたい」

「私の…？」

「ああ…君は、王女が行っていた今回の犯罪、本当に正しいと思っていたのか？」

「…っ！」

ルークが尋ねた内容に驚愕し、目を開かせる。一瞬言いよどむが、すぐに返事が返ってくる。

「私の意見などないわ。忠臣として、命じられたことに答えるのは当ぜ…」

「それは真の忠臣ではない!！」

言いかけた女忍者の声を、ルークが遮る。先ほどまでの話し方と違い、その一言一言に、迫力が増す。

「忠臣として等と逃げるのではなく、君自身の意見を言ってくれ」

「…リア様が行っていたことに…間違いなどは…」

「罪もない民を自分の快樂だけのために死なせることがか？それが本当に上に立つ者の行動だとも？」

「…」

ルークの問いかけに女忍者は答えることが出来ない。その拳が強く握られたのは、何に対しての悔しさからだったのであるうか。

「先ほど忠臣と言ったな。真の忠臣であるのならば、主がその道を違えたら、横つ面引つ叩いてでも道を正すものじゃないのか？」

「それでも…自分の意志を殺しても主の命に従うのが…忍びとしての役目です…」

自分の意志を殺してでもと言ったのを聞き逃すルークではない。先ほどまでの迫力のある喋り方から一転、穏やかな喋り方になる。

「確かに…忍びとしてはそれが正しいのかもしれない。だが、忠臣

として…人間として…そして、一人の女の子として、その考えは絶対に間違っている」

自然と涙がこぼれる。情けない、恥ずかしい。涙を止めようとするが、止めることが出来ない。

「私だって…あんなことしたくなかった…でも…恩義に報いるために…」

嗚咽混じりに答える。やはり、彼女の行動は本意ではなかったらしい。ルークがそれを感じたのは以前の公園での出来事。あのように姿を現し、手を引けと忠告するのがそもそもおかしいのだ。殺すので忠告などせずにさっさと殺せばいい。彼女は王女を止めることが出来なかった。だからこそ、巻き込まれて犠牲になる様な人を減らしたかったのだ。彼女もまた、足掻いていたのだ。ルークは女忍者の頭に手を置き、泣き止むまでしばらく待つてやった。シルも気絶しているヒカリを介抱しながら、静かにそれを見守る。少しの後、泣き止んだ彼女は、恥ずかしそうに顔を赤らめる。

「すみません…恥ずかしいところを…」

「いや、気にしてないさ。恩義っていうのを聞いてもいいかな？」

「命の恩人なんです。祖国のJAPANに帰れず、大陸に行くところもなく彷徨っていた私を、リア様が拾ってくださいましたんです」

「そうか…」

それは、ただの気まぐれだったのかもしれない。あるいは、大陸には珍しい忍者を貴重に思ったのかもしれない。しかし、あの王女が彼女の命を救った、これは一つの真実なのである。なればこそ、彼女は王女に仕えたのだ。たとえ自分の意志を殺してでも、その恩義に報いるために。

「因みに…祖国にはどうして戻れないんだ？捨て駒扱いで切り捨てられたとか、何かの秘密を握ってしまつて命を狙われているとかか？」

びくつ、と女忍者の動きが止まる。はて、何か変なことを聞いてしまっただろうか、と考えるルークに対し、言いにくそうに彼女が答える。

「…ゆう…でまい…つて…」

「ん？何か言いにくいことだったか？それだったら無理しなくても…」
「…研修旅行で迷子になつて…勘違いで抜け忍扱いされて…帰れなくて…」

屋内なのに冷たい風が吹く。女忍者の顔は、先ほどよりも更に赤みを増している。

「んっ…それは…災難っ…だつたな…くっ…」

「笑つた！今笑いましたよね！！」

「いや…全然笑つてなんかいないぞ…ぷっ…くっ…」

「隠せてない！全然隠せてないですから！だから言いたくなかつたのにい！！」

今にも泣き出しそうな顔をしてルークに詰め寄る。ルークは必死に堪えるが、笑いが抑えられない。それを見かねて、シイルがフオロ―に入る。

「ルークさん、笑っちゃかわいそうですよ…ふふっ…あははっ！！」
「うわああああん！！！！」

まったくもってフオローになっていなかった。

・リーザス城 地下通路・

ルークは女忍者を引き連れてリア王女が逃げた通路を歩いていた。途中で気絶していたマリスを拾う。ランスの前に立ちふさがり、返り討ちにあつたのだらう。目覚めたマリスに、先ほど女忍者にしたのと同じような事を言った。

「…返す言葉もございません。リア様のためを常に考え、叱らずにいたことが…甘やかしてしまっていたのかもしれない…」

そうルークに答えるマリス。だが、話を聞いているとその役目をマリスに託すのは酷であつたかもしれない。リア王女とマリスの年の差は7つで、王女が幼い頃から仕えていたため、どうしても妹を見るような目になってしまっていたのだらう。本来、叱るのは親の役目だが、リアの両親は幼い頃から優秀であつた娘を恐れ、遠ざけてしまっていたらしい。彼女のしたことは決して許されることではないが、彼女が歪んでしまった原因を考えると、彼女もまた被害者なのかもしれない。

「まあ、今頃ランスがしつかりと叱っていてくれるだろう」
「大丈夫なんですか？正直…あの男と二人きりにするのは危ない気が…」

問いかける女忍者に笑いながら答える。

「まあ、大丈夫だろう。別れ際にかなりまじめな顔をしていたからな。ランスも許せなかったんだろう。まだ出会ってから一月も立っていないが分かる。あいつは…決めるときは決める男さ」

言っていると、目の前に光が差し込む。長い地下通路を抜けた先には泉があった。そのほとりの方で声がする。三人はそちらに向かって走り出した。

「ああっ…もつと、もつと気持ちよくして!」

「がははは、ではもつとお仕置きしてやろう!」

そこにはお仕置きと称して王女とやっているランスがいた。

「はふう…」

マリスが倒れる。目の前の現実に打ちひしがれたのだろう。

「って、やっぱり全然駄目じゃない!何があいつ決めるときは決める、ですか!」

「キめていたじゃないか…それはもう、バツチリと…」

「何上手いこといった風な顔してるんですか!」

まさか本当に王女に手を出すとは…あの真面目な顔はなんだったんだろうか。ランスにとって王女とHすることは、大まじめな顔をするに価する出来事だったてことか。

「がはははは!どうだ、もう悪いことはしないな?」

「もう悪いことしません、庶民もいじめません。だからもつとおお

!」

「まあ…あれはあれで改心したってことでいいんじゃないか?」

「よくなああああいー!!」

・数日後　アイスの街　ランス宅

無事に仕事を終了し、報酬を受け取ったランスはGOLDで敷き詰めた風呂に入っていた。ルークとの分け前は宣言通り8:2にし、計26000GOLDを手にしたランスは満足そうだった。

「がはははは！大もうけだ！だがGOLD風呂は痛いだけだな、もうやめておこう。」

「よかったですね、ランス様」

その後、王女が許していたので怒るマリスと女忍者を尻目にしっかりと帰路についたランス。ルークとは今朝別れた。俺様が女を抱く邪魔をしないし、色目も使わん。俺様程じゃないまでもそここの腕はある。まあいても邪魔にはならんな、というのがランスのルークに対する評価であった。

「そつだ、一応奴隷として少しは活躍したからな。お前にも服を買ってやるっ」

「本当ですか？私、外出用のお洋服が欲しいです」

「そつだな、すけすけのネグリジエか超ミニスカートを買ってやるっ」

「…はい、ありがとうございます…：そういうえば、ランス様宛に手紙が届いてましたよ」

「ん？俺様宛のファンレターかラブレターか？」

「お城からの手紙みたいですね」

ランスはシイルから受け取った封筒を開き、中の手紙を読む。

・親愛なるランス様。我が王家には、初めて交渉した者と結婚しなくてはならないという

代々伝わる伝統があります。それに従ってあなたは責任をとって私と結婚して頂きます。

ではこれより、すぐにあなたの所に嫁がせて頂きます 王女リア・パラパラ・リーザス・

「シイル、逃げるぞ」

「へ？」

結婚などする気のないランスは逃げようとするが、時既に遅く、家の扉が大きくノックされる。

「ダーリン！！開けてー！！リアが参りました！！」

声が聞こえた瞬間に、ランスはシイルを連れて一目散に逃げ出していた。

「シイル！ついてこい！」

「はい！ランス様、どこへでも！」

・アイスの街近辺 街道・

ルークは一人その道を歩いていた。約束の報酬をランスに渡した後、次のギルド仕事を受け、休む間もなくアイスの街から旅立っていた。歩きながら、ルークは思う。面白い奴であった。またどこかで巡り会いたいものだ。すると、遠くから声が聞こえてくる。

ルークが歩いている街道の向こう、今考えていた男が、パートナーを連れて王女と侍女から全力で逃げている。最後まで退屈させない奴だ。

「やれやれ…また会いたいとは思ったが、早すぎるだろう…」

そう思うルークに、こちらに気がついた女忍者が道を外れて近づいてくる。

「どうした？王女様から離れていいのか？」

「すぐに戻りますから。ルークさんに…一言お礼を言いたくて」

「礼などいらんさ。今後、リーザスがどのような道程を辿るか楽しみだよ。道を違えそうになったら…」

「私が戻します。今はまだ無理だけど…いつか、真の忠臣と呼ばれるように…」

「上出来だ」

ふと二人が笑いあう。ランスたちが少し離れてしまったので追いかける一礼し、追いかけてよとする女忍者をルークは呼び止める。振り返る彼女に、もっと早く聞いておくべきだった事を問いかける。

「名前、まだ聞いてなかったな」

「かなみ、見当かなみです」

満開の笑顔を向けてくる。これは、良い気分で次の仕事に移れそうだ。青天の下、ルークはそんなことを考えていた。

第10話 こじより変わるリーザスの物語（後書き）

「人物」

見当かなみ

LV 14 / 40

技能 忍者LV1

リーザス王女リア直属の忍者。不本意にも抜け忍になってしまっていたところをリアに拾われ、恩義に報いるため諜報から暗殺まで忠実にこなす。ルークの言葉を受け、少しずつだがリアに自分の意見を言うようになる。意外なことに、関係は以前よりも良好。本編では一応1のラスボス。一応とか言うな。

ヒカリ・ミ・ブラン

ブラン家の次女。リアに誘拐されていたが、実はそのときに色々と目覚めてしまい、リアのことが大好きになってしまう。ランスとルークのことは、気を失っていたのであまり覚えていない。ランス1のサブタイトル「光を求めて」が、彼女の名前と掛かっていることはファンの間では有名である。

ウエンズディング・リーザス

リーザス国国王にしてリアの父。実権は娘に握られている。婿養子であり、結婚前の名前を名乗るなど少し頭がおかしくなり始めている。

カルピス・パラパラ・リーザス

リーザス国女王にしてリアの母。頭の良すぎた娘をあまり良く思っており、知らず知らずの内に遠ざけてしまっていた。

ミンミン

パリス学園の学園長。裏でリアと繋がっており、美少女を定期的に提供していた。事件解決後、全て自分一人で犯行を行ったという遺書と共に遺体で見られる。マリスが一晩でやってくれました。

「技能」

忍者

忍者としての才能。隠密としての素質や、強力な忍術の使用に關わる。

「技」

ヒーリング

傷を癒す初級神魔法。暖かい光で包み込み、傷だけでなく体力も回復させる。

マジックミサイル

炎の塊をぶつける初級魔法。炎の矢よりも威力は低い、塊であるため敵に命中しやすい。本編では炎の矢の旧名であり同一魔法。後にダイジェスト版が出た際、名前が炎の矢に統一され、その存在が抹消される。本作では別魔法扱い。これは、筆者がマジックミサイルでランスの窮地をシイルが救うシーンが1屈指の名シーンだと思っており、名前を変えたくなかったためである。

第11話 反逆の少女たち

GI1009

- 自由都市カスタム -

話は少し前にさかのぼる。自由都市地帯のほぼ中央に位置する町、カスタム。この年、とある老魔法使いが魔法塾を開塾する。男の名はラギシス。人当たりが良く、町の住人からの信頼も厚かった。これを受け、カスタムの町では一つの事項を決定する。それは、町を守る魔法使いを育てるため、三人の娘をラギシスに弟子入りさせるというものだ。

若い娘たちにそのような重荷を背負わせることに初めは疑問の声も上がったが、三人の娘は彼に良くなつき、魔法の修行も自ら進んで行った。三年後のGI1012年にはもう一人娘が加わるが、こちらもすぐにラギシスに懐いた。四人の娘と一人の老魔法使い。師匠と弟子、というよりは親子のようだな、と住人の一人が言った。何を今更、もう彼女たちの育ての親だよ、ラギシスさんは、と聞いていた住人が答えた。

「うわあああ、きれいーい」

本日の授業は草原で行われていた。ラギシスが腕を振るうと、その腕から花びらが舞う。入塾したばかりの紫色の髪の少女は目を輝かせる。

「本当…きれいね」

「そんなのより攻撃魔法を教えて欲しいわ」

「もっ…」

赤い髪の娘が言うと、緑色の髪の娘が別の魔法が良いと言う。隣にいた青い髪の娘がとがめるが、ラギシスは優しく微笑む。本当に不満に思っているわけではないのを知っているからだ。そう文句を言った娘も、舞い踊る花びらを見ながら優しく微笑んでいたからだ。花びらが彼女たちを包むように回り始める。その美しい光景に、娘たちの目の輝きが更に増す。

「ふうん…目隠しくらいには使えそうね。今日の授業はやっぱりこれでいいわ」

「もう…素直じゃないんだから」

あはは、と笑い声が草原に響く。言われた娘はふん、と拗ねた風な顔を見せるが、耐えきれなかったのかすぐに吹き出してしまふ。平和な光景が、そこには広がっていた。

そして…月日は流れる…

LP0001 10月

- 自由都市カスタム -

「ラギシス！」

ラギシスの前には美しく成長した娘たちが立っていた。しかし、様子がおかしい。ある娘は剣先をラギシスに向け、ある娘は魔法を使う構えを取る。

「どうしてもやるのか…」

悲しげに呟くラギシス。返ってきたのは言葉ではなく、魔法。紫の髪の娘が、小型の幻獣をラギシスに放った。

「…!!」

それが始まりの合図であった。師であるラギシスだが、既に老体の身。それにリーダー格であった緑髪の娘は、既にラギシスをも凌駕した力を持ち合わせている。更に、四対一。必死に抗戦するが、徐々に追い詰められていくラギシス。青い髪の娘が水の魔法を放つ。防御魔法でそれを防ぐと、剣を持った赤髪の娘がラギシスに迫った。

「くっ・・・」

ギリギリで剣を躲し、距離を置くラギシス。が、すぐに気がつく。誘導させられた、と。他の三人が左右に分かれ、道を開く。今、ラギシスと一直線上に対峙するのは、リーダー格の娘。既に呪文詠唱を終え、放つ直前だ。ラギシスに逃げ場はない。

「死ねええええええ!!!!」

「っ!!」

ラギシスを光が包む。結界を張るが防ぎきれない。吹き飛ばされ、動けなくなるラギシス。柱が崩れ、瓦礫がラギシスの身体に落ちていく。薄れゆく意識の中でラギシスは思った。

「（指…輪…）」

ラギシスの身体が瓦礫に埋もれていく。それとほぼ同時に、空中に魔方阵が現れ、町全体を包む。娘たちの誰かが使ったのであるのか。恐ろしい魔力で魔方阵はカスタムの町を地下に陥没させていった。

住人は言う。娘たちが狂った。育ての親である師匠を殺し、地上に出られないよう封印を掛けた。あの娘たちは悪魔だ。誰か…この町を救ってくれ。四人の娘たちの指には、それぞれ違った色の指輪が妖しく光っていた。

- アイスの町 キースギルド -

男は数多くある依頼書の中から、その依頼書に目を付けた。

- 反逆の少女たち、親代わりでもあった師匠を殺し、町を封印する。彼女たちは今こう呼ばれている、カスタムの四魔女、と。 -

「なんだ？その仕事受けるのか？こつちとしちゃーありがてーが、報酬はそんなに高くないし、割にあつた仕事じゃねーぞ？」

「割に合わない仕事はいつものことさ。この四魔女というのが少し気になつてね…」

「なんだ？遂にお前にも春が来たつてか？」

下品な笑みを浮かべるギルドマスターのキースに対し、そんなんじゃないさ、と返す。

「まあ、そこまでお前が興味持つたつて事は、受けるんだろ？」

「ああ、この依頼、受けさせて貰う」

「あいよっ！頼んだぜ、ルーク！」

第12話 地下に沈んだ町

- 荒野 -

砂埃舞う荒野をルークは歩いてきた。向かうはカスタムの町。アイスの町からそう遠くない町だが、ルークは迷ってしまっていた。

「…おかしいな、地図によるともうそろそろのはずなんだが…」

というのも、ルークはカスタムの町をほとんど訪れたことがない理由としては二つ。リーザスやポルトガルといった、仕事で訪れることの多い大都市に向かう際の通り道からは少し外れてしまっているというのが一つ。もう一つは、いままでギルドに依頼されるような事件は起こらない平和な町であったため、訪れる機会がなかったのだ。そのような平和な町での異変。一体何が起きているのだろうか。

「訪れるのは約20年ぶり、あの時とはどれほど変わっているのかね…」

前述の通り、ルークはこの町を訪れたことがないわけではない。かつて、たった一度だけこの町に来たことがある。18年前、7つの時だっただろうか。ルークはかつての光景を思い出す。

GI0998 冬

- カスタムの町 -

身なりはボロボロ、全身に擦り傷を付けた二人の子供が町の前に立っていた。声を掛けようとする者はいない。その目だ。後ろに連れられている少女は普通だが、もう一人の男児の目が普通ではない。濁っている。まるで、この世全てを恨んでいるかのように。

「どうしたんだ？何かあったのか？」

そんな中、一人の男が声を掛ける。この町に最近移り住んできた魔法使いだ。それが、ルークとこの男の出会いであった。

LP0001 10月

荒野

ふ、と自嘲気味に笑うルーク。懐かしい思い出でもあり、同時に出来ることならば思い出さたくはない過去である。そう、あの時はまだ彼女が隣にいたのだ。と。そんなことを思っていると、目の前に洞窟の入り口が見えてくる。そこには一人の少女が立っていた。こちらに微笑んで近づいてくる少女。

「お待ちしておりました。ルーク様でいらっしゃいますね？」

「そうだが、君は？」

少女は顔をパツと輝かせると、深々とお辞儀をした。

「ようこそおいでくださいました、カスタムの町へ。私は町長の娘、チサと言います」

「町……どこにあるんだ？」

「さあ、どうぞこちらへ。父がお待ちしています」

娘はそう言うと、ルークを案内するように洞窟の中へと入っていく。

「まさか…洞窟の中か…？」

- カスタムの町 -

洞窟をしばらく進むと、そこには地下の空洞の中に町があった。

「地下に町が丸々入っているのか！？以前来たときは普通の町だったが…封印というのはこういうことだったのか…」

「以前に町を訪れたことがあるのですか？すいません、町長の娘ともあろうものが、覚えていなくて…」

申し訳なさそうに頭を下げるチサに対し、こちらもすまなそうに返すルーク。

「いや、謝らなくて良い。多分君が生まれる前の話だ。20年くらい前だからね」

「そうだったんですか。…ルーク様から見て、今の町はどのように見えますか？」

周りを見回す。だいぶ過去の話なので記憶も曖昧だが、以前はもっと住人の元気な声が飛び交う町だったはず。それに、所々破壊された家が目に入ってくる。

「正直…以前の姿を知っている者からすれば…信じられない光景だ

な」

「それも全て…彼女たちが…」

悲しそうな、それでいて悔しそうな顔をする。そんな話をしている内に、町長の家に着き、中に案内された

「これはこれは、よくぞ来てくださいました。身体が少し弱いので、床に入ったままで失礼します。私は町長のガイゼル・ゴードといいます」

町長を見るルーク。以前の町長とは違うな。あちらもルークのことを覚えていない。無理もない、18年も前の話だ。それに、この町に滞在していた期間も短かった。

「あなたはキースギルドに所属する冒険者の中でも、特に優秀な戦士だと聞いています。どうか、この町をお救いください」

キースめ、大げさに言いやがったな、とルークは思う。多くの人々を救った優秀な冒険者、という点では、ラーク&ノアコンビの方がよっぽど当てはまる。というのも、ルークの仕事の請負方には癖があるからだ。事件の規模や報酬ではなく、強そうな奴に会えるか、その依頼者との繋がりが大きな意味を持ちそうかという事を最も重要視している。そのため、時には初級冒険者が請け負うようなお使いのような依頼もこなす。以前ラークに苦言を呈されたが、先の大戦を見据えているルークにとって、この方針を変えるつもりはなかった。

「まあ、任せておいてくれ。受けた依頼はきっちりこなすさ」

「それは頼もしい！それでは町の状況を説明させていただきます。チサ、頼んだ」

ガイゼルがそう言うと、チサが一步前に出てくる。

「はい、ルーク様もご存じの通り、この町は元々地上にありました。ですが、少し前に魔法使いたちの戦闘がこの町に起こりました。一人の魔法使いの名前をラギシス。この町で魔法塾を開いていた方です。彼は私たちを守って戦ってくださいました。悪いのは四人の魔女たち。ラギシスの塾生であった彼女たちは、突如反逆を起こしました。ラギシスの持っていた指輪を奪い、ラギシスを殺した彼女たちは、指輪の力でこの町を地下へと沈め、町を封印してしまいました」

「町一つを地下へ沈めたというのか…その娘たちが…」

にわかには信じがたいことである。魔法大国のゼスでも、たった四人でそんなことを出来る者は限られてくるだろう。

「きっと、指輪の力で彼女たちの魔力を増幅させているんです。そして彼女たちは地下に迷宮を築くと、私たちの生活を脅かすようになりまし。数々のモンスターが町へ進入してきたり、若い女性が誘拐されたり…」

「彼女たちを倒そうとはしなかったのか？」

「いいえ、青年団が四人の魔女を倒そうと迷宮に潜っていきまし。が…まだ誰も帰ってきません…」

そう、肩を落とすチサ。

「酷な話だが…もう生きてはいないだろうな」

「あつ…か、彼女たちの目的は分かりませんが、お願いです。私たちをお救いください！」

「私からもお願いします。彼女たちを倒して、この町を以前のよう

な平和な町にしてください」

ゴード親子がルークに対し懇願する。ルークは右拳を少し前に出し、力強く握ると、口を開いた。

「任せておけ。すぐにこの町を元の平和な町に戻してやる」

「ありがとうございます！ルーク様！」

ルークの手をチサの手が包み込む。その光景にごほん、とガイゼルが咳払いをすると、恥ずかしそうにチサが手をすぐに下げた。

「…娘はやらんぞ。で、報酬のことだが…」

「安心してください。どこかの冒険者と違って、節操なしではないんで…」

ルークは三ヶ月ほど前、共に仕事をした男の顔を頭に浮かべる。

あいつだったら、報酬はチサちゃんが良いとか言い出すだろうな…

「うむ、それならいい。で、報酬なのだが一応20000GOLD用意しています。ただ、依頼した冒険者は一人ではないため、早い者勝ちになってはしまいますが…」

ふむ、20000GOLDか。事件の規模を考えると割の良い仕事とは言えない。町を沈める程の魔力を持った魔法使いと、命を掛けて戦わねばならないのだ。前回の誘拐事件の割が良いすぎたのもあるが、（まあ結果としてあれもリーザス王家が絡んでいたから、割の良い仕事では無かったが）それにしても安すぎる。報酬の額を気にするルークではないが、この案件は個人の依頼ではなく、町としての大規模な依頼。あまり安くされると、キースギルドの名が汚されると同時に、カスタムの町の評判も落ちてしまうのだ。

「少し安すぎますね。復興のための資金を貯めなければならぬのは分かりますが、30000GOLDが最低限のラインですね。そうでないと、ウチのギルドだけでなく、カスタムの町の評判も落ちます。それに、その値段では請け負ってくれる冒険者が極端に減るでしょうね。早く解決させた方が、結果として出費を安く抑えられると思いますよ」

「なるほど…申し訳ありません。今までギルドに依頼などしたことが無かったものですから、相場が分からなくて。それでは30000GOLDとさせていただきます」

「了解だ。それでは、正式に受けさせて貰う」

そう言い、部屋を出て行くルーク。

「…なんて頼もしく勇ましいお方。あの方ならきつと大丈夫ですね、お父様」

「うむ、彼になら任せても良さそうだな…だが、娘はやらんぞ」

「…あつ、お父様。もうすぐ次の冒険者様が到着する時間なので、町の入り口まで迎えに行つてきますね」

ルークは町の中を見て回っていた。時間を掛けて町を一周するが、中々に入り組んだ町であると同時に、モンスターに荒らされてしまっているため、店の場所などを思えることが難しかった。と、チサが歩いているのが目に入る。

「ああ、チサちゃん、ちょっといいかな」

「あら？どうされましたか、ルーク様」

「ちょっと町の地図をいただけませんか？少し覚えるのに時間が掛かりそうだ」

「それでしたら、家にいくつか予備がありますのでついて来てください」

チサの後をついて行き町長の家まで引き返すルーク。道中無言なものも気まずいので、世間話感覚でチサに話しかける。

「そういえば、チサちゃんは買い物か何かかな？」

「はい、ルーク様の次にもう一組冒険者様がお見えになったんですけど、お茶菓子を切らしてしまいました」

そう言い、家の中へ入る二人。すると、町長の部屋の方から大声が聞こえる。これがもう一組の冒険者の声だろうか。それにしても、どこかで聞き覚えのある声な気が…

「がはははは、安すぎる！！報酬は50000GOLDか、チサちゃんの処女だ！！！そうでない俺様は降りるぞ」

「駄目だ駄目だ駄目だー！チサには指一本触れさせんぞー！……」

間違いない、あいつだ。

第12話 地下に沈んだ町（後書き）

「人物」

ガイゼル・ゴード

カスタムの町の町長。病に倒れながらも、町再建のために奔走する。親バカである。

チサ・ゴード

カスタム町長の娘。父親思いの優しい少女である。50000G OLDに吹っかけた冒険者に対しても、頼もしく勇敢で彼なら大丈夫とのたまう辺り、あまり深く物事を考えていないと思われる。

「都市」

リーザス王国

大陸東北部に位置する、人口約5000万人の豊かな国。ヘルマン帝国に反乱を起こしたグロス・リーザスがG I O 5 3 4年に建国以後、長きに渡りヘルマンとの争いが続くこととなる。土地が豊かで食料に恵まれ、商工業も盛んで暮らしは豊か。魔人界とも隣接していないため、基本的には平和な国である。

アイスの町

自由都市。ランスが生活している町であり、キースギルドの他に、冒険者のお供として有名な回復薬「世色癌」で薬市場の約50%を占めている世界有数の製薬会社「ハピネス製薬」などがある。

ジオの町

自由都市。「ジーク・ジオ」を合い言葉としており、経済力は高い町である。

第13話 トマト爆誕

- カスタムの町 酒場 -

「まさかこんなに早く再会する事になるとはな…稼いだからしばらく働かないんじゃないかなかったのか？」

ルークは自分同様、依頼を受けるためカスタムまで来たランスとシイルと共に、町の酒場で食事を取っていた。当然のようにルークの奢りになってしまっている。テーブルの上には注文した料理が並んでいる。口を付けたうるうるんが余りにもまずかったので、ビールで口直しをしながらルークが尋ねる。

「ふん、どうせ再会するならヒカリちゃんとかの方が良かったがな。ん？金か？あんなもんとつくに使い切ったわ」

言い放つランス。少し贅沢な生活をしていても、しばらくは大丈夫なレベルの大金があったはずなのだが。シイルの方を見ると、食べていたチョコレートパフェをテーブルに置き、申し訳なさそうに頷く。本当に使い切ったのか…

「まあ50000GOLDで交渉成立したから、この仕事が終わったら、またしばらく仕事する気はないがな」

上機嫌に出来たてのへんでろばを食べるランス。そう、先ほどガイズルに対する値上げ交渉は見事に成功し、報酬は50000GOLDへと跳ね上がっていた。娘を守るための苦渋の決断だったのだらう。

「そこで、提案なんだが。どうだ、またこの間みたいの手を組まないか？」

「ん？まあ…分け前次第だな…」

ルークの提案に珍しく応じる気配を見せるランス。理由としては、ルークの実力を知っており、同時に自分が女を襲う邪魔をしない男というのが一つ。もう一つは四魔女が美少女であった場合、やる気満々なため、ランスはさっさと事件を解決させたいのだ。

「そうだな…俺は10000GOLD貰えれば十分だな」

「むう…まあいいだろう。がはは、俺様のためにしっかり働けよ」

ルークに10000GOLD支払っても、当初提示された報酬よりも多いのだ。それに、ルークと一緒にいると今夜の食事のように、所々で奢らせることが出来る。これ幸いと手を組むことにするランス。

「はい、ご注文のうはあんお待たせ」

店の自称看板娘であるエレナが追加で頼んだ料理を持ってくる。と同時に、シルルの頭を撫で始める。

「…おい、人の奴隷に何やってるんだ？」

「わつと、ゴメンなさい。私って、人の頭を撫でるのが好き…で…ふああっつ！何これえ！」

頭を撫でていたエレナが突如騒ぎ出す。

「な、なに、この頭…あつたかくて…優しくて…心が引きずり込まれていく…正にゴッドオブヘア…」

「あ…あの…あんまり中で動かさないでください…」
「ええい、さっさと離れろ！」

ランスに引きはがされるエレナ。その顔は恍惚の表情を浮かべている。特徴的なもこもこヘアーだが、あの中はそんなにも気持ちのよいものなのか…？

「…おい、ルーク。何を人の奴隷の頭に手を伸ばそうとしているんだ？」

「…そんな事してないですよ？」

「喋り方が普段と違うし、目を反らすんじゃない！」

ランスが暴れ始めて酒場の中が騒然となる。シイルは周りに平謝り。こうして夜が更けていった。

- 翌日 カスタムの町 アイテム屋 -

迷宮に挑むことになるため、それに備えてアイテム屋に寄るのは冒険者の常識。ということで三人はアイテム屋にやってきていた。

「いらっしやいませですねー？ここはアイテム屋ですかー？」

「…それを店主のあんたが聞いてどうするんだ？」

店に入ると整った容姿の店員がそんなことを行ってきた。頭の弱い娘なのだろうか？ミミックと思われるモンスターが檻に入れられている。どうやらペットのようだ。

「おう、中々にグッドな娘さんだな。名前は何という？」

トマトの頭に二人のチョップが炸裂した。

「しくしく…何を求めになられますか」

「自業自得だな、さすがに。ん…：棚がすかすかだな」

「町がこんな状況なので、物資があまり届かないんですよ。特に剣が品薄なんですよね？」

「こつちに振るんじゃない。とりあえずこの剣と鎧を貰うかな。ルーク払っておけよ」

「いつから俺はお前のサイフになったんだ！というか、この間俺の金で勝手に買った装備はどうした？」

リーザスで買っていた装備の方が、今選んだ装備より良いものだと思うのだが、とルークは思う。

「ああ、盾は装備してても戦いにくいんであの後すぐに売った。剣と鎧はもうちょい後に生活費の足しにするため売った」

「人の金で買ったものを…」

「すみません、すみません…」

シイルが謝る横で、ルークも店内を物色した。剣は妃円の剣がまだまだ刃こぼれを起こしていないので、鎧と世色癌を購入。

「ん？シイルちゃんも遠慮しないで買って良いんだぞ？」

「いえ…申し訳ないですし…」

「主人と違って謙虚だな、シイルちゃんは。店主、そのこのローブもついでに買わせて貰うぞ」

「はい、お優しいんですねー？」

「すみません、ありがとうございます」

「あ、こら！勝手に俺様の奴隷に服を着せるんじゃない」

「ダンジョン潜るときくらいは羽織るくらいいいだろ。流石に危な

いぞ…って、何勝手に世色癌そんな大量に買ってたんだ！」

「全部で4000GOLDになりますー？」

「高っ！ランスお前、何買いやがった！！！」

「がはははは、高そうな鎧とは思ってたが、中々の値段になったな」

渋々払うルーク。流石に分け前をもう少し上げて貰おう、と心に誓うのだった。トマトはほくほく顔でお金を受け取りながら、先ほどランスから返して貰った家宝の剣を大事そうに抱えていた。

「そんなに大事な剣だったのか？」

「はい、家宝というのもありますが、私、いつか自分で冒険をした
いと考えているんです…よね？」

「アイテム屋さんなのにですか？凄いですね」

「全く鍛えてるようには見えんが…危ないぞ。俺様が近くで守って
やろう」

シルルが感心し、ランスが下心満載で護衛に志願する。

「鍛えてはいないですけど、何とかありますよ。…その、気合いで
？」

「それはある程度ちゃんと鍛えた奴が最後に頼るものだよ。ふむ…
でも素質は悪くなさそうだな。鍛えれば一端の冒険者になれるかも
しれないな」

「え？本当ですか？わーい、そうだったら、いつか一緒に冒険して
くださいね？」

「がはは、最強の俺様はいつかじゃなく、今すぐでもいいんだがな
「いつかそんな日が来るのを待っているよ」

店を出て行く三人を見送るトマト。流石にお世辞なのは分かっていたが、ちょっと剣の修行を試みようかな、と思うのであった。

- カスタムの町 ラギシス邸跡 -

その家は戦闘の影響でか、崩れかけであった。部屋は薄暗く、床には魔方阵が刻まれている。

「ランス様…ここ、なんだか怖いです。なにか…気配みたいなもの感じませんか？」

「ラギシスの亡霊でもいれのか？馬鹿馬鹿しい、びびりすぎだ」

「で…でも、もしかしたら…」

ブルブルと震えるシイル。するとそのとき、ペシーんと音が響いた。

「ひゃあああああ」

「がはは、尻を叩かれたくらいでびびりおって。情けないぞ」

「ひどいですよお…ランス様…」

悪ガキっぽく笑うランス。シイルは目に涙を浮かべながら、腰を抜かして床に座り込んでしまった。その姿が中々にそそる。

「よし、やるぞシイル。ルーク、ちょっと外で待ってる」

「はいはい、早めに済ませてくれよ」

「え、え、え、…その…ここは怖いんでせめて場所を変えましょうよ」

シイルの胸を揉み始めるランスに、場所替えを提案するシイル。それを尻目に部屋から出て行こうとするルークだったが、部屋の中

心部、魔方陣のあつた辺りが光輝き、青白い人の形を成したものが
出来上がっていった。

「こら、神聖なる屋敷で不埒な行いをするんじゃない。その男も
出て行かないでちゃんと止める」

「うわっ、なんだこの親父は！おばけか？」

ランスがそう言うと、シイルは怖がってランスの後ろに隠れる。
ルークも出て行こうとしていたのを止め、剣に手を伸ばして臨戦態
勢に入る。

「お化けにあらず…怯える必要はない。私こそ、この町の守護者、
ラギシスだ…」

死してなお、その魔法使いは地縛霊となりこの世に留まっていた。
それは自分の弟子を止められなかった後悔からか、あるいは別の未
練があるともいえるのだろうか…

第13話 トマト爆誕（後書き）

「人物」

ランス （2）

LV 10 /

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV1 冒険LV1

早々にルークと再会した鬼畜戦士。誘拐事件解決時にはLV15ほどになっていたが、その後ほとんど冒険をしないでいたらレベルダウンしていた。

シイル・プライン （2）

LV 10 / 40

技能 魔法LV1 神魔法LV1

ゴッドオブヘアーの持ち主。ランス同様、冒険していなかったため仲良くレベルダウン。

トマト・ピユール

LV 1 / 37

技能 剣戦闘LV1

カスタムの町アイテム屋店主。趣味は盆栽と俳句で、ミミックをペットにしている変わった娘。大冒険に興味がある。本家2とリメイク版である02で性格がだいぶ違う。本作では02仕様。因みにRance1のパッケージは彼女だったりする。しかし、1に彼女は登場しない。最新作ランスクエストにて再登場。その保有スキルの使いやすさから、お世話になったプレイヤーも多いのでは？

エレナ・エルアール

カスタムの町酒場の看板娘。覆面社交パーティーで抱かれた初恋の男を捜すため、500GOLDで体売っている。

「モンスター」

ミミック

宝箱に潜むモンスター。強力なレーザー攻撃を放つため、油断は禁物。なぜかトマトがペットにしている。

「装備品」

イナズマの剣

ランスが購入。切れ味は並だが、雷属性の武器であり、通が好むとされている。

界陣の鎧

ランスが購入。戦士向けの本格的な鎧で、値段も1800GOLDと中々の値段。

真紅の鎧

ルークが購入。若者に大流行の軽鎧。付属のマントはランスに上げた。

防御のローブ

シルが購入。女性用の防具で、見た目は軽いがそこそこの防御力を持つ。

「アイテム」

世色癌

回復薬。ハピネス製薬が発売しており、冒険者のお供。苦い。どこかの世界にはこれを1000粒くらい一気のみする猛者がいるら

しい。名前はナクト、きつと世色癒食LV3の技能保有者なのだろう。

「料理／食材」

うるろーん

ねちよーりして、ガリンゴリンしていて、それでいて半生の料理。つまり不味い。

うはあん

桃りんごを用いて作る高級料理。果物である「うはあん」と名前が似ているが、別物である。

ビール

ご存じビール。本家2でエレナが勧めてくる。

チョコレートパフェ

ランス曰く男の食べ物。よって、シイルはあまり食べさせて貰えない。

第14話 抱く疑念

- カスタムの町 ラギシス邸跡 -

「あんたが四人の魔女に殺されたラギシスに間違いないんだな？」
「いかにも。お主たちはこの町の住人ではないな。雇われた冒険者であるか？」

廃墟と化したラギシス邸跡で、ルークは霊体になったラギシスと話をしていた。未練を残した人間が霊体となってこの世に留まるのは、珍しくはあるが決してあり得ない事ではない。この間の誘拐事件の際も、ラベンダーという幽霊になった女の子がいたように、冒険者を長く続けていれば、何度かは出くわす事もあるケースだ。ラギシスは長髪に髭を生やした、ナイスミドルという言葉がよく似合いそうな、老人一歩手前の中年であった。平穩無事なら、まだまだ余生を過ごせたであろう。

「ふふん、俺様こそ史上最強の戦士、ランス様だ！こっちは奴隷のシイルで、こいつは下僕のルーク」

「よ、よろしく…お願いします…」

「俺はいつになったら下僕を卒業できるんだ…？」

ランスがポーズを取りながら自己紹介をし、その後ろから控えめにシイルが顔を出しお辞儀する。

「そうか…頼む、どうかこの町を救って欲しい。私にはもう、それを行う力はない…」

申し訳なさそうに霊体となったラギシスが頼み込む。その顔はどこか悔しそうであった。町を守れなかったこと、弟子たちに反乱を起こされたこと、現世に相当な未練があるのだろう。

「任せておけ。で、出来ることなら事のあらましを本人から聞きたいのだが」

「さて、そう言われても…どこから話していいものか…そうだな、私はこの町の守護者として長い間この町を守ってきた。だが、老いには勝てん。力が衰えていくのを感じた私は、魔力に素質のある者を四人集め、後継者として育て始めた。ゆくゆくは、この町の守護者として跡を継いで貰おうと。幼い彼女たちに魔法を教えている時間は、安息に満ちた時間であった。日に日に魔力を増した彼女たちを見るのは…」

「まてまて、要点だけ話せジジイ。お前の思い出話が聞きたいんじゃない。話したいならその辺の石にでも話してる」

「……………」

バツサリと切って捨てるランス。が、内心ルークは拍手していた。正直ルークも、この先関係ない話が続くような気配を感じ取り、どうしたものやらと考えていたからだ。

「…要点だけ話そう。ある日奴らは私の大事なフィールの指輪を奪っていった」

「フィールの指輪？聞いたことがないな…」

「以前にゼスのとある魔法使いから譲り受けたものでな。はめた者の魔力を数倍にも増幅させるのだ」

話を聞いてルークは驚く。今この男は数倍と言ったか？確かに魔力を増幅させる装飾品が無いわけではない。例えばカラー族のクリスタル等がそうだ。彼女たち一族の額に埋め込まれたクリスタルは、

ある方法を用いると魔力が増幅され、強力なマジックアイテムの材料となる。これを加工したクリスタルリング等は、魔力を増幅させる装飾品と呼べるだろう。が、それでも増幅する魔力はせいぜい二倍。相場20万GOLDのクリスタルを加工した、市場にあまり出回らないクリスタルリングでさえその程度なのだ。なればこそ、数倍にもなるようなマジックアイテムがあれば、国宝になっけていてもおかしくはない。それを手放すぜスの魔法使い、そんなことが有り得るのか…

「奴らはこともあろうに、師である私に戦いを挑んできたのだ。普通であれば未熟者が束になろうと負けはせん。が、フィールの指輪を装備した奴らは絶大な魔力を手にしてた。特に、リーダー格であった娘は私をも凌駕する魔力…私は敗れ、このような姿になってしまった。…このまま野放しにするわけにはいかない！」

「待て、今の話し方からすると、フィールの指輪は一つではないのか」

「うむ、全部で四つある」

四つ…一つでも国宝になりかねん、そんな指輪が四つだと…

「ふん、自分の弟子に負けるなど情けない奴め。とりあえず、彼女たちの情報について教えて貰おう。名前、得意技、スリーサイズを答えろ！」

「スリーサイズは知らんが…答えられる範囲で答えよう」

魔力の増幅などに興味のないランスは、指輪の異常さに気がつかず話を進める。ラギシスがそれに答え、彼女たちの説明を始めるが、ルークは未だ頭からフィールの指輪のことが離れていなかった。

「まずは、マリア・カスタード。冰雪系の中でも、取り分け水魔法

を得意とする少女だ。魔法以外にも研究や発明の才能もあったな。ひよつとしたら育てればそちらの方が伸びたかもしれん」

「可愛いのか？」

「たとえ殺されようとな…どの子も、私にとっては可愛い娘だ」

そう言うラギシスに対し、ちよつと感動したのかシイルがつるつると涙目になっている。奴隷として売られていたということは、両親は亡くなっているか、生きていたとしても長く会えていないのだろう、とルークはシイルを見ながら思った。

「次にミル・ヨークス。他の三人よりも弟子入りしたのが遅く、年齢も一番若い。珍しい幻獣魔法の使い手だ。指輪の魔力を持っている今では、ほぼ無尽蔵にモンスターを生み出すだろう」

「厄介だな。次。」

「三人目はエレノア・ラン。彼女は剣の腕にも秀でた魔法剣士で、初級魔法レベルのものを手広く学んでいる。その中でも幻惑系の魔法を最も得意としている」

「つまり器用貧乏タイプだろ。一番中途半端なタイプだな」

三人目までの説明を聞き、戦い方を考えるルーク。ランスも言ったように、ここまでで一番厄介なのはミルという娘だ。前衛に守らせ、後ろで詠唱をするという魔法使いの基本戦術。基本であるが故に、ただ単純に強い。その前衛を、無尽蔵に生み出すというのだ。単体ではもちろん、他の魔女と組まれると非常に不味い。逆にエレノアという娘は、幻惑魔法にさえ気をつければ、比較的やりやすい。そして、問題の四人目だ。リーダー格であり、指輪を付けていたとはいえ、師であるラギシスをも上回る魔力を持ち合わせた人物。

「そして最後が…ランス、ルークよ、彼女には特に気をつけるんだ。将来的には間違いなく人類最強クラスの魔法使いになるであろう素

質を持っている。魔法大国ゼスでも、これ程の才の持ち主は限られるだろう」

ゼスでも有数の魔法使いか。ふと、一人の青年が思い出される。何度か仕事を共にしたことのある魔法使い。魔法使いにあらずば人にあらずという思想が蔓延するゼスにおいて、そういった思想に捕らわれない珍しい男。初めて出会ったとき、あいつはまだ学生だった。ギルド仕事で学園を訪れた際、モンスターが現れ駆り出されたあいつは、得意の炎魔法で敵を消し炭に変えていった。正直、別のギルドから派遣されていた魔法使いや、その場に居合わせた教師なんかよりも、よっぽど才能を持ち合わせていた。つい先日、約10年ぶりに再会を果たした際、ゼスの兵隊になっていたのを見たときは時の流れに驚かされたものである。まあ、あちらも、10年も顔を見せないから死んだと思っていた俺と再会して、たいそう驚いてはいたが。そんな事を懐かしんでいると、最後の娘の名前を聞き逃す。

「あ、すまない。考え事をしていて聞き逃した。最後の娘の名前は？」

「ぼーっとしてるんじゃない、馬鹿者。志津香だ、志津香！」

「気をつけるよ、彼女も数多くの属性の魔法を……」

「返す言葉もないな。ゼスと聞いて友人のことを思い出していた」

「ん？美少女か？だったら俺様に紹介しろ」

「いや、男だよ」

「なんだ男か。……ん、なるほど、以前女に興味ないとか言っていたが、そういう事か。貴様、ホモだな！」

「一応訂正しておくが、女じゃなくて、お前が誰を抱いたって話に興味なかっただけだからな。」

「ル、ルークさんにそんな趣味が……」

「違うから。あり得ないから。信じないでくれ、シイルちゃん！」

がはは、と一歩ルークから離れながら笑うランス、信じてしまったのかシヨックを隠しきれない様子でルークを見るシル、必死に弁解するルーク。やんややんやと大騒ぎを始める。

「あの…まだ話の途中なんだが…」

・カスタムの町 地獄の口・

ラギシスから少女たちの情報を聞いた三人は、彼女たちが築いたという迷宮の前まで来ていた。住人の間では、地獄の口と呼ばれて恐れられている場所だ。

「さあ、入るぞ！がはは、とつと少女たちをお仕置きして、報酬ゲットだ！」

ランスが先頭に立ち、その後ろをルークとシルがついて行く。中に入ると辺りは暗く、少し先も見通せないほどだった。ただでさえ暗い洞窟が、地下にあることで光の全く差し込まないダンジョンになっていた。

「とりあえず明るくしますね」

シルが呪文を唱えると、2メートルくらいの位置にミニ太陽が現れ、ダンジョン内を明るく照らす。

「んー、やはり魔法使いがパートナーだと仕事がやりやすいな。もうちょい大事に扱ってやれよ、ランス」

「ふん、こいつは俺様の奴隷だから、俺様がどう扱おうが問題ない。余計なこと言ってるんで、さっさと奥に進むぞ」

そう言っただけで先に歩いていってしまおうラン。ダンジョン内はあまり入り組んでおらず、出現するモンスターもきゃんきゃんやミートボール、ハニースライムなど、雑魚モンスターばかり。道中出るモンスターを倒しながらスムーズに奥へと進んでいく三人。と、ランの足が滑る。足下が急に坂になっていたのだ。

「げー!!」

「うおっ、人の足を掴んで巻き込むな!!」

「きゃあああああ!!」

巻き込まれるルークとシル。三人は下にあった地下水湖に仲良く落ちていった。

・洞窟内 研究室・

洞窟内のある一室、ダンジョンを築く際、わがままを言って無理矢理作った部屋だ。机の上には怪しげな薬品の入ったビーカーや、拡げたままの難しそうな書物が散乱していた。そこに、少女はいた。白衣を身につけ、顔には特徴的なまん丸メガネ。彼女がここで研究しているのは、新たな兵器。魔法の才能を持たない戦士でも、魔法使い同等の威力を持った長距離攻撃を可能とする新兵器を開発していた。

「もしもこれが完成すれば…戦闘の歴史がひっくり変わるわよ…ふふ」

怪しげな笑みを浮かべ、メガネがきらーんと光る。と、そのとき研究室の入り口前からゴゴゴゴ、と音が聞こえる。モンスター進入撃退用のトラップが発動したのだ。左右の壁が迫ってきてモンスターを押しつぶす、彼女の自信作である。

「うがああああ！！なんじゃこりやああ！！」

「きゃー、ランス様あああ！！」

「まずい、駆け抜けるぞ！ギリギリ間に合うかもしれん！」

いけない、モンスターではなく人間が引っかかってしまったらしい。慌ててトラップのスイッチを切る。

「ん？止まったぞ？がはは、へっぽこトラップめ、故障したな」

むか。私の作ったものがそんなに簡単に故障してたまるものですか、と聞こえてきた声に腹を立てる少女。程なくして、部屋の扉が開かれる。そこには冒険者が三人立っていた。一応こちらが危険な目にあわせてしまったので、謝罪する。

「すみません、大丈夫でしたか？怪我はないですか？」

「うむ、怪我なら平気だ。ところで君は何者だ？」

一番前にいた口の大きな冒険者が問いかけてくる。彼の言うように、三人ともなぜか濡れているが、怪我はないようだ。ホツとしながら、彼女は男の問いに答える。

「ああ、申し遅れました。私の名前はマリア・カスタード。よろしくお願いします」

第14話 抱く疑念（後書き）

「人物」

ラギシス・クライハウゼン

LV 23 / 30

技能 魔法LV2

カスタムで魔法塾を開いていた魔法使い。故人。弟子でもあり、娘のような存在であった四人の少女たちに反逆され、死亡する。死語は地縛霊となってカスタムに留まる。

「モンスター」

きゃんきゃん

一つ星女の子モンスター。無邪気な性格で戦闘意欲はなく、人間魔物問わず、遊んでと持ちかける。

ミートボール

槍と盾で武装した知能を持った肉団子。食べてもおいしくない。

ハニースライム

体が溶けているハニー。ハニー誕生の儀式に失敗すると、体が固まりきらず、この形状となる。

「技」

見える見える

ミニ太陽を生み出す初級魔法。ダンジョン内を探索するのに非常に役立つ。

「装備品」

クリスタルリング

カラーのクリスタルを加工して作るアクセサリ。魔力を二倍にする効力があるが、非常に高価であると同時に、市場に中々出回らない。

「アイテム」

クリスタル

カラーの額に埋め込まれている宝石。処女を失うと色が赤から青に変化し、膨大な魔力を持つようになるが、クリスタルを抜かれたカラーは消滅してしまう。相場は20万GOLD。カラー族は見目麗しく、クリスタルは犯されれば犯されるほど魔力を増すため、一攫千金を狙う者たちによるカラー狩りが後を絶たない。

第15話 その娘、研究者

- 洞窟内 研究室 -

「こんなに友好的ですと戦い辛いですね、ランス様…何かの間違いじゃないのですか？」

シイルが小声でランスに問いかけるのも無理はない。四魔女の一人であるはずの少女は、今自分たちの前で丁寧に自己紹介をしながら、ペコリと頭を下げて一礼しているのだ。シイルの言うように自分の師匠を殺して指輪を奪うような人間には思えない。まあ、そういった初見での評価が当てにならないことは、この間の王女様で証明済みだが。

- リーザス城 王女の間 -

「ぶえつくしっ！」

「リア様、大丈夫ですか？風邪気味なでしたら、今すぐお休みになつて…」

件の王女が大きなくしゃみをしていた。心配そうにする侍女。

「ううん、大丈夫。ところで、ダーリンの居場所は分かった？」

「はい。かなみの調査の結果、現在ランス様は仕事でカスタムの町を訪れているようです」

「じゃあ今すぐ向かいましょう！マリス、準備を」

「申し訳ありません、リア様。例の物を持ち出す許可が下りるのに、もう少々だけお時間が…」

「えー、今すぐ出発したいのにい…ぷんぷん」

仕事を放り出してランスに会いに行くことは特に問題視していないマリスだが、すぐに出発しようとするリアを止める。理由は王女がランスに会いに行くに当たって、城から持ちだそうとしていたものだ。それは本来持ち出し厳禁の代物で、裏で実権を握るマリスだからこそ、色々と手回しをして持ち出すことが可能なのだ。

「早うしの準備は整っておりますので、許可が下り次第すぐに出発できます」

「急いでね、マリス。待つててね、ダーリン！」

「かなみも準備を進めておくように」

「はっ！」

この部屋にいたもう一人の人物にマリスが声を掛ける。カーテンの裏に潜んでいたかなみはそう返事をしながら、主君が目当てにしている人物とは別の人のことを考えていた。

「（調査しているときに分かったんだけど、ルークさんも今カスタムに滞在してるみたいなのよね…偶然会ったりとかするかな…）」

・洞窟内 研究室・

「なんだか寒気が…」

「大丈夫ですか、ランス様？」

「それで、あんたはここで何の研究をしているんだ？」

ランスが得体の知れぬ悪寒を感じ取っている横で、ルークはマリアにそう尋ねる。すると、マリアが「バツ！」と目を輝かせてルークを見た。

「興味ある？興味あるのね！しょうがないな、ちよつとだけ説明してあげる！魔法って才能ある人しか使うことが出来ないでしょ。だから自然と魔法を使えない人は戦士として前衛に立つことが今の戦闘の通例になつてるの。でもそれを覆せるとしたら？戦士にも魔法使いと同じだけの破壊力を持った後衛攻撃が出来るようになったら？」

「一応遠距離をこなす戦士も少数だが存在はするんじゃないか？弓矢とかの武器もあるし、遠距離技を使う奴もいるしな」

捲し立てるように喋り出すマリアにちよつと引き気味になりながら、ルークが尋ねる。自分自身、一応真空斬という遠距離技を持っているからこそ、彼女の発言に少し引つかかったのだ。すると、マリアはやれやれ、分かってないな！という顔をしてみせる。

「確かにそういった例外もあるわ。でもね、弓矢なんかはある程度のセンスや努力が必要だし、必殺技なんかそれこそ持って生まれた才能が必須になるでしょ。そうじゃなくて、才能も努力も必要としない新兵器の開発をしているの！」

「努力を必要としないというのは無茶じゃないですか？やっぱり強くなるうとしたら、ある程度の努力が必要にはなってくるかと…」

「無茶を可能にする！そういった研究をしているの！もしもこれが完成すれば…ふふふ…」

シイルの問いに、グツ！と右拳を握りしめマリアが答える。その瞳は燃えていた。一見すればマッドサイエンティストの類に見られ

かねないが、確かに彼女の言う兵器が本当に実現すれば、戦いの歴史は大きく動くだろう。

「そこまで言うとなると興味があるな。どういった兵器か俺様に見せてみる」

「残念だけどそれは秘密。まだ完成していないもん。詳しい質問も受け付けないわよ。私が欲しいのは弟子じゃなくて、研究を手伝ってくれる人なんだから」

「こら待て、俺様を助手扱いとは無礼な！」

「…あれ？助手希望の人じゃなかったの？だったら助けるんじゃないかな」

そう言うてのけるマリア。今の発言に、ルークは少し思うところがあり、問いかける。

「つまり…助手希望の人間でなかったら、死んでしまっても構わなかったと？」

「うん、だって時間の無駄じゃない」

先ほどまでと何ら変わらない調子で、マリアは恐ろしいことを言うてのける。それがさも当然であるかのような様子に、ルークは若干身震いする。こんな少女が…

「わあ、私たち間違われたおかげで助かったんですね。ラッキーです」

ガクツ、とルークがこける。相変わらずシルは少し天然が入っていた。

「喜ぶな、バカ」

「ん？助手希望じゃないとなると…もしかして敵？」

「うむ！四魔女を退治しに来たのだ！」

「あー、それじゃあお帰りはあちらです。研究の邪魔になるから出て行ってください。早く出て行かないと警備のハニーやグリーンハニーやダブルハニーをたくさん呼ぶわよ」

「ハニーに何かの拘りでも！？」

マリアがお帰りください、とルークたちの入ってきた扉を指さす。警部を呼ばれるという発言を気にする様子もなくランスが答える。

「がはは、そんな雑魚どもは全く怖くないぞ。それより、どうして町を陥没させたんだ？」

「……………」

「質問を変えよう。フィールの指輪は？」

「一つは私が持っているわ。ほら、これがそうよ」

マリアが手をかざすと、その指には青い指輪が詰められていた。本当にあったのか…とルークは内心動揺する。

「あなたもこの指輪が目当てなの？でも渡せないわ」

「がはは、なら力尽くで奪うまでだ！」

ランスがそう言うと同時にルークも臨戦態勢に入る。魔力を数倍にするというのが本当なのであれば、油断するわけにはいかない。魔法を使われる前に取り押さえる。

「はあ…なら悪いけど死んでね」

油断したつもりはなかった。初級魔法ならばいくら魔力が上がっていたところで対応は可能だし、中級以上ならば呪文の詠唱をして

いる間に飛びかかれるよう構えていた。しかし、結果はどちらでもなかった。マリアの後ろに水の柱が噴き上がる。

「ほぼ無詠唱で中級魔法だと!？」

「迫激水!！」

水の柱が滝となり、ルークたちに襲いかかる。攻撃範囲が広く、逃げ場がない。

「ぐっ…」

「うがぁ、水が水が水が!！」

「あーん!ぶくぶくぶく…!」

滝に飲み込まれ、部屋の外に押し流される三人。それを見届けると、マリアは新しいトラップを発動させて、時間を無駄にしたというような顔つきで研究の作業に戻っていった。

・洞窟内 研究室前・

「うがぁぁぁ!開けるおぉお!！」

ランスが扉をがしがしと蹴る。かなり遠くまで押し流された三人が部屋の前まで戻ると、扉は固く閉ざされ中に入ることが出来なくなってしまうていた。

「結果…とは違うな。さっきのトラップと同じで、何かしらのカラクリか」

「これじゃあ、マリアさんにもう一度会うことが出来ませんね」

「ひとまず洞窟内に扉を開ける手段がないか捜すぞ！あの女、今度は容赦しないぞ。あんな事やこんな事してやる！」

ぶんすかと怒りながら、洞窟内の先に進んでいくランス。それにルークとシイルはついて行くが、ルークは先ほどの見通しの甘さを反省していた。魔力が上がる、ということだけを鵜呑みにし、詠唱時間さえも早まるという可能性を考えていなかった。一つ間違えれば、それが命取りになる。冒険者として気を引き締め直すと、少し開けた場所に出た。

「あ、ランス様！あそこにどなたかいらっしやいますよ!？」

言われた方を見る二人。そこには傷だらけの女性がいた。格好や近くに落ちている剣を見るに、冒険者だろう。すると、彼女が苦しそうにこちらに問いかけてきた。

「だっ…誰？」

「心配しなくて良い、同業者だ。俺はルーク、こっちの二人は同じく冒険者のランスと、そのパートナーで魔法使いのシイルだ」

「ふむふむ、美人じゃないか。…ぐふふ」

「よろしく願います」

「…どうやら貴方たちは奴らの仲間じゃなさそうね。私はネイと言い…ゲホッ」

挨拶の途中で辛そうに咳き込む。放っておくと危険な状態だ。

「シイルちゃん、とりあえずヒーリングを」

「はい。いたいので、とんでけーっ！」

シイルが治癒魔法を唱える。彼女の傷がふさがっていき、顔色が

良くなっていく。

「ふう…ありがとう。随分と楽になったわ」

「応急処置だからしばらくは安静にしていた方が良いな。こんな状況ですまないが少し聞いて良いかな？君は一人でこの迷宮に来たのか？」

「いいえ、私たちが迷宮に入ったのは四日前。私、ゼウス、カーネル、バードの四人で入ったの。目的は多分貴方たちと同じ、四魔女退治ね」

「うむ、俺様たちも同じ目的だ。それで、他の奴らはどうした？」

「水の彫像に負けて、みんな散り散りになってしまったわ」

「水の彫像？」

「強いんですか？」

「第二研究室を守っているガーディアンよ。恐ろしく強い上に二体いてね。私たちのパーティーでまともに応戦できていたのはバードだけだったわ」

「それはお前らがへっぽこだったからだろう。で、第二研究室とはなんだ？」

「へっぽ…！？」

ランスの発言に顔を歪めるが、一応命の恩人であるため話を続けるネイ。

「…あの迷宮にはマリアの研究室が二つあるの。一つはトラップで守られた第一研究室、もう一つが水の彫像に守られた第二研究室。基本的にマリアはどちらかにいるわ」

「俺たちが会ったのは第一研究室だな。扉を開ける手段があるか分からんし、第二研究室に向かった方が良さそうだな」

「待って。第二研究室に向かう途中の扉には鍵が掛かっているわ。頑丈な扉だし、破壊しての進入も難しいと思うわ」

「鍵か：水の彫像まで辿り着いたということは、君たちはその鍵を持っていたんだろう？その状態では探索の継続は無理だろうし、悪いが譲って貰えないかな？」

「ええ、ダンジョン内の宝箱から発見して持っていたわ。でも、彫像から逃げる途中で落としてしまったの。落とした場所は、多分地下水湖だと思う」

「おお、その場所ならさつき通ったぞ。よし、ルーク、捜してこい！」

「俺かよ……」

「当たり前だ！ネイちゃんを町まで送り届けなきゃならんがそれには護衛がいるし、悪化したときのための治療用でシイルも必要だからな」

まあ筋は通っている。シイルがネイと一緒に行動するのが確定な以上、主人であるランスがそちらの護衛をするのが普通の考えだ。

「ま、いいか。町の酒場で待っていてくれ。ネイは怪我人だからな、無茶はするなよ」

「がはは、任せておけ」

「あ、一緒にかえるの耳飾りも落としてしまったの。大事なものだから一緒に捜してきて貰えないかしら？」

「了解した。じゃあ行ってくる」

そう言って地下水湖に向かうルーク。残された三人の内の一人が、口をにたつと開いた。

「じゃあ、私たちも町に引き返しましょう。帰り木は持ってるのかしらっ？」

「……………」

「…なんでにじり寄ってくるの？なんで笑っているの？なんで何も

答えないの？なんでそっちの娘は遠い目してるのおおおお！？」

・カスタムの町 酒場・

「いらっしやーい。お仲間なら奥の席にいるよ」

酒場に入ってきたルークにエレナがそう言って案内する。その後地下水湖まで引き返したルークは、時間を掛けて捜した結果、鍵と耳飾りを発見し、約束の酒場までやってきたのだ。

「戻ったぞ。一応どっちも発見した…ん、ネイはどこに行った？」

「がはは、泣きながら「いつか殺してやる」とか言っただけで行ってしまったわ」

…おかしい、この展開、最近どこかで体験したような。

「…無茶はしないように言っておいたはずだが…」

「うむ、英雄である俺様とのHは無茶な行動ではないな。がはは」

…そう、あれは確か盗賊団の…

「そうそう、お前も含まれてたぞ。「治療してくれたシルはいいけど、あんたら二人にはいつか地獄を見せてやる!!」とか言ってたし」

「完全にデジャブツ!!」

第15話 その娘、研究者（後書き）

「人物」

ネイ・ウーロン

LV 8 / 27

技能 シーフLV1

女冒険者。傷つき倒れたところをランスに襲われる。ランスとルークを恨んでどこかへと姿を消す。いつか某盗賊の娘と一緒に復讐に來たりするかもしれない。

ゼウス

ネイの仲間の男冒険者。水の彫像に敗れ逃げているところ、モンスターに襲われ死亡。

カーネル

ネイの仲間の男冒険者。水の彫像に敗れ逃げているところ、足を滑らせ転倒し死亡。

「モンスター」

ハニー

茶色い基本形ハニー。意外なことに、ランスシリーズに初登場したのは6。

グリーンハニー

緑色のハニー。右手にトライデンを持つ。1から長いことシリーズ皆勤を続けていたが、戦国ランスにて遂に記録が途切れる。正直、出して欲しかった。

ダブルハニー

誕生の際、失敗して二体くっついてしまったハニー。右手にトライデン、左手に花を持ち、お腹には日の丸の国旗がある。右と左で性格が違う。

「技」

迫激水

氷系内水類の中級魔法。水の柱が噴き上がり、滝となって相手に襲いかかる。

「アイテム」

帰り木

ダンジョンから脱出する事の出来る冒険者の必須アイテム。一度使うとなくなる。

かえるの耳飾り

ネイの大事なもの。返しそびれたのでルークが一応持っている。

「その他」

ハニー種

ハニワ状の不思議な生物。男女の区別があり、同種内で繁殖可能。人間ともある程度共存している。魔法を無効化する「絶対魔法防御」という特性を持つ。

うし

ムシの一種。丸っこい赤い体でみゃーみゃーと鳴く、世界で最もポピュラーな家畜。足が速く、上手く走らせれば時速100kmに

も達する。はやつまやてはさき等つしよりも速い生物も存在するが、
うしが最も簡単に扱えるため、交通手段としても広く利用されてい
る。

第16話 水使いマリア

- 洞窟内 第二研究室前 -

「これがネイの言っていた水の彫像か」
「うーん、腰のラインがいやらしい」

三人は洞窟内に戻り、第二研究室前まで来ていた。そこには美しい女神像が二体並んでいた。彼女の話の通りなら、これがこの部屋を守るガーディアン。

「部屋に入ろうとすると動き出すタイプか？」

「では入る前に破壊してしまえばいいんだろう。がはは、とー！」

ランスが剣を振りかぶり、女神像を破壊しようとする、轟音と共に二体の彫像が動き出した。

「我らが眠りを妨げる不埒者ども」

「その身で償いをするがよい」

「ええい、部屋に入ろうとしなくても動き出したではないか、この嘘つきが！」

「別に断定しなかっただろうが。ランス、右の彫像は任せた。シルちゃん、後ろから援護を頼む」

「はい！」

ルークはそう言うと、左から襲いかかってきた彫像に対峙する。

見るからに頑丈そうな彫像だが、一定の距離で止まると呪文詠唱を始めた。彫像だから物理攻撃メインかと思っただが、どうやら魔法攻

撃タイプのようだ。ルークもその距離で腰を落とし、剣を左から右へ振り抜く。

「真空斬！」

ルークの放った斬撃は彫像の腕に直撃し、右腕が崩れ落ちる。が、特に気にすることなく呪文詠唱を続ける。

「水雷」

「おっと…痛みを感じてないな。一気に破壊するのが得策か」

彫像の放った魔法を躲し、ルークが彫像への戦闘方針を決める。少し離れた場所で、ランスももう一体の彫像と対峙していた。が、その瞳はとろん、と閉じかけている。

「えい、炎の矢！ランス様、起きてくださいーい！」

「おお！くそ、厄介な魔法使いやがって！」

シイルが炎の矢を彫像に放ち、寝かけていたランスを起こす。そう、ランスは彫像の放ったスリープの魔法で眠りかけていたのだ。地味ながらも強力な魔法である。

「水雷」

「ぶん、一気に仕留めてやる。必殺、ランスアタアアツクー！」

彫像の放った魔法を空中に飛び上がることで躲し、その頭に渾身の力で剣を叩き込む。剣の直撃の威力と、そこから発せられた闘気が重なり合い、彫像は粉々に砕け散った。

「ぶん、ざっとこんなもんよ」

そう言い、ルークの方を見る。すると、ルークもシルの炎の矢の援護を受け、空中に飛び上がったところだった。その姿が先ほどのランスと重なる。っておい、ちよつと待て…

「真滅斬!!」

闘気を纏った刃が彫像の頭から下半身まで一直線に走る。真つ二つになった、彫像が崩れ落ちた。

「な…な…な…」

「ランス、終わっていたのか。時間を掛け過ぎたな、すまん。」

「パ…」

「パ？」

「パクリだ！俺様のランスアタックのパクリだ！貴様にはプライドがないのか!!!」

ランスがそう大声を上げ、慰謝料だ、賠償金だと騒ぎ立てる。

「いや…一応10年以上使っている技なんだがな…」

「ふん、証拠がないな。きつとこの間のユラン戦で見てパクツたの
だろう」

「一応キースに聞いて貰えれば証言してくれると思うが」

「あんなハゲの言うこと信用できるか！今後その技を使いたければ
一回につき10000GOLD俺様に払え！」

「いやいやいや。おかしいから、その金額。それに構えは似てるけど微妙に違うから。俺のは一点集中型。お前のは拡散型。俺にはあんな風に闘気を爆発させて周りを巻き込むなんて芸当、真似出来ないやー、才能の差かな。凄いなー」

「むっ、そうだな。がはは、俺様は天才だからな。うむ、言われて

みれば確かにちょっと似ているだけで、俺様のものとはレベルが違うな。」

そうルークが煽てると、わかりやすく反応するランス。なんとか慰謝料だか賠償金だかを払う危機を乗り切ったようだ。上機嫌で第二研究室に入っていくランス。それを追いかけてながら、シイルがルークにぼそつと喋り掛けた。

「すみません、ルークさん。…でも、本当に似ていましたね」

そう言っただけでランスの後を追っていくシイルの後ろ姿を見ながら、ルークは小さな声で呟いた。

「似てる…よな、やっぱり。ってことは…そういうことなのかね…」

その言葉は、ランスとシイルの耳に届くことはなかった。

・洞窟内 第二研究室・

「「「「あ」「」」」」

扉をくぐると、そこには MARIA がいた。扉の先はすぐに第二研究室に繋がっている訳ではなかったようで、開けた場所になっており少し道が続いている。MARIA は別の道を通って、この扉の前に来たところだった。おそらく、第一研究室から直通で道が繋がっているのだろう。

「がはは、さすが俺様の強運！見る見る、すっかり MARIA がいたぞ

！」

「はい、とつてもラッキーです」

「げ、なんでここに」

「そちらこそどうしてここに？その道がおそらく第一研究室と繋がってるんだろうが、第二研究室に用事でも？」

「第一研究室は貴方たちのせいで水浸しになっちゃったのよ！責任取ってよね！」

ぶんすかと怒るマリアに対し、どう考えても自分のせいだと
思うルーク。

「ふん、そんなことはどうでもいい！さあ、勝負しろマリア！今度
は俺様が勝つ番だ！」

「まあ、三対一で申し訳ないが、諦めてくれ」

「ふん、この指輪がある限り、私は負けない。それが死なないと判
らないみたいね！」

マリアがそう言って手を前に差し出すと、詰められていた指輪が
妖しく光る。それが戦闘開始の合図だった。

「行くぞシイル、ルーク！」

「シイルークって名前みたいですわね」

「暢気だな、シイルちゃん……」

「迫激水！」

マリアが唱えると、水の柱が滝になって三人に襲いかかる。が、
先ほどと違い全員がそれを避ける。第一研究室のときは、部屋が狭
く、部屋の外の通路も狭い一本道であったため逃げ場がなかった。
しかし、今は違う。ランスとルークは素早く左右に避ける。そう、
ここは開けた場所であるため、多少範囲の広い攻撃でも十分に避け

るだけのスペースがあるのだ。シルも扉をくぐって前の部屋に戻り滝をやり過ごした。

「ちっ、水雷」

続けて水雷を放つマリア。ルークが躲すと魔法は後ろの壁に命中し、壁が崩れた。本来はあまり威力のない魔法だが、指輪のせいであまり凶悪なものになっていた。

「がはは、俺様がお仕置きしてやる」

「水雷水雷水雷水雷もいっちょおまけに水雷！」

「うおっ、連発するんじゃない！！！」

元々連発可能な魔法ではあるが、流石にもうちよつと時間が掛かる。ここまでノータイムで連発されては流石のランスとルークも近寄ることが出来なかった。近寄りさえすれば、一撃で仕留められる。後はどう近づくか…するといつの間にか部屋に戻ってきていたシルが炎の矢で応戦を始める。

「炎の矢、炎の矢！」

「ふん、水雷水雷水雷水雷」

威力が違ったため相殺とはいかないが、炎の矢が直撃した水雷は威力が落ち、ルークたちに届く前に地面に落ちる。が、詠唱速度が違いすぎる。

「ええい、シル！もつと連発しないか！」

「すいません、ランス様。これが限界です…」

「いや十分だ。多少余裕が出来た」

シイルのお陰で避ける動作に余裕が出来たルークは腰を落とし、剣を振り抜く。

「真空斬！」

放たれた刃が水雷とぶつかり、相殺する。

「嘘…遠距離攻撃が使えたの？威力も高いし…でも速さが伴わなきや…」

「真空斬！真空斬！真空斬！」

「れ、連発可能！ずるいわよ！みつ、水雷水雷水雷」

「炎の矢、炎の矢」

立場が逆転する。ルークとシイル二人の攻撃をマリアが相殺する形となり、自然とランスに攻撃の手が回らなくなる。

「決める、ランス！」

「おお、くらええええい！！」

マリアの方に前進し、ほどよい距離で空中に飛び上がりランスアタックの構えを取る。狙うはマリアの手前の地面、ユランのときと同じように衝撃波で吹き飛ばすつもりだ。

「引つかかったわね、まずは…迫激水！」

そう言うとマリアがルークとシイルに向かい迫激水を放つ。それを左右へと躲す二人。と、同時にマリアの意図が読めたルークは慌てて腰を落とす。マリアはランスに向かって両手を揃えて突き出した。あれは上級魔法。

「さっきまでで斬激の速度は見たわ、すぐに気がついたのは良かったけど、そこからじゃ間に合わないわよ。…死ね、ウォータミサイル!!!」

「んげ!!!」

「ランス様あああ!」

マリアの両手から強力な水の塊が撃ち出される。指輪で増幅されたその威力は、直撃すれば一溜まりもない。焦るランス。

「ランス、俺を信じて気にせず振り抜け! うおお、真空斬!!!」

ルークが真空斬を放つ。間に合うわけがない、とマリアは思っていた。それが誤算。マリアは先ほどまでの真空斬がルークの全力だと思い込んでしまっていたのだ。真空斬は闘気の量によりその威力、速度、連射性が変化する。先ほどまでは連射性を上げるため、威力と速度をある程度落としていたのだ。そして、今から放つのは闘気を十二分に込めたため連射できないが、威力、速度共に申し分ない全力の真空斬。放たれたその刃は、ランスに迫っていたマジックミサイルに直撃し、水の塊が半分に分れる。割れた魔法はランスに命中することなく地面へと落ちていった。

「うそ…そんな…」

「ランスアタアアアック!!!」

ランスアタックがマリアの目の前の地面に命中し、衝撃波がマリアを襲う。吹き飛ばされながらマリアはまだ自分の敗北を実感できずにいた。

その部屋にある人影は三体。明かりは点っておらず、顔が判らない。ふいに声が発せられた。

「マリアがやられたようだな……」

「フフフ…奴は四魔女の中でも最弱……」

「冒険者ごときに負けるとは魔女の面汚しよ……」

パチツ、と部屋の明かりが付く。そこにいたのは一人の少女と二体の幻獣であった。明かりを付けたのは新しく部屋に入ってきた女性、四魔女の一人エレノア・ランだ。

「もう、ミル！暗くして遊んでたら目が悪くなるでしょ。それに今の喋り方はなんなの？」

「漫画で読んだの。かっこいいでしょ？」

部屋の中にいたのはミル・ヨークス。こちらにも四魔女の一人だ。

「幻獣は立ってるだけで、全部自分で喋っちゃってるじゃない。それに、マリアを勝手に最弱にしたり、負けさせたりしないの。ちゃんと謝っておきなさい」

「はい」

まさか本当にマリアが負けていようとは夢にも思っていない二人であった。

第16話 水使いマリア（後書き）

「モンスター」

水の彫像

第二研究室を守るガーディアン。スリープ等の高度な魔法を使用してくる強敵。初代2では、運が悪いと本当に何も出来なくなるため、初見で殺されたプレイヤーも多いはず。

「技」

真滅斬（オリ技）

使用者 ルーク

ルークの必殺技。剣を両手持ちし、頭上から渾身の力で振り下ろす技で、構えがランスアタックと非常に似ている。衝撃波を生み出して広範囲に影響するランスアタックと違い、刃に込められた闘気は拡散することなく直撃した相手を斬り伏せる。単体攻撃だが、直撃時の威力はランスアタックよりも上。

炎の矢

指先から生み出した炎の塊を放つ初級魔法。魔法使いがまず初めのうちに習うことになる基本魔法だが、使い勝手は良い。

水雷

指先から生み出した水の塊を放つ初級魔法。水魔法の使い手は少ないため、割とレア魔法である。

ウォーターミサイル

揃えた両手から濃縮された水の塊を放つ上級魔法。レアな水魔法の上級呪文なため、使い手が殆どいない。

スリープ

対象に眠りをもたらす支援魔法。非常に強力な魔法で、その分使いこなすのに高度な技術を要する。ゼスにはこれだけが得意な珍しい魔法使いもいるらしい。

第17話 明かされた真実

- 洞窟内 第二研究室前 -

「がはははは、新兵器開発とか言っていたな。これが俺様のハイパ
ー兵器だー！」

「うわ、でか！いーいやー！」

部屋の中からランスとマリアの声が聞こえる。今は勝者の特権、お楽しみタイムだ。ルークとシイルは部屋の外で待っていた。一般人や無抵抗の人間を無理矢理犯そうとすれば多少の苦言は呈するが、基本的に向かつてきた相手を犯すことに関してはルークは何も言わない。人によっては外道とも言うであろう行為だが、命のやりとりをしているのだ、たかだか犯される覚悟もない奴が向かってくるなというのがルークの考えだった。もちろん万人に受け入れられる感覚ではないだろう。以前ラーク & アコンビと共に仕事をした際、この事を話したら理解できないと苦言を呈された。逆にルークから言わせるとあの二人が純粹すぎるという感覚。キースから言わせればどっちもどっち、とのこと。ふと少し離れた位置にいるシイルを見ると、悲しそうな顔をしていた。

「はあ……」

「どうした、シイルちゃん。ため息なんかついて。やっぱり……こう
いうのは嫌か？」

ため息を吐くシイルを見かねたルークが問いかける。

「いえ、私はランス様の奴隷ですから……」

「…リーザスのかなみと俺が話したとき、側で聞いてたよな。その上での意見かな？」

「…出来れば、止めて欲しいです。でも…」

「まあ、言って止めるような奴じゃないだろうしな…」

「…ランス様にとって…私なんてどうでもいい存在なのかな…」

そう言っただけに落ち込むシル。自然と涙が頬を伝う。やれやれ、一番大切な人を悲しませてるんじゃないかねーよ、とルークは思う。まあルークがマリアとの情事を止めなかったのも原因の一環ではあるのだが、それはそれ。

「とおおおおお!!!!!!」

「ああああああん!!!」

という声が聞こえたかと思うと部屋の中が静かになる。どうやら終わったらしい。

「どうやら終わったみたいだな。シルちゃん、部屋に戻ろうか」

「あ、はい。ありがとうございます」

そう言っただけで部屋に戻ろうと扉に向かう二人。扉に手を掛けながら、ルークはシルに声を掛ける。

「大丈夫だよ、シルちゃん。ランスは君のことを大切に思っている」

そう言いながらルークが振り返り見たのは、シルが魔力を帯びた光に包まれている姿だった。

「ぎゃあああああああ!!!」

「あれは…テレポルトウェイブ！シイルちゃん！！」

シイルを包んでいた光にルークは見覚えがあった。依頼で魔法使い退治をした際、一度だけ見たことがある。光で包んだ対象をどこか別の場所にワープさせる魔法装置、テレポルトウェイブ。ルークは慌ててシイルに手を伸ばすが、その手が届ききる前にシイルは光に吞まれ、この場から消えてしまった。

「しまった…」

どこかに魔女を一人倒したことで気の緩みがあったのかもしれない。一人取り残されたルークは拳に爪を食い込ませながら自身の油断を悔やんだ。

- 洞窟内 第二研究室 -

「おつかしいなー、この指輪どんなことしても外れなかったのに、どうして外れたんだろう」

部屋の中では情事を終えたマリアが不思議そうに指輪を見ていた。ランスとのHが終わると、それまで絶対に外せなかったフィールの指輪が外れたのだ。

「スケベの力は偉大ということだ。それよりも、今後のことだが…」
「わかっているわ、町の人たちにこんな迷惑を掛けたんですもの。償いはちゃんとする。でも…その前にラギスだけは許せない！」

大きな変化は指輪が外れたことだけではない。マリアの様子が変化していたのだ。自分の行いを悔やみ、町の人たちへの償いをした

いと自ら申し出てきたのだ。反省や心境の変化で済ませるにはあまりにも唐突な異変。

「ラギシスを許せないとはどういうことだ？お前たちが反乱を起こして指輪を奪ったんじゃないのか？」

「違うわ…私たちは…話したら長くなるけど…」

「マリアが口を開き掛けたところで、バンツと扉が開く。部屋に入ってきたのはルークだ。が、様子がおかしい。それに一緒であったはずのシイルの姿がない。」

「ランス…スマン、落ち着いて聞いてくれ…」

「ん？何だ急に？それにシイルはどうした？」

「…シイルちゃんが攫われた。…俺の失態だ」

「な…なんだとおー！ルーク、貴様がいながら何をしていた！
！！」

「待って、攫われたってもしかしてテレポートウェーブじゃない？
だったら防ぐのは難しいんじゃない？」

「ああ、テレポートウェーブだ。だが、俺がもつと周りに気を張っていれば、シイルちゃんではなく俺が転送されるという手段もあった。一人で戦うことの出来る戦士ではなく、前衛がいないとまともに戦うのは厳しいシイルちゃんが一人になってしまったということが最悪なんだ」

「な…なんてことだ…シイル…」

「ランスがへたへたと座り込んでしまう。普段の気丈な態度からは見て取れない落ち込み様だ。先ほどまでとの態度の一変に驚くマリ
ア。」

「げ、元気出してよ。きつと見つかるはずだから…」

ランスを慰めながら、マリアはその落ち込みように、実は悪い人じゃないのかも、とランスの評価を改めていた。

「…あいつに有り金全部持たせてたのにー！シイルのばかやるー！俺様の許可もなくいなくなりやがってー！！」

「えっ！そんな理由なの！？」

「ふん、まあ俺様がすぐに見つけ出してお仕置きしてやる。シイルめ、待っている。がはは！」

そうあっけらかんとした様子でランスが言うのを見てマリアが呆れる。その後、とりあえず今後の方針をまとめるため一旦町まで戻ることとなった。帰り木で町にワープする直前、ルークはランスだけに聞こえるよう小さな声で話しかけた。

「本当にすまない、後でぶん殴ってくれて構わない。…必ず助け出す！」

「…ぶん。しっかり働けよ」

- カスタムの町 酒場 -

「いらつしゃーい、…あれ？あのゴッドオブヘアーの娘は一緒じゃないの？それにそっちのコートの人は新顔さん？」

酒場に入るとエレナが元気に声を掛けてくる。シイルがおらず、代わりにフード付きコートを深く被り、顔のよく分からない人物がいるのが気に掛かり尋ねてくる。

「がはは、あいつは邪魔になったから捨ててやったわ」

「ランスさん、ヒドすぎ…」

「宿泊用の奥の部屋、開いているかな？出来れば少しだけ使いたいのだが」

「開いてますよー。では、三名様ご案内です！」

この酒場は奥の部屋を宿泊施設としていた。本来宿屋が別にあつたのだが、現在建物が崩れていて使い物にならないため、元々は酔った客の介抱用であつた部屋や物置などを片付け、冒険者のために開放していたのだ。部屋まで通され、エレナが出て行ったのを見送ると、マリアがコードを脱ぐ。町をこんなにした犯人の一人であるマリアが見つかればパニックになるため、このように姿を隠していたのだ。

「ふう…暑かつた」

「そういえばそちらだけにさせてしまつて、こちらの自己紹介がまだだつたな。俺はルーク」

「俺様は英雄ランス様だ。そして、今攫われている無能のバカが奴隷のシイルだ」

「もうちょい言い方つてものが…まあ、とりあえず始めましょうか」

そう言つて、マリアは自分たちがどうしてこのような事件を起こしたか、説明を始める。

「私たちはこの町の守護者となるため、ラギスから必死に魔法を教わつたわ。そして、半年前ラギスは私たちに卒業証書だと言つて一人一つずつ指輪を渡したの。それがこのフィールの指輪よ」

「盗んだんじゃないのか？」

「違うわ。あつちから渡してきたの。でもこれは、着けてはいけな
いものだったの。その晩、私の部屋に志津香がやってきたんだけど、

ラギシスの独り言を聞いてしまったらしいの」

「やはりそうか…全てラギシスの陰謀だったんだな？」

「そう、全てあいつが元凶よ」

「なんだ？ラギシスが怪しいと気がついていたのか？」

「確信は持てなかったが…奴の話に色々と引つかかる点があつてな。もう少し情報が集まったら一応お前らにも言うつもりだったんだが…」

奴の言う通りなのであれば国宝級の指輪。それを自らは身につけず弟子に渡すという不可解な行動。これらがルークには引つかかつており、素直にラギシスを信用してはいなかった。

「着けてはいけない…というのは、やはり呪いの類か？」

ルークは当初、指輪がラギシスの言っていたような効果はないのではと疑っていたが、最初にマリアと戦闘した際の魔力量や高速詠唱から、その考えを破棄。次に疑っていたのが装着者が何かしらのデメリットを被る、いわゆる呪いだ。

「その通りよ。この指輪は十人分の魔力を吸い取って成長する恐るべき指輪だったの。既に九人分の魔力を吸い取った指輪を手にしたラギシスは、最後の媒体となる四人の魔法使いを捜していたのよ」
「ほー、つまりラギシスは指輪を回収するためだけにお前たちを育てていたわけだな」

「ええ、そしてそれを私たちが偶然知ってしまった。許せなかった…信じていたのに…」

「なるほど…それが反逆へと繋がるのか」

「ええ、そうよ。それに、魔力の溜まりきったフィールの指輪を四つ全て着ければ、無限の魔力を手に入れると言うわ。でも、この指輪を外されたら最後、私たちは魔力を失ってしまう。だからラギシ

スに戦いを挑んだの。戦いの衝撃で町は地下に陥没してしまったけど……」

「なるほど……ラギシスや町長から聞いた話とかけ離れているな。それが真実か」

ルークの発言にマリアが驚きで目を見開く。目の前の男は、死んだはずの人間から話を聞いたと言ったのだ。それも、自らの手で殺した相手。

「ラギシスが生きているの！？確かに殺したはずなのに！」

「生きてはいない。奴の館に地縛霊として漂っている」

「そう……後で見に行かないとね……そして、今度こそ……ふふふ」

マリアの目に殺意がこもる。無理もない話ではあるが。

「それで、マリアたち四人が迷宮を築いたのも指輪の影響ってことで良いのか？」

「ええ、この指輪には人を悪の方へ惑わせる力があるわ。気がついたら迷宮を築いて、やってくる冒険者たちを返り討ちにしていたわ。こんな地下迷宮築いて……私たちは何を……志津香たちも救わないと！なるほどな……」

「ふん、指輪のせいで悪いことをしてるなら、指輪を外してやればいいんだろっ？で、この指輪を外す条件は処女を奪うで良いんだな？」

「ん、そうなのか？」

「ええ、多分。きつと魔力を込める対象になるのが処女なんだわ。その条件を失えば、指輪は外れる……っていうことだと思う」

今まで決して外れなかった指輪が、ランスに犯された直後に簡単に外れたことからマリアはそう推理した。ルークも話を聞いてその

見解に賛成した。処女というのは神聖なものとして、儀式の条件などによく持ち入られるものであったからだ。

「なるほど、つまり事件解決のためには俺様が他の三人の処女も奪えばいいんだな！ぐふふ、これは面白いことになってきた。仕方がない、正義の為に俺様が苦勞してやろう」

「…別にルークさんでも良いんだけどね」

「んー…状況が状況だし、相手がランスよりも俺の方が良いと言ったら抱きはするが…」

「ふざけたことを言うな！他の三人の処女も俺様のものだ！よし、そうと決まれば行動だ！まずはあの大嘘つきなラギシスの館に向かうぞー！」

そう言つて腰掛けていた椅子から立ち上がり、外に出ようとするランス。が、後ろからマントを誰かに引っ張られる。振り返ればそれはマリアだった。決意のこもった瞳をしながら、マリアは口を開いた。

「私も…連れて行つて！」

「…大丈夫なのか？」

「君は操られていただけだ。責任を感じる必要はないぞ」

「いいえ、操られていたとはいえ、町をこなにしたのは私たちよ。足手まといにはならないわ、だからお願い！私もみんなを救いたいの！」

マリアが必死に懇願する。と、ランスがマリアの手をマントから無理矢理離して部屋から出て行こうとする。焦ったマリアが何か言おうとするが、それよりも先に口を開いたのはランスだった。

「行くぞ、ルーク、マリア。俺様の足を引っ張るなよ！」

「ああ、シイルちゃんも、操られている三人も救い出さず。よろしくな、マリア」

二人の話の流れについて行けず、混乱していたマリアだが、情報を頭の中で整理していき、その顔がだんだんと喜びに包まれていった。そして、満面の笑顔で二人に返事をする。

「うん、二人とも、これからよろしくね！」

第17話 明かされた真実（後書き）

「人物」

マリア・カスタード

LV 13 / 35

技能 新兵器匠LV2 魔法LV1

カスタム四魔女の一人。師であるラギシスを殺害するが、それはラギシスに裏切られたが故の行動であった。現在は他の三人を救うため、行動を共にする。水魔法を得意としていたが、指輪を外された際にその魔力のほとんどが奪われ、その力を失ってしまった。だが魔法以上に非凡な才能を持ち合わせているのは、兵器開発の面。彼女の発明の多くが、今後歴史にその名を残すことになる。

「装備品」

フィールの指輪

赤、青、黄、白がある四つの指輪。処女十人の魔力を吸い込んだ四つの指輪全てを身につけることにより、無限の魔力を手に入れることが出来る。長く身につけていると精神が蝕まれ、邪悪な心に支配されてしまうという呪いのアイテム。ラギシスがかつてゼスのある魔法使いから譲り受けたものらしい。

「その他」

テレポートウェイブ

対象者を決められた場所にワープさせる魔法装置。敵を分断させたり、自らの逃亡用などに使用することが出来る。

第18話 新たな事件とチューリップ

- カスタムの町 ラギシス邸跡 -

「こら、ラギシス！よくも俺様を騙したな！」

「黙ってないで出てきなさいよ！！」

ラギシス邸跡に入るやいなや、ランスとマリアがそう言って大声を上げた。しかしラギシスが出てくる気配はない。

「変だな？出てこんぞ」

「どういうことかしら…本当にここにラギシスがいたのよね？」

「ああ、ここに確かにいた。逃げたか？だが、俺たちがマリアと合流したことは誰も知らないはず…」

「成仏しちまったか？」

「そんな…そんなのってないわ…私たちをこんな目にあわせて、自分だけ成仏するなんて…」

ラギシスをもう一度殺すつもりだったマリアはへなへなと崩れ落ち、悔しそうに呟く。フォローを入れようとしたルークだが、マリアはすぐに立ち上がって、くよくよしても仕方がないから気を取り直して三人を助けよう、と自分で立ち直った。中々にポジティブな性格である。

「前向きだな。いいことだ」

「だって、ラギシスは憎いけど、それ以上に他の三人が心配なんだもん。ランスだって、シルちゃんのことを気になるでしょ？」

「馬鹿抜かせ。あいつはただの奴隷だ」

「とりあえず町長の家に向かうか。マリアの誤解を解いておかないと、ろくに町も歩けないからな」

・カスタムの町 町長の家・

「ラーンナーズー！ルークー！」

「うおおお！なんだなんだ！暑苦しい！」

家に入るやいなや、町長のガイゼルが涙を流しながら二人に迫ってきた。普段は床に伏している彼が立ち上がって迫ってくるということは、よっぽどのがあつたのだろうか。そういえばチサの姿が見えない。買い物にでも行っているのだろうか。いや、この取り乱しようから見るに、もしかしたら…と、ルークは考え、町長に尋ねる。

「チサちゃんは何処へ行った？まさか…いなくなったのか？」

「おお！そうなんだ！大変なんだ！どうやら娘のチサが、あの魔女たちに攫われてしまったみたいなんだ！」

「なんだと！！それでは、もしかしたら今頃あんなことやそんなこと…」

「うおおお！チーサーー！！」

「ちよ、ちよつと待って！私そんなことしてないわ！」

ランスに無駄に不安を煽られて更に騒ぎ立てるガイゼル。身に覚えのないことの犯人にさせられそうになり、慌ててマリアが話に割って入る。

「ん？誰だ…って、わー！ま、ま、マリア・カスタードじゃないか

「ランス、ルーク、敵だ敵だ！」

「ええい、落ち着け！」

「ぐふうううう！！！」

そう言つて腹に蹴りをかますランス。一応相手は病人なのだが、容赦がない。若干無理矢理にはあつたがガイゼルを落ち着かせ、ルークたちはここまでの経緯をガイゼルに説明した。

「ふうむ…あのラギシスが…にわかには信じられんが…あり得ない事ではない…か。つまり、娘たちは町の敵ではないと」

「いいえ、私以外はまだ町の敵です。指輪の呪縛から解放されるまでは…」

「安心しておけ。俺たちがすぐに呪縛は解くし、チサちゃんも連れて帰る」

「おお、頼もしい！」

「で、どうしてチサちゃんが魔女たちに誘拐されたと思つたんだ？何か証拠が？」

チサが誘拐されたのは心配だが、これが何か手がかりになるかもしれない。ルークが尋ねると、ガイゼルは言いにくそうにしながら口を開いた。

「そ、それはその…四時間も帰つてこなかったから…その、心配で…」

「…本当に誘拐なのか？彼氏かなんかと遊んでいるという可能性は？」

「なななな、なんてことを！チサに彼氏などいないわー！そんなもんいたら、とつくの昔に殺したに決まってるだろうが！」

「その通りだ！チサちゃんの処女は俺様のものだ！！」

「なんでランスまで突つかかってくるんだ！しかも町長、あんた今

とんでもないこと口走ったよな!？」

「はあ…厳格で信頼できる町長さんだったのに…」

今の町長の姿にショックを受けるマリア。彼女の中でガイゼル町長は過去の人となった。

「でも、四時間も帰って来ないのは確かにおかしいわね。この町の状況じゃ、寄り道するようないところもないだろうし」

「そうだな…道中見つけたら保護しておくよ。魔女の誰かが攫った可能性が高いだろうしな」

「おお…頼みます…」

「その分の報酬は別払いだぞ!がはは!」

「…鬼ね」

- カスタムの町 情報屋 -

一応目撃情報がないか、二手に分かれて聞き込みをすることになった。早く洞窟に潜りたいところだが、流石に放っておく訳にもいかない。ルークが情報屋、ランスが教会、マリアが酒場に聞き込みに行った。町長が早々にマリアは操られていただけという情報を町中に回してくれており、また、元々町の住人も小さな頃から知っている彼女たちが反乱を起こしたというのを信じたくなかったという思いがあったようで、既にマリアは町を自由に歩き回れるようになっていた。この行動の早さ、確かに親バカなこと以外は優秀な町長である。

「あら、ルークさんね。いらっしやい。何かご用かしら?」

「ああ、ちょっと聞きたいことがあってな。あれ、妹さんはどこへ

？」

情報屋に入ってきたルークに、コンピュータから手を放して話しかけてくる女性。彼女がこの情報屋を営む双子の姉、芳川真知子だ。ルークはこの町を初日に情報収集で一度店に寄っていたため、既にお互い顔見知りであった。が、今はもう一人店主である妹の今日子の姿が見えない。

「あの子ならどこかへフラッと。困った子ね」

「誰かに誘拐された、ということはないかな？」

「あら、出て行ったのはついさっきなのでそんなことはないと思いますわ。でも、どうしてもそんなことをお聞きになるの？」

「まだ事を荒立てたくなくて町長も声明は出していないが、チサちゃんが行方不明だな」

「あら、それは大変。ごめんなさい、その事をお聞きに来たのであれば、私は何も知りませんわ」

「そうか、邪魔をした。今日子さんにあつたら家に帰るように行っておくよ。チサちゃんが本当に誘拐なのであれば、今外を不用心に散歩するのは危険だからね」

「すいません、お願いしますわ」

そういつて店から出て行くルークにペコリと頭を下げる真知子。

普段の余裕のある話し方から誤解されがちだが、これでも彼女は妹思いであった。

- カスタムの町 地獄の口 -

迷宮の前までやってきたルーク。情報を集めたらここで合流する

予定であった。やってきたときにはまだ二人はおらず、泣き濡れた老戦士が洞窟の前に立っていた。話を聞いたら彼の名前はANTというらしく、特に情報は持っていなかった。泣いてる理由も町から出られず困っているということだったので、特にどうすることも出来ず、放っておいたらそのままどこかへ行ってしまった。多分二度と会うことはないだろう。無駄な時間を過ごした。その後、少し待っていると言いつつとランスとマリアがやってくる。が、なんだかランスが疲れた様子だった。

「すみません、待たせちゃったみたいで。ルークさん、何か情報はありましたか」

「いや、こっちは特に何も。そっちは？」

「こちらも特には…聞く前からまだ内緒のはずのチサちゃんが誘拐されたことを知ってましたけどね」

「流石は情報飛び交う酒場と言ったところか。ランスの方はどうだった？」

「教会に淫乱シスターがいた…流石の俺様もあれはちょっと…」

「は？」

「ああ…ロゼさんの事ね。あの人は…気にしないに限るわよ。ちょっと変わった人だし…」

ランスがやる気になれなかった敗北感からか、かなり疲れた顔をしている。ランスとマリアの話を纏めると、元凶は教会にいるロゼという名のシスターらしい。よし、教会には近寄らないでおう、と心に誓うルークだった。ふと、マリアが先ほどまで持っていなかった筒状のものを両手に抱えているに気がつく。

「ん？ところでマリア、その手に持っているものは？」

「ふふふ、よくぞ聞いてくれました。これこそが…」

「なんだ、このぶっさいくなものは。変わったこんぼうだな」

「…ランスにはこの無駄のない美しい形状が判らないみたいね。これはそんな原始的な武器じゃないわ。その名もチューリップ1号!」

ババン、とチューリップ1号という名らしい筒状の武器を高らかに掲げる。その側面にはチューリップの花の絵が描かれていた。決して口には出さないが、ルークにも無駄のない美しい形状というものは理解できなかった。

「それが以前話していた戦いの歴史をも代えかねない武器か?」

「そう!まだまだ試作段階だけだね」

「ふむ、魔法が使えなくなつてへぼぴーで足手まといのお前を連れて行くのは正直迷つていたが、これで多少は戦えそうだな」

フィールの指輪を外したマリアはその際に魔法力のほとんどを吸い取られ、あの強力な水魔法を使えなくなつてしまつていた。が、これで多少の戦力にはなるとルークとランスは安心する。

「ところでこれはどうやつて使うものなんだ?」

「ヒララ鉱石をエネルギーにして、爆発的な破壊力を相手にぶつけるの。そうね、雷撃の魔法なんかより遙かに威力を出せる武器だと思つていいわ」

「それは凄いな。雷の矢でなく、雷撃以上か」

「ふふふ、私の自信作よ。このチューリップとヒララ鉱石があれば、魔法が使えなくなつたつて役には立てるんだから」

「がはは、これあのバカがない分の後衛役は決まりだな」

「ええ、任せて。ヒララ鉱石さえあれば、モンスターなんかちよちよいのちよいなんだから!」

不意にルークは嫌な予感がした。何か先ほどからマリアの言い回しがおかしい。ヒララ鉱石が…あれば?そういえばヒララ鉱石は割

と手に入れにくい鉱物ではなかっただろうか？ランスと笑いあうマリアに、ルークは意を決して尋ねる。

「ヒララ鉱石…あるのか？」

ピタッ、とマリアの笑い声が収まる。ランスも、まさか…という顔でマリアを見る。俯いていたマリアが勢いよく顔を上げる。そしてマリアは、笑顔で元気よく答えた。

「ありません！」

「お前もう帰れ！！」「」

第18話 新たな事件とチューリップ（後書き）

「人物」

芳川真知子

カスタムの町の情報屋。双子の姉で、コンピュータを使って理論的に情報を導き出す。ランスのアプローチをのりくらりと躲す。

芳川今日子

カスタムの町の情報屋。双子の妹で、水晶玉を使って知りたいことを占う。一途な少女だが、若干いきすぎている。

ロゼ・カド

カスタムの町のシスター。神への信仰心は無く、金儲けの手段として使っている。暇さえあれば自分で呼び出した悪魔とのHに耽るなど、数少ないランスをどん引きさせた女性の一人。

牧場野ANT

冒険者。珍しい名前をしており、妹と娘がいる。シリーズでも上位に入るマイナーキャラであったが、2のリメイクとまさかのランスクエストへの再登場により知名度が上がった。ほんの少しだけだが。

「技」

雷の矢

指先から生み出した雷の塊を放つ初級魔法。炎の矢や氷の矢と並んで良く使われる魔法であり、特にゼスでは多くの若い魔法使いがこの魔法を好んで使う。その理由としては、「雷に愛された男」「雷帝」という異名を持つ老魔法使いが、魔法学園の講師をしている

ため、自然と若い頃に触れる機会が多くなるためと思われる。

雷撃

雷を水平方向に飛ばす中級魔法。本来は手から放つ魔法だが、鍛え上げると頭上から雷を落とせるようになる。

「装備品」

チューリップ1号

マリアが発明した新兵器。ヒララ鉱石をエネルギーとし、爆発的な威力を出すバズーカ。側面に描かれたマリア手書きのチューリップの絵が特徴的。

「アイテム」

ヒララ鉱石

レアストーン。特殊な条件下で強力なエネルギーを発生する。

第19話 その占い、今はまだ意味を持たず

・ピラミッド迷宮・

「これは…随分と様子が変わったな？」

結局頑なに帰らなかったマリアを連れて、三人は地下三階まで下りてきていた。するとそこは、二階までのいかにもな洞窟から、一目見て床や壁の石が明らかに人口のものと判る、整った迷宮になった。

「ここからはピラミッド迷宮になっているわ」

「こんなに突然迷宮の内部が変わるものなのか？」

「本来この迷宮は私が支配していた第二層までしかなかったの。ここから先は、他の場所から魔法で持ってきて追加したのよ。この第三層の支配者はミル。リンゲル王のピラミッドを改造したものらしいの」

「ミル・ヨークスとは仲間なんだろう？何か迷宮のことは知らないのか？」

「ごめんなさい、ずっと自分の研究室に引きこもってたから…」

「ちつ、役に立たない奴め」

「むかー、親切で教えたのにー！」

「ほらほら、喧嘩してないで進むぞ」

仲良く喧嘩する二人をなだめるルーク。迷宮の奥へ進んでいく三人。道中棺の並んだ部屋や四つの宝石が並んだ部屋があり、念入りに調査をしたが、特に何も発見することは出来なかった。更に奥へと進んでいくと大きな鏡が壁に埋め込まれた部屋に出る。

「わっ！大きい。こういうのって高いのよねー」

「がはは、鏡に映る俺様もかっこいいな！」

「ん？部屋の隅に石版が置かれているな」

鏡の前でポーズを取るランスを放って置いて石版を拾うルーク。

見れば何か文字が書いてある。薄汚れているが、ギリギリ読めるレベルだ。石版に書かれた文字を読んでいくルークだが、だんだんと呆れた顔になっていく。

「ルークさん。石版に何が書かれていたんですか？」

「あー…誤解しないで欲しいが、俺は書かれていることをそのまま読むだけだからな」

「？いいから早く読め」

「鏡の前で少女のパンティーを露出するべし。さすれば宝石の装置が起動するであろう」

「……なんなの、それ？」

マリアが冷たい視線をルークに向ける。ただ書いてあることを読んだだけのルークからしたら理不尽きわまりない。

「がはは、仕方がない。これも他の三人を救うためだ。とぉー！！」

「きゃあああああああー！！」

いつの間にかマリアの背後に回り込んでいたランスが一気にマリアのスカートをまくり上げる。下着を白日の下にさらされ、マリアが悲鳴を上げる。

「ばっ、ばかあ！こんな事で本当に装置が起動するわけ……」

怒り心頭でランスに食ってかかるマリアだが、話を遮るように鏡から音声が響く。 - 第一のワープ装置、解除されました - と。

「最低だわこの鏡!!」

「がはは、中々見所のある鏡ではないか」

「第一の…って言ったよな。宝石って…四つあったよな。つまり…」

「やめてー、ルークさん、考えさせないで - 。私も気がついてはいたけど、気がつかない振りをしていたんだからー!!」

- ピラミッド迷路深部 小部屋 -

「くっそ…がああっ!!」

女戦士が近寄ってきたグリーンハニーを斬り伏せる。パリンっという音と共に、その体が砕け散る。が、ハニーに気を取られていた隙にラーカイムの接近を許してしまい、その鋭利なハサミが脇腹に突き刺さる。

「っ…!!何するんだい!!」

頭頂部の岩ごとラーカイムを粉碎する。部屋の中では大量のモンスターが四人の女戦士を囲んでいた。しかし、応戦しているのはたった一人。既に他の三人の息はなく、おびただしい量の血溜まりの中に倒れ伏していた。残った女戦士も满身創痕の状態だ。傷は浅くなく、愛用のロングソードは既に折れ、今は倒れた仲間が使っていた剣を手に戦っている。

「ルー、チヨルラ、リムリア…巻き込んだ形になっちまった

ね…すまない。ルー、あんたのアリスソード、自慢していただけの事はあるよ。もうちょっとだけ力を貸してくれ…」

今は亡き仲間たちにそう呟く。モンスターに囲まれているだけでなく、部屋の入り口にはグリーンスライムがへばりついており、通ることが出来ない。逃げ道はない、彼女はたった一人で十体以上いるモンスターの群れを倒さなければならぬのだ。普通ならば絶望に打ちひしがれ、生きることを諦めてしまってもおかしくない状況である。だが、こんな状況でも彼女の目は死んでいない。最後まで諦めずに勇敢に立ち向かった仲間のためにも…妹のためにも…

「まだ…俺は死ねないんだよおおお!!!」

咆哮し、近くにいたこんにちわを一刀両断にする。それと同時に部屋に爆音が響いた。音のした方向は部屋の入り口、見れば通路をふさいでいたグリーンスライムが吹き飛び、煙を上げていた。敵の増援か、女戦士に緊張感が増す。

「きゃー、やったー、見た見た？これがチューリップの威力よ！」

「凄い威力だな。ピラミッド内にヒララ鉱石の採掘場があつてよかつたな」

「むっ、部屋の中に傷だらけの美女を発見！」

そこに立っていたのはランス、ルーク、マリアの三人。ワープ装置で飛んだ先に偶然ヒララ鉱石の採掘場があり、こうしてマリアが戦力に加わった状態で探索を続け、この部屋まで辿り着いたのだ。状況の変化に頭の回転が追いつかない女戦士だが、どうやら敵ではないらしいことを感じ取り安堵する。しかし、あそこで喜んでいる女、どこかで見覚えが…

「行くぞ！ルーク、マリア！困っているときにはお互い助け合おう！それが冒険者の正しい姿だ！」

「すまないね、恩に着る！」

「もし襲われているのが男だったら？」

「一文の得にもならんから立ち去る」

「期待通りの発言、ありがとう。まあいい、さっさと仕留めるぞ！」

群れを成していたとはいえ、この部屋にいたモンスターは大した強さを持ち合わせてはいなかった。みるみる内に数をその減らしていく。いや、本来であればもう少し苦戦していたかもしれない。元々この部屋にいたモンスターはもっと多かったからだ。ミリは死んでいった仲間たちに感謝しながら、最後のこかとりすを仕留めた。すると、緊張の糸が切れたのか、床に倒れ込む。

「おい、大丈夫か！？せつかくの美女だ、このまま死んだら許さんぞ」

「死にやしないさ。あんたたちのおかげで助かった。礼を言っぜ。」

俺はミリ・ヨークスだ……」

「待つて……ミリ・ヨークス……」

名前を聞いて、先ほど喜んでいた女が近寄ってきた。やはり見覚えがある……と、ミリはすぐにその正体に気がつく。怒りで目を見開き、口元に付いていた血を拭くとマリアに食って掛かるように叫んだ。

「……！お前はマリア・カスタード！俺の妹をどこにやりやがった！」

「ヨークス……なるほど、ミルの姉か！」

「ああ、俺は妹を捕まえて始末をつけるために、ここまで来たんだ。あんだけの事をしでかしたんだ。姉として……俺が始末をつけなきゃならないんだ！」

「そういうことか。そうとなれば、誤解を解いておかなければならないな」

そう言い、自己紹介をすませた後、全ての元凶はラギシスにあることを説明するルーク。話を聞いている内に、少しずつ安堵の表情へ変わっていく。やはり妹が自分の意志で事件を起こしたわけではないということが判って、ホッとしたのである。が、ミリはすぐに真剣な表情に戻し、口を開いた。

「事情は判った。だとしても、このまま手を引く訳にはいかないな。目的が、操られている妹の救出に変わるだけさ」

「その怪我で探索を続ける気か？」

「妹は、放っておけないもんさ。だが、俺の仲間は見ても通り全滅だ。頼む、俺も一緒に連れて行ってくれ！」

「…妹…か。そうだな、放っておいては…いけないな」

「がはは、俺様に任せておけ。だが、弱い奴はいらんぞ」

「ありがとよ、ルーク、ランス！話の判る奴らは好きだぜ！」

「がはは、そのまま惚れてしまっても構わんぞ！」

こうしてパーティーに新たにミリ・ヨークスが加わった。怪我を押して先を急ごうとするミリだが、ルークがそれを引き留める。

「待った。一旦町へ帰り木で戻ろう。ワープ装置を動かせるから、ここまでならすぐに戻って来られる」

「なんだい、ルーク！？俺の怪我の治療のためとか言うなら、そんなもんはいらないよ！」

「そうじゃないさ…」

ルークが床に視線を落とす。ミリもそれに併せて視線を落とす。そこには、掛け替えのない仲間たちの…遺体。

「葬つてやらんな。戦士の定めとは言え…大事な仲間なんだから」
「…すまない」

- 迷宮内 どこかの泉 -

そこに倒れていたのはシイル。泉から流れる水が頬を伝い、目を醒ます。朦朧とした意識がはつきりとしてきた。そうだ、自分はレポートウェイブでどこかへ飛ばされてしまったのだ。見覚えのない場所、近くにランスたちがいないか、声を出す。

「ランス様あー？ルークさんー？いませんかー？いたら返事してくださいあーい」

返事はない。が、ふと岩陰から気配がする。誰かが声に反応したようだ。

「だ、誰かいらっしやるんですか…？」

「……………」

「も、もしかしてランス様ですか？」

「うう…ぐっ…」

そこには一人の戦士が倒れていた。大きな怪我は無いようだが動けない様子。慌てて駆け寄り、ヒーリングを唱えるシイル。

「だ、大丈夫ですか！？しっかりしてください！いたいいたいのとんでけっ！」

「ん…ありがとう、もう大丈夫だ…君のおかげでこの命、拾うこと

が出来た」

「よかった、わたしはシイル・プラインと言います」

「僕の名前はバード。バード・リスフィ。君の魔法のお陰で助かったよ。改めて礼を言わせて貰う」

「え…えへへ」

こうもはっきりと感謝されることにシイルは慣れておらず、ちょっと照れる。ランスが素直に礼を言うなんて事、ほとんど無いからだ。バードという名の戦士が立ち上がり、辺りを見回す。

「君もあの変な魔法でここへ？」

「はい、早くランス様と合流しないと…」

「ならば、互いの目的は一緒だね。僕も君もここから脱出したい。

どうだろう、ここからは僕と協力しないか？ 帰り木も奪われてしまったようだね」

「ええ、よろしくお願いします」

「ああ、よろしく…誰だっ!？」

バツつと後ろを振り返るバード。シイルもそちらの方向に目をやる。そこには赤い頭巾に身を包んだ少女が立っていた。緊張を解く二人。

「こんにちは。こんな迷宮内に来るなんてよっぽど物好きな人だね」

「こんにちは。可愛い子ですね」

「お嬢ちゃん？君は？」

「失礼しちゃう。アーシーはお嬢ちゃんなんかじゃないわ。こう見えても、てんちゃい占い師なんだから。おかし女が持っているお菓子をくれたら占ってあげてもいいよ」

「干し芋じゃ駄目かい？」

腰に掛けていた袋から干し芋を取り出すバード。

「駄目駄目。干し芋をお菓子のカテゴリーに入れないで」

「甘いんだけどなあ……」

残念そうに干し芋をむしゃむしゃ食べるバード。隣のシイルにも手渡し、シイルもそれを受け取って二人で干し芋を食べ始める。そんな二人を見ながら、アーシーはおかしな事に気がつく。

「あれ……そこのお兄ちゃん……」

「ん？僕がどうかしたかい？」

「……なんでもない。教えて欲しかったらお菓子持ってきてね」

「そう言われると気になるな。でもごめんね、お菓子は持っていないんだ。君もこんな所にいると危ないから一緒にいて来るかい？」

「大丈夫……モンスターさんには占いのお陰で出会わないから」

「そう、じゃあ私たちは行くね。アーシーちゃんも気をつけてね」

そう言っただけで泉から離れ、ダンジョンを進んでいくバードとシイル。その二人の背中を見送りながら、アーシーはぼつりと呟いた。

「あのお兄ちゃん……凶の運命の持ち主だったな。かわいそう。それに、寿命がとつくの昔に無くなっちゃってるのに……なんでまだ生きてるんだろう……悪運？あんな人初めて見た」

アーシーのつぶやきは、誰の耳にも届かないまま虚空へと消えていった。

第19話 その占い、今はまだ意味を持たず（後書き）

「人物」

ミリ・ヨークス

LV 15 / 28

技能 剣戦闘LV1

ミル・ヨークスの姉。腕の確かな女剣士で、Hの腕はそれ以上。ランスがヤルのを嫌がる数少ない女性の一人。妹に事件の責任を取らせるため迷宮に潜っていた。誰にも打ち明けていないが、重い病を患っている。

バード・リスファイ

LV 15 / 42

技能 剣戦闘LV1

冒険者。顔、性格、腕の三重奏揃った戦士だが、幸が薄い。惚れっぽい性格をしており、気がつけば毎回違う女性を連れ歩いているが、本人に悪気はない。

アーシー・ジュリエッタ

LV 1 / 3

技能 占いLV2

魔人バークス・ハムの使徒。姉妹が二人いる。その占いの的中率は100%と言われており、お菓子をあげると占って貰える。

ルー（オリモブ）

ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。ミリとは三人の中でも一番性格が合い、飲み友達でもあった。ミリが持っているアリスロードは彼女の愛剣である。名前はアリスソフト作品の「DARK」より。

チヨルラ（オリモブ）

ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。ミリ、ルーと共によく一晩中飲み明かしていた。名前はアリスソフト作品の「DALK」より。

リムリア（オリモブ）

ミリの仲間の女戦士。迷宮探索中に戦死。普段から飲み過ぎな三人に頭を抱えていた苦勞人。名前はアリスソフト作品の「DALK」より。

「モンスター」

こかとりす

鳥系モンスター。肉の味が絶品で、冒険者によく狙われている。へんでろぱの材料でもある。

こんにちわ

顔が三つある球体のモンスター。怨念が深いと、倒された際こんばんわというモンスターとして復活することがある。

ラーカйм

ヤドカリに似たモンスター。岩を背負い、鋭いハサミを持っている。

グリーンスライム

緑のねばねばしたモンスター。物理攻撃を無効化する。

おかし女

一つ星女の子モンスター。お菓子を作るのが大好きで、その味は

絶品。戦闘能力は低い。

「技能」

占い

物事を占う才能。LV2以上にもなると、未来予知とも呼べるものになる。

「装備品」

ロングソード

ごく一般的な剣。値段の割にはそこそこ攻撃力もあるため、とりあえずこれを装備している冒険者も多い。

アリスソード

柄に女神アリスをモチーフにした紋章が飾られている剣。攻撃力は高いが、見た目以上に軽く、力のない魔法使いや神官でも装備可能。

第20話 未だ見ぬ宿敵

・ピラミッド迷宮 鏡の間・

「今度は鏡の前で少女が胸を見せる、だとさ」

「いーーーーーやーーーーー!!」

「一応言っておくが俺もやらないぞ」

「がはははは、全く持ってけしからん！が、これも三人を救うためだ。頑張るのだマリア、カスタムの未来はお前の両乳にかけられたぞ」

「ぜつつつたい、いやっ!!」

一度町に戻り、三人を丁寧に埋葬した一行は、再び迷宮に潜っていた。一つ目のワープ装置を利用しようとしたが、あの先は行き止まりであったとのミリの証言によりそれを中止し、なんとか二つ目のワープ装置を作動させられないか調べるため、鏡の間までやってきていた。その際、偶然にもミリが石版を宝箱から発見していたことを聞き、ルークが受け取り書いてあることを読んだのが今。嫌な予感のしていたマリアは、内容を聞くやいなや悲鳴を上げた。

「そうだ、前は私がやったんだし、今回はミリさんが…」

「嫌だぜ、俺は。そんな馬鹿馬鹿しいこと」

「んがつ!」

「ええい、まどろっこしい!早く見せんか!!」

渋るマリアをランスが後ろから羽交い締めにし、服をずり下げ胸を露出させる。ルークに出来ることはそっぽを向いて見ないようにしてあげることだけだった。南無南無。

「きゃああ！ちょー！いやー！ー！」

「うふふ、可愛い胸だね」

「さあ、鏡様にお前の胸を見て貰うんだ！上下に揺すって乳揺れのサービスだ！」

「こんなのひどすぎるー！ー！ー！」

マリアの絶叫と第二のワープ装置解除の放送が迷宮内に空しくこだました。

「あと二回…か…」

「ルークさん、その通りですけど不吉な発言しないでください！」

・ピラミッド迷宮 棺の間・

二つ目のワープ装置を使用し、少し進むと棺が大量に置かれた部屋に辿り着いた。その部屋の奥、他の棺に比べ多少豪華な装飾を施してある棺に、ミイラ男が腰掛けていた。モンスターかと身構える四人に落ち着いた様子でミイラ男が話しかけてくる。

「誰だい。ああ、そう身構えんでいい。戦うつもりなんてないんね」

「なんだ貴様は？」

「なーに、ただのミイラ男さね」

「ただの…ねえ。ただ者には見えないか？」

「え？どういうこと、ルークさん？」

声を聞く限りは中年男。包帯に隠れておりよく判らないが、体格はでっぶりとしており、とても強そうには見えない。ルークの発言にからからと笑うミイラ男。

「おんやまあ。死んでから200年、こんだけ鈍っちまった体なのによく気がついたね」

「座り方がな…隙だらけのようできて、その実、隙がない。生前はかなりの実力者とお見受けしたか？」

「そんな大したもんじゃねーよ。おいちゃんは、リングエル王ザーハードス6世に仕える親衛隊副隊長、バ・デロス・ガイアロードじゃ」

「なんつー大層な名前だ。まあ今はただのミイラだがな。がはは、情けない」

リングエル国。200年前に滅んだ国だ。ゼスと隣接した砂漠の中に栄えた国で、近隣諸国との関係も良好であったと文献には残されている。ピラミッドも、国の滅亡後に近隣諸国が建て、集められた関係者の死体を埋葬したものだという。そういえば、マリアがこの迷宮はリングエル王のピラミッドを改造したと言っていたか。

「砂漠の真ん中であつたんじゃが…いつの間にか地下じゃ。不思議な…」

「あ、ごめんなさい。それは私たちが魔法で移動させたせいなの…」

「ん？ほー、お嬢ちゃん若いのに凄い魔法を使えるんだの？」

「あんな広大な砂漠の真ん中とは、随分とへんぴな国だったんだねえ？」

「廣大？うんにゃ、小一時間も歩けば渡りきれぬちつぽけな砂漠さね」

ミイラ男の発言の意味が分かっていない様子のランスとミリ。逆にその意味を正確に理解しているのはルークとマリアだ。

「死んでる期間が長くてボケたのか？」

「違うわよ、ランス。あの砂漠はね、昔はなかったの」

「そうなのかい？」

「ああ、今から200年ほど前、広大な大地を目当てにゼスに攻め込んだヘルマン軍とゼスとの戦争があつてな。ゼスは禁断とも言われた秘術でその大地を砂漠化することにより、ヘルマンの目的をなくすと同時に、以後ヘルマン軍がゼスに侵攻するのを難しくした。なにせ、ゼス中心部に攻め込むためにはその砂漠を通らなきゃならないからな。その秘術を使う際に、媒体としたのが数年前に滅んでいたリッゲル国の砂漠だったと伝わっている」

世界の中心部に位置するキナニ砂漠。専門の案内人なしに越えるのは自殺行為とも言われるほどの広大な砂漠の誕生にはこういった背景があつた。

「あんれま、今砂漠はそんなことになつとんだんか」

「200年の間に、世界は大きく変わっていますよ」

「200年か：言われてみりゃ長いもんじゃ。あの時代が懐かしいわい。アホな隊長とノー天気な部下に挟まれた日々は大変じゃったが、楽しかったなあ：モエモエ国の行方不明だった騎士隊長はその後見つかったんだろうか：娘のリスガドルはどうしとるかのう…」

昔を懐かしみ、遠い目をするミイラ男。平和な国を突如襲った悲劇。ソレは無抵抗な民を虐殺した。ソレは抵抗する親衛隊を全滅させた。ソレはわずか二日で国を滅ぼした。

「200年も前じゃ騎士隊長も娘もとつくにじじいばあになつて死んでるだろ。それよりも、ミルという娘を捜してるんだが、何か情報を持っていないか？」

「それもそうか、はっはっは。ミル？その娘かどうかは判らんが、四つ目のワープ装置の先で娘の話し声がよくするぞい。その部屋はこの部屋と壁挟んだ隣でな。因みにワープコードは鏡の前でレス行

為じゃ。以前迷宮内を歩いてるとき石版に書いてあった」

「ぎゃああああ!!」

「おつ、それは俺の出番でもあるな。頑張ろうぜ、マリア」

「なんで張り切ってるんですか!」

「そりゃま、俺は男も女もいけるクチだからな…ふふ、楽しみだねえ」

「がはは、楽しみ…いや、町の平和のためだ。仕方ない。じゅるり」

「もういや…なんで私ばかりがこんな目に…」

「マリア、前向きに考える。三回で済んで良かったじゃないか!」

「全然良くありません!!」

ルークの精一杯のフォローが失敗に終わる。ランスとミリは既に行方を想像しているのか、ランスの表情はイヤらしく、ミリの表情は妖艶なものになっていた。

「情報ありがとうな、副隊長さん。安らかに眠ってくれ」

「おお、ちよっと待った。これ、持ってけ」

部屋を後にしようとするルークたちに対し、ミイラ男は何かを放り投げる。ルークが受け取り、見ればそれは剣。棺同様、装飾が施されているが決して武器を振る邪魔にはならず、斬れ味も良さそうだ。

「それはおいちゃんが生前使っていた幻獣の剣だ。一緒に棺に納められてた。このまま腐らすのも勿体ないからな、あんたらが使ってくれ」

「いいのか?」

「がはは、ルーク、俺様に寄越せ!」

「お前この間新しい剣買ったばかりだろうが。しかも人の金で!」

「はっはっは、誰が使ってくれても構わんよ。おいちゃん、あんた

らが気に入ったからな。やる」

「豪快なおっさんだね。ま、貰えるもんは貰っておくもんさ。俺はルーの剣があるからいらないけどな。さあ、行こうか」

「うう…鏡の間…嫌だな…」

豪快に笑うミイラ男に感謝するルークたち。ランスがまず部屋を後にし、ミリがマリアを引きずりながらそれについて行く。ルークも部屋を出ようとするが、ミイラ男がポツリと呟いた一言に足を止める。

「あんだ…ケイブリスって…知ってるかい…」

ケイブリスダーク。その事件は、今より200年前にゼスに侵攻した魔人の名前を取ってそう呼ばれている。多くの人間が虐殺された、地獄の一年。ゼスと隣接していたリングエル国も、この魔人に滅ぼされたのだ。

「…ああ、知っている。見たことはないが…かつて何度も聞いた名前だ…」

「そうかい…あれに出会っちゃいけない…ありや化け物だ…ちょっとは腕に覚えがあったが…一分も持たなかったよ…ははっ…」

「そうか…だが会うなというのは無理な話だな…」

「ん？どういうことだんね？」

ルークは一瞬だけ振り返り、静かに笑う。それは己が身に過ぎたる事を言うことへの自嘲か、あるいはもつと別の何かか。

「いずれ…必ず戦わねばならない相手だ。あんたのその無念、俺がこの剣と共に持って行く」

・ピラミッド迷宮 鏡の間・

「いやー、もういやー！おうち帰るー！！」

「ふふふ、虐めがいがあるねえ、マリアは……」

「おお、いいぞいいぞ。ほれ、もっと股を開け！」

「はいはい、踊り子さんには手を触れないでください……」

こうして最後のワープ装置は解除された。頑張れマリア。

・ピラミッド迷宮深部 通路・

「もう……お嫁に行けない……」

一行は最後のワープ装置を起動させて迷宮の奥へと進んでいく。聞いていた部屋までは少し距離があるようだ。後ろでマリアがさめざめと泣いている。ミリが慰めているが、泣かせた張本人にフオロ―されても効果は薄いだらう。と、少し開けた部屋に出る。なんだか少し寒気がする。

「ねえ、ランス……なんだかこの部屋寒気がするわ……早く抜けましょ
う」

「うむ、こんな部屋に長居は無用だな。ん？なんだこの札は。てい
っ！」

壁に貼ってあったお札を考え無しに剥がすランス。すると、煙と共に角の生えた緑色の神の女性が現れた。その強力な邪気に、ルー

クの緊迫感も増す。すると女性が深々と頭を下げながらこう言った。

「はじめまして、悪魔の札により召喚された者です。事情により名前は言えませんが、以後お見知りおきを」

「悪魔…だと…」

「ちょっと待って、私たちは別にあなたを呼び出してなんかいないわよ！」

「そのこの戦士の方が札を剥がしてくださいましたでしょう。あれが私を呼び出す方法です」

「で、お前は何しに出てきたんだ？」

悪魔の女性はコホン、と咳払いを一つし、自分のやってきた目的を話し始める。

「私は呼び出された方の願い事を三つだけ叶えます。もちろん、私の力の範囲内なので、不老不死や世界平和などは無理ですが。さあ、願いを仰ってください。ですが、見返りとして…あなたの魂を頂きます。安心してください、魂は死後に引き取りに来ますので、今後の生活が変わるわけではありません」

キャッチセールスの様な口調で話を続ける悪魔。彼女は内心こんなことを思っていた。

「（ようやく悪魔の契約係を任せられるくらいに出世したんだもんね…初仕事頑張らなきゃ…）」

「むっ、それはかなえられる範囲ならどんな願い事でもいいんだな？」

「ちょっとランス、危険よ！」

「確かに俺も危ないと思うぜ。話が美味すぎる」

「契約するなら無理には止めないが…賛同は出来んな…」

彼女はこの日、目の前の男と出会ったことにより転落人生を歩むこととなる。だがそんなことを知る由もない彼女。

「がはは、大丈夫だ。悪魔の娘、その契約乗ったぞ！」

「（やった、初仕事成功！私って幸先いい！！）」

彼女は今、とても幸せそうだった。

第20話 未だ見ぬ宿敵（後書き）

「人物」

バ・デロス・ガイアロード

LV 25 / 33 （生前）

技能 剣戦闘LV1

リングエル国親衛隊副隊長。平和な国、尊敬できる王、信頼できる仲間、美人の妻と愛娘、その全てを魔人ケイブリスに奪われた。現在はピラミッドの中でミイラとして暮らしている。この生活もそれなりに気に入ってはいるようだ。

「装備品」

幻獣の剣

生前、ガイアロードが使っていた業物の剣。特殊な結界に覆われていてダメージを与えられない幻獣をも斬り伏せる。盗難防止のため本人以外の男性が触ると電流が走る仕掛けとなっているが、その仕掛けを解除してルークたちに手渡した。

「都市」

リングエル国

自由都市。近隣諸国と良好な関係を築いており、特にゼスやモエモエ国との親交が深かった。ピラミッド内の装置はその名残。約200年前、魔人ケイブリスによって二日で滅ぼされる。

「その他」

GI0802 魔人の後押しを受けゼス建国 モエモエ国騎士隊長

行方不明に

GI0808 モエモエ国、ゼスに併合され滅びる

GI0813 ケイブリスターク発生 リンゲル国滅びる

GI0816 ゼスヘルマン戦争勃発 キナニ砂漠が誕生

第21話 転落人生

・ピラミッド迷宮 お札の間・

悪魔との契約を結ぶことにしたランス。その返事を聞いた悪魔の娘は、嬉しそうに羽尾をパタパタと動かす。マリアは心配そうにランスを見ているが、ルークとミリは何となくこの後の展開の予想がついている。

「おい、お前に叶えられる範囲ならなんでもいいんだな？」

「はい。ではさっそく、願いの方をお願いします」

ランスに問いかけられ、嬉しそうに綻んでいた表情を引き締める悪魔。ランスもキリツと真面目な顔になる。ゴクリツ、息を呑むマリア。

「うむ…俺様の願いはズバリ…」

「ズバリ…？」

「やらせる！」

「……………へ？」

想定もしていなかったであろう回答に思考が追いつかないのか、ポカーンとアホ面になる悪魔娘。隣では盛大にマリアがずっこけている。

「この男はなんだって、こつ…」

「そうか？俺は言うと思ってたぜ？」

「まあ、これでこそランスというか、何というか…」

予想通りの展開にちよつと誇らしげなミリ。

「どうした？まさかこの願いは駄目だとか言うつもりはあるまい？」
「へあ！？モ、モチロンそんなことありませんよ。ただ…そんな願い今まで話にも聞いたこと無かったので…」

「がはは、それではさっそくゴーだ！」

「え、ここですか？せめて他の方を別の場所にとか…」

ちらりとルークたちを見る悪魔娘。気のせいか視線が助けを求めている気がする。

「なんだ？悪魔のくせに恥ずかしいのか？情けないな！」

「カツチーン！そ、そんなことはありません。さあ、どこからでも来てください！！」

「ああ…まんまと挑発に乗っちゃったぞ、あの悪魔…」

「男慣れしてないんだらうねえ」

「そういう問題なの？」

「ぐふふ、では…とー！ー！」

「きゃあ！」

悪魔に飛びかかり、情事を始めるランス。ミリがそれをやんややんやと観戦し、ルークとマリアは部屋の隅で壁とにらめっこし、事が終わるのを待つ。もし万が一悪魔が反抗した場合の時に備え、部屋からは出て行かない二人。その背中には哀愁が漂っていた。

「がはは、悪魔はエロエロだぞ！マリアも見ろ！」

「ルーク、あんたもこっちに來たらどうだ？悪魔と人間の行為なんて、中々見られるもんじゃないぜ」

「…ギヤラリー増やそうとしないぞ」

ランスとミリが壁を向いている二人を誘う。ルークを誘ったミリをランスが止めなかったのは、ルークがランスからそれなりの信頼を得ているのか、はたまた気持ちよすぎて深く考えなかっただけなのか。

「悪魔とのHに別に興味ないんでパス。魔人となら見学もちよっと考えた」

「私もパスします。女の子がランスにHされてるとこなんて、見たくないもん」

「がはは、マリアはやきもち焼きだな」

「…馬あ鹿」

「なんか今さらりと凄い発言が飛び出た気がするんだが…俺の聞き間違いか？」

「…胸揉みながら普通に会話とかしないで」

先ほどから悪魔娘がぼそりと抗議を続けるが、誰も聞いていなかった。

二十分ほど行為が続き、しっかりと本番まで終わらせたランス。悪魔娘はぐったりとしながら、人間のくせに…と小さく呟いている。トラウマにならなければいいが。

「ほら、いい加減起きろ。悪魔のくせによわっちいな」

「くうう…（人間のくせに、人間のくせに、人間のくせに…！）」

「さて、それじゃあ次の願い事だが…」

悪魔娘を無理矢理起こして二個目の願い事を頼もうとするランス。一体何を頼む気だろうか。金か？女か？順当にシイル救出の手伝い

か？思考を巡らせるルーク。

「ズバリ、やらせる！！」

「……………」

「……………お、鬼だわ！」

「……………これはさすがに読めなかったな」

「……………大した男だ」

「おねが、お願いです！お願いですから別の願い事に…いやあああああ……！！！」

カーン、とどこかでゴングが鳴る音が聞こえた気がする。第二ラウンド突入。それはつまり、ルークとマリアの壁とのにらめっこ第二ラウンド突入も意味していた。

「それでは…次が最後の願いです…よく…よく考えた上でお願いします」

第二ラウンドもたつぷりと時間を掛けられ楽しまれた悪魔娘。まさかの三ラウンドを警戒してか、必要以上に念を押してくる。それに対し、既に三つ目の願いを決めていたのか、ランスは即答する。

「俺様の魂を取るといふ話をなかつたことにしろ」

「……………えっ？」

「何だ？お前に叶えられる範囲のことだろう、この願いは」

「…上手いな」

ルークが感心する。こういふ悪知恵に対しての頭の回転は本当に凄い。

「い、いえ…その…あの…」

「まったく、悪魔というのは自分が交わした契約一つ守れないのか。ああ、情けない」

「……わかり…ました…受理させて…いただきます…」

ガクリと頭を下げる悪魔娘。その頬を涙が伝う。なぜかマリアの胸の中に親近感が湧いてきたらしく、私今なら悪魔と仲良くなれるかも…とか呟いている。

「がっはっは、悪魔とタダでHしてやったぞ！とーくしたー！」

「う…うーわん！この悪魔ー！ー！二度と私の前に現れるなー！ー！ー！ー！」

泣きながらどこかへと去っていく。悪魔に悪魔と呼ばれる人間が誕生した瞬間であった。

・ピラミッド迷宮 幻獣の間・

その部屋は、ただ広いだけの何も置いていない部屋だった。ここは四魔女の一人、ミル・ヨークスが改造して造った幻獣たちと遊ぶ部屋。自分が生み出したたくさんの幻獣たちと、あるときは魔法の修行を、またあるときは鬼ごっこやボール遊びを楽しんだ。そういった目的ゆえに余計な物を置いておらず、ミルの部屋はこの部屋の奥に別に造ってあった。先ほどまで幻獣たちと遊んでいたミルは自分の部屋に引き返そうとするが、入り口から誰かが入ってきたのが見える。

「だあれ？なにかご用？」

「ミルッ!」

「おお、あれがミルだな。ぐふふ、彼女も美人ではないか」

「あっ、ランス、言っておかきやいけないことがあるんだけど、ミルはね…」

部屋に入ってきたのは四人。男一人は知らない人だが、女性の方は同じく四魔女の一人

マリアと、実の姉であるミリであった。予想外の客人に目を丸くするミル。スレンダー美人であるミルに対し感想を述べたランスにマリアが何か言いかけるが、ミルの言葉に遮られる。

「あれ、お姉ちゃん?もう、なんで来たのよ。私のことは放っておいてよ!」

「ようやく見つけたぞミル!町の人たちにこんなに迷惑かけやがって…指輪を外して姉ちゃんと来るんだ!」

「ふんだ!」

ぷいつ、と頬を膨らませそっぽを向くミル。妹の反抗にミリが額に青筋を立て、声を荒げる。

「こら!いい加減にしないとお尻ペンペンじゃすまさないよ!」

「ひっ…」

「子供かよ…」

ミリの発言もどうかと思っただが、それにびびるミルに対し呆れるルーク。あれではまるで子供だ。

「な、なによ、なによ。全然怖くなんかないんだからね!もう、さつさと帰って!」

ミルがそう言って手を振ると、虚空からザワザワと何かが生まれる。体は青白く、鋭い爪にギョロリとした目。あれが、幻獣。ミルを一瞬のうちに数体もの幻獣を生みだしたのだ。

「やっちゃって、幻獣さん!!」

「まずいわ!!」

ミルの合図と共に、幻獣たちがルークたちめがけて宙を走る。幻獣の呪文とは、無の世界から怪物を召喚する力。その怪物たちはある特殊な性質を持っていた。

「がっはっは、動きが鈍いな!俺様の華麗な剣技で真っ二つだ!!」

そう言って向かってきた幻獣に剣を振るランス。しかし、その剣は幻獣の体をすり抜けてしまう。

「あ、あれ?どういうことだ!？」

「駄目、私のチューリップも効かない!」

「あっはっは、私の幻獣さんにはそんな攻撃効かないわ!!倒したかったら大昔に所在不明になった幻獣の剣でも持つてくるのね!!」
「くそっ、どこまで世間様に迷惑かければ気が済むんだ、ミル!!」

これが幻獣の特性。その体を覆った特殊な結界のせいで攻撃がその体をすり抜けてしまい、ダメージを与えられない。一気に幻獣たちに囲まれてしまうランスたち。

「今ならごめんなさいすれば無傷で帰してあげるわよ。さあ……えっ?」

勝ち誇るミルだが直後信じられない光景を見る。一閃。目の前の

幻獣が先ほどまで静かにしていた男に斬られ、消滅していた。

「わざわざ説明ありがとう。幻獣の剣…っていうのはこいつのことかな？」

「ど、どうしてそれを！卑怯よ、反則だわ！その剣は幻獣使いにとつて天敵なのよ！」

男が持っていたのは先ほどミルが口走った幻獣の剣。あの剣は幻獣の境界を無効化してしまう特殊な剣で、幻獣使いのミルにとつては発言通り天敵とも呼べる代物だった。

「おお、ミイラ男に貰った剣か。仕方がない、今この場で戦えるのはお前だけだ。さあ、働け！」

ランスがルークに指示を出す、今の一撃で何かを確信したルークは、手に持っていた幻獣の剣をランスに向かって投げる。反射的に受け取ってしまうランス。

「ランス、使え。貰いもんなんだから後でちゃんと返せよ」

「むっ、貴様自分が楽するために俺様に剣を渡したな。めんどくさいからお前が…っておい！」

ランスの話が終わる前に、元々の装備である妃円の剣を抜いて幻獣に突っ込んでいくルーク。幻獣が鋭い爪をルークに振り下ろす。

「だめ、ルークさん危ないわ！！」

「何やってんだ！さっさと下がれ！！」

マリアとミリも声を上げる。普通の剣で幻獣に向かうなど自殺行為だ。幻獣の腕とルークの剣が交差する。剣はその体をすり抜け、

爪がルークを引き裂く、とその場にいた誰もが思っていた。が、現実起こったのは全くの逆。幻獣の腕をルークの剣が斬り裂き、そのまま体ごと真つ二つにしていた。

「嘘、どうして！？なんで普通の剣で幻獣さんに攻撃できるの！？」
「残念だったな、ミル・ヨークス。どうやら俺は幻獣使いにとって…」

ミルが先ほど以上に大声を上げる。マリアとミリも目の前の光景に唖然とする。普通であれば幻獣の結界に攻撃は遮られるはずなのだ。普通であれば、だ。しかし、今目の前に立つ男の持つ世界に唯一の技能は普通ではない。対結界。それは、ミルにとって幻獣の剣以上の…

「天敵みたいだ！！」

- 悪魔界 某所 -

「願い事を叶えたのに契約を破棄されたですって、このグズ！フェリス、あなたは降格処分ね…」

「そ、そんなあああああ！！フィオリ様あああ！！！！」

転落人生、スタート。

第21話 転落人生（後書き）

「人物」

フェリス

LV - / -

技能 悪魔LV1

元カラーの悪魔。若くして第六階級まで上り詰めたエリートであったが、ランスのせいで降格させられた。悪魔は通常のLV概念から外れており、階級や功績により強さがある程度変動する。第六階級ともなれば、並の魔人とも同等に渡り合える実力を持つ。降格したが。

フィオリ・ミルフィオリ（ゲスト）

LV - / -

技能 悪魔LV2

フェリスの上司。DS。第三階級悪魔で、広大な領地を持つ君主。その実力は並の魔人では到底太刀打ちできない。最近空中に浮かぶ都市が気になっているとかいらないとか。アリスソフト作品の「闘神都市3」よりゲスト出演。

「技能」

悪魔

悪魔としての才能。人間やカラーから転成した者は、転成する際に身につく。

第22話 幻獣使いミル

・ピラミッド迷宮 幻獣の間・

「なんで…なんでよ…なんで幻獣さんが倒せるのよ！」

目の前で起こっている事態にミルが声を張り上げる。今までどんな相手にも敗れることの無かった幻獣。ランの剣も無効化し、あの四魔女最強の志津香も幻獣を破る手段は持ち合わせていなかった。それがささやかな自慢だった。だが、その自信が今音を立てて崩れていく。目の前にいる二人の戦士が、次々と幻獣を消滅させていくのだ。茶髪の戦士の方はまだ理解できる、彼が装備しているのは幻獣を打ち破れる特殊な剣だ。では、もう一人の黒髪の戦士は一体何なのか。ミルが魔力を込め、手を振る。先ほど生み出したよりも更に大量の幻獣が召喚される。

「やつちゃって、幻獣さん！特にあの黒い髪のおじさん、絶対許さないんだから！！」

「お…おじさん…」

幻獣を斬り伏せていたルークの手が止まり、顔が引きつる。流石に聞き捨てならない言葉だったのか、ミルに対し反論する。

「失敬な！俺はまだ25だ！お兄さんと呼べ、お兄さん！」

「がはは、十分おっさんだ！」

「あ、結構年上だとは思っていたけど、私よりも8つも上なんです
ね」

「まあ…ミルから見たらおじさんだろうな」

まさかの味方からの追い打ちに肩を落とすルーク。ランスがやい、じじいと更なる追い打ちを掛けるが、直後のミリの発言にその挑発が止まる。

「つてことは今この場に二十代はあんただけか」

「ん…ちよつと待てミリ、お前年はいくつだ？」

「俺か？今年で19だけど？」

「なんだと！…！」

「…あんたら二人、後で覚えておけよ」

ふざけながらもルーク、ランス共に一流の冒険者。新しく迫ってきた幻獣の攻撃を躲し、お返しにとその体を両断する。幻獣の動きは基本的に鈍い。攻撃さえ普通に与えられれば、低級モンスターを相手にしているような者ものだ。ふと見れば、ミルが更に幻獣を召喚していた。

「とは言え…キリがないな。指輪のせいで魔力切れも遠そうだし…術者を倒すのが手っ取り早いな」

「ひっ…」

そう言い放ち、ミルに向かって殺気を含んだ視線を飛ばす。その殺気もミリの妹なので多少甘めのものだが、十分効果はあったらしい。

「こ、来ないでよ…幻獣さん！あのおじさん絶対に殺して…！」

四度手を振ると、またも大量の幻獣が生み出される。既に部屋にいたのと併せて、その数は三十体以上にも及ぶ。これを倒すのは骨が折れそうだ。そう思っていると、ミルは走って奥の部屋へと逃げ

て行ってしまう。」

「ランス、追え。ミルの指示通り、幻獣は俺を狙ってきている。もしテレポルトウェイブなんかの装置があつて逃げられると厄介だ。マリアとミリもついて行け。ダメージを与えられない以上、残つていてもしょうがないしな」

「ふん、ならここは任せた。ミルのお仕置きと処女は俺様に任せろ！」

「悪いね、頼んだよ」

「ルークさんも気をつけて」

そう言つて目の前の幻獣をランスが斬り伏せ、ミルを追う三人。幻獣は単純な思考回路らしく、追う三人よりも直接指示を受けたルークの方に寄つてくる。部屋を出て行く間際のミリの背中に向かつて声を掛ける。

「ミリ、必ず妹を救い出せよ！」

「…ああ、恩に着る！」

こうして部屋にはルークただ一人取り残された。周りを囲むのは三十体を越える幻獣。特にルークに近かつた幻獣三体の爪が一斉に襲いかかつてくる。そんな状況に置かれながらも、ルークは不敵に笑つた。

「ふっ…最近魔法攻撃中心の敵との戦闘が多くてな…やはり近接戦闘はやりやすくいいな！」

ミルを追ってきたランスたちも、奥の部屋で幻獣を相手取っていた。結果として脱出装置のようなものはなく、単純に追い詰めた形となったが、無制限に生み出される幻獣が面倒なことこの上ない。しかもこの場で戦えるのはランス一人、そんな状況にだんだんと苛立ちが溜まってきていた。

「ああ、なんか面倒になってきたなあ……」

「そんなこと言わないでよ、ランス」

「ほらほら、まだまだ幻獣さんたちはいるんだから、早く帰ってよね！」

「バカ抜かせ！妹を残してどこに帰ってんだ！お前がいるところが、私がいる場所だ！」

「……おねえちゃん……」

やる気をなくしているランスを必死にフォローするマリア。ミルとミルは二人で盛り上がっている。なんだ、姉妹仲良いんじゃないかと思っていたランスはふとある作戦が頭に浮かぶ。

「……うむ、俺様自身恐ろしくなってしまうほどに完璧な作戦だ。これが持つて生まれた才能か」

「？何言ってるの、ランス？」

「まあ、見ておけ」

近場にいた幻獣を倒したランスは、隣で盛り上がっているミリの背後にこそそと回っていく。そして突如ミリを腕で拘束し、その首筋に剣先を押し当てた。

「これが目に入らぬか！ミル！！」

「なっ！！！！」

「おい、ランス…」

「見てろって…この光景を…？最低…」

「さあミル、降伏するんだ！姉のミリがどうなってもいいのか！！」

清々しいまでに外道な作戦を実行したランス。マリアの軽蔑の眼差しなど気にしていない様子で、ミルに降伏するよう迫る。困惑するミルだが、易々とは降伏しない。

「あ、あんた最低！おねえちゃんとは仲間だったんじゃないの！？
…そ、そんな猿芝居に騙されたりなんか…」

「おおっと、手が滑った！」

そう言っつて剣先を少しずらすランス。ミリの首筋に薄い切り傷が出来、一滴の血が流れる。

「ランス、お前いい加減にしろよ。本気なのか？それなら俺も全力で抵抗させて…」

「バカ。演技に決まってるだろ！お前も協力しろ」

ミリの問いかけに対し、ミルに聞こえないよう小声で回答するランス。その答えにミリが少し安堵の表情を浮かべる。

「まあ…考えてみればそうだよな。本気でこんな事するわけ…」

「うむ。だから弾みや流れで殺してしまっても恨むなよ」

「……………うおおおおおおお！！！！」

「バ、バカ。何全力で拘束から逃れようとしてるんだ！」

「もうやめてーーーー！！！！」

危うく作戦が頓挫する直前でミルが大声を上げる。たった一人の大切な姉、放つては置けない。指輪で心が悪に染まっただけでも、そ

の絆までは消されていなかったようだ。

「わ、わかったから…降伏するから…おねえちゃんにヒドいことしないで…」

「がはは、そうか！では命令を聞いて貰うぞ！まずは服を脱げ！それから…」

「ええっ!?!」

「ちょっと待ってランス、まだミルは…」

「ええい、うるさい。処女を失わんと指輪を外せないんだろうが！」
「うっ…まあそうなんだけど…」

ランスとマリアが問答をしている間にミルは着ていた服を脱ぎ去った。下着姿で恥ずかしそうにしながら口を開く。

「……これで…いい？」

「まだまだ、さあここからが本番だ。ぐふふ…」

「ほん…ばん？」

・ピラミッド迷宮 幻獣の間・

こちらでは丁度ルークが最後の幻獣を倒したところであった。見ればその体はほぼ無傷。高レベルな事もあり、近接戦闘であればこの程度の相手がいくらいようと、その動きの鈍さを見切って無傷で倒しきることは十分可能であった。とは言え数が数、多少くたびれた様子で肩を回すと、奥の部屋の方を見る。

「さて…俺も行くか。もう終わってるかもしれんがな」

そう言つて、ルークは奥の部屋へと向かう。戦闘の音がしてこない。やはり決着はもうついてしまつたらしい。少し残念そうにしながら入り口を潜る。しかし、ルークは部屋に入つて飛び込んできた光景に驚愕し、持っていた剣を落としてしまう。

「びえーん！痛いよー！！」

「なんだ、なんだ、なんだー！！？」

先ほどまでこの場にいなかった裸の少女がわんわんと泣いており、その横でランスが困惑していた。少女とランスは既に事を済ませた後のようなのだ。ここまでは見慣れた光景であるが、問題なのはその少女の年齢。明らかにまだ10前後である。

「ランス…お前…あんな幼い娘になんてことを…流石に容認できんぞ……」

「ち、違つわ！こんなちんちくりんなガキ、俺様は知らん！」

「おお…ランスにそんな趣味があつただなんて…よーいちろーがやつてきてしまつ…」

「だから違つと言つてるだろうが！」

「ランス、ルークさん、これがミルの本当の姿なの」

状況が飲み込めていない二人に、マリアがフォローを入れる。

「なつ？これがミルだと！？全然姿が違うではないか！」

「多分、強すぎる魔力にも耐えられるように、指輪がミルの体を成長させていたんだろうな」

「それを知らずにヤッチまつた訳か…因みに今いくつなんだ？」

「ミルはまだ9才だよ」

ぎろつ、とどこかでソフリンちゃんが睨んでいる気がする。聞い

てはいけない質問だったようだ。年齢を聞いて更にショックを受けた様子のランス。

「さて…と、悪いけど俺はここで抜けさせて貰うぜ。ミルを町に連れて帰らないとな」

「あれ？一度置いてきて合流はしてくれないの？」

「ミルを見ててやらないとな。どんな指輪の悪影響があるかも判らないし」

「まあ、そうだな。こっちは大丈夫だから、妹と一緒にいてやれ」

「悪いな。短い間だったけどお前らとの冒険、なんだかメチャクチャで楽しかったぜ。またな、ランス、ルーク！」

そう言っつてミルを連れて帰り木で町へとワープしたミリ。それを見届けた後、マリアが張り切った声を上げる。

「なんにしてもこれで指輪はあと二つね。さあ、四層にいるランのところに向かうわよ！」

「あんなガキンチョに…俺様のプライドが…」

「ほらほら、行くぞ」

未だ立ち直れないランスを引きずっていくルークとマリア。四層へと続く階段はミルの部屋の近くにあった。気を引き締めてその階段を下りようとしたとき、下の階から声が聞こえてきた。

「…ス…ま…たすけ…」

「！？ランス、今の声！」

「シイルの声じゃねえか！行くぞ！！」

「え、なにになになに？」

先ほどまでの力の抜けた状態から一転、剣を握りしめながらラン

スは下の階層へと走り出した。

・ピラミッド迷宮 棺の間・

「お、音がやんだな。おいちゃんの剣は役に立ったかねえ？」

壁向こうのミルの部屋から聞こえていた戦いの音が止み、ミイラ男は一人呟く。まさか自分の剣が人質作戦などと言う卑怯な手に使われたとは夢にも思っていない。すると、突然声を掛けられる。

「おほほほほ、お久しぶり。聞こえたでおじゃるよ。あの剣、誰かに渡したのでおじゃか？」

部屋に入ってきたのは、体は人間だが顔が猫である何か。真っ赤なタキシードを着て、手には看板を持っている。

「おお、K・D殿、お久しぶりです。またここには暇つぶしで？」
「その通りおじゃ。さあクイズでおじゃよ。で、質問の返答は？」

「ええ、中々に見所のある戦士が二人いたんで、譲ったんでさあ。こんなところで腐らすよりいいからねえ」

「ふむ、大事な剣を譲るほどに将来有望そうな戦士。まるも見てみたかったでおじゃ」

「はっはっは、ケイブリスの事を言っても、逆に俺が倒してやるみたいだな目をしていたよ。端かりや見りや、世間知らずかただのバカだが…そういう感じでもなかったんね。おいちゃん気に入っちゃったよ」

「おほほほほ、それにしてもあの貧弱だったリスちゃんが今や魔人

四天王とは…時代の移り変わりは凄いものでおじゃね」

「またその話ですか。K・D殿の話はどこまで信用して良いのか困りますなあ」

慣れた様子でK・Dの発言を受け流すミイラ男。あまりにもスケールが大きすぎる内容はいつものことのように、全く信用していない。

「本当なんでおじゃがね…」

落ち込んだ様子のK・Dと呼ばれた生物。まだ随分と先の話になるが…彼もまた、ルークと深く関わることになる。K・D。^{キング}_{ドラゴン}。その正体は、今から4000年以上前の話だが、かつて大陸に統一国家を建国したドラゴン族の王であった。その彼がなぜこのような姿をしているのか、なぜ戦うことを止めたのか…それを知る者は少ない。

第22話 幻獣使いミル（後書き）

「人物」

ミル・ヨークス

LV 10 / 34

技能 幻獣召喚LV1

カスタム四魔女の一人。非常に珍しい幻獣魔法の使い手であり、まだ幼いながらも他の三人にも一目置かれていた。ミリの妹であり、家に帰った後はこつてりと絞られたが、姉妹仲は良好。ランスに処女を奪われる。おお…ソフリンちゃんがお怒りだ。

K・D

クイズ好きの猫人間。その正体はドラゴンの王、マギーホア。かつて大陸を統治したドラゴン族だが、今ではごく少数が翔竜山に生息するのみである。彼らに何があったのか、その真実は謎に包まれている。

「技能」

幻獣召喚

異空間から幻獣を呼び出すことが出来るレア技能。その姿は術者の精神に影響を受ける。

「その他」

よーいちろー

悪い子にしているとよーいちろーがくるよ、と子供のしつけによく使われるなまはげ的存在。やってくるのは可愛い少女のところのみ。

ソフリンちゃん

その睨みはハニーキングをも震え上がらせるといふPCゲーム界のドン。その割には6でカーマ、7で香姫、8でオノハと意外に寛容な面もある。

第23話 幻術使いラン

- 妖体迷宮 通路 -

第四層に位置するエレノア・ランの迷宮の中を、シイルとバードは歩いてきた。ワープ装置が数多くあり、少しでも手順を間違えれば同じ場所をループさせられるまさしく迷宮。二人は自分たちが今どこにいて、どこに向かっているかも判らなくなってしまうていた。

「彼女たち…一体どこに連れて行かれてしまったのでしょうか…」
「わからない…早く助け出してあげないと…」

彼女たちというのはランに捕らえられていた女性たちだ。以前にチサが話していた誘拐された若い女性たちというのが彼女たちなのだろう。出口を捜すシイルたちが拷問戦士に嬲られているのを発見し、これを救出。しかし、少し目を離れた隙に再度ランに攫われてしまったのだ。

「魔女たちは彼女たちを攫って一体何をしようとしているんだ…」

バードが独りごちる。目的が見えない行動は、それだけで恐怖の対象となる。ましてや相手は魔女。バードの脳裏には先ほど救出した三人が人体実験を受けているシーンが浮かぶ。自然と顔が強ばり、その緊張はシイルにも伝わってしまう。

「私たち…このまま出られないんでしょうか…?」

「何を言ってるんだシイルちゃん！諦めちゃだめだよ」

「でも…もう何時間もこうして歩いているのに手がかり一つ…」

「大丈夫だ！君のことはこの僕が命に代えても守ってみせる！」
「…ありがとうございます。すいません、弱気になっちゃって」

バードは共に迷宮を探索している間にシイルに惹かれていた。本人は積極的にアプローチをしているつもりもなかったが、言葉のそこらかしこにそれが垣間見える。シイルも薄々感づいてはいたが、好意を持っている人物が他にいるため、気がつかない振りをしていった。

「早くランス様と合流しないといけないですし、弱音なんて吐いていられませんよね」

好意を持っている人物であるランスの名前を出し、自分を奮い立てるシイル。しかし、隣にいたバードはその発言に少しむっとする。道中シイルからランスの奴隷であるという話を聞いたバードは、黙っていたりなかった。

「シイルちゃん、君はどうしてランスとかいう男と会いたがっているんだ？君を奴隷にしているような奴なんだろう？…そうか、逃げたらもつと酷い目に会うと思っつてしまひ逃げられない程に酷いことをされているんだね。なんて最低な男なんだ、ランス！」

「え…いえ、そういう訳ではなくて…」

「無理しないでいいんだ、シイルちゃん！君は僕が救い出す！」

そう言っつてシイルを抱きしめるバード。いきなりの行動にシイルが慌てるが、バードはどんと話を進めてしまふ。既に彼の頭の中には外道ランスと囚われの姫シイル、そしてそれを救い出す英雄バードの構図が出来上がつてしまつていた。

「安心してシイルちゃん、僕がきつとランスの魔の手から君を救い

出して見せるから」

「あ、いえ…そうじゃなくて…私がランス様と一緒にいるのは自分の意志というか…一緒にいる内にランス様の魅力に気づいて…その…」

「……うん、判った。ランスのことが好き、そう言いたいんだろう？」

「……えっと…は、はい…」

顔を紅潮させながらも小さく頷くシイル。どうやら伝わってくれたらしいと胸をなで下ろす。

「そして、そうしなければいけないと思えるほどに酷い目に遭わされてきたんだね！」

「……あれ？」

「うう…もう許しておけない。その外道は必ず僕が倒す！」

シイルに同情したのかポロポロと涙を流しながら誓うバード。決して悪い男ではないのだが、若干自分に酔っている。どうしたものかとシイルが困っていると、前方から女性が現れる。

「バード、助けに来たわよ。あら…その人は…？」

「えっ!?!どうして君がここにいるんだ、今日子？」

現れたのは情報屋の双子の妹、今日子。行方不明になっていたのは誘拐されたわけではなく、バードが迷宮で行方不明になったことを知って、冒険者も連れず一人救出に来ていたのだ。中々に行動力のある娘である。バードがシイルを抱きしめている光景を見て、少し目を丸くするが、すぐに冷静な表情に戻る。

「……別に、ここに占いに仕える道具があるって聞いたから探しに

来ただけよ」

「あれ？今バードさんを助けにつて……」

「……聞き間違いじゃないかしら？どうして私がバードを助けに来る必要が？」

「そうだよ、シルちゃん。僕と今日子はただの知り合いだからね」

バードの発言に一瞬だが顔を歪ませる今日子。天然で火に油を注ぐ男である。

「ま、そういうことだから私は行くわ」

「ちよつと待った、今日子。一人は危ない。一緒に行かないか？」

「誰があなたなん」あら？ここにも生気が滾った娘がいるわね」……！？」

今日子の言葉を遮るように迷宮に声が響く。すると、突然今日子の後ろから赤い髪の女性が現れた。振り返り顔を見た今日子は、彼女の名前を口走る。

「……エレノア・ラン」

「ふふ、お久しぶりね今日子さん。そして……さよなら」

ランがそういった瞬間彼女の目が妖しく光り、今日子の体が崩れ落ちる。幻惑魔法の使い手であるラン。その彼女が最も得意にしているのがこの催眠の魔法だった。その目を見た者は幻想の世界に投げ込まれ、行動に自由を奪われる。

「今日子さん！！」

「ラン、ここでお前を倒して今日子と三人の娘たちを救い出す！今日がお前の命日だ！」

「あちら、怖い怖い。早く今日子さんを志津香様のところに送りたい

「いのだけれど……まあいいわ。私が直々に可愛がつてあげる」
「！？シルちゃん、彼女の目を見てはいけない！」

そう言つて再び目を妖しく光らせるラン。バードはシルの前に立ちはだかるように躍り出る。シルも慌てて目を閉じる。が、直後辺りを切り裂くような悲鳴が響いた。

「うあああああつっ！！！！！」

「バードさんっ！？」

目を開いたシルが見たのは、ランに左腕を肩口から斬り飛ばされるバードの姿だった。腕がゴロゴロと転がる。

「あははは！信じられない！敵を目の前にして二人して目を閉じるなんて。幻惑魔法だけじゃなくて剣も使えるって知らなかったの？それに…攻撃魔法もね。炎の矢！」

そう言つて指先から炎の矢を放つラン。対象はシルでもバードでもない、床に転がっていたバードの左腕だ。炎の矢が直撃し、一気に燃え上がる左腕。辺りに肉の焦げる臭いが充満する。

「これであなたはもう一生片腕ね。冒険者稼業は廃業かしら？くすくす」

「うつつぐうううあああああ！！ラン！！！！！」

剣に付いた血を舐めながら、ランが笑う。バードが苦痛に声を上げながらも、剣を握りしめランに向かっていこうとする。

「駄目です、バードさん。ここは一旦引いて早く治療しないと！」
「に、逃がさないぞ！！！」

バードが腕を掴み、逃げられないようにする。しかしその相手はランではなくシイル。驚いたシイルがバードの顔を見る。その目からは正気が失われていた。

「まさか…バードさん、幻術に!？」

「シイルさん」

思わぬランの呼びかけについ振り向いてしまうシイル。失策。しかし、後悔してももう遅い。その瞳が妖しく光る。

「あつ…あああ…」

「ふふふ、こんなに簡単に操られるなんて…滑稽すぎるわよ、あなたたち。さて、このまま志津香様のところへ…」

「ランス様……」

「あら？まだ意識が少し残っているのね？催眠が効ききっていないところを見ると、彼女もそれなりに才能ある魔法使いみたいね」

「助けて……」

「助けなんてこないわよ。さあ、志津香様のところへ。それとも少し私が楽しもうかしら」

「ランス様……助けて……」

「うふふふふ、だから助けなんて……きゃいんっ！」

突如ランの後頭部に激痛が走る。振り返れば仲間であるはずのリアと見覚えのない男が一人。この男にげんこつをされていたのだ。頭を押さえ、涙目になりながら怒りの声を上げる。

「な、な、な、何者よあなた！急に現れて！」

「俺様を知らないのか？勉強不足だな！よく覚えておけ!!」

聞き慣れた声が辺りに響き渡る。今の一撃で催眠が解けたのか、シイルの意識が戻っていく。

「ある時は今世紀最強の天才剣士！またある時は女たちのハートを射止める絶世の美男子！そしてまたある時は数々の謎を解き明かす知的な冒険家！」

「あ…あ…」

シイルの目に涙が溜まっていく。意地悪で口も悪いが、自分のピンチには必ず駆けつけてくれる大好きなご主人様。

「そしてそのこのピンクモコモコ奴隷のご主人様にして世界の大英雄！ランス様だ！…！」

「そこまで自分で言うの…？」

「ランス様ああああ…！」

マリアの突っ込みをよそに、シイルがランスに抱きつきに行こうとする。感動の再会だ。ちよつとロマンチックかもしれないとシイルが考えていたが、その頭にすこーんとランスの投げた石がヒットする。

「ひどっ！ちよつとランス、シイルさん可哀想でしょ…！」

「ばかもん、シイル！こんな雑魚にやられやがって！俺様の奴隷を名乗るならもつとちゃんとしろ！」

「ひんひん、ごめんなさい…」

ロマンチックどころか色々台無しな再会であった。

「ラン、その指輪には恐ろしい悪の作用があるの！元の優しかった貴方に戻って！」

「恥を知りなさい、マリア！そんな男の軍門に下るなど！こんな男、私が倒してあげるわ！」

自信満々に右手で剣を取るラン。左手に魔力を溜め、目も再び妖しく光り始める。

「がはは、お前みたいな雑魚が俺様に勝てるわけないだろ！」

「雑魚ですって！？バカにして…剣、魔法、そしてこの魔眼！一戦士風情が私に向かって雑魚などと…」

「まあ…雑魚と言われてもしょうがないだろうな。まだ気がついていないんだから」

「へ？」

チャキッ、と後ろから首筋に剣を突きつけられる。固まるラン。剣を突きつけているのはルーク。ランスたち登場の前に身を隠し、ランの後ろに回り込んでいたのだ。

「侵入者の人数くらい把握しておくべきだったな。おおっと、振り返るなよ。幻術を使おうとしたら問答無用で首を飛ばすぞ」

「がはは、雑魚すぎる！」

「……………くすん」

こうして自信満々だったランは、四魔女中最速で敗れ去った。その背中が少し寂しそうであったと、後にシイルが語った。それと時をほぼ同じくして、町の方で二つほど動きがあった。

「お姉ちゃん、ごめんなさい…」

「俺じゃなくて町の人にちゃんと謝るんだぞ」

「はい…」

ルークたちと別れ、一足先に町に戻っていたミリとミル。町長に話を済ませ、今は自宅に帰る途中であった。が、廃墟となったラギシス邸の前を通ったときに異変に気がつく。家の中から気配を感じるのだ。

「誰だ！」

ミリが叫ぶ。すると屋敷の暗闇から、湧き出るように一人の少女が現れた。その瞳は焦点が合っておらず、ぼんやりとしている。

「お姉ちゃん。この人…」

「ああ…行方不明だったチサだ。おい、大丈夫か！」

ラギシス邸にいたのは行方不明になっていた町長の娘、チサであった。程なくして意識を取り戻すが、行方不明の間のこととは全く覚えていないようだった。

「攫ったのは…ランか志津香だと思っていたが…違うのか…？」

ミリの呟きに答えられる者はこの場にはいなかった。そしてもう
ーっ…

「お客様、三名様ですね。：随分と高貴な出で立ちですね」

「当たり前じゃない！で、ダーリンはどこにいるの！」

「へ？ダ、ダーリン？」

「リア様、ここはお任せください。私たちはリーザスの者で、ランス様という冒険者を捜しているのですが……」

「（マリス様の話が終わったら、ルークさんのことも聞いてみようかなあ……）」

全ての準備を終え、リア一行がカスタムの町に到着していた。

「……かなみ、心配しなくても一緒に聞いておいてあげますからね」

「へ！？な、何のことですか！？」

第23話 幻術使いラン（後書き）

「人物」

エレノア・ラン

LV 16 / 30

技能 剣戦闘LV1 魔法LV1

カスタム四魔女の一人。珍しい幻惑魔法の使い手であると同時に、剣も使いこなす魔法剣士。本来は非常に優しく、真面目な性格である。考えすぎてしまう傾向があり、悩みすぎてその内自殺でもしてしまっじゃないかと一部で心配されていたりもする。雑魚じゃありません、器用貧乏なだけです、とは本人の談。また、エレノアが名前のはずだが、なぜかランと呼ばれることが多い

エルム・トライ

ランに捕らえられていた赤い髪の少女。拷問戦士から空気ポンプの拷問を受けていた。

ゼリファイ・ゴーラ

ランに捕らえられていた緑髪の少女。拷問戦士から逆さ吊りの拷問を受けていた。

レザリアン

ランに捕らえられていた緑髪の少女。拷問戦士から鞭打ちの拷問を受けていた。

「モンスター」

拷問戦士

女の子の拷問を生き甲斐とする残忍な戦士。剣の他に雷撃などの

魔法も使用してくる厄介な相手。

「技」

催眠

魔眼から放たれる光で敵を自分の意のままに操る初級魔法。初級とはいえ、幻惑魔法の使い手は少なく、非常に珍しい魔法である。

第24話 戦士三人

- 妖体迷宮 通路 -

「わたし…町の人たちにあんな酷いことを…ごめんなさい…ごめんなさい…」

「随分性格が変わったな。って、こらしシル、いつまで抱きついてるんだ。ウザイぞ」

「だって…ううっ…ランス様…」

「元は優しい性格だったってマリアがさっき言ってただろ。それとせっかくの再会なんだ。もう少しそのままにしてあげろよ」

「ラン、落ち込まないで。みんな指輪のせいなんだから」

あの後ランスがすっかりとランの処女を奪い指輪を外すことに成功した。するとランの性格が一変し、今までの自分の行いを悔やみボロボロと涙を零し始めたのだ。マリアがランをフォローし、ランスは抱きついて泣いているシルを引きはがそうとしている。ルークは倒れていた男戦士の止血をし、今日子の介抱をしていた。

「でも私…信じられないようなことを…今日子さんにだって…その冒険者さんの左腕だって…全部私が…もう町の人たちに会わせる顔がない…もう町には帰れない…」

言った瞬間ポカーンとランスのげんこつが飛ぶ。二度目のげんこつに再び頭を抱えるラン。

「ふん、終わったことをウジウジと。町の人たちに会えないなら新しい町にでも引越すんだな。その町の人たちはお前が何をしたのか知らんから簡単に顔を会わせられるぞ」

「もう、ランス！新しい町なんて引越しても何の解決にもならないでしょ！…あれ、新しい町…それって考えようによっては…」

「もう私に出来ることは…死んでお詫びすることしか…」

「！？ちよつとラン！！」

パン、つと乾いた音が辺りに響いた。もう一度げんこつを飛ばそうとしたランスよりも早く、ランの左頬をルークの平手が打っていたのだ。

「君は今最低な行為を口にした。それは、君をここまで助けに来たマリアに対する侮辱だ」

「……………」

「マリアだけじゃない。ミリもミルも君のことを心配している。町の人だつてそうだ。町長が既に誤解を解いて、町の人たちは君たちの帰りを待っている。その想いを自ら踏みにじるのか？」

「ルークさん……………」

「……………うっ……………」

「死ぬことは償いなどではない。自害という命の投げ捨てなど尚更だ。生きて町の復興に力を尽くせ」

「そうだそうだ！もし自殺なんかしてみる。お前の死体にいっぱい悪戯してやるからな！」

「うわ…台無し……………」

「うっ…うん、ありがとうルークさん、ランスさん……………」

涙を拭いながら返事をするラン。その表情は先ほどまでの沈んでいたものと違い、若干ではあるが笑顔が戻っていた。

「ん？もしかして今のってランスなりの励ましだったの？優しいところあるじゃない」

「ふん、俺様は可愛い女の子には優しいのだ。シル、いい加減離

れる！」

「きゃん！ランス様あ……」

「ルークさんもありがとう」

「別に礼を言われるようなことは……」

「流石年を重ねているだけのことはありますね！」

「ぐはっ！」

マリアの悪気のない発言に倒れ込むルーク。ミルのおじさん発言をまだ引きずっていたようだ。そのとき、一振りの剣がランスに迫った。

「うおおおおお！！！」

「きゃあああ、ランス様危ない！」

ガキイイーン、と音が響く。ランスは迫ってきていたバードの剣を冷静に防ぎ、腹部に矢のような蹴りを入れた。倒れていたルークもすぐさま起き上がり、剣を抜く。

「ぐはああっ！！！」

「なんだお前、新手か？」

「違いますランス様。この方はバードさんと言って、一緒に協力してここまで来た人です」

シイルの発言に今すぐにも斬り殺そうとしていたランスはその殺気を抑え、バードをジロジロと見回す。

「ふうん……つまり、雑魚以下か」

「なん……だと！僕の剣の腕まで侮辱する気か！！！」

「だっってお前雑魚のランに負けたんだろ？つまり雑魚以下だ」

「雑魚じゃありません！器用貧乏なだけです！！！」

「そうよ、ランス。ランはちょっと全部が中途半端なだけなんだから!」

「マリア…とどめ刺してるぞ…」

「え?あれ、ラン?どうしてそんなに落ち込んでるの?さっきまでの元気はどこにいったの?」

ランがまた自殺しそうな顔に戻ってしまった。もう一発、今度はマリアに必要なだろうか考えるルーク。

「ランス、貴様と男と男の話がある!シイルちゃんは僕が守る!」

「シイルちゃん…だと?ふん、面白い。聞かせてみる」

「あっ…ランス様…」

そう言っただと一緒には洞窟の奥深く潜って行ってしまおうラン。シイルが追いかけてよとするが、ルークが制止する。

「男の話だ。聞かない方が良く。シイルちゃんは今日さんの介抱を頼む」

- 妖体迷宮 通路奥 -

「ランスさん、貴方はいつもシイルちゃんに酷いことをしているそうですね?貴方みたいな人にシイルちゃんを任せておけない!」

先ほどから少し冷静さを取り戻し、呼び捨てにするのを止める。抑えている左腕は止血したとはいえ、かなりの激痛のはずだ。その苦痛に耐えてでも早急に片を付けなければならぬことがあったのだ。勘違いではある。先走りでもある。しかし、彼は全力で一人の

少女を救い出そうとしていたのだ。その行動は、間違いではない。

「なんだお前、シイルに惚れてるのか？」

「ああ、そつだ！彼女は僕が守る！！！」

「ふん、何を勘違いしてるんだお前。シイルは俺様にメロメロなんだよ」

「なんて自信過剰な人なんだ！彼女の幸せのために貴方が立ちはだかるなら…力づくでも…」

「思い上がるなよ雑魚！片腕一本で俺様に勝てる気か？シイルを守る守るつて、お前はシイルのピンチに何をしていた！」

「うっ…それは……」

「それに、助けられたときにシイルがお前ではなく俺様に抱きついてきたのを見ていなかったのか？」

「あっ……」

ランの催眠と左腕の激痛に意識がぼんやりとはしていたが、バードは確かに見ていた。ランスに嬉しそうに抱きつくシイルの顔を。自分には向けてくれなかったあの顔を忘れられるわけがなかった。

「全て…僕の勘違いだったと…言うのか…」

「ふん、やっと気がついたか。じゃあな、勘違い男」

そう言っつてシイルたちのいる場所に戻ろうとするランス。その背中に向かってバードが悔しそうに声をかける。

「僕はきつと…この腕を治してもう一度貴方の前に現れる！そのとき…もしシイルちゃんが不幸であったなら…僕が貴方を倒す！！」

その言葉に、ランスはふん、とだけ言い、返事をすることなく通路を戻っていく。すぐ側にあった曲がり道を曲がったところにル―

クが立っていた。

「……聞いてたのか？盗み聞きなど男らしくないぞ」

「一応、斬り合いにでもなったら止めようと思っていたんだが…割と寛大な処置だな」

「ふん、今の話、誰にもするんじゃないぞ。言ったら叩つ斬るからな。」

「誰にもする気はないさ。それより……」

ルークを通り過ぎ、シイルたちのところに戻ろうとしていたランスに問いかける。

「俺もシイルちゃん、って呼んでいるんだが…よかったのかな？」

「……………ふん！」

・ 妖体迷宮 通路 ・

「あ、ランス様お帰りなさい。なんの話を……」

「なんでもいいだろう。さあ、帰るぞ」

そう言って帰り木を使おうとするランス。

「えっ、ちょっと待って。ルークさんは？」

「先に帰ってるだよ。ふん、偉そうに俺様に命令しやがった。…シイル、帰ったらやるぞ！勝手に俺様から離れたお仕置きをしてやる！」

「はい、ランス様！」

「くそっ…くそっ…」

バードは泣いていた。先走ってしまったことに、女性一人守れないことに、左腕を無くしたことに、それらを招いた自分の不甲斐なさに。すると、ランスの去った方から声を掛けられる。

「あつちとは帰りづらいだろ。帰り木、持ってきてやったぞ」

「あなたは…ランスさんたちと一緒にいた…」

「ルークだ。お前と同じ冒険者さ」

現れたのはルーク。手には帰り木を持っており、バードと共に町に帰還するつもりらしい。バードの隣に腰を下ろし、口を開く。

「バードって言ったか。冒険者はまだ続けるつもりなのか？」

「はい」

「……その左腕でか？」

「義手でもなんでも手段はあります。必ず…強くなって見せます」

「そうか…なら、強くなるまでは女を連れるのは止めておけ」

「…？それはどういった意味ですか？」

思いも掛けないルークの言葉にその真意が判らず聞き返すバード。

「ランスが言っていただろ。守る、守るってお前は何していたってあれ、間違いじゃない。守る力もないのに弱い者を巻き込むのは…罪だ」

「……………」

「それが元々戦いの中で死ぬ覚悟のある奴ならいいさ。ネイのような生粋の冒険者だったりな。でも……今日子さんやシルちゃんは違う。これから先、そういつた覚悟のない女性と共に冒険をするつもりなら…命がけで守れ。それが出来ないなら安請け合いするな」
「……はい」

「それと……シルちゃんをここまで守ってくれて…ありがとうございます。ランスに変わって礼を言わせて貰う。ああ見えてランスも感謝してるんだぞ。そうじゃなきゃ喧嘩売った時点で殺されてる」

「……ありがとうございます。必ず…必ず強くなっ…て見せます！」

先ほどまでよりも更に大粒の涙を流すバード。しかし、その瞳は先ほど以上に決意に満ちあふれていた。こいつはきつと強くなる、ルークはそう確信しながら帰り木で共に町へと帰還した。

- 溶岩迷宮 とある部屋 -

「ランもやられたみたいね…」

迷宮第五層、溶岩迷宮のとある部屋で緑色の髪の女性が独りごちる。彼女こそが、カスタム四魔女最後の一人にして、最強を誇る人物。魔想志津香。

「もう準備は整ったことだし…私一人でもどうとでもなるわ」

そう言っ…て結界維持に回していた魔力を切る。彼女の計画に必要な全ての準備が整い、それを維持する必要がなくなったからだ。この瞬間、カスタムの町を覆っていた結界は解除された。

「ふう…これで大丈夫そうね。あと少し頑張れば…」

そう言っただけで疲れた様子で椅子に腰掛ける志津香。録に寝ていないのか、目には若干くまのようなものが出来ている。机の上に置いてあった竜角惨を飲み、気合いを入れ直す。

「もうすぐ…もうすぐだからね…待っていて、お父様…」

最後の魔女との決戦は近い。

第24話 戦士三人（後書き）

「アイテム」

竜角惨

気力を回復させる黄色い錠剤。冒険者だけでなく、労働者にも愛用されている。

第25話 王女襲来

- カスタムの町 町長の家 -

町に帰還後、バードと別れたルークは町長の家まで来ていた。既にランスとシルが先に到着しているが、マリアとランの姿はない。そして驚いたことに、町長の隣に行方不明だったはずの娘のチサが立っていた。

「チサちゃん…無事だったのか？」

「はい、おかげさまで。ラギシス邸でミリさんに見つけて貰いました。いなくなっていた間のことは覚えていないのですが…」

「ラギシス邸で…？」

「うむ、無事に戻ってきてくれて何よりだ。それと、ラギシス邸はもう無い。事の真相を知った町の若者たちが取り壊してしまったよ。チサがラギシス邸で発見されたことも怒りに拍車をかけたようだ」

もう一度あの館を調べようと考えていたルークにとって、この知らせはあまり嬉しいものではなかった。が、住人の心境も考え、黙っておくことにする。

「それともう一つ大きな動きがあつてな。町の結界が遂に解けたのだよ。おそらく四人中三人が解放されたことで、維持できなくなったでしょう。これもランスさんとルークさんのお陰です」

「うむうむ、俺様を崇め奉るがいい」

「町の復興にはどれほどかかりそうなんです？」

「うむ…軽く一年以上はかかるかと…ですが町の者みんなで協力して再建していきます。三人の娘たちも積極的に復興に協力してくれているんですよ」

「そうなんです。既にマリアさんは町の外で新しい町の開発の陣頭指揮に、ミルちゃんはお姉さんと一緒に薬屋を営み、ランさんは役所で外交を行っています。みんな町のために精一杯です！」

チサの説明にホツと胸をなで下ろすルーク。彼女たちは悪くないという説明を受けて納得していた町人も、いざ彼女たちが帰ってきたときどのような反応を示すか心配していたのだ。が、その心配は杞憂に終わっただけ。町長の家を出た後、それぞれの仕事場を見て回ることにした。ランスとシルは外の工事現場と薬屋を、ルークは役所と今日が無事帰っているか確かめるため情報屋を回ることにし、終わったら酒場で集合することになった。

・カスタムの町 情報屋

「あら、ルークさんいらっしやい。今日子を見つけてくれたようでありがとうございます」

「ん？今日子さんの姿が見えないようだが…」

情報屋にやってきたルークは今日子の姿が見えないことに疑問を抱く。ふう、と真知子がため息をつく。

「帰ってきてすぐに旅に出てしまいました。この町にはいられないんだとか」

「何かあったのか？」

「多分：バード君に失恋したんでしょうね。あの子：バード君のことが好きだったから。バード君もルークさんの少し前にウチに寄ったのよ。で、今日子がいなくなったって教えたら僕の責任だって追いかけて行ってしまったわ」

「やれやれ…あの左腕で無茶をする。俺の言ったことはちゃんと守るんだろっな…?」

「悪い子ではないんだけどね…ちょっと自分に酔っているところがあるから…」

はあ、と今度は二人でため息をつく。なんだか次に会うときにはもう女の子を隣に侍らしている気がする。もしそうだったら脳天チヨップ確定だな、と心に誓うルークだった。

「バカよね…この世に男性も女性も、一人ではないというのに。もっと魅力的な男性が、たくさんいるかもしれないのにね」

「まあ…な。だが、それだけ一人を好きになるっていうのも、いいものかもしれないがな」

「あら?ルークさんにもそういう相手がいたのかしら?」

「まさか。寂しい独り身さ」

「ふふふ、ルークさんの魅力に気がつかないなんて、周りの女性はよっぽど見る目がないのね」

「リップサービスでも嬉しいよ。じゃ、俺はそろそろ行くよ。真知子さん、お元気で」

「ルークさんもお元気で。志津香さんの件もあるからまだ町にはいるのでしょうか?町を出て行く前に、顔くらい見せてくださいね」

「ああ、必ず寄らせて貰うよ」

そう言って店を出て行くルークの背中を見つめながら、真知子は小さく呟いた。

「リップサービスではないのですけどね。ふふふ、私も今日子の事は言えないわね…一人の男性に…執着しそうになってしまっているんですもの…」

- カスタムの町 役所 -

地下都市の一角を利用した臨時の役所。復興のためにはどうしても必要らしく、早急にでつちあげた場所らしい。他の場所と比べてもかなり忙しいようで、人々がせわしなく動いている。その奥の方の席にランがいた。

「しっかりと復興のために働いてるみたいだな、ラン」

「あ、ルークさん。はい、これが私の償いですから。志津香のこと…よろしく願いますね。もう…あまり時間はないと思いますから」

「…どういうことだ？」

「結界が解けたのが理由です。あれは三人が解放されたから解けたんじゃないですね。元々結界は志津香一人で張っていたんです」

「なるほど…解けたんじゃない、解いたということか。となると…何かしらの計画の準備が終わった、ということか」

「誘拐された少女たちの安否も心配です。一体彼女たちを使って何を…」

「ま、俺とランスに任せておけ。必ずみんな助け出してみせるよ。志津香もな」

そう言ってポン、とランの頭の上に手を置く。四魔女の中でも最年長であり、他の娘のお姉さん役であることも多かったためか、あまり年上の男にこういったことをされるのには慣れていないらしく、顔が赤く染まっていく。

「…あう」

「あら？ランさん、ひょっとして彼氏さんですか？」

その様子をみた役所の職員がランをからかいにくる。真面目なランの珍しい姿に興味を引かれたのだろう。

「ひゃい!? そ、そんなことないですよ!」

「お、振られちゃったな」

「残念でしたね、私なんてどうです?」

「はは、名前も知らない女性といきなりはつきあえないさ」

「きゃ、私も振られちゃいましたね」

笑い会う二人をよそに、まだ顔の赤いランは二人の会話が耳に入ってきていないようだった。

「で、ランは今どういった仕事を任されてるんだ?」

「えっ!?! い、今は町の再建費用を隣の王国から借り入れする交渉をしています。あちらの王女様が中々曲者で…こちらが必要な額を完全に把握していてカスタムが支配都市になるよう色々条件を突きつけてきて…」

「隣の王国…というとゼスではなくリーザスかな。確かにあの王女と侍女は曲者だな」

ルークの頭に誘拐王女と甘やかし侍女の顔が浮かぶ。ううむ、懐かしい。会いたいような、会いたくないような。

「ご存じなんですか?」

「以前、仕事で顔を会わせたことがある程度さ。そうか…リーザスからの資金か…」

「それでも凄いですよ。なんにしても私、町のために頑張ります」

「ああ、いい町にしてくれ。それじゃ、あまり邪魔しても悪いからそろそろ行くよ」

「はい、本当にありがとうございました。それと…お気を付けて」

・カスタムの町 酒場前・

「お、タイミングぴったしだったな」

「ルークさんもお疲れ様です」

酒場の前まで来たルークは、丁度反対側から歩いてきたランスたちと店の前で合流する。聞けば、ミリとミルは姉妹仲良く薬屋を営み、町の人からも頼られており、マリアは設計の才能があったらしく、新しい町作りのため工事現場を張り切って仕切っているという。そして、どちらからも志津香を頼むと言われたらしい。

「ま、こっだけ女の子に頼られたら…助けない訳にはいかんわな」

「がはは、当たり前だ。志津香の処女も頂いて四魔女コンプリートだ！」

「そこかよ…」

そう言いながら酒場に入っていく一行。入るやいなや、エレナが声を掛けてくる。

「いらつしゃい、ランスさん。二階のお部屋にお客様が尋ねてきていますよ」

「なに？もちろん美人なんだろうな？」

「そりゃもう、とびつきりの美人さんが三人ですよ。ランスさん本当にもてるんですね」

「三人も？特徴とか何かあるかな？」

「なんだか高貴なかたでしたよ」

その言葉に先ほど話題に上がったある人物が頭に浮かぶ。が、まさかなとその考えを吹き飛ばす。

「おお、それではすぐに二階に上がるぞ！」

「あつ、待つてください、ランス様！」

「それと…三人の内の一人はどちらかというところとルークさんに会いに来たみたいですよ。ルークさんも来てますねー」

「俺に…はて？」

そう言われながらランスの後についてルークも二階に上がる。臨時の宿泊施設として使っている最奥の部屋、客人が来ているという部屋の前まで来て、ランスが豪快に部屋を開ける。

「さあ、俺様への客というのは誰かな？」

「きゃあ、ダーリン！！リアです！！！」

パタン、と扉を閉めるランス。女好きのランスにしては非常に珍しい反応である。しかし、すぐに内側から扉が開けられる。

「ってダーリンったら酷い。いきなり閉めるなんて！」

「うおっ、やっぱりリアか！結婚はしないと云っただろっが！ダーリンって呼ぶな！」

「そんな…私のことが嫌いなんですか…？」

「うっ…」

「ごめんなさい、ダーリン…でも困らせる気はないの…妻と認めて貰える日までずっと待ち続ける覚悟があります！」

「ええい、そんな日は来んわ」

客人というのはルークの予想通り、やはりリア王女一行であった。

結婚する気はないとはいえ、美人の涙には弱いランス。リアの積極的なアプローチにたじたじとなっている。シルモリアの勢いに呆然となっている。その横でルークはマリスと挨拶を交わしていた。

「久しぶりだな、マリス。息災で何より」

「お久しぶりです、ルーク様。そちら様もお変わりないようで」

「で、リア王女の悪癖は収まったのか？」

「お陰様で。ランス様からもきつく言われたようで、今ではそのようなことは一切しておりません」

「それは何より」

軽く挨拶を交わしているルークとマリス。その間に、ぬっとリアが割り込んでくる。

「ね、マリス。ダーリンを困らせないように妻と認めて貰える日まで待ち続けようとする私ってけなげよね？」

「はい、その控えめな態度がきつといつかランス様に通じることでしょう」

「えへへ、待ってるからね、ダーリン！」

「待たんでいい！」

「…相変わらず甘やかしてはいるみたいだな」

「あら、この程度甘やかしている内には入りませんよ」

まあ悪事をしていないのならいいか、と深く追求することは止めるルーク。騒ぎ続けるランスとリアを尻目に、部屋の隅に控えていたもう一人の女性に声を掛ける。

「…久しぶりだな。息災で何よりだ、かなみ」

「お久しぶりです、ルークさん」

そう言って軽く礼をするかなみ。若干だが流れてくる雰囲気が以前とは違う。

「なるほど、前より鍛えられている。忠臣になるべく励んでいるよ
うだな」

「わかりますか!？」

「わかるさ。以前とは纏っている空気が違う。よく頑張っているな」

「…ありがとうございます」

「そうそう、かなみったら最近以前にも増して張り切っちゃってる
んだから」

「わずか二、三ヶ月の間にレベルを四つも上げてくれました。隠密
の仕事をこなしながらということを考えれば、十分すぎる成果です。
こちらとしても喜ばしい限りです」

リアとマリスにも褒められ、恥ずかしそうにしながらも若干誇ら
しげなかなみ。それに対してランスが茶々を入れる。

「がはは、へっぽこ忍者も少しは使えるようになったのか？」

「……ふん、今ではランスさんより強いかもしれませんよ」

「がはは、言ったな!今何レベルだ？」

「18レベルです!ランスさんは？」

「今から計ってやろう。レベル神ウィリス、俺様の呼び出しに応じ
て直ちにこの場に姿を現せ!」

主の前だというのに挑発に乗ってしまうかなみ。精神の修行はま
だまだだな、と失笑するルーク。リアも愛しのランスのレベルには
興味があるらしく、特に争いを止めるでもなく状況を見守っている。
ランスの呼びかけに応じてレベル神が姿を現す。誘拐事件の時はレ
ベル神が付いていなかったはずなのだが、いつのまに契約を結んだ
のだろうか。

「私は偉大なるレベル神ウイリス、呼び出したのは貴方ですね。レベルアップをお望みか？」

「そうだ。この身の程知らずに力の差を思い知らせてやらんとな」

「…ん？君はリーザスの城下町でレベル屋をしていた子か？レベル神になっているということは昇進試験には受かったのか」

「あ、ルークさんじゃないですか。お久しぶりです。先日無事に合格しました」

「がはは、俺様が手伝ってやったのだ！」

「なるほど、それで専属契約を結んでいる訳か」

誘拐事件から今までの間ずっとサボっていたのかと思っていたが、すっかりと仕事もこなしていたランス。この短期間の間に彼女の昇進試験を手伝い、専属契約を結んでいたのだ。

「というか、ルークさんはレベル神と契約を結んでいないんですか？貴方ほどの人なら結んでいない方が逆に珍しいんですけど？」

ルークのレベルを知るウイリスが問いかけてくる。

「以前カグヤさんというレベル神と契約していたんだが…寿引退してしまっただね。その際の引き継ぎがどうやらトラブっているらしく、今はいないんだ」

「あ、それなら私と契約しませんか？今丁度手が空いていますし」

「お、それは助かるな。ぜひお願いするよ」

「ええい、世間話しとらんでさっさとレベルアップの儀式をしろ！」

「あ、すみません。ルークさんも一緒にしておきますね」

「ああ、頼む」

「うーら めーた ぱーら ほら ほら。らん らん ほろ ほろ
ぴーはらら」

力の抜けるレベルアップの儀式である。以前契約を結んでいたレベル神とは呪文が違うんだなあ、とどうでもいいことを考えるルーク。そんなことを考えている内に儀式が終わったようだ。

「ランス様は経験豊富とみなされて20レベルになりました」

「がはは、どうだ聞いたか、へっぽこ忍者！」

「くっ……」

「きゃー、さすがダーリン、かつこいいー!!」

「流石はランス様。優秀な冒険者ですね」

悔しそうに歯がみするかなみ。しかし、この後のウィリスの言葉に更に追い打ちを掛けられる。

「シイル殿は経験豊富とみなされて19レベルになりました」

「わーい、やったー」

「がーん!!」

「がはははは、俺様の奴隷にも負けるとは情けない。真の忠臣にはほど遠いな」

「ランス、あんまり追い打ち掛けるな。かなみ、隠密の仕事が主である君と違って、こっちは冒険者でレベルが上がりやすいんだ。あまり気にしないでいいんだぞ」

「…はい。すいません気を使わせてしまって」

涙目のかなみにフォローを入れるルーク。ランスが勝った勝ったと騒ぎ立て、リアも一緒に一緒になってはしゃいでいる。が、この空気がウィリスの発言で凍り付くこととなる。

「ルーク様は経験豊富とみなされて46レベルになりました」

「……えっ!?!」「」「」

「なんだとっ！！」

一気に全員がルークに視線を向ける。その視線にルークとウィリスは一瞬びくつとなる。

「貴様、なんだそのレベルは！！」

「お強いとは思っていましたが、そんなにレベルが高かったんですか！？」

「あれ、ルークさん？みなさんに言ってなかったんですか？」

「あー、話したことはなかったな。まあ冒険者としては少し高い程度さ」

「た、た、高いってもんじゃないですよ、ルークさん！一国の将軍クラス、いや、それ以上ですよ！」

「……マリス！」

「はい、リア様。……ルーク様、こちらにサインをお願いしますか？」

一枚の紙を取り出し、ルークに署名を求めるマリス。勢いでサインしそうになるルークだが、よくよく見るとリーザス国への兵士入隊の書類であった。

「って、おい！何勝手に入隊させようとしてるんだ！」

「……ちっ」

「……ルーク様。リーザス国は他にはないほどの好待遇で迎え入れる準備がありますか？」

「ん。すまないが、まだどこかに収まる気はないんだ」

「指揮官適正の結果次第ですが、今なら特別に副将の地位もお約束するのですが……」

「わ、私もルークさんにリーザスに来ていただきたいのですが……」

「スマン、かなみ。かなりの好条件だがお断りさせていただく」

「…残念です」

「おい、ルークばかり目立ちやがって。俺様に誘いが無いとはどういうことだ！」

「あら、ダーリンは私の夫としてリーザスの王になって貰うんですもの」

「…しまった」

「ランス様、やぶへびです…」

こうして、リアたちがカスタムの町を訪れた理由もまだ聞いていないというのに、長い時間大騒ぎをするルークたちであった。

「…二階、騒がしすぎて営業妨害だよ…くすん」

下の階では、高貴な相手や相手に注意に行くことも出来ず、エレナが一人泣いていた。

第25話 王女襲来（後書き）

「人物」

ウイリス（2）

ルーク、ランスと契約を結んでいるレベル神。先日まではレベル屋で働く普通の人間であったが、ランスの助力もありレベル神へと見事昇進を果たす。彼氏には人間を辞めたことはまだ内緒にしている。儀式呪文は「うーら めーた ぱーら ほら ほら。らんらん ほろ ほろ ぴーはらら」。

アガサ・カグヤ（オリモブ）

かつてルークと契約を結んでいたレベル神。黒髪が美しく、ファンも多かったが、一年前レベル神を寿引退。儀式呪文は「さーくーら さーくーら こよいも よるも わが よいの かえる ぴよこ ぴよこ」。名前はアリスソフト作品の「闘神都市2」より。

長柄亮子

カスタムの役所で働く女の子。役所の女の子の中では最もランと仲が良い。

第26話 面影

・カスタムの町 酒場二階・

「で、わざわざランスの顔を見にカスタムまでやってきたのか？…
マリス、いい加減書類を仕舞ってくれ」

そう言われ、渋々と書類を引っ込めるマリス。どうやらまだ諦めきれないらしく、ジッとこちらを見ている。まあ三大国の中ではリーザスが一番肌に合っているかなとは思うルークであったが、今はまだその時ではない。

「もつちろん！ダーリンに会いにここまで来たの！」

「…職務はいいのか？」

「万事抜かりありません。三日先の分まで終わらせてありますし、有事の際は優秀な者に後を任せてあります」

「わざわざ会いに来るのにそこまでいい。まったく…」

「あん、ダーリン。リアね、お土産も持ってきたの」

「お土産？なんだ、金目のものか？」

「かなみ、持ってきて」

リアがそう言うと、かなみがカーテンの後ろにわざわざ隠してあった剣と鎧を持ってくる。どちらも美しい光沢を放っているが、観賞用というわけではなく装備品として一級品であることが見て取れる。

「これは我がリーザス王国に古くから伝わる秘伝の聖剣と聖鎧です。どうぞお納めください」

「それをリアだと思って大事に使ってね、ダーリン！」

「武器をそう思うのは無茶があるな……」

「うむ、貰えるものは全てありがたく頂いておくぞ。がはは」

そう言つて聖剣と聖鎧を装備するランス。今まで装備していたイナズマの剣と界陣の鎧をシルに手渡し、なにやら耳打ちしている。あいつ、絶対売りさばくつもりだ。俺の金で買ったもんだし、回収してやるうか、とルークは考える。

「というかそんな大事なもんはいよいよ渡しちまって良かったのか？」

「もちろん！将来の旦那様ですもの！」

「ええい、やかましい。まだ依頼が済んでいないから俺様たちももう行くぞ！」

「ダーリン、リアはあなたが振り向いてくれるまでいつまでも待っています」

そう言つて貰うものだけ貰い部屋から出て行くランス。その後をシルが追いかける。随分と静かにしていたが、王女相手に物怖じしていたのだろうか。ルークもそれに続こうとするが、ふとあることを思い立ってリアとマリスに話しかける。

「少し頼みがある。ムシのいい話ではあるんだが……」

「……あら？確かにムシのいい話ね。そんな要求じゃあ……」

交渉に入った瞬間、王女と侍女の目つきが変わった。ランスの前ではあんな状態だが、やはり政治家としての手腕は高い二人である。数分の後、ある程度の落しどころで交渉がまとまる。

「すまないな、無理を言つて」

「まあ、以前の借りもあるしね。こちらの条件も呑んで貰ったことだし」

「ルーク様、リーザはいつでも副将のポストを準備してお待ちしておりますので」

「ま、当分ないと思ってくれ。それじゃあ俺もそろそろ行くとするか」

「お気を付けて。ルーク様には何もお持ちできず申し訳ありません」

マリスが深々と頭を下げる。リアは気にしていない様子だが、かなみも申し訳なさそうにしている。

「んー、そうだな。かなみ。手裏剣とかくはないとかの予備があつたら一つ貰えるか？」

「え？あ、くないならここに予備が。手裏剣はしびれ薬を塗ってあるのしかなく、取り扱いが…」

「ごそごそと懐からくれないを取り出すかなみ。それをパツと受け取るルーク。」

「リーザスからの支援、確かに受け取った。忠臣を目指す者が使う武器、そんじょそこの支援よりも遙かに心強い。大事に使わせていただく」

そう言っつて部屋から出て行くルークを見送る三人。リアがまた政治家の顔つきになり、ぼつりと漏らす。

「やっぱり、一冒険者にしておくには惜しい人材ね。戦闘力、交渉力、視野の広さ、多分指揮官としても優秀でしょうね。意志が硬そうだから難しいかもしれないけど、定期的にアプローチは続けておいて」

「かしこまりました。かなみ、受け取って貰えて良かったですね」
「はい。…って、別にそんなことは…」
「そうだ、かなみ。ルークにリーザスに来るよう色仕掛けで迫ってみてくれないかしら？」
「そ、そ、それは私には荷が重すぎます、リア様！」
「ふふ、冗談よ」

・溶岩迷宮 入口・

「なんだこれは、灼熱地獄じゃないか！あ、こらシル、すり寄って来るな！余計暑くなるだろうが！」
「きやつ、ランス様押さないでください…」
「下は溶岩で落ちたら一溜まりもないな…道も細いし気をつけながら先に進む必要があるな」

リアたちと別れた後、ルークたちは最後の魔女、志津香の拠点である迷宮第五層、溶岩迷宮までやってきていた。岩で出来た道は非常に狭く、下は溶岩が広がっているため落ちたら間違はなく即死。外気温も40度ほどあり、吹き出る汗を拭いながら、慎重に先に進む。金とりや人食いTOWNSといった普段であれば相手にならないようなモンスターも、この足場では倒すのに時間が掛かってしまう。ランスの言っていたように全ての準備が整っているのであれば、急ぐ必要がある。程なくして目の前に屋敷が現れる。その館を見た瞬間、ルークの目が見開かれる。

「おお、ここが志津香の屋敷か！ぐふふ、待っているよ！」

そう言って涎を垂らすランス。シルが屋敷の扉を開けようとす

るが、鍵が掛かっていて開かない。

「ランス様、駄目です。鍵が掛かっていて開きません」

「なんだと、そんな鍵破壊してやる。ふん！」

ガキン、と金属がぶつかり合う音が響く。が、鍵は傷一つ付いていない。今度は扉を破壊しようとするランスだが、それも弾かれる。

「うがー、なんだこれは！シイル、その辺の窓から入れないか調べてみる」

「ああ…そんなことをしても無駄だよ」

と、後ろから声を掛けられる。振り返ってみれば、枯れ木のようによせ細った男戦士がこちらに話しかけてきていた。

「む、なんだ貴様は」

「これは失礼。私は風の戦士シイルフィード、志津香様の部下だ。

その屋敷は扉にも窓にも結界が張ってあって鍵がないと中には入れないよ」

「部下ということは貴様鍵を持っているな！さあ、すぐに寄越せ」

「それが…ラルガというサッキュバスに奪われてしまったんだ。私も取り返そうとしたんだが…精気を吸われてしまいこのざまさ」

「ふむ、ならばそのラルガから鍵を手に入れる必要があるな。そいつはどこにいる？」

「この先にラルガの屋敷がある。ラルガの元へ行くならあんたも気をつけた方がいい」

「がはは、無敵の俺様にそんな心配は無用だ。行くぞ、シイル、ルーク。…なんだルーク、ポーツと突っ立って？」

ひとまずラルガの屋敷に向かおうとしたランスだが、ルークがつ

いてこない。見ればブーツと志津香の屋敷を見ている。

「知っている…俺は…この屋敷を知っているぞ…」

「あ、おい!？」

ルークは屋敷に近づいていき、まず扉を調べる。結界を無効化して鍵を破壊することは出来そうだが、鍵になにやら結界とは別の文様が描かれている。無理に破壊すれば何かしらの罠が発動する可能性がある。次に窓を調べる。少し押すと結界が発動するが、それを無効化し窓を開く。扉とは違い、こちらには鍵を掛けていないようだ。

「あ、なんだ開くではないか。では俺様も…って、あちちちっ!」

「きゃっ、ランス様大丈夫ですか? いたいなの、とんでけーっ!」

「窓が開いた…志津香様の結界だぞ…あんた一体…?」

窓に触れた瞬間、ランスの手に電流が走り少し火傷をする。シルがそれを治療し、シルフィードは信じられないものを見たといったように驚いている。

「……ランス、ランの言うとおりなら事態は一刻を争う。俺は先に屋敷に潜入する!」

「あ、おい待て! コンプリートが掛かっているんだ! 勝手に志津香の処女を奪ったら承知せんぞ!」

ランスの抗議をよそに、ルークは屋敷へと一人潜入していく。ランスに言った理由ももちろんあるが、それ以上にルークを突き動かしたのはこの屋敷の形だった。遠い記憶であり、絶対とは言い切れない。が、確かにそれはルークの記憶に残っていた屋敷とよく似て

いた。

- 志津香の屋敷 一階 -

屋敷に入ったルークが感じたのは外で感じたのと同様の既視感。ここまで広くはなかった。が、内装が非常に似通っている。間違いない、あの人の屋敷だ。それは、今回カスタムの町を目指しているときにも思い出していた記憶、18年前、幼いルークたちがほんの数日だがお世話になった夫妻。その屋敷がなぜここに？志津香が迷宮に屋敷を作る際に参考にでもしたのだろうか？考えながら屋敷を探索していると小部屋を発見する。その扉の前に風の戦士が一人。

「むっ、貴様！何者……っ……」

「……邪魔だ」

こちらに気がつき、声を掛けたときには既に風の戦士はルークに斬られていた。倒れこむ風の戦士の横を通り、部屋に入るルーク。そこで一冊の本を発見する。パラパラと中身を読むルーク。その中で他のページよりも明らかに読み込まれたページを発見する。そこには気になる項目が書いてあった。

「時空転移魔法…過去に飛び歴史を改変するだ…？聖女モンスターにそういった力を持つ存在がいるという話をかつて聞いたことがあるが…そんなことが人間に可能なのか？…なるほど、普通では不可能だが術者の莫大な魔力に加え、女性の生気を使うことで擬似的に可能とする。女性を攫っていた理由はコレか！」

ボタン、と本を閉じるルーク。ようやく目的が見えていなかった

志津香の計画の内容に行き着いた。彼女がそこまでして変えたい過去は判らないが、それを止めるためにルークは走り出した。

「過去など変えても、それが救済になどなりはしない。それ以上に過去を変えたことによって、現世にどんな影響が起こるかも判らないんだぞ……」

階段を駆け上がった先に水の結界があった。本来であればこれも解除する必要があるのだろうが、ルークは結界を無効化し、その先にあつた鉄の扉を開ける。そこには機械が置いてあつた。シイルが攫われた際に使われたテレポートウェイブを使った転移装置だ。罠かもしれないと一瞬躊躇するが、その機械を作動させる。すると、周りの風景が夜空のような空間に転移される。辺りの様子を窺っていると、突如目の前の地面が盛り上がり、床をぶち破つてストーン・ガーディアンが現れる。

「ここは志津香様の星域、何人たりとも通すわけには行かぬ」

「……手強い相手だが、今は貴様と遊んでいる暇はない。どけ!!」

そう言うと、ルークは妃円の剣を抜き、一直線にストーン・ガーディアンに突っ込んでいった。

- 溶岩迷宮 ラルガの屋敷 -

「赤い媚薬を使うなんてずるい……ううん、もうダメ……」

「がはは、サッキュバスなぞ俺様の超絶テクの敵ではなかったな!

さあ、鍵は手に入れた。行くぞ、シイル!」

「はい、ランス様!」

「あれだけ卑怯な手で勝っておいてあんなに勝ち誇るなんて…人間
って恐ろしいにや…」

正攻法のH勝負で一度負けたランスは、卑怯にも媚薬を使ってラ
ルガに勝利し、鍵を手に入れていた。その様子に主人の心配をしな
がらも呆れるラルガのねこ。

「抜け駆けは許さん！俺様が行くまで処女のまま待っているよ、志
津香！」

- 荒野 -

どことも知れぬ荒野の真ん中に、その女は立っていた。最後の四
魔女、魔想志津香。時空転移魔法を使って過去に渡ることに成功し
た彼女は、もうすぐこの場所で起こる出来事に備え、精神を落ち着
けていた。

「大丈夫…やれる…私がお父様を…必ず救い出す…」

そのとき、後ろから気配がする。おかしい、まだ目的の間には
早い。振り返った志津香が見たのは、黒髪の剣士。自分よりも随分
と年上の顔の整った青年剣士がそこに立っていた。

「…誰？ここにいと危ないわよ。悪いことは言わないからどこか
遠くに行きなさい」

一応忠告をする志津香。その戦士を心配したというより、下手に
邪魔されては困るという想いからの忠告であったが、直後に戦士か

ら発せられた言葉に目を見開く。

「……アスマーゼ……さん？」

「!?!? 母を知っているの!?!?」

目の前に立っていた戦士はルーク。志津香の後を追って環状列石の装置を作動し、過去へとやってきたルークが目にしたのは、かつてお世話になった魔法使いの奥方に瓜二つの少女の姿だった。

第26話 面影（後書き）

「人物」

リア・パラパラ・リーザス （2）

LV 3 / 20

技能 なし

リーザス国王女。今では改心し、誘拐騒動はもう起こしていない。ランスに会うためだけに無理矢理時間を作った。健気と言えば健気。

マリス・アマリス （2）

LV 26 / 67

技能 神魔法LV2 剣戦闘LV1

リーザス国筆頭侍女。リアのわがままを聞いて秘伝の聖剣と聖鎧を一冒険者にプレゼントしてしまう。相変わらずの甘やかしである。

見当かなみ （2）

LV 18 / 40

技能 忍者LV1

リーザス王女リア直属の忍者。ルークの忠告を受け、忠臣目指し目下修行中。その頑張りは城の兵士たちも目の当たりにしており、將軍たちの間でも評価が上方修正されている。上達していることをルークに一目で分かって貰えたことを内心喜んでいるが、ばれないように冷静に勤める。しかし、主と侍女には見抜かれている。

シルフィード

志津香に仕える風の戦士の一人。ラルガに精気を吸われ、干涸らびている。

「モンスター」

ラルガ

四つ星レア女の子モンスター。サツキュバスであり、男の精気を吸い取って生きている。媚薬を使われてランスにH勝負で敗れる。

ラルガのねこ

全滅危惧種女の子モンスター。ラルガの忠実な部下。

金とり

金色に輝く鳥モンスター。こかとりすと違い、あまり美味しくない。

人食いTOWNS

頭がコンピュータのモンスター。雷撃で一撃死するため、初級魔法使いの経験値稼ぎとしてよく狩られる。

風の戦士

志津香の部下。モンスターに属しているが、実は普通の人間の戦士である。

ストーン・ガーディアン

魔法使いによって作られる岩石巨人のガーディアン。地面を岩で囲ってしまい、一度出会ってしまったら逃走することは出来ない。知らなかったのが、ストーン・ガーディアンからは逃げられない。

「装備品」

リーザス聖剣

リーザスの紋章が刻まれた王家に代々伝わる剣。その斬れ味もさることながら、実はリーザス国にある封印の鍵としての役割も

担っている。

リーザス聖鎧

リーザスの紋章が刻まれた王家に代々伝わる鎧。防御力も非常に高いが、実はリーザス国にある封印の鍵としての役割も担っている。

くない

かなみが常に懐に忍ばせている忍具。ルークが一本譲り受ける。大陸では武器屋には中々売っていないため、通販で購入している。10本500GOLDのところ、今なら手裏剣5枚もついでお値段据え置きのお買い得価格。

「アイテム」

赤い媚薬

ラルガのねこがこっそり隠し持っている媚薬。どんな相手でも敏感になる代物。本編ランス02ではなぜか赤い香水に変更されていた。ランスクエストでは媚薬で勝ったと明言されていたので、本作では旧2仕様の媚薬に。

「その他」

環状列石装置

ストーンサークル。魔方陣よりも効果が高く、これを用いて志津香は時空転移を行った。

聖女モンスター

神に作られた生命の母であり、全ての男の子、女の子モンスターのプロトタイプを生みだした四体の特殊な存在。四体はそれぞれ命、

力、時、地に分類される。神に位置する存在であり、あまり広くは知られていない。ルークはある女性から彼女たちの存在を聞いていた。

レア女の子モンスター

一体しか存在しない特殊な女の子モンスター。死んでしまった場合は、別の場所に転生される。

第27話 恩人の娘 志津香

GI0998 冬

- カスタムの町 -

「飲むといい、暖まるよ」

「おかわりもあるから欲しかったら言っただけ」

町の前で拾った傷だらけの少年を自分たちの住む屋敷に連れてきた夫妻は、彼の前にホットうし乳を入れたコップを差し出す。彼が連れていた同じ年くらいの少女は、既に寝室で寝ている。聞けば彼の双子の妹らしい。今この場には夫妻と少年の三人、机を挟む形で向かい合っている。

「私は魔想篤胤。この町に最近移り住んできた者だ。こっちは家内のアスマーゼ。君の名前、聞かせて貰っても良いかな？」

「…………… ルーク・グラント」

「差し支えなければ…何があったのか聞かせて貰っても良いかな？その傷の量は尋常ではない」

その後、ルークはここに至るまでの出来事を語り始める。平穏な暮らし、それが一変したこと、その原因を担ったのが自分であること、住んでいた町を追われたこと。ルークの過去に関しては、後にまた語ることになるので今回は置いておく。目の前の少年が体験するには、あまりにも荷が重すぎる過去に、アスマーゼの顔が曇る。篤胤も黙ってそれを聞き終えた後、静かに口を開く。

「…もし君さえよければ、しばらく一緒に暮らしてもいいんだが」

「夫婦二人で暮らすには少し大きい屋敷なの。遠慮しなくていいのよ」

「いえ…ありがたい話ですが、明日にも出て行くこうと思っっています」「何か協力できることはないかな？」

「…じゃあ、もし知っていたら評判の良いギルドを教えてください」「その年で冒険者を目指す気か？」

「はい、自分たちの手だけで生きていかなければならないので」

危険性を説いて止めるよう勧める篤胤だが、ルークという少年の決意は固く、最終的には篤胤の方が折れる形になり、アイスの町のキースギルドへの紹介状を書くことになる。

「紹介状を書く代わりとってはなんだが…明日に出て行くのは止めて何日か滞在していきなさい。その傷を治していかないとな。それに、妹さんも少し休ませてあげないとな」

「……本当に色々、ありがとうございます」

こうしてルーク兄妹は数日の間、魔想の家に厄介になることになる。篤胤もアスマーゼも、二人に暖かく接してくれた。特にアスマーゼは、実の子供のように二人を可愛がっていた。

「妊娠されているんですか？」

「ええ、まだ二ヶ月だけど、主人の魔法で女の子ということだけは判っているの」

こうして、数日はあっという間に過ぎた。アイスの町に旅立つ日、夫妻は町の前まで二人を見送りに来ていた。

「この地図通りの街道を通ればほとんどモンスターも出ないはずだ。初めのうちは危険の少ない依頼をこなしていきなさい。そういった

仕事をギルド長のキースが優先して回してくれるはずだ」

「いつでも町に寄ってくれていいからね」

「ありがとうございます。冒険者として一人前になったと思った暁には、立ち寄らせていただきます」

こうして、二人はアイスの町へ向けて旅立った。その背中を見送りながら、アスマーゼが悲しそうに呟く。

「あんな幼い子が…冒険者にならなければいけないなんて…」

「だが、止められなかった。譲れないものがあつたのだろう、目がその信念を語っていた。子供とは思えんほどの決意だ」

「ルーク君、話し方も大人びていましたものね。将来的には娘の結婚相手になんてどうかしら」

「……それとこれとは話が別だ」

「ふふ、はいはい」

時間にしてみれば夫妻と過ごしたのは本当に短い間であった。が、その間にルークが受けた恩義は、今もその胸に残っていた。いつか一人前になったら、そう思いながら今日までカスタムの町を訪れていなかったルーク。その判断は間違いだっただのかも知れない。

LP0001

- 荒野 -

「母…アスマーゼさんの娘さんか。そうか、あの時の！」

「ちよつと、質問に答えなさい。母を知っているの!？」

目の前にいるのがアスマーゼではなく、その娘だと判ったルーク。

今にも食って掛かりそうな少女に対し、落ち着かせるように質問に答える。

「ああ、よく知っているよ。アスマーゼさんも、旦那の篤胤さんもな」

「そう、父と母を知っているのね…名前を聞いてもいいかしら？」

「ルークという。冒険者だ。篤胤さん夫妻には二十年近く前に大変お世話になった者だ」

「……二十年前？」

ルークの言葉を聞いて眉をひそめた少女は、スッと目の前に手をかざす。その行動にどこか不穏な空気を感じたルーク。すると彼女の手のひらに魔力が集まり始める。

「……火爆破」

「っ！？」

瞬間、横へと飛ぶルーク。その後ルークが先ほどまで立っていた場所で足下から炎の柱が立ち上がる。すぐに少女に向き直るルーク。

「元の時代に戻った際に両親のことを聞こうと思って名前を聞いてみたら、まさか二十年前にお世話になったとか言い出すとはね…あなた、この時代の人間じゃないわね！冒険者って事は私を追ってきたのかしら？」

「そうか…四魔女の話を町長から聞いているときに上の空で名前をちゃんと聞いていなかったのが徒になったな。君が、四魔女最後の一人…」

「ええ、魔想志津香よ」

言葉と同時に、炎の矢が弾丸めいた速度で連射される。それを躲しながらルークは叫ぶ。

「待て、篤胤さんの娘さんと争いたくはない！話を聞かせてくれ、過去にさかのぼって、君は一体何をしようとしているんだ！」

その言葉に、ピタッ、と炎の矢の連射を止める志津香。

「目的？そんなこと、決まっているでしょう！父にお世話になったとか言っていたのに、娘の私の目的に見当もつかないの！？」

「……見当がつかない。頼む、教えてくれ」

「ふん、まあいいわ。私がここにやってきたのは、卑怯な手段で殺された父を助け出すためよ！」

志津香の言葉を聞いた瞬間、ルークの目が見開かれる。

「殺された…だと。篤胤さんが!？」

- 志津香の屋敷 一階 -

「いたぞ、侵入者だ！仲間をやったのはお前だな!!」

「うおっ、なんだなんだ!!」

ようやく志津香の屋敷に辿り着いたランスだったが、先に潜入していたルークが風の戦士を倒してしまっていた影響で、警備が頑丈になってしまっていた。思わぬ足止めを食ってしまうランス。

「ルークさんはこんな嚴重な警備を一人で大丈夫なのでしょうか…」

「ふむ、ルークなどどうでもいいが志津香の処女は心配だ。急ぐぞ！」

この嚴重な警備がルークのせいであるとは思っていないランスとシルだった。

- 荒野 -

「…知らなかったの？ラガールという魔法使いに卑怯な手段で父は殺され、母は連れ去られた…私が生まれて間もない頃にね」
「いや、知らなかった。…キースめ、黙っていたな」

そう言つて恩人たちのその後顔に曇らせるルーク。キースは事の顛末を知っていたが、そのときまだ幼かったルークに話すにはあまりにも思いと考え、いつか話そうと先送りしていたのだ。が、その後ルークは15才のときから約10年近く行方知れずになるため、キースが伝え忘れていたのだ。

「そう、ならさっさとここから消えてくれる。あなたも父と母にお世話になったのなら、まさか私を止めはしないわよね？」

「……過去の改変など、どんな影響が出るかも判らないんだぞ。それを判っていない君ではあるまい？」

「ええ、今いる世界が変わるのか、平行世界として別の世界が出来るのか、検討がつかないわ。本にも載っていないかったしね」

「…歴史だけではなく、君のこれまでの思い出にも、大きな影響を及ぼすかもしれないんだぞ」

一瞬、躊躇うような顔を覗かせる志津香。頭に浮かんだのは、青

い髪のメガネをかけた親友の顔。が、それを振り払うかのように口を開く。

「構わないわ。父を救い出せる可能性が少しでもあるならば、実行するまでよ！」

「……気持ちは判る。が、町の少女たちを誘拐して集気を集め、世界にどんな影響を及ぼすかも判らないその行為を認めるわけにはいかない」

「そう、父と母の話を知りたいと思っていたのだけれど……邪魔をするなら死んで貰うわ！」

そう言ってこちらに魔法を放とうとしてくる志津香。身構えるルークだが、志津香の後ろ、若干遠くはあるが記憶にある男女の姿が目に映る。

「篤胤さん、アスマーゼさん……？」

「っ！？隠れて……！」

そう言って攻撃を止め、ルークを引っ張り物陰に隠れる志津香。ルークもここで夫妻に出会ってしまったては歴史に多少なりとも影響を及ぼしてしまうかも知れないと思い、素直に応じる。無理に戦えば二人にばれてしまう可能性があるため、自然と一時休戦の形となった。物陰から顔を出し、夫妻を見る。志津香が生まれた直後ということは、ルークが会ったときとそう時は経っていない。記憶にあるままの姿で魔想夫妻が荒野に立っていた。

「お父様……お母様……」

横を見ると志津香の瞳が少し潤んでいた。幼い頃に失ったため、写真や人から聞いた話でしか知ることのなかった両親。涙が抑えら

れないのも無理もない。そう思いながら志津香の顔を見ていたルークだが、志津香が見られているのに気がつき、力一杯ルークの右足を踏みつける。

「…っ！…！」

「見てんじゃないわよ！」

すると、夫妻の話し声が聞こえる。志津香の表情が引き締まる。ルークも足を押さえながら夫妻の方をばれないように見る。

「…さんに言われたとおりここに来たけど、いったい何の用なのかしらね？」

「うむ、町にいる間あまり話したこともない相手で、嫌われているのかと思っていたのだがな。こんなところに呼び出すとは、よっぽど周りに聞かれたくない相談なのか…っ！？」

「あなた…！」

話をしていた夫妻だが、突如篤胤の体を雷撃が襲う。足下に魔力装置の罫があつたのだ。それも、違法なまでに改造を加えたものだ。そのダメージから立っていることが出来ず、崩れ落ちる篤胤。アスマーゼが悲鳴を上げると、ルークたちとは夫妻を挟んで反対側の物陰から男の声が響く。

「ふはははは！いい様だな、魔想よ！」

「…あなたは！？」

「ラガール…なぜここに！？」

漆黒のマントに身を包み、左手には爪を装備した魔法使いに対し、先ほど志津香が父の仇と言った男と同じ名前を篤胤が叫ぶ。この男が…ラガール。

「衰えたな魔想よ…かつての貴様であればこんなに簡単には罠に掛からなかったであろう。その後悔を抱いたまま、愛する者の前で無様に死ね!!」

「させないわ! ラガール、死ぬのは貴方よ!!」

「っ!? 待て!!」

篤胤の危機に、飛び出していく志津香。ルークが止めるが、その腕を振り払っていつてしまう。両親とラガールの前に立つ志津香が、様子がおかしい。篤胤も、アスマーゼも、ラガールも志津香を見ていないのだ。志津香もすぐに気がつき、最悪の想像が頭の中に浮かぶが、それを振り払うかのようにラガールに向かって魔法を放つ。

「ファイヤーレーザー!!」

両手から放たれた火柱が一直線にラガールを襲い、直撃する。が、ファイヤーレーザーはラガールの体をすり抜けてしまう。

「まさか…そんな…」

「…そういうことか。俺らは今過去に実体化しているのではない。過去の…映像を再生しているようなものだ」

三人の反応を見た時点で想定していた最悪の予想をルークに言われ、否定するように志津香が声を荒げる。

「時空転移魔法は成功したわ! そんなはずはない!!!」

「本が間違っていたのか、魔力が足りなかったのかは俺には判らない。が、そもそも過去改ざんなんて悪用される恐れもある無茶苦茶な魔法、実在するのであれば魔法大国のゼスが放置しておくはずが

そう言うルークの右拳に爪が食い込み、血が滴っているのを志津香は見る。恩人の死にルークも憤りを感じていた。

「俺も協力しよう。冒険者の俺の方が居場所の情報を掴める可能性は高いからな。奴を…必ず殺すぞ」

「…役に立たないと判断したら…切り捨てるからね」

こうして仇討ちという目的の下、ルークと志津香は手を結ぶことになった。これより、長く深い付き合いとなる二人の出会いであった。

第27話 恩人の娘 志津香（後書き）

「人物」

魔想志津香

LV 20 / 56

技能 魔法LV2

カスタム四魔女の一人。才能は篤胤、容姿はアスマーゼの血を色濃く継いでいる。ラギス殺害後、殺された父を救うためフィールの指輪と少女たちの生気を使って過去へと飛ぶが計画は失敗に終わる。その後は父の仇であるラガールを殺すことに目的を変更し、情報収集のためルークと手を結ぶ。ルークにとっては恩人の娘であり、守るべき存在。

魔想篤胤（半オリ）

LV 38 / 50（生前）

技能 魔法LV2

志津香の父であり、ルークの恩人。優秀な魔法使いであったが、ラガールに不意打ちされその命を落とす。名前はアリスソフト作品の「ぱすてるチャイムContinue」より。

魔想アスマーゼ

志津香の母であり、ルークの恩人。夫を目の前で殺され、ラガールに攫われる。その後はラガールに犯され、精神を病み衰弱死する。死ぬ直前、妊娠していたという噂もあるが、定かではない。

チエネザリ・ド・ラガール

LV 39 / 50

技能 魔法LV2

志津香の両親の仇である魔法使い。アスマーゼを攫った後の所在

は謎に包まれている。

「技」

火爆破

敵の足下から炎の柱を噴き上がらせる中級魔法。同時に複数の相手に使用することが出来るため、集団戦で重宝される。

ファイヤーレーザー

両手から追尾能力のある高熱光線を放つ上級魔法。ある程度の才能がなければ使用することが出来ない強力な魔法である。

「装備品」

ポイズンガントレッド

ラガールが左手に装着していた爪。魔力で遠隔操作も可能な魔法の籠手。ラガールが改造して造り出した。

「料理／食材」

うし乳

うしから取れる白い液体。栄養満点で、子供に飲ませると良いとされている。独特の臭みがあり、好き嫌いの分かれる一品。

第28話 祝賀会

- 志津香の屋敷 二階 環状列石装置前 -

「もうここにいない必要もないだろう。町に帰るぞ。誘拐した娘たちは？」

「奥の部屋にいるわ。もう彼女たちに用もないし、一緒に連れて帰りましょう。一応対等な協力関係だから、ルークって呼び捨てにさせて貰うわよ」

「ああ、別に構わん。こちらも志津香と呼ばせて貰う」

泣き止んだ志津香にルークが町に戻るよう持ちかける。計画が頓挫した今、ここに残る理由もない志津香はそれに応じる。残った問題は指輪だけだ。

「で、その指輪なんだが…それは呪われたアイテムでな。それを身につけていると…」

「ああ、それなら知っているわ。ラギシスに貰って指に填めた瞬間、呪われてるってすぐに気がついたから」

「そうなのか!?!」

「ええ。で、こんなもの寄越したラギシスを怪しんで探ってみたのよ。そしたら奴がボロを見せたって訳。とりあえず私たちを利用するつもりだったラギシスを殺して、指輪はありがたく魔力増強に利用させて貰ったわ」

「そこまで判っていないながら指輪を使ったのか？」

「少しづつ魔力を吸われるけど、それ以上に魔力が増えるしね。一時的に魔力ブーストするには十分役に立つわ。心が悪に染まるっていうのも、自分にガード魔法かければほとんど影響を及ぼさないしね」

「なんだって？じゃあ、指輪の悪影響は殆ど受けていないのか？」
「そういう事」

そう言っただけで赤い指輪をルークに見せる志津香。聞くところによると、この指輪は外す際に装備者の魔力を大量に奪う仕組みになっているが、普段も微量ながらも少しずつ魔力を吸収しているらしい。だが、吸われる以上に増える魔力量が圧倒的に多いため、魔力増強装備としての効果は本物のようだ。

「志津香の言うとおりなら、外すには処女を失わなければいけない上に、大量の魔力を持って行かれるんだろ？どうするつもりだ」

「ん？別に外せるわよ、これ」
「は？」

そう言っただけで右手に魔力をこめた志津香は、左手の中指に填められている指輪を右腕で包み込み、少しずつ外していく。特に何も起こらないまま、指輪は志津香の指から外れた。

「処女を失わなければ外せない、って呪いとしては低級なものよ。ちよつと魔力で覆ってやれば認識阻害することは簡単って訳」

「…マリアたち、可哀想に」
「えっ！？マリアたち処女失っちゃったの？ミルも？あんたがやったの！？」

キツとこちらを睨み付けてくる志津香に、慌てて弁解するルーク。

「違う、違う。ここにはいないが仲間のランスって奴が全部やった。まあ緊急事態だったわけだから責めないでやってくれ。それに、処女を奪えばって言うのはマリアが教えてくれたんだぞ」

「…ちゃんと教えておくべきだったわね。悪いことしちゃったかし

ら

時空転移装置を完成させることに躍起になっていた志津香は、他の三人への説明を怠っていた。まさか自分たちを倒すほどの相手が来るとは思っていなかったというのもある。流石に友人の処女を奪う原因となってしまうことに、その表情を曇らせる。指輪をマントの裏地にあるポケットにしまいながらルークに向き直った。

「さ、話はこの辺にして娘たちと一緒に町へ帰りましょう」

「ああ。が、その前に……」

そう言っつて、ゴンツ、と志津香の頭にげんこつを落とすルーク。帽子の上からなので衝撃は若干和らいではいるが、突然の暴挙と頭に走る激痛に志津香が声を荒げる。

「っ……！！いきなり何するのよ！！！！」

「指輪の影響がなかったってことは、娘たちを攫ったのは素の状態をやったって事だろう？流石にそれは見過ごせないな。篤胤さんやアスマーゼさんだったら、絶対に注意していただろうから、その代わりにな」

「っ、余計なお世話よ！！」

「指輪のせいだったってことにしていから、ちゃんと謝るんだぞ。町の人たちにもな」

ふん、とだけ言っつて娘たちが捕らわれている部屋に向かう志津香。その後を追うルーク。部屋は環状列石装置の近くにあり、中に捕らわれていた娘たちを解放する。全員が裸であったのはその方が生気を奪いやすいからとのこと。志津香は奪っていた彼女たちの服を返し、全員を着替えさせた。ルークはその間、部屋の外で待つ。部屋の中に耳を傾けていたら、小さくだが志津香が彼女たちに謝罪をし

ている声が聞こえてきた。文句を言いながらも、しっかりと謝れる
辺り、根は悪い子じゃないんだな、と思うルーク。ほどなくして着
替え終わった娘たちを連れて志津香が部屋から出てくる。

「終わったわ。さ、帰りましょう。帰り木は持ってるの？」

「ああ。ん？あれは……」

町へ帰還するため、帰り木を取り出したルークだが、前から誰か
迫ってきていることに気がつく。目をこらしてよく見れば、それは
ランスとシルであった。何か叫びながら全力でこちらに向かつて
くるランス。

「ルークうう！！貴様、そんなに美少女を侍らして何をしてるかあ
あ！！この世の美女は全て俺様のものだああ！！」

「……なにあれ？」

「……あれがさつき話した、仲間のランスだ。まあ、根は悪い奴じ
ゃないんだがな」

厳重な警備に足止めされていたランスが、ようやくここまで到着
したのだ。ルークの前まで駆けてくるランス。後ろではシルが息
切れしている。

「で、どれが志津香だ？抜け駆けしていないだろうな？」

「志津香は私だけだ」

「おお、性格はきつそうだが美女ではないか。グッドだ！……ん？」

そう言って手を上げる志津香。イヤらしい目つきで志津香をジロ
ジロと見回すランスだが、あることに気がつく。どちらの手にも指
輪をしていないのだ。

「な、な、な！ルーク、貴様俺様を出し抜いて志津香の処女を奪いやがったな！はっ、まさか…周りの娘たちも一緒にハーレム行為に及んでいたのでは…ゆ、許さんぞ！！」

そう言つて剣を抜くランス。隣で志津香が汚らしいものを見るような目をしている。

「…これで、根は悪くないとか正気？こいつ頭大丈夫なの？」

「ま、これも味があるというかなんというか。ランス、剣を仕舞え。指輪は別に外す手段があつて、俺は手を出してないから安心しろ」

「ん？そうなのか？がはは、ならば俺様が志津香の処女をゲットして四魔女コンプリートだ。英雄の俺様に抱かれることを泣いて感謝するがいい。とうっ！」

「……粘着地面」

「んがっ！！」

志津香に飛びかかるうとしたランスだったが、両足が地面とくつき、盛大にこける。こけた拍子に今度は全身が地面とくつき剥がれなくなってしまう。

「んがが、なんだこれは。くっついて取れんぞ！」

「さ、馬鹿は放つておいて帰りましょう」

「…ま、娘さんたちを送り届けないといけないしな。剥がすのに時間も掛かりそうだし、悪いが先に帰っているよ。シルちゃん、頑張つてな」

ランスの体を地面から剥がそうと頑張るシルにそう言い残し、帰り木で町まで帰還してしまうルークたち。ワープする直前、志津香がルークにだけ聞こえるように呟いた。

「後でさ…両親のこと聞かせて貰える？」

「ああ、勿論」

「こら、勝手に帰るんじゃない。いたた、シイルもつとゆっくり剥がせ、バカ！」

「ランス様、動かないでください。余計外せなくなってしまうです…」

取り残されたランスとシイルの声だけが辺りに空しく響いたのだ。
った。

- カスタムの町 祝賀会会場 -

その晩、事件解決を祝して町を挙げての祝賀会が催された。町長の屋敷にはたくさんの人たちが集まり、中に入りきれないため臨時の第二会場として酒場を利用するほどの大盛況であった。四人の魔女たちを倒し、町の封印を解き、四魔女たち自身や攫われた少女たちも無事帰ってきたのだ。町中の人たちがルークとランスに感謝しており、会場には「ランスさん、ルークさんありがとう記念！カスタムの町復興祝勝会」と書かれた垂れ幕がかけられていた。その下にはリーザス国提供と書かれた花輪が飾つてある。どうやらこの祝賀会にはリーザスも金を出しているらしい。が、その王女様一行の姿は見えない。気になってルークは町長のガイゼルに聞いてみると、なにやら緊急の案件が国で起きたらしく、駄々をこねる王女をなんとか侍女が説得し、既に帰国してしまったらしい。一緒にいた女忍者も王女を説得しながらも、どこか寂しそうだったとのこと。

「がはははは！酒だ、酒だ！ドンドン、持ってこいよー！お、その君、こっちに来て恩人の俺様に感謝するのだ！」

「ランス様、へんでろば取ってきました。お酒もお注ぎしますね」

ランスが上機嫌に騒ぐ。町に戻ってきたランスはルークに文句を言ってきたが、この見事な祝勝会で機嫌を取り戻したようだ。シイルは甲斐甲斐しくランスのコップにお酒を注いでいる。実はこの酒、少し薄めてある。あまり酒に強くないランスを思っ、悪酔いしないよう、普段からこっそりとランスの酒を薄めて渡しているのだ。どちらかというとかっこつけの為に飲んでおり、酒の味はあまり分らないランスは、普段からそれに気がつかず飲んでいるのだった。献身的な娘である。

「あ、ルークさんもどうぞ」

「ありがとう、シイルちゃん。……俺のは薄めなくて大丈夫だからな」

「……知っていらしたんですか。どうかランス様には……」

「大丈夫。そんな野暮なことはしないさ」

ルークもランスの隣で飲んでいた。真犯人であるラギシスの姿が消えたのは気になっていたが、せつかく町の人たちが自分たちの為に開いてくれた祝賀会だ。悪酔いしすぎない程度に軽く酒を飲みながら、会場を見回す。町の人たちはみな一様に笑顔であった。こういう光景を見られるのも、冒険者稼業の利点だとルークは思う。そんなルークとランスに今回の事件で特に関わりの深かった人たちが寄ってくる。四魔女やミリ、ガイゼル、トマト、真知子といった人々だ。エレナは第二会場の酒場で仕事をしているのでこちらには不在。

「妹のこと、ありがとうな。感謝してるぜ、ランス、ルーク」

「ランス、今回は本当にありがとうね」

「ミリとミルか。うむうむ、俺様に感謝しておけ。ミルは10年……」

いや、5〜6年後にまたやらせる」
「今してもらっても……いいのよ？うふふ」

セクシーな流し目をランスに送るミル。どうやらすっかりランスに懐いてしまったらしい。

「いらね」

「がーん！！」

「ばっさりだな。ま、いるって言うのも問題だが」

「ルーク、ちよつと聞きたいことがあるんだ。後でいいから俺とあつちで飲まないか？なに、ほんの少しいいんだ」

「ん？構わないぞ。ちよつと待っていてくれ、他の人にも挨拶を済ませないとな」

ミリがルークを差し飲みに誘う。思わぬ所からの誘いに驚きながらも、他にも寄ってきた人がいたため、そちらの対応を済ませてからならとそれに応じる。ランスは話しかけてきたガイゼルにチサの処女を寄越せと言って、横で揉めている。ルークの方にはトマトと真知子が寄ってきた。

「ルークさん、お疲れ様ですかねー？ルークさんに剣の見込みあるかもって言われたんで、私も今冒険者目指して頑張っているんですかねー？」
「トマトさんか、相変わらずの話し方だな。本当に修行を始めたんだな」

「はい、昨日は剣の素振りを五回もしたんですよ？」

「……先は長そうだな。まあ、頑張れ」

「聞いていましたわよ、ルークさん。ミリさんの後は私とお酒を付き合って貰えるかしら」

「真知子さん。どれ位かかるか判らないからその後でも良いなら……」

「ええ、待っていますわ。必ず声をかけてくださいね」

トマトと真知子の二人とそういったたわいもない話をしていると、今度はランが話しかけてくる。ランスも丁度ガイゼルとの話が終わったようので、二人でランの話を聞く。

「ルークさん、ランスさん。本当にありがとうございました。私がしたことは許されることではないですが、お二人のお陰でこうして町の人たちにも受け入れられ…」

「あーあーあー、酒が不味くなる。辛気くさいのはナシだ」

「俺もランスに賛成だな。ラン、君は普段からもっと明るくしていた方がいいぞ。その方が今よりもっと魅力的だ」

「えっ…あっ…ありがとうございます。頑張ります」

「こら、俺様の女を口説くな」

「ん？別に口説いたつもりはないが」

「というか勝手にランを自分の女にしないの、ランス」

そう言っやってきたのはマリア。その足下にはゲデゲデに酔っ払った志津香がいた。先ほどまでのきりりとした姿とのギャップに驚くルーク。

「本当にありがとうね、ランス、ルークさん。二人がいなかったら大変なことになってたと思う。あっ、もちろんシルちゃんもね」

「うむ、当然だな。たっぷり感謝しておけ」

「ところで…志津香はどうしたんだ？」

「あはははは、あはははははは！」

ゲラゲラと大笑いする志津香。どうやら笑い上戸らしい。

「あはは…やけ酒を一気に飲んだらこうなっちゃった…あんまり見

ないであげてください」

「それは難しいな、良い笑顔だ」

「あははははは、殺してやる、ラガール。あははははは！」

物騒な事を言いながらも真つ赤な顔で上機嫌に笑い続ける志津香。その懐から、フィールの指輪が床に落ちる。それを拾うランス。これで四つの指輪コンプリートだ、と騒いでいる。一応後でちゃんと返すように伝えておこう、と思いつながら、志津香の顔を見る。このように笑っていると、本当にアスマーゼさんそっくりだなと昔を懐かしむルーク。

「志津香、ちゃんと口にはしないけど感謝してましたよ。ご両親のことを聞けて…」

「たいしたことはしていないさ。ほら、志津香。ここで寝ると風邪引くぞ」

「あはははは、ルーク、しっかりと手がかり見つけなさいよー！」

志津香を起こそうとしたルークに寄りかかってくる志津香。見ようによつては抱き合っているような光景が出来上がる。瞬間、パシヤツとフラツシユ音が響いた。見れば金髪の少女がカメラを向けていた。

「やーやーやー、どうも。写真家のペペって言います。良い写真を激写してしまいましたね。今度ゼスのお抱え写真家オーディションに投稿させて貰いましょう」

「流石に可哀想だから止めてやってくれ。ゼスで写真家をやりたいのか？」

「はい、ゼスで写真家としてのし上がり、ゆくゆくは世界を股に掛ける美人写真家になるのが私の夢なんです」

「そうだな…ゼスの結構偉い軍人に知り合いがいるから、今度紹介

しておいてやる。だからその写真は決して投稿しないこと」
「わふー。こいつはラッキー。ぜひお願いしますね。これ、私の連絡先です。では皆様と一緒に、ラストに一枚！パシャリンコッコッコ！」

今度はルークと志津香だけでなく、ランスとシイル、マリア、ラン、ミリ、ミルにトマト真知子も含めた全員の集合写真を撮る。突然ではあったが、笑ってピースするランスと女性陣。ガイゼルは運の悪いことに見切れてしまっていた。

- カスタムの町 祝賀会会場外 -

「で、聞きたい事って言うのは？」

ルークとミリは会場から出て、夜風に当たりながら酒を飲んでいった。会場内の喧騒がほんの少しだけ聞こえるのみで、町の灯りも町長の家と酒場以外はほとんど消えてしまっている。中々に風情のある静かな夜であった。

「ああ…別にたいしたことじゃないんだ。俺がちょっと気にかかっただけなんだが…ルーク、あんた妹いるんじゃないのか？」

「…………どうしてそう思った」
「迷宮で初めて会ったときにさ、俺が妹を放っておけないって言ったとき、ちよつと表情が変わったのが気になっただけで、後はただの勘さ。妹を持つ身としてのね」

そう笑いながら酒を一口くい、と飲むミリ。普段の立ち振る舞いからはあまり想像できないが、ミリは周りをよく見ており、中々に

鋭いところもある。

「そうだな。双子だが、妹がいる。いや…正確には、いた…だな」
「…悪いこと聞いちゃったかね」

「気にしなくていいさ。死んだのは二年前で、俺もあいつも成人してからだ。それよりも、冒険に明け暮れて録に故郷にも戻らず、妹が死んだことを一年以上も後になって知った馬鹿な兄貴が問題さ。こんな風にはなるな。ミルを大切にしてくれ」

「そうだったのかい…悪かったね。ま、俺は大丈夫さ。言われなくてもミルのことは大事に育てるよ」

今は亡き妹の話に、少し昔を思いだすルーク。結局、かつて魔想の屋敷で数日の間生活をした四人の内、二人がもうこの世にはいないのか、と感傷に浸る。ルークもその可能性を考えてはいたが、誘拐されたアスマーゼももうこの世にはいない。実際にはあの四人の内、生きているのはルークだけであった。ミリがスツとグラスをルークの目の前に差し出す。

「乾杯し直しといこうじゃないか。亡くなった妹さんにな」

「悪いな。それと、ミルの成長と…迷宮で命を落としたミリの三人の仲間にもな」

ミリの差し出したグラスに、ルークは自分のグラスを当てる。カラン、という音が静かな夜に響く。

「やっぱ…いい男だな、あんた。俺を抱く気はないかい？真知子との酒が終わったら俺の部屋に来ないか？」

「魅力的なお誘いだが断っておくよ。ランスでも誘ってくれ」

「ランスはなあ…体力は凄いんだがテクニクがまだまだなんだ」

「もうヤツってんのかよ。いつの間に…」

空気を変えるため、あえてそういった話題にシフトしたミリ。ルークもそれに乗り、二人で笑いながら酒を煽る。そういえば、この後酒を飲む約束になっている真知子も妹持ちである。リーザスで無理をして助けたデル姉妹もだ。知らず知らずのうちに、兄妹、姉妹という存在に惹かれているのかも知れないな、と酒を飲みながらルークは考えていた。

・カスタムの町 祝賀会会場 チサの部屋

「ぶひー、えがっだ…」

ランスは祝賀会会場としている町長の家のホールを抜けだし、チサの部屋のベッドで横になっていた。ルークが出て行ったすぐ後、チサがランスを自分の部屋に誘いに来たのだ。まだチサの処女を奪っていなかったランスはこれを承諾。チサの部屋につくやいなや情事に入り、それを終えた今はベッドの上で脱力感に身を浸らせていた。

「町を救って頂き、本当にありがとうございます。あの、ランス様その指輪、つけてみてもいいですか？」

「ん？別に良いぞ。魔法使いでも処女でもないチサちゃんがしたところで何の意味もないからな」

チサがランスの服の側に置いてあったフィールの指輪を指さす。H後で上機嫌だったランスは、難なくOKを出した。左手の指に四つの指輪を填めていくチサ。すると、突然チサがおかしな笑い方を始めた。目は正気を失っている。

「ふふ、ふふふ、ふふふふふふふふふふ」

「…チサちゃん？」

「ふふふくくく、ありがとう、ランス君。私からも礼を言おう！」

この場にはいないはずの初老の男の声が響く。それと同時に、ランスは金縛りに襲われ動けなくなってしまった。ランスはこの声に聞き覚えがあった。チサの後ろに、その男の姿が浮かび上がる。

「なつ、てめえ、その声は生きてやがったのか！ラギシス！！」

「ふはははは、久しぶりだなランス。この娘が行方不明になったことがあっただろう。そのときに内側に潜ませて貰っていたのだ。くくく、結果は上々だ。こうして私の元に指輪を持ってきてくれたのだからな！」

「てめえ、そこを動くな！今ギッタギッタにしてやる！」

「ははは、それは恐ろしい。感謝の意を込めて君は生かしておいてやろう。さらばだ、ランス」

そう言い残し、勝ち誇った笑いを浮かべながら四つの指輪と共に姿を消すラギシス。部屋には金縛りの解けたランスと、気絶しているチサだけが残されていた。

第28話 祝賀会（後書き）

「人物」

ペペ・ウィジーマ

世界を股に掛ける写真家を夢見る少女。思わぬ形でゼスとのパイプが出来そうで上機嫌。撮った写真はちゃんと写っている全員に渡しました。志津香にツーショット写真を渡した際、ネガを燃やすから寄越せと追いかけられる羽目になった。

「技」

粘着地面

一定サイズの地面を粘着質にして動きを止める初級魔法。術者の能力次第で効果範囲や粘着度に差が生まれ、ある程度の術者であれば戦闘支援魔法としても優秀な魔法となる。

「その他」

GI0998 ルーク、カスタムの町を訪れ魔想夫妻の世話になる

GI0999 志津香誕生 直後、篤胤は殺され、アスマーゼは攫われる

GI1006 ルーク、行方不明になる

GI1014 ルークの妹、死亡

GI1015 ルーク帰還、妹の死を知る その数日後、元号がLPへと変化する

第29話 怨嗟

・カスタムの町 臨時宿泊施設

「頭いたっ……」

志津香が目を覚ますとそこは酒場に作られた臨時の宿泊部屋であった。どうやらマリアが連れてきてくれたらしい。昨晚の記憶がまるでない。どうやら飲み過ぎで仕舞ったようだ、と痛む頭を抱えながらベッドから抜け出す志津香。部屋を出て営業場の方に行くと、何人かの客が朝食を取っている。志津香と同じように二日酔いに頭を抱えているものも多い。奥の席にマリアの姿が見える。マリアもこちらに気がついたようだ。

「あ、おはよう志津香。……調子悪そうね」

「おはよう、マリア。…最悪ね。頭痛いし、昨晚のことは何にも覚えてないし」

「あはは…そうなんだ…」

そう言って志津香はマリアの前に座る。マリアの苦笑いが少しだけ気になる様子であったが、今の状態ではあまり深くは考えられないように、エレナに水の注文をする。

「はい、水。昨晚は随分とはしゃいじゃったみたいね。あまり気にしない方が良くいわよ」

「あっ、エレナさん！それは…」

「……どういこと？」

水を持ってきたエレナが志津香にフオローを入れる。が、昨晚の

ことを覚えていない志津香にとってそれは逆効果であった。マリアの方に向き直り、昨晚のことを問う。

「ねえ、マリア。私昨晚どんな状態だったか聞かせてもらえる？」
「え、えつとね……落ち着いて聞いてね」

これは隠しきれないと判断し、観念して昨晚のことを話し始めるマリア。親友のことを思い、極力オブラートに包んで説明を続けたが、その努力は無駄になる。志津香の様子を見に酒場に入ってきたミリが、その姿を見るやいなや志津香に向かってこう言ったのだ。

「お、なんだ元気そうじゃないか。昨晚は凄かったな。真つ赤な顔で騒ぐわ、絡むわ、爆笑するわ。抱きつかれたルークが困ってたぞ」

その発言になぜかマリアの血の気が引く。ミリに黙っているようにジェスチャーを送るがもう遅い。志津香は机に突っ伏しながら、二度と酒は飲み過ぎないようにしようとは心に誓うのだった。

- カスタムの町 街路 -

町長の家に向かってルークは道を歩いていた。一応事件解決ではあるが、消えたラギシスの問題が残っていたからだ。酒場の前を通ると、店からマリアとミリ、ミル、そして俯いた状態の志津香が出てきた。

「おはよう。みんなで朝食でも取っていたのか？」

「あ、ルークさん。おはようございます」

挨拶をしながら四人の方に寄っていったルークだが、いきなり志津香に右足を踏まれる。見れば志津香がこちらをものすごい顔で睨んでいた。

「……昨日のことは記憶から抹消しなさい。死にたくなかったらね」

「ん？ああ、そのことか。別に俺は気にしていないんだがな……」

「私が気にするのよ！」

「お、仲良いな」

「おねえちゃん、あれは仲良いつて言うの？」

志津香のヤクザキックがルークに飛んでくる。そんな感じで談笑をしていると、町長の家の方からランが慌てた様子で走って来る。マリアがいち早くランに気がつき、声をかける。

「どうしたのラン？そんなに慌てて」

「良かった、みんな揃っている。今すぐ来て、大変なことになったの！」

- カスタムの町 町長の家前 -

「ファイルの指輪を奪われたですって！というか、いつの間に私の指輪持って行ったのよ！」

「ランスの馬鹿。40人分の魔力を吸ったあの指輪はとんでもない魔力を秘めているわ。そんなものラギシスの手に渡ったら……」

「ランスのバカ、バカ、バカ！！」

「いた、いた。そんな怒るな」

町長の家の前にいたランスから一行は昨晚の報告を受ける。四魔

女である志津香、マリア、ミル特に激怒しランスに食って掛かる。町長の屋敷に用事があって寄っていたランは、先に報告を受けていたため食って掛かるようなことはしないが、やはり相当怒っていた。ミリは達観した様子で事の成り行きを見守る。ルークは自分の迂闊さを後悔する。ラギシスに対する懸念はあつたし、チサがラギシス邸で見つかった話は聞いていた。あの時疑念を抱いておくべきだった、と。

「やはり生きていたか、ラギシス。シルちゃん、ラギシスが今どこにいるかは判っているのか？」

「はい。あちらの森の方に向かわれたのを目撃した住人の方がいました」

「多分まだ指輪の力を完璧には扱いきれていないんだわ。あの森で魔力に慣れるつもりよ」

「…マリア、ミル、ラン、行くわよ。私たちの手でラギシスをもつ一度殺しに」

志津香の言葉に三人が頷く。騙されていたとはいえフィールの指輪を完成させてしまった者として、ラギシスの弟子として、四魔女で決着を付けるつもりらしい。

「水くせーな。俺も行くよ。妹だけ向かわす訳にはいかないだろ」

「ま、このまま放っておける存在ではないな。最後まで付き合おう」

志津香の言葉に反応したのは三人だけではない。ミリとルークも共に戦う腹づもりの様だ。が、ランスだけが無然とした態度でこう言っただけのける。

「めんどいから俺様は行かんぞ。俺様の仕事は四魔女退治とこの町の開放だ。後は知らん」

「でもランス様……」

「それに40人分の魔力を持った相手だろう？お前たちに敵うような相手じゃないだろ。俺様ほどではないが多少は強いルークが協力したとしても、死ぬかもしれないぞ」

「それでも行かないといけないのよ」

ジロリとだけランスを一瞥した志津香は、マントを翻して颯爽と歩き始めた。ミリ、ミル、ランがそれについて行く。

「止めたらどうだ？マリア、ルーク」

「そんなわけにはいかないわ。ラギシスを放っておけないもの」

「奴を放置するのは危険だからな。指輪に慣れていない今のうちに叩いておくのも冒険者の勤めだ。が、ランスの判断を否定するつもりはない。そちらの言っていることも正しい。仕事でもないのに命をかけてまでやることはないからな」

「……シイル、帰り支度をしておけ。そろそろアイスの町に帰るからな」

「ランス様……」

シイルが悲しそうな表情でランスを見つめる。どうやらシイルはみんなに協力をしてあげたいと思っている様だ。が、主人のランスの意見には逆らえない。

「今までありがとうね、ランス。シイルちゃんも元気でね。バイバイ」

「ま、俺が誰も死なせはしないさ。またその内、冒険を一緒にすることもあるだろ」

そう言ってマリアとルークは軽やかに志津香の後に付いていった。

「…ふん、馬鹿な奴らだ」
「……………」

・カスタムの町近隣の森・

六人はラギシスがいるという森の中まで入ってきていた。志津香が魔力を察知し、道案内をする。マリアはゴロゴロと砲台を乗せた台車を転がしていた。ルークもそれを後ろから押す。

「すみません、ルークさん。手伝って貰っちゃって」

「気にしないでいい。で、これは一体何なんだ？」

「よくぞ聞いてくれました！これはマレスケ。長距離用のチューリップ2号です。指輪に魔力を吸われすぎた私が付いて行っても足手まといだからね。ちょっと離れたところからこれでみんなを援護するわ」

「なるほどな、ラギシスの正確な位置は判るのか？」

「GPSっていう物が手に入れば良かったんですけど、手に入らなかったんで志津香の魔法でターゲットして、その位置を特定して発射できるようにしています」

「この辺りが広くてよさそうね。マリア、ここから援護して。頼んだわよ」

「そういえばランとミルは吸われた魔力は大丈夫なのか？」

マレスケを台車から降ろしながらルークが二人に尋ねる。指輪を外すときにこの二人も魔力を相当量吸われているはずだ。魔法を使えないのであればマリアと共にここに残った方が良い。

「かなり吸われはしましたが、魔法を使えなくなるほどではありません

せん。それに、私は一応剣も使えますし」

「幻獣さんの出せる量は減っちゃったけど、少しならまだ出せるよ」

どうやら魔法を使えなくなるほどにまで吸われてしまったのはマリアだけらしい。運が悪かったのか、元々の魔力量に差があったのか。

「志津香、調整が必要だからマレスケが撃てるようになるまでもう少し掛かるんだけど…」

「待てばその分ラギシスが指輪に慣れるわね…いいわ、先に戦っていきましょう。準備が出来次第、援護をよろしく」

こうしてマリア一人を森の広場に残し、五人で奥へと進んだ。少し進むと洞窟が見えてくる。この中でラギシスは指輪の魔力に慣れているのだろう。洞窟の仲ではマレスケの砲撃が届かないため、なんとか外に誘導できないか辺りを窺っていると、突如洞窟の入り口前の時空が歪み始める。その時空の裂け目からラギシスが現れる。

「貴様らか…何故私の前に立つ」

「ラギシス、観念しなさい！」

「貴様を野放しにしておくのは危険なんぞな」

「ふはははは！無限の魔力と生命力を持つこの私に楯突こうとはなよほどの命知らずらしい」

「もう一度殺して、今度こそ地獄に送ってやるわ！」

「おお、ミル、ラン、志津香。私の可愛い娘たちよ。命だけは助けてやったというのに…」

その言葉に志津香がキツとラギシスを睨み付ける

「私の父は一人だけよ！あんななんかじゃない！！」

「くくく…そうか。なら、殺されても文句は言つまい!!!」

その言葉が開戦の合図となった。全員が臨戦態勢に入る。純粹な剣士であるルークとミリがラギシスに向かっていく。その二人に向かって志津香が声をかける。

「私がラギシスの魔法を封じ込めるわ。あまり長くは持たないと思うから、その間に奴を倒して」

「了解、頼んだぜ志津香！」

「こつこつ役回りは俺たちに任せろ。ミルはあまり前線に来るな。ランは志津香が攻撃魔法を使えない分、剣ではなく魔法で援護を！」

ルークが的確に指示を出す。ランとミルもそれに頷き、前衛ルークとミリ、中衛ランとミル、後衛志津香という布陣が出来る。向かってくるルークとミリに対し、ラギシスが何やら呪文を唱えようとするが、その魔力が志津香の妨害魔法によって封じ込められる。

「なるほど…我が魔法を封じ込めるか。簡単な魔法ではないのだが、さすがは志津香だ。これ程の魔力を有しているとは…」

「そうだな。そして貴様は何も出来ないまま死ね！」

「おりゃ！」

ルークとミリの剣がラギシスを斬る。ミリの剣は胸を、ルークの剣がその首を真一文字に斬り裂いた。が、ミリが付けた胸の傷もルークが付けた首の傷も、ジユクジユクと音を立てながら再生してしまふ。

「もはや人間ではないな…」

「無限の生命力を持つと言ったであろう」

「援護します。炎の矢！」

「幻獣アタック！」

ランの放った炎の矢がラギシスの右腕を燃やし、ミルの幻獣が体当たりをする。ミルの幻獣は、洞窟の中で見た凶暴な姿からなにやらファンシーな可愛らしい物に姿を変えていた。これはミルの精神状態で変化する物なので、あの時と違い元の幼い状態で、かつ指輪の悪影響を受けていないミルが呼び出すとこういう姿になってしまうのだった。丸焦げになった右腕が、じわじわと再生していく。

「ちっ、化け物め！」

「ミリ、手を止めるな！再生力を上回るダメージを与えれば勝てる！真空斬！」

「ごさかしい…魔法の攻撃が出来なくとも、我がパワーを防ぐことは出来まい」

「！？ぐあっ！！」

「おねえちゃん！！」

突如、ラギシスの体から鋼鉄の触手が伸び出し、目の前にいたミルに襲いかかった。直撃は避けたミリだが、脇から出血をしている。今この場に回復役はいない。一人の離脱がそのまま戦況を大きく動かしかねない。特に前衛のミリは貴重な存在だ。倒れられるわけにはいかない。ルークがミリの方を見るが、右手を挙げてこちらに合図をしてくる。

「心配しなくていいよ、かすり傷だ！」

「魔力を肉体の改造にも使えるのか。厄介だな」

「外に放たない魔力は抑えることが出来ないわ、悪いけどそつちでなんとかして！」

ラギシスの魔力を抑えているのが相当きついのか、青ざめた顔を

「でかい図体の割には、言うことが小さいな。自分が小者だと伝えられているだけだぞ」

「なんだと……」

高らかに笑っていたラギシスだが、ルークの言葉を聞きその笑いが止まる。ルークは意味もなく挑発したわけではない。ランもミリもミルも戦意が落ちてしまっている。今襲われては総崩れしかねない。だからこそ、自分に意識を向けさせたのだ。

「そうか、そんなに死にたいのか。ならば望み通り死ね、ルーク！」

ラギシスが両拳を握りしめ、ルークの立っていた場所に振り下ろす、轟音と共に砂煙が巻き起こる。見れば地面が抉れている。恐ろしいほどの威力だ。ランたちは焦ってその場を見るが、ルークの姿がない。

「ぐあっ！！」

ラギシスがうめき声を上げる。ラギシスの攻撃を素早く躲したルークが、少し離れた場所で鎧の間から剣を突き刺していたのだ。

「触手同様動きが鈍いな。これではただなのでかい的だ」

「貴様あ！炎の嵐！！」

ラギシスが初級呪文を放つが、それを躲しながら鎧の間を攻撃していくルーク。更に執拗にラギシスを挑発し、それに誘導されるようにラギシスはルークばかりを狙い続ける。さすがに完全には躲しきれなくなっていく、少しずつその体を傷つけられていく。

「あそこまでラギシスの注意を引きつけてくれたんだ。俺たちも行くよ！」

「うん、おねえちゃん！」

「ルークさん、今援護します！」

「みんな…頑張つて…」

戦意を失いかけていた三人が再びラギシスへ攻撃を始める。志津香も青い顔をしながら必死にラギシスの魔法を抑えている。今は初級魔法のみで済んでいるものの、志津香が崩れれば一体何が飛んでくるか判つたものではない。早く勝負を付けなければ敗北は必至。ルークはここに来て大技を放つ。狙うはラギシスの右腕。

「真滅斬！！！」

「ぐつつつ！！貴様あああ！！！」

ラギシスの右腕が斬り落とされる。怒り狂うラギシス。志津香の妨害魔法の影響がある中、無理矢理にでも魔力を込め上級魔法を放とうとする。

「ぐつ……これ以上は……抑えきれない……」

「はははは、死ねえええ！！！」

ラギシスがそう言つて魔法を放とうとした瞬間、空が光つた。直後、ラギシスを強力な砲撃が襲い、その体が灼熱に包まれる。

「ぐおおおおお！！！！！」

「マリアよ、マリアの砲撃が間に合つたのよ！」

「なんという威力だ…マリアめ、あいつは本当の天才かもしれんな…」

更にもう一発追い打ちの砲撃が飛び、豪華の中ラギシスの体が見えなくなる。鋼鉄の鎧がメキメキと音を立てて崩れていく。

「やった…のか…?」

「大丈夫だよ、おねえちゃん。これでやれなきゃ本当の化け物だよ」
「!?!いや、まだみたいだ…!」

炎の中から異形の生物が姿を現す。鎧に覆われていた肉の塊が姿を現したのだ。所々から触手が伸び、手足は無くナメクジのように地面を這っている。全長は一体どれほどになるのだろうか。遙か高い位置から見開かれた両目でルークたちを見下ろすラギシス。

「……黒色破壊光線」

「みんな逃げて!!」

ラギシスが強力な魔法を放つ。志津香が叫ぶが、時既に遅し。ルークは他の四人を庇うように前に出るが、防ぎきれものではない。暗黒の光線が五人を包んだ。

・カスタムの町近隣の森 広場 ・

遠くで轟音が響く。と、同時にマレスケの目標座標も担っていた志津香の封印魔法が解除されてしまった。

「ダメ、これじゃあもう砲撃は出来ない。志津香、お願いもう一度魔法を…」

座標が特定できなければみんなを巻き込んでしまう可能性がある

ため、下手にマレスケを撃つことは出来ない。が、再度魔法が掛けられる気配はない。青ざめていくマリア。

「うそ…みんなやられちゃったの…志津香…」

目に涙を浮かべ、その場に座り込んでしまふマリア。絶望の中呟いたのは、この場に男の名前であった。

「……助けて……ランス……」

・カスタムの町近隣の森 洞窟前・

「あーはっはっはっはっはっ！身の程を思い知ったか雑魚ども！
！」

ラギシス以外その場に立っている者はいなかった。幼いミルは気を失っている。志津香、ミリ、ランの三人は意識を保ってはいたが、全く体を動かさず地面に横たわっていた。一番酷いのはルークだ。庇うように前で直撃を受けたため、地面に倒れ込んだままピクリとも動かない。

「ラギ…シス…」

「私の黒色破壊光線を受けてまだその目が出来るとは、やはり大した奴だな、志津香よ。そうだ、冥土の土産に一つ良いことを教えてやるっ」

「良いこと…ですって…」

「そうだ、お前が探し求めていた両親の仇のことだ」

「！？ラガールを…知っているの…」

「やっぱり…この男だけはもう一度殺す必要があるわね…」

「ふはははは、この無限の魔力を手にした私を殺すだと！それは不可能だ！さあ、話も終わった。貴様らは実によく役に立ってくれたよ。一度殺されたのは誤算だったがな。あの時のお返しだ、志津香。貴様から死ね！」

そう言っつて鋭い触手が志津香に迫る。満身創痍の体では避けることも迎撃することも出来ない。しかし、気丈にも目を瞑ることはなく、その瞳はラギシスを睨み付けていた。迫る触手に自分の死を悟る。恐怖よりも、悔しさが募る。父の仇を…討てなかつた…。が、迫っていた触手は志津香の直前で両断される。

「つまり、貴様も篤胤さんとアスマーゼさんの仇って事だな…」

「貴様、まだ立つのか…」

志津香は見る。自分を守るようにラギシスの前に立ちふさがる男の姿を。大きく、頼りがいのある背中。黒色破壊光線の直撃を受け、誰よりもダメージ大きいはずのルークが、それでもまだ立ち上がり、ラギシスと対峙していたのだ。

「ならば貴様はここで殺すぞ、ラギシス！俺と志津香の手でな！！」

第29話 怨嗟（後書き）

「技」

幻獣アタック

使用者 ミル

呼び出した幻獣たちを一齐に体当たりさせるミルの必殺技。幻獣の数が多ければ多いほどその威力を増す。

炎の嵐

小規模範囲を炎で包む初級魔法。火爆破よりも範囲が狭く、ある程度の魔法を習うと徐々に使わなくなるため、あまり戦場で目にすることはないある種レアな魔法。

黒色破壊光線

暗黒の光線が敵を飲み込む最上級魔法。数ある攻撃魔法の中でも最強とされている究極呪文だが、その分扱いは難しく使用者は限られている。本来ラギシスはこの魔法を使うことは出来ないが、指輪の魔力で無理矢理使用している。

「その他」

チューリップ2号「マレスケ」

長距離固定砲台のチューリップ2号。驚異的な威力を叩き出す。座標指定がネックとなる。そこまで大きくないため台車での持ち運びが可能。マリアはまだまだ満足しておらず、砲身をもっと巨大化し、GPSも付けて超巨大長距離固定砲台にしたいらしいが、そんな金はカスタムの町にはない。

第30話 英雄は遅れてやってくる

- カスタムの町近隣の森 洞窟前 -

ポツポツ、と雨が降ってきていた。その雨を頬に受けながら、ルークがラギシスと対峙している。既に体は满身創痕。立っているのもやっとな状態のはずだ。

「私を殺すだと？ほざけ、雑魚がっ!!!」

ラギシスの触手がルークに迫る。頭に血が上ったラギシスは、倒れている四人には目もくれずルーク一人に攻撃を集中させる。それを捌いていくルーク。ルークの体を突き動かしているものは二つ。恩人の仇である目の前のラギシス。そして、後ろにいる恩人の娘の志津香。戦士として、男として、ここで立たないわけにはいかなかった。触手を斬り落しながら志津香に向かって小袋を投げる。

「中に元気の薬が入っている。最後の一本だ。気休めにしかならんが飲んでおいてくれ」

「あんたが…飲みなさいよ…」

「俺は大丈夫だ、まだまだ戦えるさ。それに…志津香、お前の力が必要だ」

「……勝つためってことで…いいのね？」

「ああ、ミリとランには何も出来ずスマン。世色癌はさっきので燃やされてしまっただけなんだ」

「回復させられる一人は…あんたの判断だろ？それを信じるさ…」

「ルークさん…必ず勝ってください…」

「了解だ。志津香、援護はいらぬ。自分の撃てる最強の魔法を準

備だけしておいてくれ」

左手の親指でランに返事をし、ルークは更に迫ってきた触手を斬っていく。奥でラギシスが魔法を唱えようとすれば真空斬で妨害をし、中級魔法以上のものを撃たせないようにしていた。先ほどの黒色破壊光線をもう一度放たれば、今度こそ命はない。

「ふん、粘りはするが徐々に動きが鈍くなってきているぞ」

「化け物になって目まで悪くなったのか？あんな下らない理由で力を欲するような小者の攻撃、まだまだ何時間でも捌けるぞ」

「貴様あ！！まだ私を小者というのか！！！」

ラギシスが言うようにルークの体に更に傷が増えていく。完全に触手や魔法を避けきれなくなってきたのだ。だが他の四人に攻撃させるわけにはいかない。あえて更に挑発を続けるルーク。志津香はその姿を見ながら歯がゆい思いであった。ルークがその性格に似合わない挑発を続けているのが自分たちを守るためだというのは判っていた。だが、そんな彼に何もする事が出来ない。ミリとランも気がついていよう、悔しそうに呟いていた。

「あの馬鹿…自分だって限界だろうに…こっちの心配までしてる場合か…」

「こんな形で足手まといになってしまっなんて…」

志津香は既にルークから貰った元気の薬は飲んでいたが、やはりここまでのダメージを負ってしまったはその回復量は気休め程度であった。体は起こせるようにはなったが、集中できず魔力をあまり溜められない。普段であれば気にもならないのに、今は頬に当たる雨粒一つにも集中力を乱していた。それなのに、雨足は更に強まる。

「炎の嵐！」
「くっ……」

ラギシスの放った魔法を避けるが、横から来た触手に左足を刺される。すぐにその触手を斬り捨て、体勢を整える。じり貧である。端から見れば十分戦えている様にも見えるが、その実、迫ってくる触手を斬るのが精一杯で録に本体にダメージを与えられていない。魔法詠唱妨害の真空斬程度では今のラギシスの生命力ではすぐに再生してしまう。再生するのは本体だけではない。必死になって斬り落とした触手も、少しすれば再生してしまうのだ。この巨大な相手に立ち向かうには、攻め手が足りていなかったのだ。ルークは思う。せめて後一人、背中を預けられるほどの前衛がこの場に来てくれれば……と。

「……………?」

初めに異変に気がついたのはランであった。しかし、それは意外なことではない。ルークは交戦中、志津香は魔法詠唱に集中し、ミリはルークの戦闘を見ながらも気絶している妹が気になる様子。一番冷静に周囲の様子を窺っていたランが一番先に気がついたのは必然だったのだ。

「雨足が強くなっているの…私たちのいる場所だけだわ…」

「真空斬！真空斬！」

「ほらほら、どうした！小者呼ばわりした相手に追い詰められる気分はどうだ？」

ラギシスの触手を必死に真空斬で叩き落としながら、ルークは下品な笑い声を上げるラギシスを見上げる。そこでルークは意外なものを見る。巨大な肉塊に二つの目が付いたもはや人間とは呼べないラギシスの後ろ上方、洞窟の入り口である岩肌の上に一人の男が立っていたのだ。ルークの待ち望んでいた、背中を預けられる戦士。岩肌から飛び、その男はラギシスに向かって剣を打ち下ろす。

「不意打ちランスアタアアアック!!!」
「ぐぎやああああ!!!」

その男はランス。岩肌から飛び降りながらのランスアタックは、ラギシスの左半身を縦に真っ二つにし、更に剣が地面に付いた際に生まれた衝撃波で周りの触手も吹き飛ばす。斬られた身体の断面から緑色の液体がグジュグジュと流れ出る。

「ランス、貴様ああああ!!!」
「げ、まだ生きてるのか。しぶとい奴だ」
「来てくれるとはな、礼を言う。…仕事は終わったんじゃないのか?」

丁度ラギシスを挟み込むような位置関係になったランスに向かって、ルークが問いかける。ふん、と鼻を鳴らしながらランスがそれに答える。

「お前らに恩を売っておくのも悪くない。それに、むざむざラギシスに俺様の女たちを殺させることもないからな」
「誰があんたの女よ!来るならもっと早く来なさいよ!」
「がはは、英雄は遅れてやってくるものなのだ!」
「ふ、案外そんなもんなのかもな」

志津香がランスに文句を言う。と同時に、自分の体の異変に気がつく。先ほどまでよりも傷がふさがり、体力が戻っているのだ。

「これは…」

「体が動く。ミル、大丈夫か！」

「やっぱりこの雨…」

「みなさん、大丈夫ですか!？」

森の茂みからシイルが現れる。ランたちの周りだけ雨足が強まっていたのは、シイルが普通の雨の中に隠して回復の雨を唱えていたからだ。ランとミリも体が動く程度には回復し、ミリは気絶したままのミルに寄っていつて抱き起こす。ランは側に落ちていた自分の剣、ドラゴン・スレイヤーを握るが、その刀身は折れてしまっていて最早使い物にはならない。シイルの姿を見た志津香が声を上げる。

「ありがとう、シイルちゃん。でももう回復の雨はいいから、ヒーリングで私を優先して回復して！」

「え？」

「シイルさん、私からもお願い。この剣じゃもう援護も録に出来そうにないから」

「ルークは志津香を必要としていた。それに、あの二人が前衛なら俺は足手まといさ。ミルと一緒に下がっているよ」

「二人とも…ごめん、ありがとう」

「わかりました。いたいのいたいので、とんでけーっ！」

シイルの治療を受けながら、志津香は呪文を唱えながら両手に魔力を込め、ルークに言われた通り自分の撃てる最強の魔法の準備をする。黒色破壊光線より威力は劣るが、光属性最上級魔法に位置する攻撃魔法、白色破壊光線の準備を。

「ふん、くそっ、なんだこの触手は！ああ、めんどい！やはり帰ればよかった！」

「ま、今更引き返せないだろ。しっかりと働いてくれ」

言い合いながら触手を蹴散らしていくルークとランス。戦況は一気に変化した。ランスの登場によって触手の猛攻よりもこちらの手数の方が多くなったのだ。徐々にだが触手の数が間に合わなくなってきた。更にそれを後押しする要因がもう一つある。ドゴオオオン、と辺りに爆音が響く。ラギシスの顔面右下が燃え上がっていた。

「くうううう！マリア、育ての親でもある私に歯向かうかあっ！！」

「今更親面しないで。もうあんたには怨みしかないんだから！いつけー、チューリップ！！」

これがもう一つの要因、マリアの参戦だ。座り込んで泣いていたところにランスとシルが現れ、座標の問題から使用できないマレスケを置いて加勢に来ていたのだ。離れた位置からチューリップでルークとランスを援護する。最早優勢なのはラギシスではない。ラギシス自身もそれは判っているようで、徐々に焦り始める。

「無限の魔力を持つこの私が貴様らごときに！こうなれば、もう一度黒色破壊光線でまとめて吹き飛ばしてくれる！！」

「ぐおっ、一斉に触手が集まってきやがった！」

「させるか、真空斬！」

「いつけー、チューリップ！」

魔法詠唱を阻止しようとルークとマリアがラギシスの顔面を狙う。その攻撃はラギシスに直撃するが、呪文詠唱は止まらない。多少の

妨害で集中力を欠いていた先ほどまでと違い、ここへ来てラギシスも全力でこちらを殺しに掛かる。

「ちっ、まずいぞ！」

「ランス、俺が行く。マリア、援護を頼む！」

「あ、はい！了解です！」

ルークが触手の中を縫って全力でラギシスに向かっていく。全ての攻撃を捌くのは追いつかないため、道を阻むもののみ斬って捨てる。その分細かい触手からダメージを受けるがルークは構わず進む。あれを放たれば詰みだ。後先を考えているときではない。ランスではなくルークが向かったのはラギシスまでの距離がランスよりもルークの方が近かったこと、範囲は狭いが直撃時の威力だけならランスアタックよりも真滅斬の方が上だからだ。ラギシス目前まで迫ったルークの前に一層巨大な触手が立ち上がる。が、その触手はチューリップの砲撃で燃え上がる。

「いい援護射撃だ、マリア！お前のチューリップは戦闘の歴史を変えるかもしれないな！」

「あつたりまえでしょ！私のチューリップは世界に羽ばたくんだから！いけー、ルークさん！」

崩れ落ちていく巨大な触手を足場にし、ルークは駆け上がったいく。そして、ラギシスの顔面めがけて飛び上がった。

「篤胤さんとアスマーゼさんの仇だ！くらえ、真滅剣！！」

「馬鹿め、掛かったな！私を小者と馬鹿にした報いだ！！」

ラギシスがそう言った瞬間、ルークとラギシスの間に魔法結界が発動する。物理攻撃を遮断する結界だ。これでもうラギシスに剣は

届かない。そうして無防備になったルークを魔法で吹き飛ばす算段であった。これが他の戦士であったなら、この作戦は成功していただろう。だが、目の前に対峙した男が悪かった。ルークの剣は結界を打ち破り、ラギシスの顔面右部を真つ二つに斬り裂いた。

「ぐぎやああああ！！なぜだ、なぜ結界が…」

「運が悪かったな！良い手だったが、俺にだけは悪手だ！！」

「ルーク、いけるわ！離れて！！」

後ろから志津香が叫ぶ。遂に魔法の準備が整ったらしい。触手と戦っていたランスがその声を聞いてその場から離れる。ルークも横に飛び、ラギシスと志津香の直線上を空けようとするが、ラギシスの最後の意地か、その体を触手が掴む。

「ぐっ…」

「あ、馬鹿！何捕まってるんだ！！」

「ふはははは、このまま黒色破壊光線で吹き飛ばしてやろう！！」

ラギシスの顔目の前で捕らえられたルーク。左手は自由に動くが、剣を持つ右手が触手に捕まっているため、斬って逃げる事が出来ない。このままではルークを巻き込んでしまうため志津香が魔法を撃てないでいる。一方ラギシスは、先ほどまで詠唱していた黒色破壊光線の準備に取りかかる。最早逃げる手段はない、勝ちを確信したラギシスだったが、その巨大な目玉が鋭利な刃物で潰される。

「ぎやあああ！ど、何処に武器を隠し持っていた！！」

ルークが左手に持っていたのは、かなみから受け取ったくない。

懐に隠し持っていたそれでラギシスの目を潰し、触手が緩んだ隙に横っ飛びする。

「撃て、志津香！！決着はお前の手で付ける！！！」

「白色破壊光線！！！！！」

志津香の両手から、強力な光の光線が放たれる。強力な魔力を帯びたその光線は、一直線にラギシスに向かっていく。

「くそがああああ！その程度の魔力、私の黒色破壊光線で…！？」

黒色破壊光線で迎撃しようとしたラギシスだったが、放とうとした瞬間、体が崩れ始める。自分の体内で魔力が暴走しているのを感じる。

「ば、馬鹿な！無限の魔力と生命力を得るのではなかったのか。まさか…ラガールめ、この私を謀ったな！！おのれえええっ！！！」

ラギシスの言うようにフィールの指輪は欠陥品であった。四つ身につければ強大な魔力を手に入れるが、一定のキャパシティを越えたとき暴走をしてしまうのだ。だからこそ、ラガールは簡単にこの指輪を手放した。更にラギシスは知らなかったが、志津香が填めていた指輪だけ魔力の装填が足りていないのだ。外すときの呪いを回避していたため、平常時に吸い出す微量の魔力しか溜まっていなかった。これでは到底40人分に届いていない。欠陥品の指輪に未完成の儀式。その二つの影響でラギシスの体が崩壊を始めたのだ。再生力を維持できなくなったラギシスの体を白色破壊光線が飲み込んでいく。

「こ、こんなはずでは…弟子に二度も殺されるといつのか…お、おのれえええ！私は小者などではない！私が、私こそが最強のまほ…」

ラギシスは最後の言葉すら言い切れないまま、白色破壊光線と指輪の暴走によって塵となって消えた。丁度雨が止み、晴れ間が差し込む。

「勝った…のよね。やった！ラギシスを倒したわ！！」

「がはははは、俺様の敵ではなかったな！」

「やりましたね、ランス様！」

「ランスさん、ルークさん、シルさん、協力してくれて本当にありがとう…」

「あれ？おねえちゃん、ラギシスは？」

「ミル、良かった、目を覚ましたか。安心しな、全部終わったよ！俺たちの勝ちだ！」

その場にいたものが全員、歓喜に打ち震える。そんな中、座り込んで下を向いている志津香にルークは近寄っていく。

「お父様…お母様…やったよ…」

「…お疲れ様」

ルークが志津香の肩に手を乗せる。志津香もそれを振り払うことなく、ルークと話を続ける。

「そつちもお疲れ。正直、助かったわ。……………ありがとうね」

「必要ないさ。この復讐は一蓮托生だろう？」

「…そうね。それに、まだ終わっていない」

「ああ、ラギシスは所詮協力者。本命が…ラガールが残っている。だが…」

「だが、なに？」

「今日くらいは素直に喜ぼうじゃないか」

そう言って、ルークは全員でわいわいと喜び合っランスたちの方を指さす。それを見た志津香が少しだけ微笑む。

「…そうね、賛成だわ」

その笑顔を、ルークはジッと見つめる。見られていることに気がついた志津香は訝しげにルークに尋ねる。

「……何よ？」

「いや、昨日笑っているのを見たときも思ったが、笑顔だと一層アスマーゼさんと似ていると思ってな」

亡き母に似ていると言われ、少し嬉しくなる志津香であったが、ふと疑問を抱く。昨日見たときも思ったってどういうことだ。私はルークの前で笑ったことがあっただろうか、と。思考を巡らせて辿り着いたのは、昨晚酔っ払って爆笑していたという失態であった。全力でルークの足を踏みつける志津香。

「ぐあっ…け、怪我人になんてことを……」

「忘れないと死ぬって言ったでしょ？」

その時、消滅したラギシスが立っていた場所から煙が立ち上る。全員が一斉にそちらを見るが、そこにいたのは全裸の女の子たちだった。

「おお、美女がいっぱいではないか。君たちは何者だ？」

「というか、なんで裸なんですか！？何か着てください！」

「私たちはファイルの指輪に閉じ込められていた40人の女の子たちの魔力です。今はこうして元の持ち主の体を元に実体化していません。解放していただき、本当にありがとうございます」

「なるほどな、魔力に服も何もあつたもんじゃないってことか。彼女たちは元の持ち主の体に戻るのか？」

「いいえ、一度離れた魔力が戻ることはないわ。それに、もう戻るべき宿主が死んでいる子もいるでしょうしね」

ルークの疑問に志津香が答える。魔力が実体化した彼女たちもそれに頷き、その上でこちらに提案をしてきた。

「なので、私たちが消え去る前に何か一つだけ、あなたたちの願いを叶えたいと思うのですが」

「なんだと？」

「40人分の魔力です。かなりのことが叶えられますよ。自分だけの国？世界の王？最強の体？巨万の富？はたまた不老不死？そんなことでも今の私たちなら可能ですよ。ただ、皆様併せてお一つですが」

思いもかけない規模の大きい提案に、全員がざわつく。ただし叶えられる願いはたった一つ。

「……私、チューリップの「却下だ！」…ちょっと！せめて最後まで聞いてよ！」

「ランスが振り向くくらいバインポインにして貰えないかな…」

「んー、いきなり言われると浮かばないもんだな。ま、それで俺は充実してるって事かもしれないけどな」

「カスタムの町の復興資金をいただけないかしら…いや、それよりも復興自体をして貰った方が…」

「あの…ランス様とずっと一緒に…いえ、なんでもないです…」

「ラガールの居場所を…いえ、もう一度時空転移魔法を…」

「こら、それは駄目だって言っただろ」

は微量の魔力であったが、一応40人目とみなされたく、全裸の志津香の魔力体が立っていた。

「あ、見つけた」

「っ！見てんじゃないわよ！！！」

志津香の目つぶしがルークに炸裂する。ルークのうめき声と、ランスの笑い声が森に響くのだった。

第30話 英雄は遅れてやってくる（後書き）

「人物」

フィールの指輪の少女たち

フィールの指輪に閉じ込められていた魔力体が実体化したものの。正確には人間ではない。リーダー格の少女の名前はセシル。ランスと乱交をした後、消滅する。

「技」

回復の雨

光の雨を降らせて傷を癒す中級神魔法。神魔法の中ではヒーリングと並んで重宝される魔法。

白色破壊光線

白い光球から光の束が光線となって敵を飲み込む最上級魔法。黒色破壊光線には一歩及ぶが、一握りの天才にしか使うことの出来ない最強クラスの魔法である。

「装備品」

ドラゴン・スレイヤー

ランが装備していた剣。ドラゴン族に大ダメージを与えられるとされているが、そもそもドラゴン族と戦う機会なんてほぼないため、効果は役に立たない。それ以外は普通の剣である。

「アイテム」

元気の薬

ミリの薬屋で売っている回復薬。効果は世色癌より上だが、小型の瓶に入った液体のため道具袋の場所を取り、世色癌ほど気軽には持ち歩けない。

第31話 再び太陽の下で

・カスタムの町 工事現場・

事件が解決し、ルークとランスがカスタムの町を去ってから数日が経っていた。ラギンスが死んだことにより何の懸念もなくなった町には、元の平和が戻りつつある。今は少しでも早く町を復興しようと、住人全員が協力し合っている。

「うん、このペースなら当初の予定の一年じゃなくて、半年くらいで移住が完了できそうね」

「はい、これもマリアさんのお陰です。そろそろ昼の休憩時間ですのでこちらは任せて休んできてください。今日は単純作業が主ですので長めに行って貰って構いませんよ」

「じゃあ、お言葉に甘えてちょっと長めに貰いますね。それじゃあ後はお願いします」

地下から抜け出し、外で町再建の陣頭指揮を執るのはマリア。頭にヘルメットを被り、設計書を睨みながら指示を出していた。若いマリアが指揮を執ることに異論を挟む者は誰もいない。マリアの指示が的確なことも理由の一つだが、今カスタムは町が新しくなるに当たって若い者たちへの世代交代をしつつあったのだ。

・カスタムの町 町長の家・

「お父様、こういった場合はどのように指示を出せば……」

「うむ、これは役所に先に許可を得る必要があるな」

町長の家では、チサが前町長である実父ガイゼルから町長の仕事を教わっていた。数日前、前町長ガイゼルが引退を表明。新しくチサがカスタムの町長になっていた。

「お父様…やはり私なんかよりも町長に向いた人がいらしたのでは？ランさんとか…」

「いや、私の仕事を一番近くで見てきたお前だ。これ以上の適任はいない。ランさんも確かに優秀だが、まだ贖罪の気持ちは強い彼女にこれ以上の重荷は背負わせられないさ」

娘可愛さでの指名ではなく、しっかりと考えての後任であった。住人もチサの優秀さは理解していたため、反発はなかった。

「でも、どうしてお父様はいきなり引退してしまったのですか？」
「うむ…ルーク殿やランス殿を見て感じてはいたのだが…これから時代が欲しているのは若い力だ。事件後に町の防衛軍を設立するべきだと私に進言し、その細部まで練られた構想を持ってきたお前を見て決心したのだよ」

「あれはマリアさんや志津香さんに協力していただいた…」
「うむ、町長一人で全てが出来ると思っていたらそれは思いつきだ。だからこそ彼女たちと協力し合って新しい町を造って欲しいんだ。そのためには若者同士の方がいいのだよ。頼んだぞ、チサ！」

「…はい！お父様のご期待に添えるよう、精一杯頑張りますね！」

「はい、お薬10GOLDね。ミルが塗ってあげようか？」
「ありがとう、ミルちゃん。店のお手伝いできて偉いねー」
「えへへ」

ヨークス姉妹が営む薬屋ではミルが一人店番をしていた。町の人に迷惑をかけてしまったことへの贖罪と、少しでも姉の役に立ちたいという思いから、9才にも関わらずミルはよく働いていた。その頑張る姿を見ている町の人々、特に年配者からミルは可愛がられていた。カラーン、と店の扉が開く。役所に行っていたミルが戻ってきたのだ。

「あ、おねえちゃんお帰りなさい」

「ただいま、ミル。すっかり店番出来たか？」

「うん、おねえちゃんも防衛軍の話し合い終わった？」

「まあな。有事の際の実戦部隊指揮を任せられた。それと、薬屋があるから不定期にだが訓練も見てやることになった。やれやれ、柄じゃないんだが…」

カスタムの町でも屈指の剣の使い手であるミリは、ランと共に有事の際は最前線で戦うこととなった。それだけならいいのだが、どうも人の上に立つというのは苦手らしく、ポリポリと頭を掻いた。

「頑張つてね、おねえちゃん」

「ま、やるだけやってみるかね…ゴホツ、ゴホツ…」

「あ、また咳してる。風邪だったらゆっくりしてなきや駄目だよ！」
「なに、大したことないさ。それよりも薬の配達のお使いに行つてきてくれないか？」

「はい。無理しちゃ駄目だよ、おねえちゃん」

配達の荷物を持って元気よく店を飛び出していくミル。その妹の背中を見送りながら、ミリはまた咳き込んでいた。

「ゴホツ、ゴホツ…うーん、あんま体調良くないな。一度ちゃんと見て貰った方がいいかもしれないな。今度セルのところにも寄ってみるか…」

・カスタムの町 酒場・

「いらっしやい。あら、珍しいですね、真知子さんがウチに寄るなんて」

「ふふ、たまにはね。あら？でも満員みたいね。やっぱりお昼時は混むのね」

「あ、真知子さん。私のテーブル余裕あるんで一緒に食べませんか？」

「じゃあ、お言葉に甘えて。ありがとう、トマトさん」

誘いに応じ、真知子はトマトと同じテーブル席に着く。エレナにへんでろばを注文し、既に食事をしているトマトとしばし談笑する。

「トマトさん、防衛軍に立候補したんですって？」

「そうなんですかー？」

「ふふ、貴方のことでしょう。その疑問系で話すキャラ付け、防衛軍として有事の際は場を混乱させるだけだから、今のうちに止めておいた方が良くいわよ」

「でも私特徴ないんで、こうでもしないと印象に残らない気が…」

「ミミックをペットにしている時点で十分特徴的よ、あなたは。で、どうして防衛軍に立候補したの？」

「えへへ、冒険者になるのが私の夢なんです。なので、防衛軍で鍛えていただいて、いつか冒険に出たいなーと思っっているんですよ」
「ふふ、素敵な夢ね。それと、私も防衛軍に入ることになったからよろしくね」

「え？そうなんですかー？」

「前線ではなく、後ろで戦略を練る方だけだね。私のコンピュータが役に立つからってお願いって、マリアさんに誘われたの」

「はい、へんでろばお待たせ！」

エレナが出来たてのへんでろばを持ってくる。少し店が空いてきたようで、エレナがそのまま真知子とトマトの話に合流する。

「そういえば今日子さんは帰ってきたの？」

「まだよ。全く、バード君に失恋したくらいでしょうがない子ね。それより聞いたわよ。エレナさん、初恋の人が見つかって付き合っているんですって？おめでとう」

「あ、そうなんですかー。おめでとうございますー。」

「ありがとう、二人とも。偶然酒場に寄った人がそうだったの。今もうラブラブなんです」

「ふふ、先を越されちゃったわね」

へんでろばを食べながら意味深に笑う真知子。彼女の態度にエレナがピンと来る。

「あ、もしかして真知子さんも好きな人がいるのかしら？ひよっとして、この間カスタムを救ってくれた…」

「あ、わかりました！ランスさんですねー！」

「ふふ、残念ハズレ。もう一人の方よ。完全な片思いだけどね」

「おお、ルークさんか！というか、トマトさんはどうしてランスさんだと思ったのよ」

確かにランスもある種の魅力はあるが、普通に考えればルークの方である可能性が高いのに、なぜランスだと思ったのか疑問に思うエレナ。食後のお茶を飲みながらトマトがボソツと呟く。

「だって…そうじゃないと私と一緒になっちゃいますし…」

「へ？」

「あらあら、ライバルになっちゃったわね。他にも多そうだけれども」

- カスタムの町 役所 -

「くしゅんっ！」

「あら？風邪ですか？」

役所ではランがかくしゃみをしていた。風邪ではないのでどこかで噂話でもされているのだろう。今は町の復興のために、リーザスからなんとか好条件で再建費用を借り入れられるよう頑張っていた。しかし、ルークに以前話したとおり、資金の借り入れは難航していた。

「ランさん、やっぱりリーザスからお金を借りるのは難しそうですか？」

「うん…こちらの望む金額だと中々条件が厳しくて…あんな条件飲んでしまったら、カスタムはリーザス領になってしまうのも同然なの…」

「難しいですね…ゼスの方からは借りられないんですか？」

「それも厳しいのよ…せっかくみんなが頑張ってくれているのに…」

お金がないんじゃない？」

その時、役所の扉が盛大に開かれる。見れば慌てた様子で役所職員員の亮子が立っていた。

「ラ、ランさん！大変です！！リーザスから書状が届いたんですが、費用の援助をして貰えるそうです！！」

「えっ！？一体どうして！？」

ランが亮子の持ってきた書状を見る。中には亮子の言うように、多少の利子はあるもののそれ以外はほぼ無条件で資金の提供をしてくれると書いてあり、リア王女の署名も付いていた。驚くほどの好条件である。だが、つい先日までこちらの足下を見た条件を出してきていたのに、いったい、と疑問に思うランだったが、ふとその書状とは別にもう一枚封筒があることに気がついた。

「あ、そちらの手紙はランさん宛だったんで呼んでいません。そちらもリーザスからです」

確かにエレノア・ラン宛と書いてある。封を開け、中の手紙を読むラン。中にはほんの少しの言葉しか書いていなかったが、それを読み終えたランの目からは、自然と涙が零れていた。

「ど、どうしたの、ランさん！」

「いえ、大丈夫です。……ありがとう、ルークさん」

ハラリ、と机の上に落ちた手紙を亮子が見る。そこにはこう書かれていた。

・ルークと約束したから資金提供してあげる。ルークに感謝しておきなさい。リーザス国王女 リア・パラパラ・リーザス・

「よろしかったのですか、リア様？」

「ん？どうしたの、マリス？」

昼食に好物のレアステーキを食べているリアに質問を投げかけるマリス。今この部屋にはリアとマリスとかなみしかいない。となればそれ相応の密談だろう。

「リア様の指示通りカスタムに資金提供をすることにはなりましたが、本当にあのような条件で……」

「条件っていうのはルークも含んでってことよね？」

コクリ、と頷くマリス。思い出すのはカスタムを訪れた日のこと。酒場の二階でルークとリアの間で結ばれた密約。それはカスタムに資金援助をする代わりに、ルークが有事の際には他国よりもリーザスに優先して協力するというだけのものだった。

「リーザスに兵として来るのならまだしも、一冒険者でしかないルーク様が有事の際に協力したところでたかがしれています。それもあのような曖昧な約束では……」

「ああ、いいのよ、それで。そういう面には期待していないから」

「え、そうだったんですか？…あつ、失礼しました」

リアの返答が予想外だったかなみは思わず声を上げてしまう。主君の話に割って入ってしまう形になったため、すぐに謝罪をする。

「ふふ、かなみはルークに来て欲しいものね」

「……いえ、そういう訳では……」

「それで、期待していないというのは？」

マリアの問いに、スツと政治家の顔つきになるリア。

「元々カスタムとは大した条件を結ぶとは思っていなかったわ。

あっちの担当のランとかいう女が結構曲者だったしね。だから最終的には適当な条件で折り合いを付けるつもりだったの。領地にしても反乱を起こしそうな町だったし、それ以外で絞り上げても復興中の町じゃ大して旨みもないしね」

「それならば、恩を売る形にしておく……」

「そういうこと。ルークに聞いたところ、優秀な技師がいて今後伸びる可能性がある町だとか言っていたしね。まあ、これはそんなに信用していないけど」

「なるほど。そのように元々適当なところで資金を出すつもりだったのに、ルーク様からわざわざ要請があったと」

「ラッキーだったわ。こちらとしては殆どノーリスクでルークにも恩を売れるんだからね」

「ですが、あの条件は少し緩いのでは？」

「本当ならもつと良い条件にしたかったんだけど、中々にあっちも狸だったからね。とりあえず恩を売る形にだけしておいたの。まっ、先行投資ね」

「一冒険者のルーク様に、恩を売るだけの価値があると……？」

最後のステーキ片を頬張りながら、リアが薄ら笑いを浮かべながら断言する。

「あるわ。ダーリンほどではないけどね」

「どうしてそのようにお考えで？」

「勘」

「……なるほど。ですが、私もその勘には同意しておきます」

「じゃあ、話はこれで終わりね。かなみ、食後のワインを持ってきて」

「リア様、午後の職務がありますので、ワインは……」

「えー、ステーキ後のワインはド・ハニーワって決めてるのにー」

「珍しく昼からステーキなんて食べるからですよ」

この時点で有事の際にはリーザスに協力するという約束に何の期待もしていないリア。しかし、これより六ヶ月後、彼女はこの条件を結んでいた幸運に感謝することになる。LP0002年4月、歴史に残る戦争、リーザス解放戦争の時に。

・アイス町 キースギルド・

「がはははは、おら、さつさと金を払え！」

ランスはカスタムの町の事件の解決料を貰いにキースギルドを訪れていた。後ろにはシルが控えている。キースが耳を掻きながらイヤそうな声で答える。

「うるせーな。ほら、これが今回の解決料だ。あつちで色付けてくれたみたいで、ランスとルークにそれぞれ50000GOLDずつだよ。ルークはもう受け取っていつちまったぜ」

「カスタムの町も復興で大変ですのに…ガイゼルさんに感謝しないといけませんね、ランス様」

「がはは。まあ俺様の活躍を考えれば当然だな！」

「キースさん、ルークさんはもう次の仕事に？」

「いや、仕事は受けてない。だけどゼスの知り合いに会いに行くって言つて、もう町にはいないぞ」

「やれやれ、忙しい奴だ。帰るぞシル。これでしばらく仕事はせんぞ！」

「はい、ランス様！」

「あつ、ちよつと待て、ランス！」

そう言つて金を受け取り部屋を出て行くこととするランスだが、キースに呼び止められる。

「なんだ？下らん用事だったら殺すぞ」

「いや、ルークには聞きそびれちまつたんだが、お前ら、一緒に仕事をしたのか？」

「まあ、そうだ。俺様の下僕として使つてやったわ！がはは！」

「以前の誘拐事件の時にも一緒に協力して解決したんですよ」

「………そうか、いやなんでもない。悪かったな、変なこと聞いて」

「ふん、下らん用事だったが、金も入つて気分が良いから許してやる。がはははは！」

「あ、待つてください、ランス様！」

そう言い残し、部屋を出て行くランスの背中を見送った後、椅子に深く座り込んだキースが一人呟いていた。

「………まさか、あいつらがな。………ルークは知っているのか？」

葉巻に火を付ける。思い出すのはかつてのこと。ルークとランス、その二人の過去を思い出しながら煙を吐いた。

「これも運命なのかね………」

・カスタムの町 志津香の部屋

「ほら、起きて志津香！」

「ん？ああ、マリア。おはよう……」

「おはようって……もう昼過ぎよ、全く。」

昼の休憩を長めに貰ったマリアは、志津香の部屋を覗きに来ていた。そこには寝ぼけ眼の親友がいた。どうやらこの時間まで寝ていたらしい。

「昨日ちよつと遅くまで調べ物しててね……」

「もう。3時からランと防衛軍のことで話し合いがあるんでしょ」

「んー……明日じゃ駄目かな？」

「駄目に決まってるでしょ。ほらほら、起きた、起きた！」

「あんた年々おばさんくさくなっていくわね」

「もう！怒るわよ！」

志津香を布団から無理矢理引っぺがす。観念して起き出した志津香は、マリアが持ってきたお弁当と一緒に取ることにする。

「おいもの塩、きいてないわ。もう少し濃い方がいいな」

「だめよ、体に悪い。志津香、放っておくと気分次第で何も食べなかつたりするんだから」

「別にいいじゃない」

「もう……お料理作つたら、志津香の方が上手なのに……」

「気が乗らなきゃ作る気にならないのよね……」

「で、作るのには栄養バランス考えてない自分の好物だけなんだもん」

文句を言い合う二人だが、それも親友だからこそだろう。マリアが数日前の事を思い出しながら話題を変える。

「色々あったね…」

「…そうね」

「本当に、ランスとルークさんがいなかったらどうなっていたか」

「ま、感謝はしてるわ。一応ね」

「私たちを助けてくれた。ラギシスも倒した。町に太陽を取り戻してくれた。…ランスがしょっちゅう自分のことを英雄だと言って言ってるけど、ランスとルークさん、本当に英雄だったりして」

「…少なくともランスは違うでしょ。ごちそうさま」

そう言っつて弁当箱を片付け始める志津香。そんな親友に、マリアはしたり顔で尋ねる。

「あら？じゃあルークさんは英雄かもって思ってるってこと？」

「……………言葉のあやよ。…なにその顔、ふん！」

「い、いたふい…はなひて…」

なんだかむかつく顔をしていた親友の頬を引つ張る志津香。最初こそ真剣な顔をしていたが、段々と笑いが堪えられなくなる。

「ふふ、おかしな顔してるわよ、マリア」

「もう。…あ、そろそろ休憩終わるから行くね。志津香もちゃんと役所にいくのよ！」

「はい、はい」

志津香の家を出たマリアは工事現場に向かって歩き出す。親友のことを思いながら、素直じゃないんだから、と思っていた。マリアは知っている。机の中にペペさんが渡してくれた集合写真を志津香

が大事に仕舞っていることを。あまりそういうのには無頓着で、昔カスタムの人たちで撮った写真なんかは適当にほん投げであったのに、なぜその写真は大事に取っているのか。そんな理由は一つしかない。カスタムの人以外で大事な人が写っているのだ、とマリアは考えていた。

「さて、この写真どう処分しようかしらね」

マリアは知らない。集合写真を仕舞っている場所よりも更に奥、わざわざ魔法で結界までした封筒の中に入っているもう一枚の写真。ペペがルークに渡す前にネガを処分したので、既にこの世に一枚しか存在しない写真。ルークと、ルークに酔っ払って抱きつく志津香のツーショット写真。処分したのであればさっさと炎の矢でも燃やしてしまえばいいのに、なぜか未だに処分を先送りしている。その真意は志津香しか知らない。

「うわっ、眩しい。やっぱり太陽って良いわね！」

地下から外へ戻ったマリアは、太陽の明るさに目を眩ませながらも、嬉しそうにしていた。みんなで協力して町に取り戻した太陽。その太陽の下、午後の仕事に一層気合いを入れるマリアだった。

その後、カスタムの町は諸国も目を見張るほどの速さで復興を遂げただけでなく、大陸随一の技術を持った都市としてその名を轟かせる。それらを成し遂げたのは、前町長ガイゼルの見越したとおり、新世代の若者たちであった。

第31話 再び太陽の下で（後書き）

「料理／食材」

ド・ハニーワ

リアが好んで飲むワイン。食後、特にステーキの後は必ずこのワインを飲む。

「都市」

カスタムの町

自由都市。一度地下に沈んでしまっただが、その後驚くべき速さで実に見事な復興を遂げる。近年ではその高い技術力から諸国の注目を集めている。

第32話 炎の色男

L P 0 0 0 1 1 1 月

- ゼス サバサバ -

ゼス北部に位置し、キナニ砂漠に面した都市、サバサバ。その位置関係からゼスの田舎とも呼ばれているが、町を歩いていた一人の男が呟く。

「これで田舎ならアイスは何世代も前の町だな…」

そう呟いたのはルーク。立ち並ぶ様々な店の数、洋服屋だけどこまで何件見たことか。飲食店も多い。小さな町では酒場しか食事場所がないところもあるというのに。ふう、とため息を付きながら、待ち合わせ場所であるオープンカフェを目指す。ルークはある人物と会うためこの町に来たのだ。目的地のカフェが見えてくると、外に置いてあるテーブル席から赤い髪の男が手を振ってくる。

「おう、ここだ、ここだ！」

「待たせちまったかな？」

「なーに、俺も今来たところさ。…こういうセリフは女の子だけに使いたいもんなんだがね」

「相変わらずだな、サイアス」

軽口を叩き合いながら席に着くルーク。目の前の男の名前はサイアス・クラウン。ゼスの軍に所属する魔法使いである。ルークとはもう10年以上の付き合いになる。

「聞いたぞ、四將軍に抜擢されたってな。兵になってからだった一

年でそこまでいくとはな…」

「国王が変わってから実力主義に変わってきているからな。ま、俺の実力なら当然の抜擢ってとこだ」

一月前、サイアスは炎の魔法団団長に抜擢され、四將軍となっていた。魔法兵になってから一年での異例の出世である。サイアスが軍に入ったのは24才の時。これはかなり遅い年齢である。というのもモクラウン家はゼスでも高貴な家柄で、軍に入るのを周りがよしとせず、妨害工作をされていたのだ。国王が変わり、制度が変わってようやく軍に入ることが出来たサイアスは、その頭角をメキメキと現したのだ。

「ふ、ただの学生だったお前がね。感慨深いものがあるよ」

「同じ年なのに感慨深くなってるじゃねーよ」

サイアスがルークと出会ったのは12年前の学生時代、その日はギルド仕事で学校に何人かの冒険者がやってきていた。近くに巣を作ってしまったモンスターを何とかして欲しいという依頼であったが、突如そのモンスターが学校を襲ったのだ。学生であったサイアスも駆り出され、モンスターの対処に当たる。冒険者は大して役に立たず、ほとんどの教師も実戦経験はほとんど無いらしく、狼狽えてばかりであった。まともに戦えていたのはサイアスと臨時講師として偶然居合わせた雷帝カバツハーン、そして自分と同じ年くらいの冒険者の三人だけであった。それが、ルーク。この事件を期に互いに興味を持ち合い、有事の際には互いに協力し合う関係となる。

「ご注文のぴんくうにゅーん、お待たせしました」

「お、ありがとう」

「この寒いのにそんなにキンキンに冷やしたのを飲むのか」

「いいんだよ。普段から炎ばっかり使ってるから、体を冷やさない

とな

「……………」

「……お前は何飲む？」

「……そうだな、エスプレッソのダブルで」

「……………」

「だとさ。持ってきてくれるか」

「かしこまりました」

店に来たばかりのルークに注文を聞こうともしない店員。サイアスが気を効かせて注文を頼んでくれる。

「……悪いな」

「なに、もう慣れたさ。……だが、この国は相変わらずか？」

「まあな。3年前、新国王にガンジー様が即位してから色々変わったては来ているが…膿がでかすぎる」

「親戚もそうだったっけか」

「金融長官のズルキな。ま、わかりやすい膿だ。が、でかすぎて取り除けない」

「難儀なもんだな。それにしても、サバサバがゼスの田舎ってのは誰が呼び出したんだ？」

「田舎さ。呼び出した奴らの言うところの、ゼスの都市の中ではな……………なるほど、そういうことか」

これこそがゼスに古くから蔓延る思想、魔法使い絶対主義。魔法使いにあらざれば人にあらざるという考えで、魔法を使えない者は2級市民とされ奴隷のような扱いを受けることになる。こういった2級市民の暮らす町も多くあるのだが、サバサバを田舎と言いだした連中はそういった市民が暮らす町を、町として認めていないのだろう。

「で、俺を呼び出したのはどういった要件だ？」

「二つ頼みがあってな。小さい方から片付けるか。一人写真家を紹介するから、実力を見て貰えるよう便宜を図って貰いたい」

「珍しいな、そんな頼み事をしてくるなんて」

「なに、実力が伴わなければ仕事を回す必要はない。あくまで機会を与えて欲しいんだ」

「了解、そのくらいならおやすいご用だ。名前は？」

「ペペ・ウイジーマ。これが連絡先だ」

「女か！？なんだ、なんだ。遂にお前にも春が来たのか？」

大げさに身を乗り出してくるサイアス。それを片手で制止するルーク。

「違う、違う。最近受けた仕事で知り合っただけさ。色々あって、交換条件で受けちまったんだ」

「なんだ、つまらん。お前はもつとがつつかなきゃ駄目だ」

「お前ががつつきすぎなんだよ」

「エスプレッソお待たせしました」

注文していたエスプレッソが持ってこられる。サイアスの注文は目の前に置いていたのに、ルークの注文はテーブルの端に置いて店員はさっさと立ち去ってしまう。ゼスに来るたびにこういった仕打ちを受け気味なので、もう慣れたものだ。エスプレッソを目の前に寄せ、一口飲んだところでサイアスが話を続けた。

「で、二つ目の要件は？」

「……人を捜している。名前はラガール。中年の男魔法使いだ」

「ラガール…二年前に四天王に就任した奴と名前が一緒だな」

「本当か！？」

「が、そいつは中年の男じゃない。若い女だ。名前はナギ・ス・ラガール」

「……そいつに近親者はいるか？」

「さあな。いないってことはないだろうが、そもそもナギ自身、ほとんど公の場に姿を現さないからな。お陰で口説けやしない」

「……相手は四天王。先走りすぎるのも危険か……もし人違いなら取り返しがつかんしな……」

「……訳ありか？必要なら情報を集めるが？」

サイアスの目が若干真剣味を増す。普段の軽い印象とは違う、真面目な表情。ルークの様子から、ペペの件とは違って重要な件だと察したらしい。流石は四將軍と言ったところか。

「こちらとしてはありがたいが……ばれたらお前も危ないんじゃないのか？」

「なに、危なくなったらナギを口説こうと思ってたから調べてまじったって言えば、俺なら逃げられるさ。だが、さっきも言ったように中々公の場に出てこない相手なんでな、時間は掛かると思うぞ」

「いや、どれだけ時間が掛かっても構わない。手がかりもない状況だからな、わずかな情報でも欲しいんだ。スマン、恩に着る」

「なに、いってことよ。その代わりと言っちゃあなんだが、この後仕事を手伝ってくれないか？」

「仕事？」

「最近、キナニ砂漠に不気味な塔が突如として現れたんみたいでな。その塔から新月の日に盗賊団が出てきて、近くの町から少女を攫っているらしい。その調査を千鶴子様から頼まれたんだ」

「なるほど、それで待ち合わせ場所をキナニ砂漠に近いサバサバにしたのか。いいぜ、丁度抱えていた仕事も終わったところだしな」
「そういうこと。話が早くて助かるよ」

そう言って、残っていたびんくうにゆーんを飲み干すサイアス。依頼を受けたルークだが、気になるところがありサイアスに尋ねる。

「ゼスの軍は動かないのか？」

「被害を受けてるのが自由都市なんでな。軍を大々的に動かすと周りを刺激しちまうのさ。で、少数精鋭って事で俺が頼まれたわけ。一応冒険者を何人が雇うのは許可されてるんだが、あまり多くても邪魔なんでな。安心しな、依頼料はしっかりゼスから払われるからよ」

「こつちの頼みも聞いて貰ったんだし、別にいいんだがな…」

「相変わらずか。前から言ってるが、お前は金に無頓着すぎる。いつか痛い目見るぞ」

「こればかりは性分だな…一応心に留めておくよ」

「その言葉聞き飽きたぞ……」

ルークの相変わらずな態度に呆れるサイアス。そんなものかね、と思いながらルークもエスプレッソを飲み干す。

「ってことは、俺とお前の二人だけか？」

「いや、もう一人上層部曰く有望な若手が一緒さ。ま、ガチガチな人物だがな。お、来たみたいだ」

サイアスが誰かを捜している様子の少女に向かって手を上げ合図をする。どうやら気を利かせてルークとの話が終わりそうな頃合いを見計らって、待ち合わせ時間をずらしていたらしい。出来る男である。手を上げているサイアスに気がついた少女がこちらに寄ってくる。髪の色は茶、ショートヘアで、左右を黄色いリボンで止めている。隣に二体の指揮ウォール・ガイを連れている。

「ゼス治安部隊副隊長、キューティ・バンド。ここに。お待ちせしめてしまって申し訳ありません、サイアス様。今回の抜擢に深く感謝すると共に、粉骨碎身…」

「堅いのはいいさ。ま、よろしく頼むよ」

そう言っただけで長くなりそうなキューティの話に切るとサイアス。サイアスに敬礼をした後、ルークの方に侮蔑の視線を送るキューティ。そのままサイアスに進言する。

「サイアス様。このような魔法使いでもない冒険者がおらずとも、私が前線もこなせますので大丈夫です！」

「なるほど、ガチガチだ」

「だろ？」

「？」

先ほどのサイアスの言葉を思い出して失笑するルーク。サイアスもそれに答え、何のことだか判っていないキューティは不思議そうにサイアスを見ていた。

「じゃ、そろそろ行くか。お姉さん、領収書を頂けるかな。宛名は

王者の塔で」

「まめだな」

「サイアス様の行動は当然のことです。これだから定職と呼べるものについていない下品な冒険者は……」

後ろでぶつぶつ言っているキューティ。完全に魔法使い絶対主義思想に染まっている。あまり気にしないことにしたルークは、領収書を受け取って席を立つサイアスの後を歩きながら、今回の仕事について問いを投げる。

「で、盗賊団の情報とかはあるのか？」

「名前がグリーンスコルピオンってことしか判っていない。ま、町に着いたら情報を貰える手はずになっているから、そこで聞くこと

にしよう」

「突如として現れた不気味な塔……やはり魔法使いの仕業でしょうか？」

キューティがルークに見向きもせずサイアスに問いかける。

「さて、どうだろうな。………そういえば、その塔だが町の人たちはおかしな呼び方をしているらしいぞ」

「おかしな呼び方？」

「ああ、どうも形状が人の形に似てるとかで付いた呼び名らしい。その名も………」

先を歩いていたサイアスが、振り返りルークとキューティを見る。フツ、と少しだけ笑い、町の人たちが呼んでいる塔の通称を口にした。

「砂漠のガーディアン」

第32話 炎の色男（後書き）

「人物」

サイアス・クラウン

LV 34 / 41

技能 魔法LV2

ゼス四將軍の一人にして炎の魔法団団長。高貴な家柄であるため、周りには軍に入ることを見越され、自らの意志で入隊。わずか一年で四將軍へと上り詰めた実力者。趣味はナンパという軽い性格ではあるが、公私はきっちりとしており、目上に対する礼儀もなっているため、上層部からの覚えも良い。ルークとは古い付き合いである。

キユーティ・バンド

LV 17 / 28

技能 魔法LV1

ゼス治安部隊副隊長。若いながらに優秀な人材で、今回の抜擢は隊長への昇進も見越し、実戦経験を積ませる意味合いが強い。幼い頃からそう教えられてきたため、ガチガチの魔法使い絶対主義思想家。攻撃魔法よりも支援魔法を得意としている。その真面目一辺倒な性格から友人、恋人はおらず、話し相手は側に控えた二体の指揮ウォール・ガイだけ。

「モンスター」

ウォール・ガイ

ゼス国内で魔法詠唱の間の壁として重宝される生成生物。壁としてだけでなく、雷での攻撃も可能。指揮ウォール・ガイは隊長、副隊長といった一部のものにしか与えられない名誉あるウォール・ガ

イである。

「料理／食材」

びんくうにゅーん

キンキンに冷やすと最高に美味いとされる飲み物。ランスも好んで飲む一品。

エスプレッソ

世界的に飲まれているが、特にゼスのイタリア周辺でよく飲まれているコーヒー。ゼス四天王、山田千鶴子の好物でもある。

「その他」

ゼス四天王

ゼス王国において国王の次に地位の高い四人のこと。国政と四天王の塔の管理が主な役割。かつては名門貴族による世襲制であったが、近年、実力主義制に改められた。

ゼス四將軍

ゼスが誇る魔法部隊、炎軍、氷軍、雷軍、光軍を束ねる四人の団長のこと。政治絡みの四天王と違い、以前より実力主義で選抜されていた。

第33話 グリーンスコルピオン

- ジウの町 -

キナニ砂漠南東部に位置する町、ジウ。本来なら専用の砂漠案内人無しに入るのは自殺行為と呼ばれているキナニ砂漠だが、ジウの町は砂漠の中でも本当に端に位置しているため、比較的簡単に立ち寄ることが出来るのだ。これが砂漠の中央に位置するシャングリラに行こうともなれば話は別だが。

「依頼のあった町がジウで良かったよ。シャングリラだったらこの依頼、断っているところだったよ」

「無責任な。これだから魔法使いじゃな…」

「ああ、俺もだ。ん？何か言ったか、キューティ？」

「……………いえ、何も言っておりません、サイアス様」

ルークに苦言を呈そうとしたキューティであったが、予想外にもサイアスがルークに乗ったため、何も言えず押し黙る。これから一緒に依頼を受ける仲間だ、少しは仲良くなっておこうとルークがキューティに話しかける。

「ところで、俺は君を何と呼べばいいかな？」

「別に呼ばなくて結構です」

「キューティ、ルークはこれから一緒に戦う仲間だ。仲良くやれ」

「……………はっ、サイアス様がそう言うのであれば、善処します。私のことは好きに呼んでください」

「ではキューティと呼ばせて貰おうかな。うん、良い名前だ」

「……………馴れ馴れしくしないでください」

「さて、町の案内人が来ているはずなんだが…」

ジウの町に入ってすぐの広場に辿り着いたサイアスは、辺りを見回す。すると、執事服を着た老人がこちらに近寄ってくる。

「貴方様がサイアス様で？」

「ああ、案内人ですか？」

「ようこそわざわざお越しくございました。主人がお待ちですので、どうぞこちらへ」

そう言ってこちらの手荷物を受け取り、前を歩き出す老執事。ルークたちはその後を付いて歩きながら、ジウの町を見回す。発展した町とは呼べないが、町のそこらかしこに行商人があり、活気に溢れた町だ。

「文化の遅れた国ですね」

「そうか？活気に溢れる良い町じゃないか」

「我がゼスは貴方の住んでいるところとは生活水準が違いますからね」

「まあ、生活水準は高いのは事実だな。ごく一部の話だが」

ふふん、とルークに自慢げに語るキューティの横からサイアスが一言加える。確かに魔法使いが生活する場所だけを見れば、資源豊かなリーザスよりもその生活水準はかなり上、世界でも屈指と言っているものだろう。その反面、2級市民の生活は悲惨極まりないのである。

「サイアス様まで…より優秀な者が良い暮らしをするのは当然のことではないですか」

「優秀ねえ……」

「魔法が使えるか使えないか。ただそれだけのことなんだがね……」

「それが大事なのです！魔法使いこそが人の上に立つべきなのです！！」

そう熱弁するキューティの前、道案内をしている老執事の表情が若干影を落とす。ジウの町はゼスに近いこともあり、こういった思想の輩が町を訪れることも多い。彼のように年を重ねている者は、それだけ嫌な思い出も多いのだろう。ルークは老人に聞こえないように、キューティに小声で忠告する。

「キューティ、そういった思想を持つのは良いが、ゼス国内を出たらもう少し自重すべきだ。前の老人がいい顔をしていない。それに、変な恨みを買って自分の身を危険にさらすかもしれないぞ……」

「……余計なお世話です」

「さあ、着きました」

町の中央部に位置する一際大きな屋敷。ここにこの町を治めている長であり、今回の調査に当たって協力を申し出てくれた人がいる。執事に誘われるまま、屋敷に入っていく三人。長の部屋の前までやってきて扉を開けると、部屋の中には褐色の肌をした黒髪の美女がいた。

「ようこそ、サイアス様とお連れ様。私がこの町の長を務めます、アニーでございます」

「ほう、貴方の様な美人が長まで勤めるとは。才色兼備であらせられるようですね」

「まあ、お上手ですこと」

顔を見るや否やいきなり口説き文句を言う辺り、相変わらずだと内心呆れるルーク。まあ、いきなりやらせるとか言いそうな人物も知ってはいるが。

「貴女を口説くのはまた後ほど、仕事が終わってからにするとして、グリーンスコルピオンについてお聞かせ願ってもよろしいかな？」
「三ヶ月前、突如として現れたグリーンスコルピオンという盗賊団によって、この三ヶ月で20人も少女が連れ去られました」

「20人も！？何も対策はしなかったのですか？」

同じ女性であるキューティが食いつく。アニーは目を閉じ、首を横に振りながら答えた。

「この町は元々殆ど武力を持っていません。なんとか寄せ集めの戦力で自警団を作り立ち向かいました。まるで歯が立たず、既に何人もの死傷者が出ています。グリーンスコルピオンについて判っているのは、首領が女性であるということだけです…」

「女性が…男なら少女を攫う理由も判るといふものだが…」

想像してしまったのか、キューティの顔が曇る。攫われた少女を心配している様子だ。魔法使い至上主義ではあるが、その辺りの線引きは出来ている辺りまだまともな方である。思想が酷いことになる、魔法使いでない者が死のうが生きようがどうでもいいのか言い始める有様だからだ。

「サイアス、最近少女が裏で頻繁に売られているという情報は？」

「一応少女が攫われているって事は聞いていたから来る前に調べてきたが、特にはなかったな」

「となると別の理由か……」

ふとルークの頭に志津香の顔が浮かぶ。そういえばカスタムの町の事件と同じ展開だ。

「少女の生気を使って魔力を溜めている、という可能性は？」

「なるほど、禁呪か！有り得るぞ！」

「そんな手段があるんですか！？」

サイアスが同意し、キューティが驚く。どうやら志津香も使っていたこの方法は、その非人道的な行いから魔法使いの間では禁呪とされており、ゼス国内で行おうものなら厳しく罰せられるものらしい。若い世代では知らない者も多いらしく、キューティが驚くのも無理はない。

「となると女首領、あるいはそれ以外に魔法使いが関わっている可能性が高いな」

「そのような悪党、魔法使いの恥です！必ず捕まえましょう！！」

ぐつと拳を握りしめて宣言するキューティ。その様子を見ながら、ルークはキューティの評価を改めていた。なんだ、全然良い子じゃないか、と。すると、長であるアニーが物騒な事を言い出す。

「女首領だけは、捕らえるのではなく必ず殺してください！」

「……必ず殺せとは物騒ですね。あまり美人が口にしていい言葉ではない。訳を聞かせて貰ってもよろしいかな？」

「人々を多数殺害した首謀者として、どうしても許しておくことが出来ないのです！塔に攫われた少女たちも心配です。お願いします！」

アニーの瞳は真剣そのもの。しかし、若干ではあるが思い詰めたような表情をしているのをルークは見逃さなかった。町の長としてどうしてもその女首領が許せないのだろうか。あるいは…と、ルークが考える。サイアスも若干思うところがあつたようだが、キューティが力強く答える。

「任せてください。こちらのサイアス様はゼスでも屈指の炎の魔法使い、そのような田舎盗賊、パパパツと打ちのめしてみましよう！」
「ま、大船に乗ったつもりでいてください、アニーさん」

- ジウの町 酒場 -

アニーとの会合を終え、情報収集も兼ねて酒場で夕食を取る三人。入る前はこんな下品な場所、とか文句を言っていたキューティだが、こういった場所にはあまり訪れたことがないようで、興味深げにチラチラと店の中を見回している。

「君を注文したいって言ったら卵の黄身が出てきたんだが…」

「下らない注文しているからだ。キューティももつとなじって良いんだぞ」

「いえ、私などが四將軍のサイアス様を非難するなど…」

「つまり、四將軍じゃなかったらとつくに非難の嵐って事か？」

「い、いえ、サイアス様。そういうわけではっ！」

真剣に焦り出すキューティを見て、同時に吹き出すルークとサイアス。からかわれていたことが判り、キューティが顔を真っ赤にする。

「か、からかったんですか!？」

「ま、これで多少肩の力は抜けたかな?盗賊団と対峙する前からそれじゃあ疲れちまうぞ」

「…………お気遣いありがとうございます」

納得いかない様子ではあるが、サイアスに強く言うことが出来ず、渋々引き下がりながらキツとルークの方を睨むキューティ。そこに酒場のマスターであるハニーがやってくる。

「お待たせしました。私、この酒場のマスターの飯田橋と申します。お聞きしたいことと言うのは？」

「グリーンスコルピオンについて、知っていることを聞かせて貰いたい」

「盗賊団ですか。私が知っていることと言えば、新月の夜にどこからともなく現れ、少女を攫っていくということしか…初めは皆感謝したのですが…」

「感謝？盗賊団にか？」

「はい。グリーンスコルピオンが町を初めて襲った際は少女の誘拐はせず、やったことは町のならず者を血祭りに上げたことだけでした。町の者は皆そいつらに困っていたので…魔法使だからといって町の人たちに乱暴に振る舞うそいつらに…」

「…魔法使い、だつたんですか…」

キューティが尋ねる。体ごとコクリと頷く飯田橋ハニー。先ほどから立て続けに魔法使いの悪行を聞いて、少し気分が落ちている様子のキューティ。最初の事件の話に少し思うところがあつたルークは、飯田橋に問いかける。

「……そのならず者、町の長であるアニーさんと何か問題を起こした事はあるかな？」

「ちよつと、何を訳の分からない事を…」知っていらしたのですか
！…！…！？」

キューティがルークに苦言を呈そうとするが、飯田橋の大声に遮られる。

「いや、ただの勘さ。…何があつたんだ？」

「あまり言いふらして良いような事ではないのでここだけの話にしてください。…アニー様は以前、そのならず者たちに白昼堂々乱暴をされた事があります。その場に居合わせた町の者たちも、ならず者を恐れ見て見ぬ振りを…」

「そんな…酷い…」

「…確かに言いふらすようなことではないな。言いづらいことを言わせてしまつてすまない。さ、そろそろ店を出て宿に向かおうか」

そう言つて領収書を貰い、店を出て行くサイアス。ルークとキューティもその後が続く。月が出ていない夜の中、宿を目指し歩く三人。

「ま、ある程度は見えてきたかな」

「そうだな…気が重いな」

「どういうことですか？お二人は事件の真相が分かつたんですか？」

ルークとサイアスが話している内容が気に掛かり、キューティが尋ねてくる。

「ああ、女の生氣を集めて何をする気かまではわからないが、女首領の目星は付いた」

「本当ですか!？」

「十中八九、アニーさんだ」

「……もう間もなくね、今晚にでも全てが終わるわ…全てがね…」

長であるアニーが小さく呟き、夜更けに屋敷を出て行くこととする。が、屋敷の入り口に気配を感じ、様子を窺う。見れば先ほど屋敷を訪れたキューティとかいう小娘が屋敷の中を窺うように立っていた。アニーは屋敷の中に引き返し、使用人用の出入り口である裏口から屋敷を抜け出すことにする。

「はあ…見張りまでして、本当にアニーさんが犯人なのかしら…あなたたちもそう思うでしょ？」

そう呟くのはアニーの屋敷を見張っているキューティ。隣に控える二体の指揮ウォール・ガイに話しかける。こくこく、と頷く指揮ウォール・ガイに満足そうにするキューティ。端から見れば中々に悲しい光景だ。先ほどの会話を思い出す。

「アニーさんが！？そんな！？まさか、ならず者を殺したからというだけの根拠で？」

「いや、それだけじゃない。砂漠の塔の事はまだ内密でな。その塔から盗賊団が出てきているっていうのはゼスが掴んだ情報で、まだあまり知られていないんだ。先ほどの飯田橋マスターも、どこからともなく盗賊団が現れてと言っていたしな」

「アニーさんも突如として現れたと言っていましたか？」

「ああ、初めの内はな。だが、こうも言った。塔に攫われた少女たちが心配だとな」

ルークがアニーとの会話を思い出しながらキューティに説明をする。それに続けるようにサイアスも補足をする。

「それに、多少だが残留魔力を感じた。アニーさんは魔法使いでもないのに…だ」

「俺は血の臭いも微かにだが感じたな」

そう平然と話すルークとサイアス。キューティは驚く。これら全て、自分は全く気がつけなかったからだ。

「という訳で、アニーさんの屋敷を見張っていてくれるかな。危険な事はしなくていい」

「え？私ですか？サイアス様たちはどうされるんですか？」

ピ、と空を指さすサイアス。上を見上げるキューティ。雲一つ無い夜空だが、月が出ていないため暗い。あ、と気がつくキューティ。

「盗賊団が来るのは新月の夜だからな、ルークと一緒にそちらに備えておくさ」

こうしてキューティはアニーの屋敷を見張っているのである。

「見張りなら、私じゃなくてあのルークとかいう冒険者にやらせればいいのに…そう思うでしょ？」

指揮ウォール・ガイにそう問いかけるキューティだったが、問いかけながらルークのことを考える。あの冒険者は、魔法使いでも無いのに自分の知らないような禁呪の事を知っていた。それがキューティには悔しかった。でも実力ならあんな冒険者には負けない。私は治安部隊副隊長なのだ。そう強く思っていたとき、カンカンと町の鐘が鳴る。見れば、町の入り口の方から火の手が上がっている。

キューティは急いでアニーの屋敷に入る。執事が驚いていたが、緊急事態だからと言ってアニーの部屋まで走る。扉を開けると中はもぬけの殻であった。執事も屋敷の中を捜してくれたようだが、姿が見えなかったようだ。

「逃げられた…やっぱりアニーさんが…？」

- ジウの町 広場 -

町の広場まで鳥のような生物に乗った盗賊団が侵入する。先頭を走るのは女首領。その後ろを何十人も盗賊がついてきていた。しかし、おかしい。夜更けとはいえここまで誰とも出会わない。こんなことは初めてだ。

「人がいないのが不思議かな？女首領さん？」

「！？」

広場には二人の男が立っていた。黒髪の剣士と赤髪の魔法使い。ルークとサイアスだ。

「町の人には避難して貰った。そう何度も決まって新月の夜に襲ってたんじゃ、遅かれ早かれそうだったさ」

「サイアス、顔が判るか？」

「いや、覆面でよく判らないな…スタイルはよく似ているが…」

女首領は顔を覆面で隠しており、一目ではアニーかどうかの判別が付けられなかった。盗賊団が跨がっている鳥のような生物に注目するルーク。

「初めて見るな…あれはなんだ？」

「俺も初めて見る。JAPANに生息するてばさきとかいうのによく似ているが…少し違うな」

「サイアス様！申し訳ありません、アニーさんの姿が見えなくなりました！！」

広場にキューティが走ってやってくる。その報告を受け、サイアスが女首領に向かって問いかける。

「ってことは、アニーさんで間違いないかな？」

「……やれ！」

サイアスの言葉に応えず、後ろに控えた盗賊たちに指示を出す女首領。てばさきのような生物に乗った甲冑の盗賊団が猛スピードで三人に迫る。

「聞く耳もたずか……」

「それじゃ、いっちょ暴れさせて貰うとするかね。火爆破！」

サイアスが魔法を放つ。五人もの盗賊がまとめて炎に包まれる。

左右から炎を避けた盗賊が迫ってくるが、すぐさま飛んできた斬激を受け鳥のような生物から振り落とされる。

「真空斬」

「相変わらず使い勝手良いな、その技。火爆破！」

「真空斬！まあな、重宝しているよ。真空斬！」

軽口を叩き合いながらも次々と盗賊を撃破していく二人。二人に襲いかかるのは得策ではないと思った盗賊の一人が、キューティの

方に迫っていった。

「!?雷の矢!」

慌てて雷の矢を放つが、盗賊が乗っている生物は意外にすばしっこく、避けられてしまう。そのままキュートイに襲いかかる盗賊。迫ってきた剣に思わず目を瞑るキュートイだが、その剣がキュートイに届くことはなかった。恐る恐る目を開くと、ルークがキュートイを左手に抱きかかえ、盗賊を剣で斬り伏せていた。

「うお、ウォール・ガイがいるから助けて貰わなくても平気です!」

「それは悪いことをしたかな?」

「……………一応、ありがとうございます」

キュートイの礼を受けたルークだが、直接斬った際に違和感を覚え、今斬ったばかりの盗賊を見る。先ほどまでは確かに人間に見えたが、今は中身のない鎧だけになっていた。

「なんだこれは、サイアス!?!」

「ああ、こちらも今確認した。こいつら人間じゃない、魔法で操られた鎧だ!」

「そんな、こんなに精巧なものが可能なんですか!?!」

キュートイが叫ぶのも無理はない。ガーディアンを作り出す魔法使いも多く存在するが、ここまで人間と同じ姿をし、命令にも忠実な知恵をもったものを作り出すなど聞いたことがない。サイアスが呟く。

「……………こんなもの、人間業ではないぞ」

ルークも気を引き締め直す。どうやら、想像以上に厄介な依頼のようだ。三人は気がつかなかった。鎧の裏に小さく書かれた文字に、メイクドラマ3号と書かれたその文字は、一際不穏な空気を纏っていた。

第33話 グリーンスコルピオン（後書き）

「人物」

飯田橋

ジウの町で酒場を営むマスターハニー。酒場を営むハニーは意外に多く、カスタムの町の酒場のマスターもハニーである。

「その他」

グリーンスコルピオン

三ヶ月前に突如として現れた砂漠の盗賊。女首領以外は人間ではなく、魔法で動く鎧である。とても人間業とは思えない魔法である。

第34話 ただ、助けたい

・ジウの町 広場・

「真空斬！」

「火爆破！」

ルークとサイアスの声が響き、広場に鎧の山が出来る。数十人はいた盗賊団の内、既に半数以上が敗れ、中身のない鎧へと姿を変えていた。

「流石サイアス様だわ。でも、あの冒険者がこんなに強いなんて…
雷の矢！」

範囲攻撃を持たないはずのルークが、サイアスとほぼ同数の盗賊を倒している事実にはキューティは驚く。それを隙と見たのか、一人の盗賊が近寄ってくるが、今度は確実に雷の矢で撃退する。

「お見事」

「馬鹿にしないでください。さっきはちょっと油断しただけです！」

ルークの言葉に反論するキューティ。今のキューティの攻撃で盗賊団の数は遂に一桁となっていた。すると、分が悪いと見たのか盗賊団が撤退し始める。

「あ、逃げていきます！」

「追うぞ！塔の場所は判っている」

そう言って、倒した盗賊が乗っていたてばさきのような生物に飛び乗るルークとサイアス。命のない鎧が乗れただけであり、その操縦は難しくなさそうだ。サイアスが先に駆けていき、ルークもそれに続こうとするが、ふと見るとキュートイがどうしたものかと狼狽えている。

「なんだ、乗れないのか？よっと」

そう言って生物に跨がりながらキュートイを抱え上げるルーク。驚いたキュートイがじたばたと暴れる。

「は、離してください！」

「ついてこない気か？ほら、しっかりと背中に掴まっているよ」

「どうして貴方なんかと一緒に乗らなきゃいけないんですか！せめてサイアス様と…」

「時間がないんだ。申し訳ないが俺で我慢してくれ」

そう言って後ろに座ったキュートイの抗議を受け付けず。先に行ってしまったサイアスの後を追いかけるルーク。初めのうちこそ抗議を続けていたキュートイだが、速度が上がるに連れて口数は減り、今はルークの背中にギュツとしがみついていた。

- 砂漠の塔 入り口 -

「これが砂漠のガーディアンか…」

「なるほど、あの辺の出っ張りを腕と考えれば、確かに人のような形にも見えるな」

盗賊団の後を追ひ、三人は砂漠の塔の前まで来ていた。着いたと同時に生物から飛び降りたキューティは、非難するような目でルークを見ていた。それを尻目に、妖しく緑に発光している塔を見上げながらルークとサイアスが話す。塔の形に何か思うところがあつたのか、キューティも話に入ってくる。

「人の形というより、なんだかハニーっぽい気がします…」
「ん？……なるほど、言われてみれば確かに」

キューティに言われて再度見直してみると、確かに巨大なハニーを岩でコーティングしたような形に見えてくる。

「さて、中に入るか」
「サイアス様。扉には鍵が…」
「ファイヤーレーザー！」

いきなり扉に向かって魔法を放ち、鍵ごと扉を吹き飛ばすサイアス。唐突な行動であつたため、固まるキューティ。

「ま、盗賊団のアジトにお行儀良く入る必要もあるまい」
「中は暗いな。気をつけて行くぞ」

そう言つて中に入ってくルークとサイアス。キューティも二人の後を追いかけていく。入つてすぐの位置に階段があり、サイアス曰く魔力を上の方から感じるといふことなのでそれを延々と上つていく。塔の中は暗く、モンスターこそ出てこないが嫌な空気が漂つていた。

「空気が悪いな。歌でも歌うか？」
「はい、サイアス様。では、不肖この私がチューリップの歌でも！」

「なんでその選曲なんだ？…残念だが、歌う必要はなさそうだな」
「そのようだな」

ルークとサイアスの言葉に前を歌おうとしていたのを止め、前を見るキューティ。階段を上りきった先は緑が広がっており、とても塔の中とは思えなかった。その奥にまた別の階段が見える。しかし、その階段の前にはこんにちわの大群と、数体のロンメルが立っていた。

「大した相手じゃないが、数が厄介だな」

「少し時間を稼いでくれれば、俺がまとめて吹き飛ばすが？」

「じゃあそれでいくか。真空斬！」

そう言っつて呪文を唱えていたロンメルに斬撃を飛ばすルーク。体が真っ二つになり、そのロンメルが崩れ落ちる。しかし、側にいた別のロンメルの詠唱が終わりこちらに魔法を放ってくる。

「ティーゲル」

「ガードはお任せください！ライトくん、ガード！」

キューティの右に控えていた指揮ウォール・ガイがロンメルの放ったティーゲルからサイアスを守る。それと同時に、今度はこんにちわの大群がこちらに進軍を開始した。その様子を見たルークがサイアスに尋ねる。

「寄られると厄介だが、後どれくらいかかりそうだ？なんなら初級魔法で少しずつ減らすか？」

「いや、もう準備は終わった」

そう答えるサイアス。その両腕に赤い魔力を纏っている。放つ前

だというのに、それはまるで綺麗な炎のようであった。

「灰と化せ。業火炎破！」

瞬間、こちらに迫ってきていたこんにちわが業火に包まれる。絶叫が辺りに響き渡るが、それもすぐに止む。後に残ったのはサイアスの言葉通り灰のみであった。同時に、奥に残っていたロンメルも崩れ落ちる。ルークが真空斬で斬り伏せていた。呆然とするキューティ。業火炎破自体は見たことはある。が、これほどまでの威力を目の当たりにするのは初めて。これが四將軍なのか、と。そのキューティにサイアスが声をかける。

「さ、先に進もうか」

「あ、すいません！気を抜いてしまい…」

「ところでキューティ…」

サイアスに深々と頭を下げ、謝罪の言葉を続けようとするキューティの話を遮るルーク。どうも気に掛かる事があるようだ。

「ライトくんって…ウォール・ガイに名前を付けているのか？」

フツと吹き出すサイアス。どうやらサイアスも気がついていたが、気づかないふりをしていてあげたようだ。キューティの顔が真っ赤に染まる。

「べ、別に良いじゃないですか！私の勝手です！…」

奥にあつた階段を上り、最上階まで辿り着いた三人。より魔力を感じる最奥の部屋に向かつて狭い通路を歩いている。すると、突然目の前に小さなハニーが大群で現れた。

「プチハニー！こんな狭いところで…」

サイアスがそう言い、ルークとキューティにも緊張が走る。しかし無理もない。ハニー族の中でもプチハニーと呼ばれる小型のハニーは、衝撃を受けると爆発するという厄介な性質を持つ。しかし気に掛かるとことが一つ。普通のプチハニーとは色が違うのだ。

「白いプチハニー…新種か？」

「プチハニーなんかじゃないやい。僕たちはこの城を守るメイクドラマ2号こと、白血球ハニーだ！」

そう言つて先頭にいたハニーが飛びかかってくる。ルークはそれを素早く躲し、白血球ハニーが地面に落ちる。すると、ハニーの落ちた場所の石で出来ている通路が溶け始めた。

「こいつら、溶解液を出すのか！」

「かかれー！！」

「ルーク、スマンがハニー相手では戦えるのはお前だけだ。キューティ、援護を頼む」

一斉に飛びかかってくる白血球ハニー。数が多いので真空斬では間に合わない。妃円の剣では溶かされてしまうため、特殊なコーティングのしてある幻獣の剣に変える。先頭の一体を斬り、一応刀身を確認するが溶けていない。そのまま立て続けにハニーを斬っていくルークだが数が多すぎる。上手いこと躲していたルークだが、遂

にその体を一体のハニーが捕らえそうになる。

「レフトくん、ガード!」

「スマン、助かる」

「……この状況、貴方に倒れられたらこちららも危険ですから」

すんでのところでキューティの援護が入る。指揮ウォール・ガイに阻まれた白血球ハニーにウォール・ガイから反撃の電撃が走る。電撃を受けたハニーはそのまま溶けてしまった。

「!? サイアス、こいつら魔法が効くぞ!」

「こちららも確認した。ならばやりようがある。火爆破!」

ルークとほぼ同時に魔法が効くことに気がついたサイアスはすぐに火爆破を放つ。悲鳴を上げながら、白血球ハニーたちはドロドロに溶けていった。

「なんだっ たんですか、こいつら。ハニーなのに魔法が効くなんて……」

サイアスが溶けてドロドロになった白い液体に少し触れる。溶かされないようにその右手は魔法でガードされている。

「これは…ハニーなんかじゃない。魔力の塊…あの鎧たちとほぼ同じだ」

「つまり、これも人工的に造られたものってことか?」

「そんなことが…可能なんですか…?」

「……わからん。だが、現実にごうして存在している。もしあの鎧も合わせて一人で造り出したとすれば…魔法LV3相当の実力は必須だな」

「ゼスの歩く災厄と同格か…もしこの塔にいとすれば、厄介どころの騒ぎじゃないぞ」

「そんな魔力は感じないからいないと思いたいが…さて、鬼が出るか蛇が出るか…」

不穏な空気を感じながら、ルークとサイアスは奥へと歩みを進めていく。キューティも不安になりながら後に付いていく。突如現れた塔、人間業とは思えない生成物。一体何が起きているのか。

- 砂漠の塔 最深部 -

その部屋には誘拐された少女たちがいた。しかし、目を背けたくなるような行為が繰り広げられていた。少女たちは意志を持っているかのように動く三角木馬に乗せられ、生気を吸い取られていたのだ。

「ひ…酷い…」

「…サイアス、キューティ。早く解放するぞ！」

「この城を建てた奴とは仲良くやれそうにないな、俺は」

捕らえられている少女たちを次々と解放していくルークたち。最後の一人を木馬から解放したところで部屋に笑い声が響き渡った。笑い声のした奥の方を見る三人。壁が崩れ、その向こうに部屋中の壁がピンク色で蠢いている、まるで内蔵の中のような部屋が現れる。その一番奥、壁と融合した形で声の発生主はいた。褐色の肌が特徴的な女性、間違いない、アニーだ。

「やはり貴方が犯人か、アニーさん！」

「ふふふ、遅かったわね。もう全ての準備は整ったわ。間もなく復活する、史上最強のアトラスハニーが！」

アニーが叫ぶと同時に城が大きく揺れ始める。外から外壁が崩れ落ちる音が聞こえる。そのまま、ドシン、ドシンと塔が動き始める。まるで歩いているかのような振動だ。

「状況から察するに…この塔自体がそのアトラスハニーって事か？ キューティの見る目は正しかったって事か」

「その通りよ！少女たちの生気を使ってこのアトラスハニーは復活したわ。今この塔はジウの町に向かって進んでいるわ。この膨大な魔力でジウの町の奴らを皆殺しにするのよ！！」

「サイアス。お前の見立てでは？」

「……可能だな。これだけ巨大な塔を動かすほどの魔力、攻撃に回せば町一つくらい簡単に消し飛ばぞ」

「そんな…」

「おっほっほ、これでジウの町も終わりよ…うつ、がああ！！」

まるで人が変わってしまったかのように目を見開いて叫ぶアニー。が、突如苦しみだし、うめき声を上げる。訝しげに状況を見守るルークたちだが、顔を上げたアニーの様子が先ほどまでの気が狂ったようなものと違い、町であったときのものに戻っていたのだ。

「サイアス様、ルーク様！私を殺してください！！」

「殺してって…そんな!？」

「どついうことだ。アニーさん、貴方は一体？」

「こうなれば全てお話しします。私はならず者に乱暴された後、自殺を考え砂漠を歩いていました。すると、突然目の前にこの塔が現れたのです。中に入ると、そこには生気の奪い方や塔の動かし方、

そして、アトラスハニーが町を吹き飛ばすだけの破壊力があることが書いてある紙が置いてありました。それを見た瞬間、私の中にもう一人の人格が生まれてしまったのです。乱暴される私を見捨てた町の人を皆殺しにしたい、もう一人の私が！」

「二重人格って訳か！」

「はい、私は今、壁と融合し塔の中枢神経の一部となっています。私を殺せばアトラスハニーは止まるはずです。お願いします、殺してください！うっ…ああっ…！」

悲痛な叫び声を上げるアニー。アトラスハニーを止めるため、町の人を救うために、アニーを殺さなければならぬのだ。決断を迫られるルークたち。すると、またアニーが呻き声を上げ、またもう一つの人格が変わる。

「もう一人の私め、余計な真似を…私の邪魔をする奴は皆殺しよ！行け、メイクドラマ1号…！」

突如、地面がせり上がり水色の巨人が現れる。腕を伸ばしてこちらを攻撃してくる。それを躲すルークとサイアス。躲しがてらサイアスが炎の矢を放つが、ほとんど効いていない様子だった。

「効いてないな。少しばかりショックだね」

「ほほほ、その程度の魔法じゃこのメイクドラマ1号には傷一つ付けられないわよ！」

「キューティ、少女たちから離れるな。ウォール・ガイで守り抜いてくれ！」

「は、はい。サイアス様！」

「もたもたしていると町まで着いてしまうな。早急に決断する必要があるな…！」

「アニーさんを…殺す決断ですか…！」

キュートイの声が悲しいものへと変わる。アニーを殺さなければもつと多くの人が死ぬ。そんなことは頭では理解している。だが、目の前の女性も被害者だ。救い出したい。魔法使いとかそんなものは関係ない。その時、ルークがアニーに向かって問いかける声が聞こえた。

「殺す必要があるのか？貴方の体と壁を融合させているその触手を斬れば、それで十分なんじゃないのか？」

「おほほ、浅はかね。この触手は強力な魔法結界でガードされているわ。決して外すことは出来ないのよ！」

アニーの言葉にルークとサイアスがピクリと反応する。

「さあ、町までもうすぐ着くわ。止めなければ殺してみなさい。そんなことが出来るものならね！まあ、メイクドラマ1号を倒せたらの話だけどね！おほほほほ！！！」

勝ち誇ったように笑うアニー。どうすればいいか判らないキュートイだったが、サイアスとルークが臨戦態勢に入るのが見える。

「とりあえず、役割は決まったかな。俺はあの巨人をやる」

「俺はアニーさんだな。油断するなよ」

「ふ、任せておけ」

「ちょ、ちよつと待つてください！…殺す気、なんですよね…」

そう問いかけるキュートイ。判っている、それしか手段はない。それでも尋ねずにはいられなかった。そんなキュートイに、ルークは小さく微笑む。

「……キューティは、どうしたい？」

殺さなければ町は滅びる。ただのわがままだ、そんなことは判っている。それでも、俯きながら声を絞り出す。瞳から涙が零れる。

「助けたい…アニーさんも町の人も…だって、あの人も被害者じゃないですか…こんなの…悲しすぎる…」

助けたい。しかし、自分には何も出来ない。魔法使い、治安部隊副隊長、自分の持つ肩書きは、今この場では何の意味も持たない。不甲斐なさから涙が止められない。その姿を見て、ルークがサイアスに呟く。

「ゼスの膿も偶には見る目があるじゃないか」

「急にどうした？」

「有望だ、確かに」

「…なるほど、同感だ」

「安心しろ、キューティ」

ルークのその言葉に顔を上げるキューティ。アニーに向き直るその背中が、魔法使いではないルークが、ほんの少しだけ、頼りがいのあるように思えた。

「俺たちに任せろ！」

第34話 ただ、助けたい（後書き）

「人物」

アニー

ジウの町を治める長。突如砂漠に現れた塔を偶然発見し、中を見て回る内に乱暴された自分を見捨てた町の人への復讐に駆られたもう一人の人格が生まれる。本来は優しく、穏やかな性格。

「モンスター」

ロンメル

聖骸闘将の一種。服は青く、目の部分には横長の切れ込み。聖骸闘将の中では下位に位置する。

プチハニー

オレンジ色の小さなハニー。衝撃を与えると爆発する厄介な相手。死骸は爆薬として利用される。

白血球ハニー

白く小さなハニーで、正確にはハニーではなく何者かによる生成生物。別名メイクドラマ2号。

メイクドラマ1号（オリ魔物）

水色の巨人。伸縮自在の腕を持ち、並の魔法攻撃ではビクともしない程の高い魔法抵抗を持つ。これも何者かによる生成生物。

「技」

業火炎破

辺り一面を業火が包む中級広域魔法。その威力は火爆破よりも遙かに高い。

ティーゲル

闇の砲弾をぶつける聖魔法。使用してくる闘将によって威力が違ふ。その威力によってティーゲル2、ティーゲル3と分類分けされて呼ばれる。

「その他」

聖骸闘将

かつて聖魔教団という団体が作り出した戦争兵器。魔法使いの死体を使った人造魔法使いや、魂の入っていない巨大メカが主な兵器である。モンスターではないが、聖魔教団が滅んだ後も命令であった蛮人撲滅命令を守り抜いているため、人類に襲いかかってくる。

第35話 激闘は遙か遠く

- 砂漠の塔 最深部 -

アニーに向かって駆け出すルーク。その行く手を壁から飛び出した触手と青い巨人が阻む。触手を避け巨人に斬りかかるが、ほとんどダメージを与えられず、すぐにその傷も再生してしまう。

「やれやれ、この間のラギスといい、最近こんな相手ばかりだな」
「火爆破！」

サイアスが魔法を放つ。触手はその魔法で燃えたが、すぐに次の触手が壁から伸びてくる。青い巨人の方はまるで効いていない様子だった。

「おほほほほ、無駄だって言ってるでしょ！天下の四將軍様も大したことないわね！」

「おいおい、雷帝が聞いたら文字通り雷が落ちるようなこと言わないでくれるか…」

「どうだ、やれそうか？」

軽口で返すサイアス。巨人の攻撃を後ろに飛んで避けたルークがサイアスに尋ねる。少し値踏みするように巨人を眺め、サイアスが答える。

「あの様子じゃファイヤーレーザーでも駄目そうだな…となると、詠唱まで1分つてとこかな」

「了解だ。それで確実に薙ぎ払えるものとして突っ込むから、失敗

したら化けて出るぞ」

「男の霊なんかお断りだね。そりゃあ失敗できんな」

そう言つて再度アニーの方に駆け出すルーク。その行く手を巨人が阻み、繰り出される攻撃を躲しながら剣で斬りつけていく。しかし、先ほどと同じく与えられているダメージはわずかだ。勿論、ルークも時間をかければこの巨人を倒すことは出来る。与えたダメージはわずかずつとはいえ確実に蓄積されているからだ。しかし、今求められているのは時間。急がなければジウの町が消し飛んでしまう。となれば巨人を一撃の下に吹き飛ばすような強力な範囲攻撃が必要なのだ。ルークの真空斬、真滅斬は共に単体攻撃。なればこそこの巨人を倒し、アニーへの道を開くのはサイアスの役目であった。

「さて、馬鹿にされたままなのもあれだし、四將軍の実力を見せてやるかね…」

サイアスの全身が黄色く光り始める。次に放つ魔法の為に全身に集中させた魔力が、ほんの少し漏れ出し、そのように黄色く光って見えているのだ。

「す、凄い…なんて魔力量…」

そう呟くのはキューティ。攻撃魔法が得意でない自分でも、今サイアスが放とうとしている魔法がどれだけ凄いのかは感じ取れる。状況は、ルークが迫ってくる触手や巨人の注意を引きつけ、サイアスが魔法を溜めている。少女たちを守るように後ろに控えているキューティだが、どうやら触手の攻撃はここまで届かないらしい。だとすれば、自分にも出来ることがある。

「ええい、ちょこまかと！四將軍の方から先に殺しなさい！」

単純な思考で動いている巨人の注意を引きつけていたルークだが、アニーが痺れを切らし指示を出す。サイアスの方に向かって巨人の腕が伸びる。真空斬で軌道を変えようとするが、その前に巨人の攻撃がウォール・ガイによって阻まれる。

「キューティか。良い援護だ！」

「私だって…アニーさんを救う手助けをしたいんです！防御付与！」

巨人が更に攻撃を加えようとしていたのを見たキューティは、ウォール・ガイに防御付与の魔法を掛ける。これこそが攻撃魔法をあまり得意としていないキューティを今の地位まで押し上げた真骨頂、付与魔法。警備隊という役職柄、優秀な支援魔法の使い手は非常に重宝されたのだ。巨人の重い一撃を、強化されたウォール・ガイが受けきる。

「ぐ…小娘がつ…！」

「サイアス様。今魔法付与を…」

「いや、必要ない。準備は終わった」

そう言ったサイアスの体は先ほどよりも更に光り輝いていた。先ほどまでと違うのは光っている色が黄色だけでないということ。その両腕が灼熱のように真っ赤に染まっていた。魔法使いでないアニーも、何か感じ取るものがあつたのか、焦った様子で巨人に指示を出す。

「殺せ、殺すのよ…！」

その指示を受け、巨人の腕が再度サイアスに向かう。それを見ながら、されど慌てた様子はなく、サイアスはゆっくりと両腕を前に

出し、叫んだ。

「灰すら残すな！ゼットン！！！」

瞬間、サイアスの両腕から炎の塊が放たれ、それを受けた巨人が灼熱の業火に包まれる。奇声を上げながらその巨体が崩れ落ちていく。アニーが驚愕に目を見開く。一撃。あの高い魔法抵抗を持つ巨人がたったの一撃で崩れ落ちたのだ。しかし、直後その目は更に見開かれることになる。崩れ落ちていく巨人の向こうから、若干の残り火を纏ってルークが飛びかかってきたのだ。

「な！？」

サイアスがゼットンを放つと同時に、ルークは巻き込まれない程度に特攻していたのだ。万が一、巨人を一撃で倒せていなかったらその無防備な姿を巨人の前に晒すことになる。そんな特攻が出来たのは、サイアスへの絶対の信頼。触手でガードすることも間に合わず、目の前に剣を振り上げ飛びかかってきているルークにアニーが叫ぶ。

「殺す気かい！本当に！？この哀れな私を！？」

「殺す気など、初めから無い！」

ルークが狙うのはアニーではない。その後ろ、アニーと壁を融合させている触手だ。塔の振動が止まる。アトラスハニーがジウの町の前まで着いたようだった。もう時間がない。サイアスが叫ぶ。それに釣られるように、キューティモルークに向かって叫んだ。

「一撃で決める！ルーク！！」

「お願いします！！！」

「真滅斬！」

振り下ろされた刃が、触手を覆っている魔法結界に食い込む。瞬間、ルークは感じる。この結界、先日のラギシスのものよりも質が上だということ。だが、決して破れないレベルではない。

「うおおおおっ！」

ルークの叫びと共に、その刃は結界を破り、アニーと壁を繋いでいた触手を一刀両断に斬り裂いた。壁と離され、倒れていくアニーを左腕で抱える。

「ありがとうございます…：ルーク様」

アニーが気を失う寸前、そう呟いた。最後にまた人格が元に戻っていたのだろう。その礼を聞きながら、ルークは言いしれぬ不安を感じていた。あのフィルの指輪で強化されていたラギシスよりも格上の結界。この結界を張った術者は一体何者なのか、と。こうして、グリーンスコルピオンは壊滅したのだった。

- 数日後 砂漠の塔 -

事件解決より数日、今はジウの町の前にそびえ立っているアトラスハニーこと砂漠の塔の調査にゼスから魔法使いたちが派遣されていた。その場にはルーク、サイアス、キューティの三人も居合わせていた。事件時の状況の説明も終わり、調査を続ける魔法使いたちを横目にルークはサイアスと話をしていた。

「で、アニーさんはどうなる？」

「ゼスで裁かれることになるな。一応口利きはしておくが…重い罪にはなるだろうな」

「盗賊団を組織してならず者殺害に少女の誘拐、その上町一つ消そうとしたんだからな…」

「それに…アニーさんは魔法使いじゃないからな。ゼスだとそれが大きなマイナスだ」

重苦しい空気の中、キューティが話に入ってくる。

「それでも何とか極刑は免れそうなんですよ。町の人たちが請願書を出してきたんです」

「町の人たちが？町ごと吹き飛ばされそうになったのにか？」

キューティの言葉に驚くルーク。いくら慕われていた長だったとは家、自分たちを殺そうとした相手を庇うとは。

「アニーさんがならず者に襲われたとき、見て見ぬ振りをしたことをずっと悔やんでいたみたいです。執事さんと酒場の飯田橋さんが中心になって、署名を集めたんです」

「そうか…これがアニーさんにとって少しでも救いになればいいがな…」

「そうですね。文化が遅れているなんて、酷いことを言っていました…いい人たちです」

そう言うキューティに、サイアスがルークに聞こえない程度のボリュームで問いかける。

「町の人たちをそうやって褒めるなんて、魔法使い至上主義は止めたのかな？」

「今でも魔法使いが一番優秀だとは思っています！ただ…」

キューティモルークに聞こえない程度に小さく返事をしながら、ルークの方を見る。魔法使いではないのに、自分に出来なかったアニー救出を成し遂げた冒険者。

「魔法使い以外の人たちも…決して劣っている訳じゃないと考えを改めただけです」

上層部に言われ、渋々連れて行った形になったが、無駄ではなかったなと静かに笑うサイアス。そのサイアスに、少し遠くを指差しながらルークが話しかけてくる。

「ところで…嚴重にバリケードを張っているあの白い球はなんだ？」

ルークが指差す先には巨大な水晶のような球が置いてあった。その周りには嚴重なバリケードが張ってある。

「ああ、あれがアトラスハニーを動かしていた魔力の塊だ。あれに触っちゃうとアトラスハニーから魔法が発射されちゃうんだ。せっかく食い止めたのに最後の最後にそれじゃ、馬鹿らしいだろ」

「確かに…そんなことになったら苦勞が水の泡だな」

ルークの脳裏に一瞬がははと笑う冒険者の顔が浮かぶ。なぜかあいつならそんな形で苦勞を水の泡にしまいそうな気がしたからだ。その時、階段から一人の魔法使いが上がってきた。水色の髪に、特徴的な杖を持った女魔法使い。

「アニス・沢渡。ズバツと参上です！」

やってきたのはゼスが誇るへつぽこ最強魔法使い、アニス。サイアスが魔法Lv3相当のものが使われていると報告したため、こうして派遣されていたのだ。因みに、千鶴子は最後まで反対していた。来るや否や辺りを見回し、おおー、と感嘆の声を上げる。そしてその目が水晶を捕らえた。

「むむっ！あからさまに怪しげなものが。どれ、ぺたぺた」

「「「あ！」「」」

この日、ジウの町の一角が吹き飛んだ。居住区でなかったため、奇跡的にも人的被害は0。調査中の事故として内密に処理されたが、ゼスは復興支援金として多額の援助をジウの町にすることになる。

・ゼス 王者の塔・

「…その、以上が今回の報告になります」

部下であるマクシミリアンの報告を受け、額に青筋を立てるのはこの塔の管理者でもある四天王、山田千鶴子。自らの弟子であるアニスの失態に頭を痛めていた。

「だから派遣には反対だったのに…ご苦労。もう行って良いわ」

「は！それと、もう一つご報告が…」

「何？今度はアトラスハニーそのものでも吹き飛ばしたのかしら？」

自嘲気味に言う千鶴子。現在の四天王でまともに仕事をしているのは彼女一人。相当疲れが溜まっているようだ。

「パイア様が今回の事件に興味を持たれ、資料を持って行かれました」

「……パイアが？」

飛び出したのは意外な名前。四天王、パイア・サーバー。千鶴子の親友でもあった彼女は、数年前からその性格が一変し、怪しげな研究にのめり込んでいた。それは昨年四天王に就任してからも変わらず、むしろ研究が楽になるからというだけの理由で四天王になったかのようにであった。そのパイアが、資料を持って行った。

「何考えているのよ…パイア…」

変わり果ててしまった親友を思い、千鶴子は小さく呟く。その問いに答える者は誰もいなかった。

・ゼス 跳躍の塔・

「やっぱこれすごいわー。この生気を搾り取る装置すごい良いセンスー」

「ぎゃはははは！これ造った奴も姐さんと一緒に狂ってるぜ！」

跳躍の塔の研究室に二人分の声が響き渡る。部屋の中には四天王パイア・サーバーただ一人。持ってきた資料を見ながら、その塔の素敵に狂った構造に目を輝かせていた。

「やーん。この壁と融合させるのなんか格好良すぎて濡れちゃうー」
「ケケケケケ！よっ、この淫乱！」

部屋には確かに一人しかいない。それなのに、どこからともなく下品な笑い声が響いていた。

「この壁と融合させる技術と生気の技術合体させて、女の子を壁一杯に貼り付けた部屋とか素敵そうじゃない？名付けて究極の美女の部屋！」

「融合、合体、コンバイン！」

「ブイ、ブイ、ブイでビクトリー！」

新しい研究材料を見つけたパイア。部屋からは一晩中笑い声が絶えなかった。

- 魔人界 とある屋敷 -

「お嬢様！大変です！」

屋敷の廊下をぺたぺたと駆ける不思議な生物。灰色の体に長い胴体。今では希少種となったネコムシの一種と思われる。焦った様子で主人のいる部屋に入っていく。

「何よアレフガルド。今お楽しみ中なんだけど？」

部屋の中は目を背けなくなる惨状。答えたのは黒髪の美しい長身の女性。彼女の股間から生えた白い蛇が、既に意識のない少女の股間から内部に進入し、その体を齧っていた。アレフガルドと呼ばれた生物に答えた瞬間、齧っていた少女の腹が裂け、内蔵が飛び散る。

「あ、殺しちゃった。勿体ない…で、何があったの？」

顔に付いた血を拭う女性。口では勿体ないと言いながらも特に気にした様子もなく、アレフガルドに問いかける。

「以前、お嬢様がゼスに建てられたという塔が人間に発見され、機能を停止しました」

「あら？レッドアイに協力して貰ったあの塔？今はあそこゼスじゃなくて砂漠なんだっけ？地下に隠していたはずなのにどうして見つかったのかしら…」

「突如塔が砂漠にせり上がったそうですぞ。原因は不明です」

「せっかくまた人間界に行くことになったら、あの塔で楽しもうと思ってたのに…どこのどいつよ、全く。許せないわ」

「お劳しや、お嬢様…」

彼女の名はメデイウサ。若い女性を甦ることを趣味としている女性だ。その正体は人間ではない。人類の敵、魔人。その中でも特に凶悪な思想を持った一人であった。

「あー、なんかドツと気が抜けちゃったわ。寝るから枕よろしく」

「はい、お嬢様。いつも通りこの爺めが膝枕をさせていただきます」

「全く…機能停止させたその人間、もし見つけたら簡単には殺さないわよ」

今ここに新たな因縁が生まれる。しかし、その対象はルークではない。四將軍、サイアス・クラウン。彼はこれより数年後、その命を掛けてメデイウサと対峙することになる。その因縁の始まりであったことを、その死闘の凄惨なる結末を、まだ誰も知る由はなかった。

第35話 激闘は遙か遠く（後書き）

「人物」

山田千鶴子

LV 40 / 50

技能 魔法LV2

ゼス四天王の一人。他の四天王がほとんど仕事をしないため、腐敗した長官連中と一人で渡り合う苦勞人。主に情報魔法に長けており、ゼスの未来は彼女の双肩に掛かっていると云っても過言ではない。服のセンスは抜群に悪い。

パイア・サーバー

LV 37 / 48

技能 魔法LV2

ゼス四天王の一人。元々は真面目な性格で、千鶴子の親友でもあったが、数年前に突如性格が一変。怪しげな研究にのめり込む。

アニス・沢渡

LV 54 / 88

技能 魔法LV3

山田千鶴子の弟子にしてゼスが誇るへっぽこ最強魔法使い。その魔力は国王すらも上回る。一度出撃すれば、敵味方区別無く全滅させてしまったため、味方殺しのアニスという異名で恐れられている。ジウの町の一角を消し飛ばしたため、千鶴子にこっぴどく説教を受ける。町の復旧にも積極的に協力していたが、周りはまた何かやらかすんじゃないかと冷や冷やしていたという。その際、同じく町の復旧に協力していたルークという冒険者と顔見知りになる。

マクシミリアン

LV 18 / 20

技能 魔法LV1

山田千鶴子の忠実な部下。主に政治面で千鶴子を大きくサポートする。魔法使い至上主義にも懐疑的で、腐敗したゼス国内で、千鶴子が信頼し、重用する数少ない人物の一人である。

メデイウサ

LV 105 / 152

技能 剣戦闘LV1 魔法LV1

ケイブリス派に属するへびさんの魔人。女性を嬲ることを趣味とする残忍な性格。ルークたちの前に姿を現すのはまだ先のこと。

アレフガルド

LV 70 / 77

技能 執事LV3

ネコムシ出身であるメデイウサの使従。彼女のためなら何でもこなすスーパードール。ケイブリス派リーダーであるケイブリスとの中も良好で、茶飲み友達。

「技」

ゼットン

一兆度の高熱火炎弾を敵に放つ最上級魔法。炎属性魔法の中では最強に分類されているが、使用できるのは極僅かな者のみである。

防御付与

仲間の防御力を一時的に上げる支援魔法。非常に使い勝手が良いが、あくまでサポートになってしまったため好んで使う者は少なく、使用者は重宝される。

魔法付与

仲間の魔法力を一時的に上げる支援魔法。ゼス国内では特に重宝される魔法。

「都市」

ジウの町（半オリ）

キナニ砂漠南東部に位置する町。行商人などで活気に溢れている。OVAではジオの町だが、位置関係がおかしいのでオリジナルの町に変更。

「その他」

四天王の塔

王者の塔、日曜の塔、弾倉の塔、跳躍の塔の四つの塔。四天王が管理することになっている。その地下にはある秘密が隠されているが、その事実を知る者は少ない。

アトラスハニー

砂漠に突如現れた塔。正確にはハニーではなく、強力な魔法使いが作り出したものである。魔法LV3相当の技術が使われている。

GI0815 メディウサダーク ゼス国内をメディウサが暴れ回る この際に塔を建設

GI0816 キナニ砂漠が誕生 地面に埋めた塔は発見されず

GI0912 レッドアイダーク レッドアイが使い魔を駆使して塔を魔改造

LP0001 地中より塔が現れる 原因は今のところ不明とされている

第36話 リーザス陥落

LP0002 4月

- リーザス城 深夜 -

時刻は既に日が変わる直前、本来であれば一部の護衛兵を残し城は閑散としている時間帯であった。しかし、この日は城の中にはまだ少数ではあるが普段より多くの兵が残っていた。城のとある部屋、そこは一般兵が入ることは許されず、副将以上の地位の者が主に作戦立案などの目的で使用している部屋。そこには七人の男がおり、会話をしていた。いずれも副将以上の地位の者である。

「バレス殿、コルドバ殿。遅くまで付き合って貰い申し訳ありません」

「気にするでない、リック。こういう事も偶にやっておかねば兵の刺激にならない」

「がははは、しかしまた腕を上げたな！」

「（やれやれ、相変わらず將軍たちは甘い。こんなに遅くまで付き合わされるこちらの身にもなって欲しい者だ…）」

リーザス赤の軍將軍のリックが深々と頭を下げる。それに応えたのは黒の軍將軍のバレスと青の軍將軍のコルドバ。この日はリックの発案で赤、黒、青の三軍合同訓練をしていたのだ。勿論全兵という訳ではなく、一部の者たちだけだが。本来もっと早く切り上げる予定であったのだが、三將軍全員がノリノリになってしまい、結局兵たちはこんなに遅くまで付き合わされることになったのだ。心の中で悪態をつくのは青の軍副将キンケード。彼は三將軍と違い、リーザス国を守るといふ熱意は薄く、仕事として軍務を行っていた。

とはいえ大国の副将、その実力は本物である。後ろで黙々と着替え、帰り支度を進めているのは黒の軍副将のドツチ、サカナク、ジブルの三人。リーザス全6軍のトップに立っている黒の軍は、他の部隊とは違い特別に副将が三人存在していた。

「しかし…やはりバレス殿のように上手く兵を動かすことが出来ませんね」

「がはは、リックは攻め気が強すぎるからな。率先して最前線に立つ將軍…ま、兵は鼓舞するがな」

「現状維持で良い訳ではないが大きく変える必要もあるまい。儂の部隊とお主の部隊では求められる役割が違うからの」

進撃部隊である赤の軍、防衛部隊である青の軍、それらを統括する黒の軍。ただでさえ兵の損耗が激しい赤の軍であるが、現將軍のリックは將軍になってからまだ日が浅い。バレスのように損耗を抑える戦い方が出来ず、悩んでいた。その悩みを察し、今回の合同訓練をバレスとコルドバは引き受けたのだった。今日の訓練の総括をしながら、そろそろ帰路につこうとしている三將軍。ようやく帰れるとキンケードが安堵するが、突如一人の女性が部屋に駆け込んできた。

「どうした、メナド。そんなに慌てて」

部屋に入ってきたのは赤の軍副将メナド。まだ少女であるがその剣の腕は本物で、若年ながら副将という地位に就いていた。

「い、ご報告します！ヘルマン軍が突如リーザス城内に現れました
！！」

「……………!?」「……………」

あり得ない報告に部屋の中にいた七人全員が驚愕する。北の大国、ヘルマン帝国。鉱物資源は豊富だが気候に恵まれず、民が貧困に喘ぐこの国は、古くからリーザスの豊かな土地を狙い何度となく戦争を繰り返してきた。しかし、リーザスとヘルマンの国境に高々とそびえるバラオ山脈が大規模な軍事行動を邪魔し、今日までリーザス侵略の野望は達成されていなかった。そう、本来であればヘルマン軍が国境警備隊に気づかれずリーザスにやって来られるはずがないのだ。一体どうやって、しかし今はそんなことを考えている場合ではない。

「現れたのは第3軍。城内外部共にヘルマン兵で溢れており、その数は数万に及ぶと思われます！」

「第3軍…トーマか。厄介なのが来おつたな」

「ですが、負けるわけにはいきませぬ！」

「絶対に死守するぞ！朝になれば白の軍と魔法部隊、それに帰つちまった兵たちも集まる。今夜さえ凌げば勝機は俺たちのもんだ！」

「やれやれ…今夜はもう帰れそうにないな…」

將軍たちが速やかに武器を取り、部屋から飛び出していく。報告に来たメナドと黒の軍副将の三人もそれに続き、キンケードがため息を吐きながら、されど武器をしっかりと握りしめ部屋を後にする。こうして戦いが始まった。

・リーザス城 一階・

「はあっ！」

金色の鎧を纏った女戦士の一撃にヘルマン兵が崩れ落ちる。彼女

は親衛隊隊長レイラ。本日の合同訓練には参加していなかったが、国王の警備のため組織されている親衛隊は交代制で常に城に駐在。ヘルマン兵が現れた報告を聞き、真つ先に防衛に駆けつけていたのだ。じわじわと押されてはいるものの、必至にこの階を死守していた。その時、ヘルマン兵の波を押し退け、巨体の男がレイラの前に立った。

「……邪魔だ、人間の女よ」

「悪いけど通すわけにはいかないわよ！はあっ！」

・リーザス城 東の塔前・

「この俺に向かうとは良い度胸だ、誉めてやるぞ！生かしては帰さんながな、ふんっ！」

「あ、あれがリーザスの青い壁……」

「リーザスの危機なんだ、給料貰った分は働きたまえよ。行け！」

コルドバとキンケードがまだ城に残っていた少数の青の軍を率い、防衛に当たっていた。その圧倒的な防衛力にヘルマン兵が攻めあぐねる。ここの兵たちを率いているオカマ言葉の中年男が金切り声を上げる。

「なにをもたもたやっているの！早くその下品な男を仕留めなさい！」

「がはははは、後ろからごちゃごちゃ言っていないで自分で来たらどうだ、ヘンダーソンさんよぉ！」

「ふん、ヘルマンー美しいこのわたしの相手をしようなんて1000年早いわ。行きなさい！」

「美しいってのは、俺の奥さんみたいな人のことを言うんだよ！おらっ！」

・リーザス城 西の塔前・

「冷静に。訓練の成果をここで見せるんじゃ」

こちらではバレスが黒の軍を率い防衛に当たる。目の前に対峙する兵を率いているのは豚のような外見の中年男。側に二人の拳法家が控えている。

「かつての大拳法家が見る影もないな、フレッチャーよ」

「そんなこと言っていていられるのも今のうちぶー。ボウ、リヨク！お前たちの力を見せてあげなさいぶー！」

・リーザス城 二階・

リーザス城の二階を守るのは、リーザス最強の兵士リックと赤の軍。一階の親衛隊が逃してしまつた兵たちを一人残らず斬り伏せていた。二階に上がってきたヘルマン兵は、リックの姿を見た瞬間一人残らず震え上がっていた。世界にその名を轟かす剛の者、リーザスの赤い死神。そのような腰の引けた者たちに遅れを取るリックとメナドではない。が、ここでリックの姿を見ても全く怖じけ付かず、堂々と目の前に対峙する者が現れる。ヘルマン第3軍将軍、トーマ・リプトン。

「トーマ將軍……」

「言葉はいらんど、赤い死神。行くぞ！」

トーマがその手に持つのは鎖の付いた巨大なトゲ付きの鉄球。鉄球をリック目がけて飛ばす。それをすんでのところで躲しながら、リックがトーマに斬りつける。素早く鉄球を手元に戻し、それを難なく受けるトーマ。大陸でも屈指の実力者である二人の対決にメナドが入り込む隙はなく、周りのヘルマン兵を倒しながらも、メナドはその戦いに見惚れていた。

リーザス軍は奮闘していた。不意を突かれた形で最初こそ後れを取っていたが、各所に將軍・副將たちが参戦すると状況は膠着。朝まで持つかもしれない、兵たちがそう思い始めていた。その時、リーザス場内に不気味な音色が響き渡る。

「むっ！なんじゃ！？」

「なんだ？この音色は……」

「これは……なん……だ……力が……」

キンケードの体が崩れ落ちる。いや、キンケードだけではない。各所で音を聞いた兵たちが次々と崩れ落ちていった。バレスとコルドバも例に漏れず、片膝を付き頭を抱え、遂にはその体が地に付く。

「……これは、トーマ將軍。一体何を……？」

片膝を付きながら、それでも意識を失うことを拒み、トーマに問いかけるリック。周りの兵たちはメナド含め既に全員が倒れていた。

「……すまん、死神よ。正々堂々と決着をつけたくはあったが……
こちらには、もう時間がない」
「無様だな、赤い死神よ！」

その時、トーマの後ろから三人の男と一人の女性、そしてガーデ
イアンが二体現れる。その中央に立つ男にリックは見覚えがあった。

「パットン皇子…貴方がこの部隊を率いた張本人か…どうやってリ
ーザスに…」

「そうだ、この私がリーザスを陥落させるのだ。どうだ、死神よ。
これが魔人の力だ！」

パットンの言葉にリックの目が見開かれる。側に控えていた二人
の男と一人の女性を見る。ヘルマン兵とは思えぬ姿。これが、魔人。

「馬鹿なっ…魔人と手を結んだというのか…無謀だ！」

「負け惜しみはそれまでにしてもらおうか。現にノスたちは忠実に
私の命令を聞いている。ははは、これでリーザスも終わりだ！」

「トーマ将軍…貴方は本心で…この作戦に賛同しているのですか！
？」

「………もう休め、死神よ」
「…無念…リア様…申し訳…」

こうして、リックは遂にその意識を手放す。その奥、事態を見守
っていた女忍者が城の階段を駆け上がる。音色に意識を奪われそう
にはなったが、奥にいたためその音色は少ししか届かず、気絶する
までには至らなかったのだ。その女忍者、かなみが目指すのは主君
が隠れる最上階。

- リーザス城 最上階 -

「リア様！ご報告です！」

リアが隠れる最上階の部屋にかなみが飛び込んできた。部屋の中にいるのはリアとマリスのみ。不安そうにするリアの背中をマリスがそっと抱き込んでいる。

「かなみ、下の様子は…」

唇を噛みしめながら、かなみはリアの問いに答える。

「地獄です。ヘルマン軍がここに来るのも時間の問題です」

「大丈夫よ。今この城にはリックモレイラもいる。朝になれば国境警備隊が駆けつけてくれるわ」

「既にリックさん、レイラさん共に敗れました」

「そんな！レイラが！？」

「リックも…ですか」

「はい。奮戦していたリック將軍ですが、突如城内におかしな音色が鳴り響き、それを聞いた兵たちが次々と倒れていきました。恐らくバレス様やコルドバ様ももう…」

「そんな…」

「それと、この軍を率いているのはパットン皇子です。いえ、率いているのは軍だけではありません…魔人と手を結んでいます！」

かなみの報告にリアとマリスの目が見開かれる。人類の敵であり、自分たちを蹂躪する存在、魔人。それとヘルマンが手を結んだというのだ。

「魔人…ですって…マリス、奴らの狙いは…」

「はい、奴らの目的はカオスで間違いないかと」

「…カオス？」

リアとマリスの話の意味が判らず、かなみが問いかける。その時、リアの様子が変わる。震えが止まり、何かを決断したかのようにその目が鋭くなる。政治家として働いているときはまた違う、王女としての威厳を持ったその姿にかなみは何故か不安を抱いた。

「……マリス、聖盾を」

言われるままにマリスが部屋に置いてあったリーザス聖盾を持ちリアに手渡す。この部屋に避難する際、何故かリアが持つてきていたのだ。受け取ったリアは、かなみの目の前に歩みを進め、その盾をかなみに手渡す。

「…リア様、これは？」

「かなみ、リーザス国王女として命じます。この城から貴方だけでも脱出しなさい」

リアの命令に驚愕するかなみ。これが、先ほどの不安の正体。主君を置いて自分だけ逃げると、そう命じられたのだ。

「リア様！出来ません！！」

「かなみ、ただ逃げろと言っている訳ではないの。忍者の貴方ならこの城から気づかれずに脱出出来る可能性が高いわ。この聖盾を持つてランス様の元に行つて、この事を伝えて。もし出来ればルーク様にも協力を要請して」

リアがランスをダーリンではなくランス様と呼ぶ。ルークを呼び

捨てではなくルーク様と呼ぶ。リア個人としてではない、一国の女王としての振るまい。断れるはずがない。不甲斐なさに唇を噛みしめながらかなみは盾を受け取る。

「かなみ、早く行きなさい。注意はこちらが引きつけます」

「……必ず……助けに来ます」

「ふふつ、期待して待っているわ。マリス、私と貴方に知識ガードの魔法を掛けなさい。魔人たちに情報が漏れることの無いように」

「はっ！」

「マリス…最後まで付き合ってくれるわね」

「地獄の底まででもお供します」

「あら？やっぱりは地獄行きなのかしら？」

そう言いながらリアとマリスが部屋を出る。部屋の外からいたぞ！という声が響き渡る。かなみが脱出しやすいように自ら囿になったのだ。その姿を見送り、胸が張り裂けそうになりながらもかなみは窓から抜け出す。

- リーザス城 外周 -

今、陥落していくリーザス城から一人の忍者が抜け出した。それに気がついたヘルマン兵はいなかった。いや、正確にはたった一人、その姿に気がついた者がいた。

「……………ん？」

「どうかしましたか、ミネバ様？」

「……………いや、なんでもない」

部下に問いかけられた人物はヘルマン第3軍副将ミネバ。女性でありながら実力でこの地位までのし上がった彼女は、その部下の問いになんでもないと答え、夜の闇に消えていく忍者の背中を見送る。

「（あの距離じゃいまから追いかけても間に合わないね…報告してあの馬鹿皇子にあたしらの責任にされるのも癪だ。黙ってたほうが賢いってもんだ）」

こうして唯一の目撃者があえて報告を怠る。かなみはヘルマン兵に気づかれることなく脱出を遂げた。彼女は向かう、ある男たちの元へ。

「…ルークさん、ランスさん。お願い…リーザスを、リア様を助けて…」

この日、リーザスは陥落した。

第37話 聖装備の秘密

- 数日前 ジウの町 -

「それではルーク様、お元気で！」

「ああ、アニスも元気だな。それと、周りをよく見て行動するように」

リーザス陥落より数日前、ルークはジウの町を旅立っていた。アトラスハニーの事件後、ルークは町の一角が吹き飛んでしまったジウの町の復旧作業の手伝いを行っており、その間に千鶴子に命じられて復旧作業に来ていたアニスに妙に懐かれていたのだった。

「ああ…ルークさんがいなくなったら誰がアニス様の暴走を止めるんだ…」

復旧作業を行っているゼスの魔法使いが嘆く。初めこそ魔法使いでないルークを蔑んでいた復旧作業員たちだが、アニスが妙にルークに懐き、ルークもアニスの暴走を最小限に抑えるよう上手く扱ってくれたため、今では魔法使いでないということに関係なく、復旧作業に来ていたゼスの魔法使い全員がルークに感謝しているのだった。一度千鶴子にこの事を話したら、「絶対に何が何でもゼスにスカウトするように！」と言われたほどだ。一応スカウトはしたが、やんわりとルークには断られた。因みにキューティも初めのうちは折を見て復旧作業に顔を出していたのだが、年が明けてからあまりその姿を見なくなる。サイアスに聞いたところ、どうも治安隊隊長に出世したらしく、激務の日々を送っているらしい。

「さて、アイスの町に帰るのも久しぶりだな…」

ジウの町の復旧もほぼ完了に近づき、アニスも近々ゼスに戻るよ
うに辞令が下るとサイアスから内密に教えて貰ったルークはここら
が潮時と考え、アイスに戻ることを決めたのだった。ここ数ヶ月、
ギルド仕事も録に受けず、ゼスからの報奨金もジウの復旧に回して
くれと断っていたためサイフの中が驚くほど軽い。この事もアイス
の町に戻ろうと考えた要因の一端であった。1000GOLDも入
っていないサイフを見て少し笑いながらルークが呟く。

「ま、それ以上に貴重な繋がりが入ったから良しとするか…」

それが、アニスとの繋がり。以前リーザスでアレキサンダーを鍛
えたときのように、ルークはある理由から世界の強者との関わり合
いを持つとする傾向がある。勿論、打算的な理由だけでジウの町
の復旧を手伝ったり、アニスと付き合っていた訳ではない。アニス
とここまで仲良く慣れたのは偶然の副産物だ。その偶然に感謝しな
がらルークは帰路につくのだった。

- アイスの町近辺 街道 -

かなみは全力で走っていた。少しでも早くリーザスの危機をラン
スに伝えるために。ランスがここ数ヶ月仕事をせずにアイスの町に
いるのは知っていた。リアに命じられ、常にランスの動向を調べて
いたからだ。しかし、それとは逆にルークが数ヶ月アイスに戻って
いないのも知っている。こちらはリアに命じられてはいなかったた
め、ランスの調査のついでに個人的に調べていたことであつたため
、何処にいるかまでは把握できていなかった。何とかルークにも救援

を要請したい。かつて自分に忠臣への道を指し示してくれた人、ルーク。かなみはルークに絶対の信頼を置いていた。だが、居場所の判らないルークを悠長に捜している時間はない。ひとまずランスに救援を要請しなければ。息も絶え絶え、身体中には擦り傷の付いた状態で何とかかなみはアイスの町の前まで辿り着いた。

「……………かなみか？」

不意に後ろから声を掛けられる。その声は、かなみが一番会った人物の声。まさか、と思いながら振り返る。かなみを通ってきた街道とは逆、ゼスからの街道からその人物は歩いてきていた。その姿を見た瞬間、自然と涙が頬を伝う。何という偶然、何という奇跡。

「どうしたんだ？また王女の命令か？」

「ルークさん！！！」

気がつけば、かなみは街道を歩いてきていた男、ルークに抱きついていて。少し驚いた様子のルークだったが、かなみの体に付いた傷やそのただ事ではない様子を見て真剣な顔になる。

「どうした。何があった！」

「…お願い…リーザスを、リア様を助けて…」

・アイスの町 ランス家・

「うーむ…昨日新しく開発した大和流星松葉崩しMK2という体位はあまり楽しくなかったな」

「あれの影響で背中が痛いです…ランス様…」

「うむ、次は世間で噂の乳山嵐を試してみるか」

「ひんひん…出来れば普通なのでお願いします…」

朝食にへんでろばとカレー饅頭を食べながら、ランスとシイルは昨晚の情事の話をしていた。食事を取りながらするような話ではないが、そこは流石ランスといったところか。この家は以前まで住んでいた借家ではない。カスタムの町の事件後、とある事件の報酬に無理矢理この一軒家をいただいたのだ。家賃を払う必要も無くなったランスは前よりも更にギルド仕事をしなくなっていた。その時、家の扉がノックされる。

「ランス様、お客様みたいです。出てきますね」

「放っておけ。そのうち諦めて帰るだろ」

「また借金取りでしょうか？ランス様、そろそろキースさんに仕事を貰わないと生活できませんよ」

「またその辺のアイテムや家具でも売ればいいだろ」

「もう売れるものは大半売ってしまいました…本当にお金ありませんよ」

「…ちつ。それにしてもいつまで扉叩いていやがるんだ。借金取りだったら殺すぞ」

その時、扉の外から声が聞こえてきた。

「…ランス、話がある。もし居留守なら開けてくれ」

聞き覚えのある声にシイルがはっとする。以前二度も冒険で一緒になった、頼りになる冒険者。

「ランス様、この声は！」

ランスも声を聞いた瞬間ガバツと立ち上がり、扉に向かつていった。よかった、ランス様もあれだけお世話になったルークさんのことをちゃんと覚えていたんだ、とシイルはホツとする。

「がはは、来たぞ！金づるだ！」

ズルツとシイルがこける音が聞こえた。

訪問者は二人。ルークとリーザスの女忍者かなみであった。大事な話があるという二人をとりあえず部屋に招き入れ、朝食の続きを取りながら話を聞くことにする。かなみの話を要約すると、突如現れたヘルマン軍にリーザス所が制圧され、リア王女が掴まったということだった。

「もぐもぐ、よく判った。で、俺様に何をしろと言うのだ？」

「リア王女を助け出して欲しいのです。王女はランスさんが助けに来てくれるのを待っているのですよ」

「んー、いやだ。リアは俺様の女の一人ではあるが、そんな面倒な事に関われんな」

「そんな!？」

ランスの返答にかなみが机に身を乗り出す。隣にいたルークはその成り行きを黙って見守っていた。

「お願いします。それじゃアリア王女があまりにも可哀想です！」

「ふん、今時なんの見返りもなく人助けする奴なぞただの偽善者だ。俺様は英雄だが、偽善者じゃない！」

「ランス様：可哀想ですから協力してあげましょうよ：そうだ、リ

ア王女を助けるとご褒美が沢山貰えると思いますよ。ねえ、かなみさん！」

可哀想に思ったシイルが助け船を出す。その事に内心感謝をしながら、かなみがその話に乗っかる。

「はい、リア王女を救って下さった暁には、ランスさんに沢山の財宝を用意させていただきます！」

「ふん、財宝は当然一生遊んで暮らせるだけ貰う。だがそれだけじゃ動く気になれんなあ。あともう一つ何か決め手になる物がないと」

そう言ってイヤらしい顔でかなみの体を見始めるランス。シイルがランスのその顔に気がつき、まずいと内心想う。

「決め手ですか…私で出来ることならなんでもします。ですから、お願いします！」

「なんでも？なるほど、ではお前の体を……」

「リーザスを救ったら、きっとリーザス中の美女からモテモテだろうな」

「……………何？」

ランスの話を遮るように喋ったのはここまでほとんど黙っていたルーク。その話の内容にランスがピクリと反応する。ルークはそのまま話を続ける。

「そりゃそうだろ。リーザスは今ヘルマンに支配されている。そこに颯爽と現れ、リーザスに平和を取り戻す戦士ランス。正に英雄だ」
「うむ、俺様は英雄だな」

「見れば顔も美形。女の子たちは思うだろう、なんて素敵なお方。あの方にこそ私の体を差し出すべきなんだわ」

「うむ、うむ、世界中の美女は俺様のものだから」

「きゃー、英雄ランス様！私を抱いて下さい（裏声）」

「がはは、よし、俺様が抱いてやるう！」

「何言ってるの、次は私が抱いて貰うのよ！あと1000人は順番待ちしてるんだから（裏声）」

「なんと！俺様ハーレムではないか！」

「でもそんなに沢山の美女相手では前もって精力を溜めておかないと勿体ないわ。今の内からそれに備えておくべきよ、ランス様！（裏声）」

「がはははは、シイル！冒険の準備をしろ！リーザス中の美女が俺様を待っている！」

「はい、ランス様！」

かなみへの要求をすっかり忘れ、上機嫌で冒険の準備をするランス。シイルがランスの指示を受け装備やアイテムの準備をし始める。ランスに引き受けて貰え、ホッとすることかなみ。ルークに礼を言うてくるが、自分の貞操の危機であったことには気がついていない様子だった。準備を続けるシイルがルークの側を通ったとき、ルークにしか聞こえない程度の声で呟いてきた。

「相変わらずお優しいですね、ルークさん」

「流石にあのまま放っておくのは可哀想だからな…」

程なくしてランスとシイルの冒険の準備が完了した。かなみはランスに持っていた白い盾を手渡す。

「ん？なんだ、これは？」

「リーザス王家に伝わる聖盾です。この間お渡しした聖剣、聖鎧とセットでお使い下さい」

「がはは、盾は邪魔になるから使わんのだが、貰える物は貰ってお

「うー」

そう言って盾を受け取るランス。その時かなみはおかしな事に気がつく。ランスが装備しているのが聖剣と聖鎧でなく、安いロングソードとプレイトメイルなのだ。

「あの…聖剣と聖鎧はどこに…？」

「聖盾ならここにあるぞ」

「いえ、盾ではなく剣と鎧です。以前カスタムでお渡ししましたよね？」

「あれはだな、売った」

場が凍り付く。シイルが申し訳なさそうにし、ルークがまたか、と呆れた表情になる。かなみはランスの言葉がすぐには理解できず、ランスに聞いたです。

「……………売っ…た…？」

「中々豪華だったから高く売れたぞ。なあシイル」

「はい、セットで2000GOLDでした」

それを聞いた瞬間、バターン、とかなみがその場に倒れ込んでしまふ。駆け寄ったルークに抱え起こされるが、上の空の様子でリーザスが滅んでしまふなどとぶつぶつ言っていた。

「なんだ？売ったらまずかったのか？」

そのランスの言葉にガバツと立ち上がり、かなみが食って掛かる。

「当たり前です！あれを売るなんて、どうしてそんな事をしたんですか！！」

「俺様の持ち物をどうしようとか俺様の勝手だろう」

「すいません、かなみさん。実はお金に困って売ってしまったんです」

「かなみ、聖装備に拘るのには何か訳があるのか？」

ルークがかなみに尋ねる。かなみは一瞬考え込んだが、これから協力する三人には真実を話しておこう決断し、口を開く。

「リーザス城に攻め込んできたのはヘルマン軍だけじゃなかったの。彼らの中には魔人もいたわ」

「魔人だと!!」

人一倍反応したのはルーク。ルークの珍しいとも言える異常な反応に少し驚くかなみ。ランスとシルモルークに少し驚くが、それ以上に魔人が人間界に来ていたことに反応する。

「魔人か……」

「どうして……魔人は仲間割れで戦争しているはずです。人間界に来る余裕なんて無いはずなのに……」

「そうだ…戦争をしている……はずなんだ……」

「はい。でも確かに魔人がいたのです。彼らの狙いは、リーザス城の地下に隠されているカオスです」

「カオス？なんだそれは？」

「それは私にも判りません。ただ、リア王女とマリス様が魔神たちの狙いはカオスと言っていました」

「だが、リーザス城が陥落してリア王女も掴まった今、そのカオスは魔神の手に落ちているんじゃないのか？」

「いいえ、いくら魔人といえどそれは無理です。カオスは強力な封印で隠されています。その封印の解くための鍵が……」

「聖剣と聖鎧、そして聖盾と言う訳だな。駄目だ、詰んだな」

「誰のせいですか!!」

ランスがまるで人ごとのように言う。かなみがそれを聞いて激怒するが、横のルークが少し考え込んだ様子でかなみに尋ねる。

「そのカオスは必要な物なのか？」

「リア王女が私に言いました。魔人を倒すにはカオスが必要だと。そして、ランスにならそれを使いこなせると。魔人を倒せるくらいだから凄い武器か何かなんだと思います」

「……………そうか、以前話しに聞いていた剣……………カオスという名前だったのか……………」

ルークが独りごちる。その呟きは三人に届かなかったが、ランスがルークに尋ねる。

「そついえばお前は結界を破れる技があるんじゃないか？」

「えっ！そつなんですか!？」

「……………俺も一応考えてはいた。聖装備が無くても俺が解ける可能性はあるが……………もし解けなかったときは相手の懐、取り返しが付かない。それは最後の手段として、聖装備を確実に揃えておくべきだな」

ルークはかつて自分が封印を解くことの出来なかつた扉を思い出す。ヘルマン東部に存在する古代の遺跡と呼ばれる迷宮、マルグリット迷宮。その第1層、偶然見つけた隠し扉の奥に佇んでいた巨大な扉。左右には二つずつ、竹を斜めに切つたような台座が置いてあった。扉には強力な結界が張っており、ルークがどんなに試してもその扉が開かれることはなかったのだ。もし万が一、リーザスの封印がそれと同等のものだったら全てが終わる。確実に封印を破る手段があるのであれば、そちらの準備をしておくにこしたことはないのだ。

「それでは、まずは武器屋に剣と鎧を買い戻しに行きましょう」
「既に誰かに買われてたらリーザスはおしまいだな、がはは！」
「だから、誰のせいだと思ってるんですか！！」

- アイスの町 武器屋 -

「む？変なおっさんがいるぞ！武器屋の店番はレンチという美少女だったはずだが」
「お前がランスだな」

武器屋にいたのは普段店番をしているレンチではなく、その父親。ランスが入ってくるや否やギロリとランスを睨み付ける。

「俺はレンチの父親だ。お前がいる限り絶対に娘は店番に出さんぞ！」

「なんだ？俺様は何も悪いことはしてないぞ」

「悪いことをしていないだと……さんざん娘を騙して傷物にしたくせにこのやろう！」

「ランス……お前な……」

「人聞きの悪い。俺様はレンチさんと合意の上でメイクラブしただけだ」

「ちょっと、喧嘩してないで聖剣と鎧の事を聞いてよ」

放っておくとどれだけの時間言い合いをするか判らなかつたため、痺れを切らしたかなみが話に割って入る。

「おい、親父。俺様が以前ここに売ってやった聖剣と聖鎧だがまだ

あるか？」

「あるぜ。あんな高いモン中々買い手が付かなくて困ってたんだ」

「おお、ラッキーだ。なら返せ」

「馬鹿野郎！ただで返せるか！しっかり金を払いやがれ！」

「ちっ、確か300GOLDだったな」

「2000GOLDだ！利子が付いて2200GOLD。耳を揃えて払って貰おうか！」

「ま、店の売値じゃなくランスが売った値段にちょっと上乗せしてる分、良心的な値段だな」

ルークがそう言う。普通店に売ったものを買うときは売値の二倍が相場だ。顔と口は悪いが、そこそこには話せる親父のようだ。

「強欲親父め。仕方ない、払ってやろう。行け、ルーク！」

「ん？何の話だ？」

「緊急事態だ。俺様の代わりにお前が払え」

「いや、今俺も持ち合わせがないぞ。しばらくギルド仕事受けてなかったし」

「な、な、な、なんだとー！！」

ランスが絶叫する。随分と意気揚々と武器屋に向かったと思ったら、どうやら初めからルークの金を当てにしていたらしい。

「馬鹿者！お前から金を取ったら、ただのちよつと強い冒険者ではないか！俺様の下僕としての自覚が足りんぞ！！」

「人の金を当てにするな！というかい加減下僕扱いを止めろ！」

「え、何？聖剣と聖鎧買い戻せないの！？」

「すみません、かなみさん……」

「店の中で騒ぐんじゃないねえ！」

店の中で口論を始める一行。そんな中ルークはサイアスの言葉を思い出していた。金に無頓着すぎる、いつか痛い目見るぞと。確かにゼスからの報酬を全てジウの町の復興資金に回すのではなく、もう少しくらい貰っておけばこんなことにはならなかったと少し反省をするルークだった。

「駄目だ、リーザス終わった」

「だから誰のせいだと思っているのよ！ランスー！！」

第37話 聖装備の秘密（後書き）

「人物」

ランス (3)

LV 10 /

技能 剣戦闘LV2 盾防御LV1 冒険LV1

鬼畜冒険者。カスタムの事件後、一件だけ依頼をこなし自宅をゲツト。その後はシイルと共に家でゴロゴロしていたためレベルが下がりがまくった。ルークに乗せられリーザス奪還のために動く。

シイル・プライン (3)

LV 10 / 50

技能 魔法LV1 神魔法LV1

ランスの奴隷。ランス同様冒険をしていなかったため、レベルがかなり下がる。普段は冒険をすることをあまりよく思わないシイルだが、知人の窮地のため、今回は率先して冒険に賛同する。

見当かなみ (3)

LV 27 / 40

技能 忍者LV1

リーザス王女リア直属の忍者。カスタムでの再開後もしつかりと鍛錬を詰め、今では副将たちと模擬戦をしてもそれなりに渡り合えるほどには成長を遂げる。ランスのあんまりな振る舞いに、気がつけば呼び捨てにしていた。

レンチ

アイスの町の武器屋の娘。ランスに散々騙されて傷物にされ、家に引きこもってしまった。それが原因で二重人格になる。

「装備品」

リーザス聖盾

リーザスの紋章が刻まれた王家に代々伝わる盾。防御力も非常に高いが、実はリーザス国にある封印の鍵としての役割も担っている。

プレートメイル

安物の軽鎧。冒険者を始めたらまずはこれ、という触れ込みである初期装備。ある程度の冒険者なら自然と装備しなくなる代物。

「料理／食材」

カレー饅頭

ピリリと辛い饅頭。へんでろばだけではランスが満腹にならないため、シイルがこれも一緒に食卓に出すことが多い。

「その他」

マルグリット迷宮

ヘルマン東部にある古代遺跡。数百年にも渡り探索研究がされているが、その全体像は未だに判っていない。現在では冒険の名所とされており、数多くの冒険者が腕試しに立ち寄る。ルークも10年以上前一度だけこの迷宮に挑んだが、その際に第一層でおかしな扉を見つけることとなる。

第38話 兄と妹、師匠と弟子

・アイスの町 キースギルド・

「おっ、ランスじゃねえか。久しぶりだな、元気にやっとなるか。後ろにいるのは：ルークか!？」

「少し金が入り用だな。楽で役得で簡単ですぐ終わって報酬ががっぱりの仕事を紹介しろ」

「んなもんねーよ!」

「あ、ハイニさん、お久しぶりです」

「シイルちゃん、ご丁寧にどうも」

聖剣と聖鎧を買い戻すための金を稼ぐため、キースギルドに仕事を受けに来たルークたち。武器屋の親父には手付け金として500GOLD置いてきた。ルークが。ランスがキースに無茶な注文をし、シイルはキースの側に控えている美人秘書ハイニと挨拶をしていた。

446

「ええい、なら何か稼ぎのいい仕事を紹介しろ!」

「一足違いだつたな、ランス。美少女救出という美味しい仕事があったんだが、さっき決まったんだ。ウチのギルドの方針が早い者勝ちだから今から受けても良いが、無駄になると思うぞ」

「何だと。何処の馬の骨だか知らん奴が受けた仕事なぞ、俺様がそいつらよりも早く解決してやる!」

「受けたのはラーク& amp ;ノアだ」

「げっ!」

「あー、そりゃ無駄になるかもな」

キースがその名前を出した瞬間ランスがイヤそうな顔をする。ル

「ルークもその二人よりも早く解決するのは難しいかもと頭を掻く。そんなルークにラーク&ノアを知らないかなみが尋ねる。」

「その人たちは強いんですか？」

「キースギルドのエースだな。数多くの依頼をこなしてきた一流の剣士ラークと、神魔法も使う攻防一体の女戦士ノア。その上美男美女。最近じゃ魔獣カーサを倒したことで、各地で敬意と信頼を得ている」

「もしかしてその方、ルークさんより、強いん……」

「なに、他人事みたいに言ってるやがる。カーサを倒したときはお前もラーク&ノアと一緒にだったんだろ。ラークが言ってたぜ、ルークがいなければ勝てる相手じゃなかったのに、自分たちだけ有名になって申し訳ないってな」

かなみの問いかけに被せるようにキースが喋る。そうだったかとルークはとぼけた様子。

「キース、その仕事の内容を教えろ。真の英雄である俺様がパパッと解決してやる！」

「やれやれ、無駄だとは思うがな。ハイニ、ランスにインダスの説明をしてやれ」

「はい、キースさん」

そう言って秘書のハイニが資料を持って一步前に出てくる。

「今回の依頼は、インダス書房の会長であるジンゲル・剛・インダスの娘、ローラ・インダスを救出することです。報酬は2300G OLD。ローラさんの写真はこちらです」

そう言ってローラの写真を手渡される。茶色い髪の少女がまだあ

どけない様子で笑っている。

「ふむ、75点といったところだな」

「失礼な奴だな。十分可愛いじゃないか」

「あの…ルークさんはこういった方が好みで…？」

「ん？」

「あ、いえ、なんでもないです！」

「ほーう」

かなみの様子を見て何かに気がついたようににやにやと笑うキース。そんな風に見たら駄目ですよ、とハイニがキースを軽く叱りながら話を続ける。

「ローラ・インダスはこの町の北東にあるリスの洞窟の主のリスに捕まっています。洞窟にはリス以外にも様々な魔物が生息しているようです」

「リス？そんなに強い魔物じゃないな。こりやラークたちが苦戦するとは思えんな…」

「ふん、俺様の實力なら先に出発したラークごときすぐに追い抜いてやる。華麗に解決すれば、ノアさんも俺様の魅力に気がつき、ラークを捨てて俺様に体を許すだろう、がはは！」

「調子の良い奴だ」

「ハイニさんもそんなハゲ親父じゃなく、俺様の秘書にならないか？」

「…困ります」

「おいおい、勝手に人の秘書口説かないでくれるか。というか、ランスもラークもそろそろ結婚しないのか？俺はつきりランスはシイルとすぐに結婚すると思っていたんだがな」

突然の話題変更は何故か当人たちではなくシイルとかなみに緊張

が走る。その様子を楽しんでいるのか、キースはにやにやとしながらランスとルークを見る。

「アホ、シイルは奴隷だ。それに俺様は結婚なんて面倒な事する気はない！」

シイルが後ろであからさまに落胆する。そのシイルをかなみが励ましている。

「残念だな。俺はお前の結婚式でクソ危ないスピーチをするのが楽しみなのに」

「叩けばいくらでも埃が出てくるからな、ランスは」

「それ以前の問題として、結婚式をしたところでお前は絶対に呼ばん！」

「こんだけ世話してやってるって言うのにつれない奴だ。ルークはどうなんだ？」

シイルを励ましていたかなみの耳が少しだけ大きくなる。

「んー……特にそういう相手はいないな。ランスやラークと違ってモテないしな」

今度はかなみが落ち込み、そのかなみをシイルが励ましていた。なんだかこの二人、すぐにでも仲良くなってしまいそうな雰囲気だった。

「何がモテないだ。何人にも告白されてるのに、ちっとも受けやしねえ。お陰でランスと違って危ないスピーチが出来ないじゃねえか」

「そんなスピーチ、されないに越したことはないだろ」

「何だ、こいつ童貞か？」

「いや、そう言う訳じゃないみたいなんだが……一晩限りとか思い出にとかつてのが多いみたいだ。俺も前調査したんだが、こいつの元彼女みたいなのは見つからなかった」

「何、勝手に訳の判らん調査してるんだ！ランス、そろそろ行くぞ」「うむ、キースのせいで下らん時間を取った。もし先を越されていたら賠償して貰わんといかん」

「お前も話しに乗ってたじゃねーか……。あ、ハイニ。俺はまだちょっとルークと話がある。先にランスたちだけ見送ってくれ」「？はい、判りました」

そう言っただけで部屋を出て行くこととする一行の中からルークだけ引き留めるキース。どうやら二人きりで話したいことがあるらしい。何となく、ルークにも話の内容に予想がついたため、素直にそれに応じる。ランスたちがハイニ連れて行かれ、部屋の中にはキースとルークだけが残っていた。ルークは近くにあったソファに腰掛ける。キースが葉巻に火をつけ、一度だけ吸ってから話を始めた。

「あー……聞いときたいことがあってな……」

「言いあぐねるのは柄じゃないぞ、キース」

「ランスのこと何だがな……あいつは……」

「……知っている。ランスがそうなんだろ？」

「！？気がついていたのか？」

驚くキースにルークが表情を変えずに答える。

「リーザスの誘拐事件の時に薄々と、この間のカスタムの時に確信……って感じだな」

「そこまで判っていて……ランスと一緒に仕事をしているのか？大丈夫……なのか？」

フツと自嘲気味にルークが笑う。

「あいつが死んだのは…ランスのせいじゃないだろ。自分のわがままで…ただあの場所での生活が楽しかったからというだけで…十年も帰らなかつた…俺の責任だ」

「…あまり気にするな。お前も若かつたんだ。それにしても…どうして気がついたんだ？」

「よく似ているよ。迷宮を探索するときのちょっとした癖から、戦い方までな」

そう言つて席を立つルーク。話は終わったとばかりに部屋を出て行くこととする。

「あいつに似てるから…一緒にいるのか？」

「そういう訳じゃないさ。何というか…放っておけないんだ」

それだけ言い残し部屋を出て行くルーク。録に吸えずに短くなつてしまった葉巻を名残惜しそうに灰皿に押しつけながら、キースは少し昔を思い出す。

GI1013

・アイス町 キースギルド・

「おい、聞いたぞリムリア。最近変な坊主と一緒に冒険しているんだつてな。独身なのにこぶつきか。ルークが聞いたら悲しむぞ」

キースが依頼を受けにやってきた女戦士に話しかける。黒髪で整つた顔立ち。右目は見えておらず、金属製の盾を加工したものを眼

帯代わりにしている。片目ではあるが、この女戦士は紛れもないキースギルドのエースであった。

「ふん、こんな事で悲しむようなやわな兄貴じゃないさ。何せ、もう姿を眩ませて8年だ」

「どこで何やってるんだかな……」

「ま、死んじやいないだろ。帰ってきたら年数分全力で殴るけどな」
「それにしても、どういう気まぐれだ？お前がルーク以外と一緒に冒険をするなんて」

少し考えた後、女戦士はキースに向かってこう答えた。

「なんだか、放っておけなくてね」

LP0002

- アイスの町 キースギルド -

「放っておけないか…兄妹ってのは似るもんなのかねえ……」

キースが二本目の葉巻に火をつけ、フウッと煙を吐き出した。

- アイスの町 キースギルド前 -

ルークがギルドから出てくるとランスたちが待っていた。ルークの姿を見るとランスが文句を言ってくる。

「遅いぞ！ルークに負けたらキースとお前のせいだぞ！」

「すまん、だが文句ならキースに言ってくれ」

「それじゃあ、リスの洞窟に向けて出発しましょう」

そうして一行はリスの洞窟へと旅立つことになる。アイスの町を出る直前、かなみがルークに話しかけられる。

「かなみ、さっきの質問の答えなんだが…」

「し、質問ですか!？」

先ほどのキースギルドのやりとりをかなみが思い出し、質問と言われ真つ先にルークの好みを聞いたことが思い浮かび、顔を赤くし焦り出す。

「ああ、俺とルーク、どっちが強いかってことだが…」

あつ、そつちかと落ち着きを取り戻した後、勘違いした自分が少し恥ずかしくなるかなみ。そのかなみの様子を不思議そうに見ながら、ルークは先ほどのかなみの質問に答える。

「まあ、負ける気はしないな」

実に平然と言つてのけるが、嫌味に聞こえない。その頼りがいのある姿を見ながら、偶然町の前で会えた奇跡に、かなみはもう一度深く感謝するのだった。

「ありました、ランス様。この扉にL I S っ て書いてあります」

アイスの町を出て北東に進んだ三人。それほど町から離れていない場所に、その洞窟はあった。緑色の扉にご丁寧なL I S と書いてある。ここがリスの洞窟で間違いないだろう。

「よし、リスの洞窟に入るぞ」

「主はリスって事だが油断はするなよ。もしかしたら、恐ろしい相手が待ち構えているかもしれないからな」

「はい！ルークさん！」

こうして一行は洞窟に入っていく。このルークの予想は的中する。今現在、このリスの洞窟には恐るべき相手が待ち構えているのだった。

・リスの洞窟 三層・

「はあっ！」

「きゃあぁー」

ラークが女の子モンスターのパステルを倒す。その横ではノアがNEOぬぼぼを斬り伏せていた。この二人がラーク & amp ;ノア。ここまで来る間に出てきたモンスターをもともせず、ほぼ無傷で三層まで辿り着いていた。

「大丈夫か、ノア？」

「ええ、大丈夫よ。そろそろローラさんを見つけられると良いんだけど……」

「リスがそう洞窟の奥深くまで行けるとは思えない。そろそろ最深部のはずだ」

そう言つてラークとノアは洞窟を進んでいくラーク。流石は歴戦の冒険者といったところか、その予想は当たつていた。もう間もなくラークたちはリスとローラがいる部屋に辿り着く。そうすればリスはラークの敵ではない。ルークたちよりも早く、この依頼を達成するはずだった。そう、このリスの洞窟が普段通りの状態であつたなら、だ。少し開けた場所に出たラークとノア、見ればその前に一人の女性が立つていた。赤い髪に、ボンテージのようなセクシーな黒い服を身に纏つている。

「ローラさん：ではないわね？」

「…ノア、何かおかしい。気を抜くな。貴方は？こんな洞窟の奥深くで一体何を？」

冷静に考えれば普通の女性がこんな洞窟の奥深くにいるはずがないのだ。だがそれ以上に、目の前の女の異質な雰囲気にはラークは緊張を解けずにいた。女がにっと笑う。

「貴方：名前は？」

「……キースギルド所属、ラークだ！」

「聖剣と聖鎧、そして聖盾。持つてるんでしょ？寄越しなさい」

「……………何のことだ？そんな物は知らない」

「ふふつ、嘘を言つても無駄。サテラには判るんだから……」

「嘘なんて言つてないわ！私たちは本当にそんなもの知らないの」

「ふーん…じゃあさ、ちよつといじわるすれば…嘘かどうか判るわよねっ！…！」

「…！？」

瞬間、サテラと名乗った女の後ろに二つの巨大な石の塊が現れる。見ればそれは人の形をしている。

「まさか：ガーディアンだともいうのか…」

「あんなに精巧なものが存在するの…ラーク…」

「ノア、俺の側から離れるな！」

「シーザー、イシス。やって…！」

・リスの洞窟 二層・

「ふん、思った通り大した敵はいないな。予想がはずれたなラーク」

「だから油断はするなと言ってるだろ。それにしてもかなみ、また腕を上げたな」

「あ、ありがとうございます！」

ラークたちもここまでほぼ無傷で進んでいた。出てくるのは雑魚モンスターばかり、その上かなみが以前よりも遙かに成長を遂げているのだ。ランスとシルのレベルが下がっているとはいえ、苦戦するようなダンジョンではなかった。その時、下の階から女性の悲鳴が聞こえる。

「この声は…：ノアの声だ！」

「急ぐぞラーク！ラークの奴はどうでもいいが、ノアさんのピンチには俺様が颯爽と駆けつけねば！」

駆け出すラークとランス。シルとかなみもそれに続き、一行は三層へと下りていった。ラークたちが通ったばかりだったのだろうか、それとも何かに怯えているのだろうか、理由は判らないが何故

かモンスターが出現せず、一直線にルークたちは駆けていく。すると、少し開けた場所に出る。そこには地に倒れたボロボロの姿のルークとそれを足蹴にする女、それと二体のガーディアンとノアがいた。ガーディアンの一は女の側に控えており、もう一はノアを拘束している。こちらルーク同様かなりの傷を負っている。

「まさか…ルークとノアがやられたのか!? 何者だ…!」

「イシス。まだ正直に言わないから、ちょっとその女いじめてあげて」

部屋の入り口にいるこちらにはまだ気がついていないようで、女はイシスと呼ばれたガーディアンに指示を出す。そのガーディアンは素早くノアの服を引きちぎる。

「いや…ルーク、助けて…!」

「やめろ! ノアを離してくれ! 頼む! ! !」

「あははは、どうして人間なんかと交渉しないといけない? さっさと喋っちゃえばいいのに」

「本当に知らないんだ…!」

「…イシス。やって!」

己の巨大な物をノアの中に挿入しようとするイシス。その瞬間、何者かがイシスに飛びかかってきた。ルークだ。その剣を腕で受けるが、拍子にノアを離してしまう。ルークは素早くノアを抱きかかえると、ガーディアンから一歩離れる。

「…誰?」

「る、ルークさん!」

「ルークだけじゃない! この英雄の俺様もいるぞ! !」

「ルーク…それにランスもか…すまない…気をつける、こいつら普通じゃない! !」

ルークとノアが突然のルークの登場に驚く。危ういところを救って貰った形になるが、目の前の敵の強さを実感している二人は安堵の表情を浮かべはしなかった。かなみが素早くルークからノアを受け取り、シイルがヒーリングを掛ける。目の前のガーディアンに対し臨戦態勢のルークだが、ランスは女にどうどうと近づいていき、高らかに宣言した。

「がはは、誰だと言ったな？この俺様こそ、愛と正義のヒーロー、ランス様だ！！こんな酷い行いを見過ぎすわけにはいかん。この俺様の正義の熱棒で更正させてやる。がははははは！！」

「……………馬鹿？」

「なんだとおおお！！」

ランスを蔑んだ目で見ながら、女がふん、と鼻を鳴らす。

458

「本当に持っていないみたいだからもういいわ。シーザー、イシス、帰るわよ。サテラ、馬鹿は嫌いなもの。馬鹿が移る前に帰らなきゃ」
「俺様が馬鹿だと、ええい、待て！俺様が更正させてやる！！」
「そうです、ランス様は馬鹿じゃないです！」

この場から撤退しようとする女に対し、ランスとシイルが抗議する。が、ルークは女の名前を聞いて目を見開く。

「サテラ…だと…」

「今日は沢山遊んだから疲れたわ。よつと！」

そう言ってシーザーの肩に飛び乗り、この場を素早く離脱する。サテラに向かってランスが叫ぶ。

「待て、逃げるのか！卑怯者め！！」

「どうして魔人であるこのサテラが人間ごときに逃げなきゃならない。見逃してあげるんだから感謝するんだな」

そう言い残し、サテラとガーディアンが消えた。ランスが悔しそうにサテラが消えた方向に文句を言い、かなみとシルはサテラたちがいなくなって気が抜けたのか、気を失ったラークとノアを介抱していた。そんな中、ルークが小さな声で呟く。

「馬鹿な…サテラだと…なぜ…なぜだ…」

それは、普通であれば知り得ないはずの情報。人の身が辿り着くことのないはずの領域。

「なぜホーネット派の魔人が…ここにいるんだ！」

その呟きは誰の耳にも届くことはなかった。

第38話 兄と妹、師匠と弟子（後書き）

「人物」

リムリア・グラント（半オリ）

LV 32 / 70（生前）

技能 剣戦闘LV2 冒険LV1

ルークの双子の妹でキースギルド所属の冒険者。GI1014年、冒険中にその命を落とす。冒険先で拾ってきた悪ガキの性根を叩き直すため、冒険に連れ歩くことになる。その悪ガキはリムリアに冒険のいろはを教わり、師匠と弟子のような関係になる。その悪ガキが今使っている必殺技も自分で考えたとはいっているが、リムリアが使っていた技に影響を受けている。そのリムリアが使っていた技も、元々は兄が使っていた技の影響を強く受けている。そのため、兄と悪ガキが使う技も、よく似ている。

キース・ゴールド（3）

アイスの町にあるキースギルドの主。ルークとランスの過去を知る数少ない人物であり、その動向を見守っている。秘書のハイニとは恋人関係にある。

ハイニ

キースギルドの優秀な美人秘書。きりりとしたメガネとスーツが決まっている出来る女。ハイニ・ゴールドという名前になる日も近いのでは、と噂されている。

「モンスター」

魔獣カースA

かつてゼスの2級市民を恐怖のどんぞりに陥れた恐るべきモンス

ター。ライク & amp ;ノアとルークが協力して打ち倒す。身体中つぎはぎだらけで、まるで何者かが人工的に造ったかのような出で立ちであった。

ぬぼぼ

生まれたときから実体を持たない霊体系モンスター。下級モンスターのため、霊体ではあるが武器でも簡単に倒すことが出来る。NEOぬぼぼという上位種もいるが、こちらもあまり強くない。

パステル

全滅危惧種女の子モンスター。鎧や盾で武装した金髪の戦士。昔は各地に生息したが、最近はめっぽう見なくなり全滅危惧種入り。

第39話 それぞれの思惑

・アイスの町 キースギルド・

「まさかラーク&ノアがやられるとは…」

ルークたちはラークとノアを放っては置けないと、一度アイスの町に戻ってきていた。ノアを病院に連れて行く際、ラーク自身も深手であるにも関わらず、先にキースギルドに報告に行くと言って分かれたのだが、姿が見えない。

「ふん、所詮は二流の冒険者だったということだ。ノアさんを危険な目に遭わせやがって。ま、これでこの仕事を受けているのは俺様たちだけだな」

「そうなるな。ちゃんと成功させるよ」

「キース、ラークは？」

「…修行の旅に出るんだとよ。自分の未熟さを知ったって言ったぜ」

「相手が魔人じゃ仕方ないと思うんだがな…」

「ノアを守れなかったのがショックだったみたいだ。それよりも、本当に魔人がいたのか？」

キースがルークたちにそう尋ねる。隣のハイニが若干怯えた様子だった。無理もない、人類の敵である魔人が現れたのだ。

「…相手はそう名乗っていたな。本当かどうかは判らんが」

「多分本当だと思います。あの女、最初は気がつかなかったけど、リーザス城で皇子の後ろに控えていた女だと思う…」

そう話に入ってきたのはかなみ。これが魔人の力と豪語していたパットン皇子の後ろに控えていた三人の内の一人があのだとすれば、魔人であるという話も信憑性が出てくる。ルークはそれとは別に、彼女の名前から信憑性を持っていたのだが、それは誰にも言っていない。かなみの言葉を聞き終えた後、キースに向き直る。

「……だそうだ。」

「ちっ、魔人がリーザスにいるってのかよ。勘弁してくれ……」

悪態をつきながらため息を吐くキース。ハイニを抱き寄せ、その不安を和らげてやっている。

「とにかく事件を解決しないと。いつまでもこうしていても事態は悪化する一方だ」

「うむ、その前にノアさんの様子を見に行くぞ。弱いルークに愛想を尽かした今なら俺様に股を開くかもしれんからな、がはは！」

「あ、病院に行くなら言伝を預かってくれるか。ルークからノアにだ。「すまない、弱い俺を許さないでくれ。君は平穩に暮らしてくれ」、だよ」

「……勝手な男だ。ノアの好意にも気づいているだろうに」

「ノアがもう戦えないことも察したんだろうな」

そう、ノアはもう戦うことの出来ない体になっていた。イシスに犯されそうになった恐怖心から精神を傷つけられ、武器を持つことが出来なくなっていた。ルークはそれを察し、修行の旅に出る自分についてきてくれとは言えなかったのだろう。

「これはルークが置いてった金だ。500GOLD。お前らにだよ」

「……ふん、こんなはした金貰ったところで聖剣と鎧を買い戻すには足りんな。事件解決したら金も十分だし、全く持って俺様たちには不都合な金だ。ああ、最後まで使えん男だ」

そう悪態をつきながら部屋を出て行くとするランス。出て行く直前でキースに振り返り、こう指示を出した。

「…俺様たちには不要だからノアさんの入院費にでも充ててやれ」
「ランス様……」

「ふん、さつさとノアさんに会いに行くぞ！」

「………ちよつと見直したわ」

「ああいう奴なんだよ」

さつさと出て行ってしまったランスの後を三人が追うが、キースがルークを引き留める。

「ルーク、お前にも言伝を預かってる」

「俺にもか？」

「ああ。「必ず強くなって帰ってくる。その時はもう一度一緒に冒険してくれ」、だよ」

「…確かに承った。期待して待っているとするかな」

修行の旅というのは大変なものだ。その上あのラークの状況では自分を無理に追い込みかねない。無茶な修行をして分不相応なモンスターと戦い、命を落とす冒険者も少なくない。だけど、あいつは必ず戻ってくる。そうルークは確信しながらギルドを後にした。

「そうですか…ルークが…」

「ああ、確かにそう言っていたらしい」

「ノアさん、お体の調子はどうなんですか？」

「うん、あまり大事には至ってなかったみたいで、これならすぐに退院出来そうなの。ルークさん、ランスさん。ありがとございませう。あの時二人がいなければきっと私たち…」

そう言いながら震え始めるノア。あの時の恐怖を思い出してしまったのだらう。確かに体は大事には至っていない。問題は心。同じ女性のシルとかなみが側に寄っていき、手を握ってあげている。少しずつだが震えが収まってくる。

「ごめんなさい、私…」

「気にしなくていい」

「うむ、美人は震えていても美人だ」

「……もう聞いているかも知れませんが、冒険者は止めて田舎に帰ろうと思っています」

「……そうか」

「いい気になっていたんだと思います。無敵のヒーローだ、なんて町の人たちに言われて。あのサテラという女に会って…初めて冒険を本当の意味で怖いと思いました。全然…無敵のヒーローなんかじゃなかった…ただの臆病な女です…」

そう言って涙を零すノア。掛ける言葉が見つからず、部屋が静かになる中、何度もルーク& amp ;ノアと行動を共にしたルークが口を開く。

「ヒーローだったさ」

「そんなこと…」

「魔獣カーズAを倒したとき、何人もの子供たちが笑顔で駆け寄ってきてくれただろ。あの時だけじゃない、沢山の冒険をしてきたんだ。何人もの人に感謝をされてきたはずだ」

ノアの頭の中を今までの冒険がよぎる。大変なこともあった。嫌なことと言われることもあった。でも、事件を解決すると必ずみんな笑顔で感謝をしてくれた。駆け寄ってくる子供たち、涙を流しながら感謝する老人。その顔が、次々と浮かぶ。

「その人たちにとって…君らは間違いなくヒーローだったさ」

「……ルークさん、ありがとうございます」

ノアが先ほどよりも更に大粒の涙を流す。だが、その涙が持つ意味合いは大きく変わっていた。まだノアさんとやっていないと騒ぐランスを引っ張り、部屋を出て行くことする一行にノアが後ろから声を掛ける。

「すぐには…無理だと思います。でも…またいつか、私が冒険者として戻って来られたら…その時は一緒に…」

ラークの時と違い、今度は全員が振り返り返事をする。

「がはは、もつと美女になって俺様の元に来るといい。可愛がってやるぞ」

「ノアさん。私、ずっと待っています！」

「ほとんど初対面なのにこういうのも何ですけど…頑張ってください」

「ヒーローに出来ないことはないだろ？期待して待っているよ！」

「必ず…必ず戻ってきます！」

ノアと別れたルークたちは、再びリスの洞窟にやってきていた。捕らえられているローラを早く救い出してあげる必要があるからだ。勿論聖装備を買い直すためでもあるが、モンスターに捕らえられている少女を長いこと待たせるわけにもいかない。サテラたちと出会った場所よりも更に奥に進むと、奥で話し声が聞こえてきた。ローラか、あるいはサテラたち魔人がまだいるのか、四人に緊張が走る。声のした方へ進んでいくと、普通のリスと比べると中々に巨大なりすと、その横に座った少女が話していた。少女の顔は写真で見た顔と一致している。彼女がローラだ。だが、何か様子がおかしい。

「ローラ、僕は君のためならどんな事でもするよ」

「うれしい…でも私にとつての幸せは貴方がいつも側にいてくれる事よ…」

「なんてかわいいんだ…いつか人と魔物の仲が認めて貰える時代が来る。それまでの辛抱だよ」

「はい。お父様とお母様も貴方と話をすればきっと良さが判るはずなのに…」

「…ん？僕たちの愛を引き裂こうとする邪魔者が来たみたいだ」
「え？」

あちらもルークたちに気がついたようで、ジッとこちらを睨んでくる。ルークが頭を掻きながらため息をつく。

「参ったな…モンスターに捕らわれたと聞いていたが…」

「どう見てもあの二人、愛し合っていますよね。種族を越えた愛、ちよっと素敵かも…」

「何者だ！一体何をしに来た！！」

ローラを後ろに庇うようにしながらこちらに向かって叫ぶリス。
ランスが剣先をリスに向けながらそれに応える。

「がはは、そのローラちゃんを返して貰おうか！リス風情が美少女と愛し合おうなんぞ100億年早いわ！」

「リス…私恐い…」

「ローラ、奥の部屋に隠れていて。それと、奥の二人を呼んできてくれるかい」

「はい。気をつけてね、リス…」

そう言っつてローラは奥の部屋へと下がっていく。

「あ、こら！ローラちゃんを返せ！」

「断る！僕とローラは愛し合っているんだ！邪魔をするな！！」

「…三人とも、気を抜くな。今奥の二人と言っていた。新手がいるぞ」

「はい、ルークさん」

「その通り！ローラを僕のいるここまで護衛してくれた二人だ！とつても強いんだぞ！謝って帰るなら今のうちだ！」

奥から二人分の足音が聞こえてくる。ランスはふてぶてしい態度のままだが、ルークはいつでも真空斬を撃てるように構え、かなみも忍剣を握り、シイルが後ろでいつでもサポートできるよう身構える。なにせ先ほど会った相手が魔人。否が応でも緊張感が増す。奥から現れたのは二人の女性だった。が、その容姿には見覚えがある。

「…あ！シャイラとネイじゃないか！」

「知り合いですか、ルークさん？」

「知り合いというか…理不尽な恨みを買っているというか…」

現れたのはかつて誘拐事件の時に出会った盗賊シャイラと、カスタムの事件の時に出会った冒険者のネイであった。

「あ、貴方たち、ランスとルーク!!」

「ここで会ったが100年目!二人ともぶつ殺してやる!」

「あー…やっぱり俺も恨み買っているのね。というかお前ら、なんで一緒に?」

「酒場でお前らの愚痴で意気投合してな。今じゃ共に鍛練を積む相棒さ!」

「鍛え上げた私たちの力、見せてあげるわ!」

そう言つて武器を取る二人。リスも臨戦態勢に入る。その時、部屋にランスの爆笑が響いた。

「がははは。とっても強い?弱すぎて盗賊団を抜け出せなかったへっぽこ盗賊と、水の彫像なんかにやられたへっぽこ冒険者ではないか。うむ、そんな弱い二人はもう一度この俺様が可愛がつてやる」

「「こ、こ、殺す!!!」」

「火に油注ぐなよ…」

目を血走らせながら飛びかかってくる二人。リスも二人に続いて駆けてくる。ランスがネイの相手をし、ルークがシャイラの相手をする形になるが、ルークに迫ったシャイラの剣をかなみが防ぐ。

「ルークさんはリスをお願いします。彼女は私が!」

「了解だ」

「くっ…小娘が…あたしの邪魔をするな!」

短剣を振るいながら、器用にも懐から投げナイフをかなみに放つてくる。確かに以前よりは成長しているらしい。だが、成長率という点では相手が悪すぎる。かなみは飛んできたナイフを全て忍剣で捌き、手裏剣を投げる。シャイラのナイフと違い、ほぼノーモーションだ。

「何!? くっ…!」

「やつ!」

「がっ…!」

突然飛んできた手裏剣を無理に避けたため体勢を崩したシャイラの間を見逃さず、腹部に膝蹴りを入れる。前のめりに倒れるシャイラの後ろに素早く回り込み、腕を掴んで後ろに回し、そのまま地面に体を叩きつけ拘束する。

「なっ…なんだこいつ…強い…」

「これ以上の抵抗は無駄です。おとなしくして下さい!」

ルークの助言を受け鍛錬を続けていたかなみ。既にシャイラ程度が相手になるレベルではない。一瞬のうちに決着がつく。その華麗な動きにシルがばちばちと拍手し、かなみが少し顔を赤らめる。

「僕たちの愛の邪魔をするな!」

「応援してあげたいのはやまやまなんだが、こちら事情があつてね。スマンな」

巨体から繰り出される鋭い爪の攻撃を難なく妃円の剣で受けながら、峰で攻撃を加えるルーク。あの二人の様子を見てしまつては、流石に殺すのは忍びない。攻撃が当たらず焦つたのか、大振りにな

る。がら空きの腹に剣の柄の部分を勢いよく押し込む。

「みぎゃあー！」

そのまま崩れ落ちるリス。悔しそうに涙を零しながら言葉を漏らす。

「ちくしょう…ちくしょう…僕たちが何をしたって言うんだ」

「少なくともローラちゃんのお親に心配は掛けたな。確かに人間と魔物、受け入れられない恋かも知れないが、だからといって洞窟に引きこもって言い訳じゃないだろ」

「でも…僕たちの愛をどうやって認めて貰えれば…」

「他人事ではないから無責任な発言しか出来ないが…誠心誠意伝えるしかないんじゃないか？」

「いや、そんなことでは無理だな。人間になれ！気合いと根性があれば人間になぞ簡単になれる！」

「んな、無責任な…」

後ろから無茶な野次を飛ばしてきたランスに振り返る。すると、ランスは思いつきりネイとお楽しみの中だった。ネイの口を抑え、ばれないようにこっそりとやっていたらしい。ルークはリスと戦い、かなみも暴れるシャイラを取り押さえていたため気がつかなかった。

「またか！またこの展開か！！」

「ちよっ…こんなところで何してるのよ！！」

「ランス様…」

「うっつ…誰か助けて…」

「がはは、久しぶりのネイちゃんの体はグッドだ！」

「（…ネイには悪いが、あっちの相手じゃなくて良かった）」

毎度おなじみの展開に頭を抱えるルーク。その後ろで、リスが決意したように言葉を発する。

「人間…判った。僕は人間になる！」

「おい、そんな簡単に来る事じゃ…」

「待っていてくれ、ローラ！僕は必ず人間になって帰ってくる！」

そう言って走っていってしまうリス。そのリスをルークたちが見送ると、突然奥の部屋に隠れていたはずのローラが出てくる。どうやらリスのことが心配で出てきてしまったらしい。辺りを見回し、リスがいないことに気がつく。

「リスは？リスは何処へ行ったの？……まさか、殺したの？この魔物殺し！魔物だつて生きているのよ！」

「いや…リスは別に死んでは…」

「リスはランスに殺されて経験値になつてしまったの！ローラさん、彼らを許しちゃ駄目！」

「そうだ！あたしもこの目で確かに見たぞ！」

「こらっ！そう言うことというのはどの口だ？この口か？ならば俺様の皇帝液でお仕置きしてやろう。とぉーっ！」

「あんっ！」

混乱するローラに真実を話そうとするルークだが、その声をランスに犯されていたネイが遮り、ローラに嘘を吹き込む。シャイラムもそれに便乗する。ローラがジッとこちらを涙目で睨んでくる。どうやら信じてしまったらしい。

「絶対…絶対に許さないんだから！仕返ししてやる…覚えておきなさい、ばかー！！」

「あっ、話を聞いて、ローラさん！」

リス同様、走っていつてしまおうローラをかなみが呼び止めようとするが、その際にシャイラの拘束が緩んでしまう。

「よし、抜けた。逃げるよ、ネイ！」

「あつ、しまった！」

「こら、待て！まだネイちゃんとかやっていないんだぞ！！」

ネイに一発出して丁度まったりしていたランスの横からネイを奪還し、ローラの後に続いて二人も走っていつてしまう。

「おぼえてろー！！」

最後に三流小悪党のような捨て台詞を残していつた。なんだろう、凄くどうでもいいところでその内また会いそうな気がする、と考えるルークだった。

・リーザス城 ヘルマン軍司令部・

ヘルマン軍司令部、元々は王の間であった部屋だ。玉座に腰掛けられているのはこの侵攻戦の首謀者、ヘルマン皇子パットン。皇子にしてはマシな方ではあるが、戦士として見ればあまり筋肉のついていないやせ形の青い髪の男。ワインを飲み、側には全裸の女性を数人侍らせている。彼女たちはリーザス城で働いていたメイドたちだ。屈辱なのだろう、その目には涙を浮かべている。

「はっはっは。リーザス全土は、ほぼ我が第3軍が制圧した。これもお前ら魔人の協力があつたからだな。感謝しているぞ、ノス」

通路を歩くのは二人の男。一人はノス。もう一人は金髪の美男子。この男が三人目の魔人、アイゼル。立場はノスの方が上なのだろうか。先ゆくノスの後について歩いている。そのアイゼルにノスが問いかける。

「我らが動き、主君ホーネット様には気がつかれていないな」

「はっ、ヘルマン第3軍前面で目立っていますので、我らのことは気がついていないでしょう」

「うむ、なんとしてもホーネット様に気づかれる前にカオスを手に入れるのだ。あれさえ手に入れば、我らの天下だ」

「しかし、何故ホーネット様には内密で動いているのですか」

その問いかけに、一瞬だけノスの眉が動くが、すぐに何事もなかったかのように返事をする。

「あまり大げさに動いてはケイブリス共にも感づかれるからな。なに、成功すればホーネット様もお喜びになる。気にするな」

「……はっ!」

「アイゼル、お前は引き続きサテラと共に情報を集めろ」

「お任せを」

「我らが時代まで、あとしばらくの辛抱だ」

話しているうちに二人は地下牢へと辿り着く。そこではリアとマリスがヘルマンの女兵士、サヤに鞭で拷問を受けていた。その美しい身体には、多くのアザが出来てしまっている。

「うふふ、王女さん。そろそろ話してくれてもいいんじゃないの？」

さあ、聖装備を渡した相手の名前を言いなさい！」

「……ふふ、いやよ」

「このっ！これだけの拷問を受けてまだ言わないのか！むかつくん
だよっ！」

「くっ……あぁっ……」

既に普通の女性が耐えられる範疇を超えた拷問を受けている二人。しかし、未だその口は固く閉ざされていた。そのリアとマリスの様子を見ながら、アイゼルが独りごちる。

「下等な人間ながら、見事。これぞ上に立つ者だ。…あの馬鹿皇子とは違う」

人間を下に見ているアイゼルだが、二人の覚悟には素直に感嘆の
声を出す。かといって拷問の手を緩めるわけではない。サヤに拷問
を更に強めるよう指示を出す。全ては、魔人界の統一のために。

第39話 それぞれの思惑（後書き）

「人物」

ルーク（3）

LV 25 / 35

技能 剣戦闘LV1

キースギルド所属の冒険者。キースギルドの中でもトップクラスの実力者だが、サテラの前に敗れ、修行の旅に出る。いつかまた、ルークの前に姿を現すこともあるかもしれない。

ノア・セーリング（3）

LV 20 / 33

技能 神魔法LV1

キースギルド所属の冒険者。ルークが認めるほどの実力派コンビだったが、サテラに敗れた上に、ガーディアンに犯されそうになった恐怖で戦えなくなってしまふ。田舎で療養することを決めた彼女だが、ルークたちとの約束通り、いつの日かまた冒険者として戻ってくるかもしれない。

シャイラ・レス（オリモブ）

LV 8 / 25

技能 剣戦闘LV1 シーフLV1

ランスとルークに恨みを持つ元盗賊。ローラに雇われてリスの洞窟までの警護を担当していた。捨て台詞を吐いて逃走。今回はランスに犯されずホツとしている。

ネイ・ウーロン

LV 12 / 27

技能 シーフLV1

ランスとルークに恨みを持つ女冒険者。シャイラ同様、ローラに雇われていた。今回もランスに犯され、恨みを更に強くする。

サヤ

ヘルマン第3軍所属の女兵士。拷問好きであり、リアたちの拷問役として抜擢される。実は処女である。

「モンスター」

リス

丸い者と呼ばれる種族の最終進化形の一つ。白い毛に覆われており、大きさは様々だが基本的には小柄なものが多い。知性は高いが戦闘能力は低い。

「装備品」

忍剣

JAPANから輸入した忍者用の短剣。かなみが通販で購入。斬れ味はそこそこ。

手裏剣

忍者の必需品。こちらも基本的に通販で購入。通販大好きかなみちゃん。

第40話 奪われた聖剣と聖鎧

・アイスの町 武器屋前・

「あー、もう閉まっていますね」

「ま、時間を考えると仕方がないか」

リスの洞窟から戻ったルークたちだったが、その頃にはもう辺りは暗くなっていた。一度ラークたちを連れて町に戻っていたため、思っていたよりも時間を取られていたのだ。

「ギルドへの報告も明日にするか。疲れたしさっさと寝るぞ、シール」

「くっ…今は少しでも時間が惜しいのに…」

「かなみ、気持ちは判る。リアたちの安否は心配だ。だが、あまり根を詰めすぎてもまずい。俺たちが倒れたら…本当にリーザスは終わってしまいかねん」

「…はい」

俯くかなみの肩に手を乗せるルーク。

「大丈夫。リアもリーザスも、必ず救うさ」

「ルークさんが言うと……なんだか信用が出来ます」

「ん？そうか？」

「はい！」

「聖剣と聖鎧買い戻し目前だな、がはは！気分がいいからお前ら二人もウチに泊めてやるぞ。寝るのは床だがな」

「へいへい、ありがとうございます」

「あの、お布団は敷かせていただきますから」
「ありがとうね、シルちゃん」

武器屋の前を離れ、ランスの家に向かう一行。その四人の背中を見送る女が三人いたことに、ルークたちは気がついていなかった。

「……聞いたかい？」

「……ええ、目的はこの武器屋にある聖剣と聖鎧みたいね」

「……ふふふ」

・アイスの町 キースギルド・

「依頼は達成したぞ。さあ、報酬を寄越せ！」

翌朝、キースギルドに報告に来たルークたち。ローラは逃げて行ってしまったので依頼達成と言えるかは微妙な状況であったが、キースの口から意外な言葉が飛び出す。

「ああ、インダス家から無事に娘が帰ってきたという連絡を受けている。依頼達成だな」

「……ちゃんと帰っていたのか。よかった」

「しかし、ローラ・インダスは帰ってからずっと泣いていたそうだ。何かしたんじゃないだろうか？」

「ローラには何もしてないな。……ローラにはな」

「がはは、ネイちゃんの体はしっぽりと楽しんだがな」

「……けどもの」

かなみがランスに聞こえないようボソツと呟く。実は昨晚、ルー

クとかなみが寝ている横でランスはシイルと情事を行っていたのだ。中々寝付けなかったことに、それまで積み重なってきたものも合わさり、すっかりランスに対して敬語を使わなくなっていた。

「ネイ？誰だそりゃ？まあいいか、ほらよ。これが報酬の2300 GOLDだ。確認しろ」

「シイル、確認しろ。1 GOLDのずれも見逃すんじゃないぞ」

「はい、ランス様。ひのふの…ぴったり2300 GOLDあります」

「ちっ、少しくらいサービスしろ。強欲ジジイが」

「ま、何はともあれ、これで聖剣と聖鎧を買い戻せるな。ようやく
第一歩だ」

「うむ、だいぶ遠回りをしたがな」

「…だから…誰のせいだと……」

2300 GOLDを受け取るランス。その無責任な発言にかなみの額に青筋が浮かぶ。部屋を出て行く前にルークがキースに尋ねる。

「そういえばリーザスに何か動きはあったか？」

「知らないな。どこで戦争しようとか俺には関係ない。流石に魔人に暴れられちゃ困るがな。いや、戦争が起こる事によって仕事が増えるから、俺にとっては良いこと尽くめだぜ」

「そんな！リーザスの危機をなんだと思ってるんですか！」

そう言っただけで笑うキースにかなみが食って掛かる。フツと葉巻を口に啜えながら、キースがかなみに向かって応える。

「悪いな、嬢ちゃん。だが、間違ったことは一つも言っていないぜ。俺はギルドを預かる身だからな。職員や冒険者たちを路頭に迷わす訳にはいかないだろ」

「それでも……戦争を喜ぶなんて……」

「そもそも冒険者なんて職業、平和すぎる世の中だったら食っているものじゃないからな。適度な動乱が丁度良いんだよ。それとも嬢ちゃんは、ルークの職業も否定すんのか？」

「……」

かなみが俯いてしまう。ハイ二さんがキースを注意しようとするが、ルークがかなみの頭に手を置きながら真剣な表情で口を開く。

「キース、確かに間違ったことではないが途中から話をすり替えるな。俺の否定は関係ないだろ。それに……相手を選べ。かなみはリーザス王女付きの忍者だ」

「……そりゃ悪いことを言ったな。スマン」

「……いえ、大丈夫です」

吸っていた葉巻を灰皿に押しつけ、キースが頭を下げる。かなみもそれに応じる。

「リーザスを占領したヘルマンは周りの町も次々と制圧。既にジオとレッドも数日前には落ちたらしい。今はラジールが狙われているんだとよ」

「なんだ、知っているではないか。このクソ親父が！」

「ということは……白の軍や魔法部隊も、もう……」

「ラジール……まずいな」

「はい、アイスの町の近くですね」

「それもあるが……それ以上にカスタムに近い」

「あっ！マリアさんたち……大丈夫でしょうか……？」

ルークの頭をカスタムの町の人々たちの顔がよぎる。新しく組織した自警団でどれほど持ち堪えられるか、聖装備を手に入れたらリーザスへ向かう道中、カスタムにも寄る必要があるな、と考えるル

ークだった。

・アイスの町 武器屋・

「スマン、本当にスマン!!」

「うおっ、なんだ！お前みたいな親父に頭を下げられても嬉しくないぞ」

「何かあったのか？」

武器屋に入るや否や、親父がルークたちに向かって頭を下げてきた。ルークが尋ねると、申し訳なさそうにしながら口を開く。

「それが…昨晚泥棒に入られちゃって、聖剣と聖鎧を盗まれちゃったんだ！」

「なんだと!!何をしてやがる!!!!」

「スマン、あの装備は諦めてくれ…」

「馬鹿者！そう言われて、はいそうですかと諦められるか！」

「リーザス国が…リア王女が…貴方の責任よ！」

「くされ親父、死んでわびて貰おうか！刀の錆にしてくれる！」

「そうよ！こんな悪人、殺してしましましょう！」

「落ち着けかなみ。似合わないこと口走るな」

「ランス様、かなみさん。このおじさんも泥棒に入られた被害者なのですから可哀想ですよ」

ランスとかなみが激怒し、それをルークとシルが宥める。ランスがこのように言うのは珍しくないが、かなみがこんな事を言うのは驚きだ。ランスのせいで疲れが溜まっているのだろうか。

「…はっ！いえ、ルークさん。これは違うんです。気の迷いというか…」

「よしよし、疲れが溜まっているんだな。気にしなくて良いぞ」

「あうう……恥ずかしい……」

「親父、盗んだ相手に心当たりは？」

「ああ、盗まれた場所に置き手紙があった。これだ。どうもお前たち宛みたいだぞ」

「ふん、そういうのはさっさと出せ。シイル、読んでみる」

そう言っただけでランスに手紙を渡してくる武器屋の親父。それを受け取ったランスは、シイルに手紙を読ませる。

「はい、ランス様。……軽蔑すべきランスとルークへ」

「なんだと、シイル！」

シイルの頭にポカーンとげんこつを入れるランス。シイルが涙目になりながら口を開く。

「ひんひん、違いますランス様。手紙に書いてあるのを読んだだけです」

「というかどう考えてもそうなる。ちょっと可哀想だぞ」

「ふん、ならさっさと読め」

「はい…軽蔑すべきランスとルークへ。聖剣と聖鎧は私たちが盗んでやったわ。悔しいだろ、ばーか」

「むかむか、なんてふざけた手紙だ。シイル、送り主は誰だ！」

「なんとなく察しは付くが……」

「ローラ、シャイラ、ネイ。ローラさんと昨日の二人ですね」

ルークの予想通り、聖剣と聖鎧を盗んだのはあの三人だった。どこかでルークたちの目的が聖剣と聖鎧であるということを知ったの

だろう。実に的確な嫌がらせである。

「ローラさんは恋人が奪われたって勘違いしてますからね。どうしよう…聖剣と聖鎧がないと…」

「せめて三人がどこへ向かったかが判ればいいんだが…」

「あら？女性の三人組ですか？それならカンラの町に向かうと言っていましたよ」

武器屋に入ってきた少女が突然声を掛けてくる。見覚えのない娘だ。武器屋の親父に薬を手渡している。ランスに犯されて傷ついているレンチへの薬のようだ。

「君は？今の話は本当か？」

「申し遅れました。私、最近この町でアイテム屋を始めたコリンと言います。今朝女性の三人組が店に来て、世色癌を買っていったんですが、その時カンラの町に行くと話していました」

「隣町だな。よし、向かうぞ。あの三人め、見つけたらたっぴりとお仕置きしてやる！」

「それがますます恨みに拍車をかけてるんだがな…」

武器屋を出て行くこととするルークたちだったが、親父が引き留める。

「手付け金で預かっていた500GOLDだ。こんなことになっちまってスマン」

「盗みに入られたのは俺たちのせいだし、それは迷惑料として取っとしてくれ」

「いや、それじゃあ俺の気がすまねえ。だったらウチにある武器を持っていってくれ」

「がはは、なら遠慮無く貰っていくぞ！シイル、この店で一番高い

武器を探せ」

「はい、ランス様！」

「って、おいランス！お前はウチの娘を傷物にしたんだ。お前は持つてくな！」

親父の文句を無視し、装備を見繕うランス。結局ランスが日本刀と鋼鉄の鎧を、シイルがシルフの杖を無料で持つて行く。ルークは妃円の剣と幻獣の剣、真紅の鎧で事足りているため、かなみは忍者用の装備が売っていなかったため何も貰わずに店を出る。丁度ランスとシイルは装備品を全部売っており、心許ない装備だったため、これからの戦いに向けて良い補強にはなった。こうしてルークたちはアイスの町を後にする。向かうはカンラの町。

- カンラの町 酒場 -

「あつという間に着いたな」
「隣町ですしね」

カンラの町に辿り着いたルークたちは情報収集のため酒場にやってきていた。店に入るとウェイトレスが注文を取りに来るが、その格好はかなり大胆なものであった。下着を履いておらず、スカートには大きく切れ込みが入っている。

「いらつしゃーい」

「おおつ、なんと素晴らしい！」

「ちよつとあなた、なんて淫らかな格好をしているのよ！」

「あの…下着を履き忘れていますよ」

「ああ、ここはサービスの一環としてこういうことをしてるんだよ」

「あら、ルークさん。お久しぶり」

ウェイトレスのセティナがルークに声を掛ける。かなみが悲しそうな瞳でルークを見る。

「あの…ルークさんはこういう店によく来られるんですか？」

「ん？冒険者だからな。酒場にはよく来るが？」

「あ…いえ、そうじゃなくて…」

「くすくす。その忍者さん、心配しないで。ルークさん、私がいくら誘っても全然乗ってこない人だから」

「……………どうも」

「馬鹿者。こういう店はさっさと教える。ぐふふ、この俺様がこれから常連になってやるう」

「ありがとうございます。こちらメニューです」

「あ、注文ついでに後で手が空いたら加藤さんと呼んで貰えるか」

セティナに注文をし、バーテンの加藤さんの手が空くのを食事しながら待つ。バーテンハニーの加藤はこの町一番の情報屋でもある。ランスがカレーマカロクを貪り食う。シイルとかなみは焼き肉そうめんを二人で摘んでいるが、あまり美味しくなかったようでそれぞれレモンティーとほうじ茶で口直しをしている。しかしかなみ、ほうじ茶とは渋いな。ルークがダボラベベをバリバリと食べながら、かなみに話しかける。

「そういえばこの町の武器屋の親父が変わっていてな、しゃもじなんだ。後で一緒に行かないか？アイスで何も買わなかったし、この町は日本刀以外にもJAPANからの輸入品を取り扱っているから、何か買って上げるよ」

「えっ、はい、ありがとうございます。……………ひょっとして、それはデートなのでは…」

かなみがぶつぶつと言っていると、ようやく手が空いたのか、加藤がこちらのテーブルにやってくる。

「お待たせしました。ルークさん、お久しぶりです」

「久しぶり。少し聞きたいことがあってな。ローラっていう女の子を知らないか？15歳くらいの茶髪の少女だ。他に二人ほど女を連れてくるんだが」

「ああ、知っているよ。ここでミルクセーキを飲んでいた子だ。もうこの町にはいないよ」

「何処へ行ったか聞いてないか？」

「確かラジールの町に向かったよ」

「まずいな…キースの話が本当ならラジールは今ヘルマンに襲われているはずだ…」

「いえ、その情報は古いですね。ラジールは二日前に占領されましたよ。今ヘルマン軍はカスタムの町を攻めています」

「なんだって！」

「ランス様、マリアさんたちが…」

「ええい、あのハゲ親父。古い情報なんぞ渡しおつて！」

現状は着々と最悪の方向へ進んでいる。ローラは敵の渦中に飛び込んでいってしまい、カスタムは既に戦火の真っ直中。どちらも放っておくわけにはいかない。

「ラジールの町への街道は先ほどヘルマンによって封鎖されたみたいです。ローラという娘たちはぎりぎり通れたでしょうが」

「そうなるならローラを追うのは難しいな。だが、封鎖された町の中にあるなら、ローラたちはある程度安全だろう。まさか奴らも彼女たちが聖剣と聖鎧を持っているとは思わないだろうし」

「それなら先にマリアさんたちを助けにいきましょう！」

「でも、ラジールの町を通らなきゃカスタムまではいけないわ」

「……加藤さん、カスタムの状況は判るか？」

「かなり強固に防衛しているみたいですよ。なんでも数千にも及ぶヘルマン軍に、たった数百人で渡り合っているみたいです」

「ふん、やるな。流石俺様の女たちだ」

カスタムの町を復興させる際、新しく組織した防衛軍が活躍しているようだ。早く救援に行きたいが、ヘルマン兵に占領されたラジールを通ることは出来ない。頭を抱えるルークたち。

「しかし、カスタムもあれだけ抵抗してしまうと、制圧された際には酷い扱いを受けるでしょう。早く降伏してしまった方がいいのに……」

「しない…だろうな。彼女たちの性格を考えれば」

ルークの頭に真つ先に浮かんだのは志津香。彼女が降伏する姿など想像が付かない。志津香だけではない。カスタムの少女たちは全員強い意志を持っている。降伏など絶対にしないだろう。その時、ルークたちの会話に入ってくるように女性の声が聞こえる。

「ほんと、あの子たち頑固なんだから。さっさと降伏すれば苦しい思いをしなくてすむのに」

「ん……げっ、ロゼ！」

「お久しぶり、ランスさん。それと、そちらの方がルークさん？」

「そうだが…どちらさんだ？」

「カスタムの町の神官さんです、ルークさん」

振り返ってそこにいたのはカスタムの町の淫乱シスター、ロゼ。カスタムの事件の際にランスから話を聞いたルークは教会を避けていたため、顔を会わすのはこれが初めてである。

「ん…待て。どうしてここにいるんだ？」

「カスタムの町は今や戦乱真っ直中よ。逃げて来たに決まってるじゃない」

堂々と胸を張るロゼにかなみが疑問を投げかける。

「神官なのに、傷ついた人を見捨てて逃げたんですか？」

「ナンセンスよ。そんな慈善事業、今時流行らないわ。神官の仕事っていうのは安全な場所で戦争を非難する事よ」

「……ま、いいがな。カスタムの状況は？」

「防衛軍が相当頑張っているわね。特にマリアと志津香が中心になって、みんなを鼓舞しているわ。でも、もう町全体を包囲されていたから、時間の問題ね。もう町からは誰も逃げられないわ」

「マリアさん、志津香さん、ミリさんとミルちゃん、ランさん、チサさん、真知子さんに今日子さん、トマトさん、エレナさん、ペペさん、それから…みなさん元気なんですか？」

ガイゼル…心の中で涙が止まらないルークだった。

「元気よ。今のところはだけどね。明日、明後日とどうなるかは判らないけど」

「待て、そんなギリギリの情報を持っているという事は最近まで町にいたんだらう。包囲された町からどうやって逃げ出してきたんだ？」

「この町の近くにカスタムの町と直通で繋がっている悪魔の通路と呼ばれる道があるのよ。そこを通ってきたの。私の体を使ってね。中々楽しかったわ」

「楽しかった？」

「悪魔の道にはデーモンがいてね。通行料は女の体。もう思い出す

だけで濡れちゃうわ」

「ちつ、悪魔の分際で生意気な。俺様がぶつ殺してやる」

「ロゼ、悪魔の通路の場所を教えて貰っても良いか？」

「ふふ、いいわよ。あー、体が火照ってきたわ。後でもう一回行っちゃおうかしら」

「それなら一緒に来てくれないか？カスタムに付く前に引き返してくれて構わないから」

「んー、寄付金ちょうだい」

「あまり持ち合わせが無くてな…500GOLDでいいか？」

「まいどー！」

こうして一時的にロゼがパーティーに加わる。悪魔の通路がある洞窟はカンラの町から南に下った所の山の麓にあるらしい。カスタムの町を救うため、ルークたちはカンラを後にし、ロゼに案内され悪魔の洞窟を目指すのだった。因みに町を出る前に武器屋には寄りました。全員で。なぜか、かなみが少し落ち込んでいた。

- 悪魔の洞窟 入り口 -

洞窟の前には門番が立っていた。緑色の髪が特徴の悪魔の女。ぶつぶつと文句を言っている。

「くそっ…元六階級悪魔の私がどうしてこんな下っ端の仕事を…」

その女悪魔は、以前カスタムでランスに召喚され、さんざんやられたあげく契約を破棄され上司に降格処分を言い渡されたあの悪魔だった。六階級というエリートだった彼女だが、今は九階級まで降格させられていた。

「全部あの男のせいだ。今度会ったら八つ裂きにしてやる！」

ぶんぶんと持っていた鎌を振り回す女悪魔。やはり相当恨んでいるようだ。

「……でも、こういう地味な仕事を頑張って勤め上げて、いずれは元の階級に戻してもらおうんだから。頑張れ、私！」

不幸は確実に近づいていた。

第40話 奪われた聖剣と聖鎧（後書き）

「人物」

ロゼ・カド（3）

LV 5 / 20

技能 神魔法LV1

カスタムの町の淫乱シスター。町のピンチにさっさと逃げ出す。薄情といえば薄情だが、現実主義者とも言える。悪魔の通路が気に入ったので、ルークに雇われて一時的に旅に同行する。

ローラ・インダス

モンスターであるリスと恋に落ちた少女。最愛の彼が殺されたと勘違いし、ルークとランスに復讐を誓う。シャイラ、ネイと共に聖剣と聖鎧を盗んで逃走。

コリン

アイスの町でアイテム屋を営む少女。店は最近オープンしたばかり。熱心なハニワ教の信者でもある。

セティナ

カンラの町の酒場のウェイトレス。店の方針で常にノーパンである。何度かルークにアプローチを掛けるも、やんわりと断られている。

加藤清森

カンラの町の酒場のバーテンハニー。町一番の情報屋でもあり、ルークとは顔見知り。

しゃも一郎

カンラの町の武器屋の親父。しゃもじ。ゼスに弟がいるらしい。

「装備品」

日本刀

ランスが無料でゲット。JAPANからの輸入品の刀。斬れ味がよく、好んで使う冒険者も多いため、輸入品ながら多くの町で取り扱われている。

鋼鉄の鎧

ランスが無料でゲット。巷で生産されている鎧の中では最高クラスの品質。重量があるため、それなりの体格でなければ装備するのは逆効果。

シルフの杖

シルフがちゃっかり無料でゲット。魔法工房シルフ社製作の杖。中々に高性能な杖で、愛用する魔法使いも多い。

忍服

かなみがルークに買って貰った新しい服。JAPANからの輸入品で取扱店が少ない。大事にするとか普段は着ないようになるとか、かなみは言っていたが、防具なので普段から着なさいとルークに窘められる。

「料理／食材」

カレーマカロロ

イタリアの神秘。フランスパンをくり貫いてシチューと餃子を詰め、うどんで巻いたもの。珍味。

焼き肉そうめん

冷たくて暖かいお袋の味。鍋に入ったカレーライスを思わせる食べ物で、臭いはチャーシューメン。かなり好みの分かれる一品。

ダボラベベ

大層な名前だが、普通のせんべい。食べると経験値が入る。子供の成長を祈って誕生日などによく食べる地方もあるらしい。

「都市」

カンラの町

自由都市。アイスの隣町で、これといって特色もない普通の町。

第41話 悪魔との契約

・悪魔の洞窟 入り口・

「はい、到着！」

「ここが悪魔の通路がある洞窟か」

「ランス様、あそこに誰かいます」

「あら？私を通ってきたときはいなかったのに」

ロゼの案内で悪魔の洞窟の前までやってきたルークたち。シールの指さす先、洞窟の入り口の前には一人の女悪魔が立っていた。しかし、どこか見覚えがある。あちらもルークたちに気がついたようで、訝しげにこちらを見た後、突如大声を上げた。

「あーっ、お前はランス！」

「…そうか。見覚えがあると思ったら、カスタムの事件の時の悪魔か」

「おお、あの時のドジな悪魔だな」

洞窟の前で門番をしていた悪魔が、かつてカスタムの事件の際ランスに召喚され、散々酷い目に会わされたあげく、契約を破棄されて逃げ帰った悪魔であることに気がつく。ランスの言葉に猛抗議をしてくる女悪魔。

「何がドジよ。卑怯な手で私を騙したくせに！」

「がはははは、騙されるお前が悪い。悪魔のくせに人間様に卑怯など、片腹痛いわ！」

「ルークさん。この悪魔とは知り合いですか？」

「以前カスタムでの事件の時、ランスと契約を結んで魂を持っていかうとした悪魔だ。ま、失敗したがな」

かなみの問いかけに応えるルーク。その言葉を聞いたロゼが首を傾げる。

「魂回収役？ だったら結構な上位悪魔のはずだけど？ どうして門番なんかしてるのかしら？」

うぐつ、と女悪魔が顔をしかめる。どうやら指摘されなくなかったことらしい。ランスを睨みながら静かに呟く。

「……お前のせいで六階級悪魔だった私は…今じゃ九階級よ…」

「がはは、自業自得だ」

「くつ…」

「とにかくそこをどいて貰おうか。俺様はその洞窟に用があるんだ」「悪魔でないあなたたちを通すわけにはいきません」

そう言っつて両腕を拡げ、入り口を通せんぼするような姿になる女悪魔。

「なら力尽くまで通して貰おうか。ついでにまたその体も楽しませて貰うとするか、がはは！」

「…やる気？ 悪魔であるこの私と？ 九階級だと思っつて甘く見ない事ね。上司の温情でまだ実力は六階級のままなんだから」

女悪魔がそう言っつた瞬間、空気が変わる。女悪魔から物凄い量の殺気が発せられたのだ。ルークとかなみが身構える。ランスも額に汗を掻いている。

「ルークさん…この悪魔…」

「ああ、やばい相手だ。…気を抜くな」

「そりゃそうよ。六階級悪魔だったら、多分下級の魔人とならそれなりに渡り合えるわよ」

「魔人並か…ちつ、覚悟を決める必要があるな…」

ロゼが平然とそう言い放つ。それはかなり絶望的な言葉だ。この戦力でそんな強敵とやり合えというのか。ルークがかなみとロゼを庇うように前に出る。ランスも意識しているかは判らないが、シールを庇うように前に出ている。

「どうやらやる気みたいね。丁度良いわ。ランスには恨みもあることだし、八つ裂きにして魂を回収させて貰うわ」

「あら？やりあう必要なんか無いわよ？」

「何？」

この状況であっけらかんと言い放つロゼ。後ろを見れば、鼻歌交じりに何やら魔方陣のようなものを地面に書いている。そして、ルークとランスに向かってこう言い放った。

「ね？悪魔の下僕、欲しくない？」

「その女、何を…？」

「いでよ、ダ・ゲイル！」

ロゼがそう言うと、魔方陣が光り出し、目の前に全身が青い毛で覆われた悪魔が現れる。角と羽が生え、目は三つ。予想だにしないかった事態に、女悪魔の目が見開かれる。

「あ、動いちゃ駄目よ悪魔さん。貴女、九階級って自分で言ってたわよね。ダ・ゲイル！」

「んだ。その小娘、動くでね。オラは八階級悪魔だべ。オラより下なんだから命令に従って貰うべ！」

「……くっ。」

「黙ってねで、返事は？」

「……はい」

ダ・ゲイルと呼ばれた、ロゼの呼び出した悪魔の命令に素直に従う女悪魔。

「どういうことだ？ロゼ、その悪魔は？」

「悪魔って完全な階級社会でね。上司の命令には逆らえないの。この悪魔はダ・ゲイル。私の大事なパートナーよ。主にHのね」

「んだんだ。オラ、ロゼ様の忠実な下僕だ」

「神官なのに悪魔とそんなことをしているんですか！？」

「あら？人間なんかよりよっぽど填るわよ？今晚貸してあげようかしら？」

「結構です！！」

神に仕える者としてあるまじき発言を平然とするロゼ。やはり信仰心というものは皆無らしい。かなみが苦言を呈すが、それを気にする様子もない。シルがロゼに恐る恐る尋ねる。

「ロゼさん、どうして悪魔を支配できているんですか？もしかして

…その悪魔より魔力が高いとか？」

「魔人じゃあるまいし、そんな魔力無いわよ。悪魔を下僕にするには、一つのキーワードを知ればいいの」

「キーワード？なんだそれは？」

「名前。真の名を知られた悪魔は、その相手に絶対の服従を誓わなければいけないのよ」

ピクツと女悪魔が震える。その事を知っている人間がこの場にいるとは思わなかったのだろつ。女悪魔を横目で見ながら、ロゼが話を続ける。

「ただし、一人の人間が覚えられる真の名は一つだけよ。新しく悪魔の名前を聞いたら、どつちを下僕にするか自分で決めるの。そうじゃなきゃ私もあと数体の悪魔を下僕にして乱交パーティーするんだけどねー」

「なるほど。つまり、この悪魔の名前を知れば俺様は好きに出来るという訳だな」

「そう。いつ呼び出して命令するのも、Hするのも自由つて訳」

ニヤリとランスがイヤらしい目で女悪魔を見る。続けてロゼもイヤらしい目で女悪魔を見る。既に女悪魔は涙目だ。

「ダ・ゲイル！聞き出しなさい！」

「ちよつ…待つ…」

「八階級悪魔として命ずるべ。真の名をオラに教えるだ！」

「……フェリスです」

「んだ。ロゼ様、これでいいだか？」

「お疲れ。また今晚呼び出すから帰つていいわよ」

ロゼがそう言うと、ダ・ゲイルは煙のように姿を消す。残されたのはルークたちと、真の名をばらされた女悪魔。ランスが声高らかに宣言する。

「悪魔フェリス。契約に基づき命じる。この英雄ランス様に従え！」
「う……」

「悪魔の契約を無視したら灰になって消えちゃうわよー」

「……はい、ランス様。第九階級悪魔フェリス、これよりランス様

の忠実な下僕になることを誓います」

「がはははは、悪魔の下僕ゲットだ！」

「貴女たちはどうする？契約結べるわよ」

ロゼがシイルとかなみにそう問いかける。二人とも物怖じしながらロゼに応える。

「ランス様が契約されたので私はいいです。恐いですし……」

「どんな恐ろしいことがあるか判らないし……私もいいです」

物怖じしながら断る二人。その時、二人の横から宣言する声が聞こえる。

「悪魔フェリスに命じる。契約に基づき、真の名を知るこのルークに従え」

「……はい、ルーク様。第九階級悪魔フェリス、ランス様同様、ルーク様にも忠実な下僕として仕えさせていただきます」

契約を結んだのはルーク。その行動が意外だったのか、シイルとかなみが心配そうにこちらを見る。最初に口を開いたのはロゼ。

「あら？意外ね。こういうのは可哀想とか言っちゃらないフェミニストかと思ってたのに」

「そうですよ、ルークさん。危険です！」

「せっかくの機会だ、結べるものは結んでおくさ。契約に基づいているから危険も少ないだろうしな。まあ、下僕のように扱う気もないから心配しなくて良いぞ、フェリス」

「……ありがとうございます」

「がはは、この俺様も紳士に扱ってやろう。とりあえず今晚呼び出すから、準備をしておけ！どうだ、嬉しいだろう？」

「……ありがとうございます」

こうして二人の主を持つことになったフェリス。片方は当たり前だが、もう片方が大ハズレだ。転落人生の第二幕の始まりであった。がはは、と笑うランスと肩を落とす悪魔を見ながら、ルークが一人呟く。

「魔人と渡り合える力…みすみす見逃す訳にはいくまい…」

「ん？何か言った？」

「いや、なんでもない。ところで、後で悪魔を呼び出す魔方陣の書き方を教えて貰えるか？」

「魔方陣？」

「さっき書いていただろ？」

「ああ、あんなもの書く必要ないわよ。カモーン、とか言って呼び出せば飛んでくるわ。レベル神とかと一緒に」

「……じゃあさっきのは？」

「その方が気分出るでしょ？」

「……………」

何となく、ランスがこのロゼを苦手に行っている理由が判ってきたルークだった。この性格は、勝てない。

・悪魔の洞窟 一層・

フェリスと契約を結び、洞窟の中に入ったルークたち。因みにフェリスはもう悪魔界に帰った。夜にはランスに呼び出されるようだが。大層な名前の割に大した敵はおらず、特に苦戦もなく先に進む。すると、結界に守られた魔方陣が目の前に現れた。横にはねこのよ

うな生物が浮いている。ルークたちに気づいたその生物は、こちらに話しかけてくる。

「ここは悪魔の通路です。善良な心を持つ人間は通ることが出来ません。速やかにお帰り下さい」

「ロゼ、これは？」

「ああ、簡単よ。横の部屋にある光の神のプレートを踏んづけければ結界を通れるようになるの。それで信仰心を調べているのよ」

「仮にも神官の貴女は…もちろん踏んだんですよね」

「当然！」

ロゼに連れられて隣の部屋に移るルークたち。その部屋には確かに床に老人が描かれたプレートが置いてあった。あれが光の神の絵らしい。何やら大層な光を放っている。あれは結構マズイ代物なんじゃないかと思ったルークは、ウィリスを呼び出す。

「レベルアップの儀式ですか？ルークさん」

「いや、そうじゃないんだが、あのプレートは神のウィリスから見ても相当な代物か？」

「へ？…あ、あれは光の神様のプレートではないですか！？お、恐れ多い代物です！！」

「やつぱりか…ランス、それを踏むのはあまりよくな…」

そう声を掛けようとしたルークだが、時既に遅く、ランスは思いつきりプレートを踏みつけ、ぐりぐりと動かし、挙げ句の果てに上でジャンプまで始めた。すると、バキツという音と共にプレートが壊れる。

「がはは、やわな絵だ。壊れてしまったぞ」

「あちゃー…遅かったか…」

「なんてことをー！わ、私は何も見ていません！」

そう言い残し、ウィリスが姿を消してしまう。がははと笑いながら元の結界の部屋に戻っていくランス。シイルとかなみが踏む前に壊れてしまったようで、どうしたものかと悩んでいたのが部屋に戻っているように指示を出す。部屋に残ったルークは割れて散らばったプレートを集めて、くつつけることは出来ないまでも見た目だけは元の状態に戻す。そのルークの姿を見て、同じく部屋に残っていたロゼが声を掛ける。

「あれ、ルークさん信心深い人？AL教？」

「そういう訳ではないんだが…このプレートはなんかマズイ感じがしてな」

「冒険者の勘？」

「そんなとこだな」

なむなむと手を合わせた後、ルークとロゼも結界の部屋に戻っていく。そのとき、プレートの部屋から声が聞こえた気がした。

「許さん……あのランスとかいう男、必ずバチを与えてやる……」

部屋に戻ったルークたち。まずランスが結界を通り、その後ルークが結界を無効化して通る。ロゼも既に踏んでいるため難なく通るが、シイルとかなみは踏んでいないため通れない。ルークがねこのような生物に、ランスがプレートを壊してしまつて踏めなくなつてしまつたと言いつつ、三人が通つたことで善良な心の持ち主ではないと判断したのか、結界を解いてシイルとかなみも通れるようにしてくれた。結界を抜け、魔方陣を目の前にするルークたち。

「ランス様、どうやらワープの魔方陣みたいですよ」

「ふん、これがカスタムに繋がっている通路だな」

「そう、この先が悪魔の通路。同時にリターンデーモンの住み処となっているわ」

「リターンデーモン？強いのか？」

「強いというより厄介な相手ね。戦おうとするとリターンっていう魔法で洞窟の入り口まで飛ばされてしまうの」

「そんな、それじゃあ通れないじゃないですか」

「何か方法はあるんですか、ロゼさん？」

シイルのその問いに、ふと真剣な表情を見せるロゼ。先ほどまでのふざけた雰囲気とは違う。

「あるわ。たった一つだけ、誰かの犠牲の上に成り立つ、恐るべき手段がね」

誰かの犠牲という言葉に緊張が走る。かなみがゴクリと唾を飲み込み、シイルがランスの背中に抱きつく。そして、ロゼの口からその方法が発せられた。

・ 悪魔の洞窟 悪魔の通路 ・

「あつ、ああつ、んっ！さあつ、私が犠牲になっている間に、早く通って！んっ、いいっ！」

「何が犠牲だ。自分が楽しんでいるだけではないか！」

ロゼの乱交を見て悪態をつくランス。ロゼの言うところによると、リターンデーモンは人間の女を性的にいたぶるのが趣味らしく、体

を差し出すことによって悪魔の通路を通して貰えるらしい。口では犠牲と言いながら、喜んで体を差し出すロゼ。

「だが、ロゼがいなかったら通るのは大変だった。そこは感謝しなきゃな」

「確かに…考えただけでも恐ろしいです」

リターンデーモンにいたぶられる自分を想像してしまったのか、かなみが身震いをする。自分の快樂のためとはいえ、結果的にロゼのお陰で通路を通れるようになったのは事実。その事に感謝しつつ、ルークたちは先へ進んでいく。奥にあった階段を上っていくと、光が差し込んでくる。どうやら洞窟を抜けたようだ。階段を上りきったルークたちは爆音を耳にする。やはりカスタムは戦乱の真っ直中のようだ。みんなは無事なのか。周りを見回すと、そこにはルークたちを囲むように女の子たちが立っていた。どうやら本当にカスタムの町の一角に直通だったらしい。囲んでいた少女たちの内の一人が声を掛けてくる。数ヶ月前、よく耳にした声だ。

「ランス、ルークさんも！どうしてここに！？」

「むっ、むちむちの太もも娘が話しかけてきたぞ。俺様のファンか？」

「ランス様、この方はマリアさんですよ！」

「へっ？」

話しかけてきたのはマリア・カスタード。数ヶ月前、カスタムの事件で共に協力し、強敵ラギシスを打ち破った懐かしい仲間だ。悲しそうな顔でランスを見つめる。

「私よ、マリア・カスタード。ランス…忘れちゃったの？」

「なんだ、マリアか。髪型が変わっていたから一瞬判らなかったぞ。」

ちゃんと俺様の許可を取ってから髪型を変える」

「もうっ！どうしてわざわざランスの許可を取る必要があるのよ！」

マリアは髪型を変えていた。まだ幼さが残っていたサイドポニーを止め、肩くらいまでの長さの下ろした髪型になっている。服装もワンピースから作業着のような色気の少ないものになっている。

「久しぶりだな、マリア。少し大人っぽくなったかな」

「えへへ、ありがとうございます。ルークさん」

「あ、こら。俺様の女に色目を使うな！」

「もうっ、誰がランスの女よ！」

階段から抜け出したルークたち。口論を始めるランスとマリアだが、マリアの表情はホツとしたものになっている。戦乱の中、ランすたちの顔を見て安心したのだろう。その時、近くで爆音が響き、同時に少女が走ってやってきた。

「マリアさん、東のランさんの部隊に攻撃が集中していて、危険な状態です」

「そんな、すぐに救援を…あ、ルークさん！」

・カスタムの町防衛線 東の部隊・

「ランさん、もうみんなボロボロですー！」

「くっ…ここに来て攻撃を集中してくるなんて。もうすぐ撤退まで追い込んでいるのに…」

トマトの報告に、部隊を指揮するランがつい弱音を吐く。防衛軍

の働きにより、ヘルマン軍を撤退寸前まで追い詰めていたが、残っていた兵を集中させ、一点突破を狙ってきたのだ。もう少し、もう少し耐えれば他の部隊の増援が来てくれるはず。その時、後ろから声が聞こえる。西の部隊を指揮していた、ランが信頼を置く少女の声だ。その声に一瞬気が緩む。その隙を、目の前にいたヘルマン兵が突いてくる。

「貰った、死ねええ!!」

「…っ!!」

目の前にヘルマン兵の剣が迫る。後悔しきれない油断。避けることも出来ず、ランが目を瞑る。が、聞こえてきたのはヘルマン兵の悲鳴と崩れ落ちる音。恐る恐る目を開けるラン。そこには戦士が立っていた。この戦乱の中、何度か彼が助けに来てはくれないものか、そう思い描いていた姿。

「無事か？ラン！」

「ルークさん…」

「おお、ルークさんですよ！これで百人力ですかねー！」

トマトも感激のあまり声を上げる。残っているヘルマン兵を真空残で撃退しようとしたルークだが、突如残っていたヘルマン兵が炎に包まれる。ランでないとするなら、こんな強力な魔法を使用出来る者は、カスタムには一人しかいない。

「火爆破：久しぶりね、ルーク。救援に来てくれたのかしら？」

後ろから掛けられた声にルークが振り返る。緑の長い髪を風になびかせ、その少女は立っていた。

「まあな。無事か、志津香！」

「当然。来たからにはしっかりと働いてよ」

怪我などあるはずないだろう、と不敵に笑う少女、魔想志津香。肩を並べてラギシスを倒した仲間でもあり、共に復讐を誓ったパートナー。こうしてルークは、カスタムの人々と再会を果たすのだった。

第41話 悪魔との契約（後書き）

「人物」

マリア・カスタード （3）

LV 18 / 35

技能 新兵器匠LV2 魔法LV1

カスタム四魔女の一人。カスタム防衛軍の総司令官を務めており、圧倒的な戦力差を覆す活躍を見せている。チューリップ1号の生産も徐々にだが行っており、チューリップ砲火部隊も指揮している。

魔想志津香 （3）

LV 23 / 56

技能 魔法LV2

カスタム四魔女の一人。カスタム防衛軍魔法部隊指揮官。志津香以外はせいぜい炎の矢程度しか使えない者が殆どだが、志津香自身が前線に立ち、それを補ってあまりあるほどの活躍を見せている。

エレノア・ラン （3）

LV 20 / 30

技能 剣戦闘LV1 魔法LV1

カスタム四魔女の一人。実戦部隊第一軍指揮官。持ち前の剣と魔法を合わせた臨機応変な戦い方で前線を支える。危うくヘルマン兵の攻撃で大けがを負うところだったが、ルークに助けられる。

トマト・ピュレ （3）

LV 10 / 37

技能 剣戦闘LV1

カスタム防衛軍所属のアイテム屋店主。実戦部隊第一軍所属。初めこそ不安視されていたが、みるみる内に上達し、防衛軍の中でも

頼りになる人物の一人にまで成長を遂げた。

フェリス (3)

LV - / -

技能 悪魔LV1

ルークとランスの二人と契約を結んだ悪魔。以前の失態で降格をさせられ、今は第九階級。しかし、実力は以前の第六階級のままであるため、並の魔人なら同等に渡り合える。

ウイリス (3)

ルークとランスを担当するレベル神。光の神のプレートを踏むという暴拳に恐れをなし逃げ帰ってしまう。

ダ・ゲイル

ロゼが呼び出した第八階級悪魔。田舎弁が特徴。決して高位の悪魔ではないが、降格させられたフェリスは彼の言うことに従うしかなかった。

「モンスター」

リターンデーモン

悪魔の通路を住み処としている悪魔。実力は悪魔の中では並だが、リターンという厄介な魔法のせいで倒すのが難しい。人間の女を性的にいたぶるのが趣味。

「技」

リターン

対象をダンジョンの入り口まで強制転移する特殊魔法。攻撃性はないが、避ける手段も少なく、厄介な魔法。

第42話 変身人間

・リーザス城 ヘルマン軍司令部・

「ふふふ、既にリーザスは、我が手中にあり。そして、もうすぐ自由都市地帯も制圧されるだろう」

玉座に深く腰掛けながら、パットンが高らかに宣言する。部屋には数人のヘルマン兵がいる。隊長や司令官たちは自由都市制圧に出払っているため、パットンの警護をするのは下っ端の兵たちだ。玉座の後ろにはノスとアイゼルが控えている。パットンの言葉を聞いた周りの兵たちから賞賛の声が上がる。

「おめでとうございます。パットン皇子。いえ、もう皇帝とお呼びになった方がよろしいでしょうか？」

「くく、皇帝か。中々に見所のある奴だ、名前は？」

「アイザックと申します」

「ふっ、覚えておこう」

周りにいる兵は全員パットンにおべっかを使っている。元々皇子という立場のため、普段から持ち上げられてはいたが、今は異常なほどだ。誰しもが勝ち馬に乗ろうと必死だった。それを無言で見ている魔人の二人。特にアイゼルの方は、下らないものを見るかのよくな態度が若干表情に表れている。その二人にパットンが声を掛ける。

「どうした？あまり見ていて面白いものではないかな？」

「……………いえ」

「まあ、無理に付き合っている必要はないぞ。お前らもリア王女から情報を聞き出すのに必死なのだろう？ 魔人の世界を支配するための物の情報をな……」

「!？」

ノスは無表情のままだが、アイゼルの表情が明らかに変わる。この辺りは場数の違いといったところか。それを見たパットンが不敵に笑う。

「見くびるなよ。私が何も知らないと思っているのか？」

「……」

「なあ、ノスよ。その捜している物とやらは必要な物なのだろう？」

「…御意」

「はっはっは、好きにするがいい。ただし……私に齒向かうな」

パットンが目を鋭くし、ノスとアイゼルに釘を刺す。二人は無言でそれに応じる。その時、部屋に一人のヘルマン兵が入ってきた。

「ご報告に上がりました」

「何だ、騒々しい。そうか、ようやくカスタムの町を降伏させたのだな？」

「い、いえ…カスタムの町への攻撃は失敗に終わりました」

「……………何？」

「敵は、司令官マリア・カスタードを中心に、少数ながら見事な防衛線を展開しています。更に、どこからともなく加勢に現れた冒険者一味がこれまた手強く……」

「言い訳はいい！」

ドン、とパットンが玉座の肘掛けを叩く。報告に来た兵が震えながら、話を続ける。

「う、ご安心を。既にカスタムの町は包囲しています。次の攻撃で必ずや占領して見せます」

「：前線司令官のヘンダーソンに伝える。次にしくじったら、命はないと思え、とな！」

返事をし、報告に来た兵が部屋を後にする。数時間後、この報告を聞いた前線司令官ヘンダーソンは、すぐにカスタムの町に大規模な攻撃を仕掛けることになる。

- 翌日 カスタムの町 作戦会議室 -

前日、カスタムに到着したルークたちの協力の下、なんとかヘルマン兵を退け一息ついていた一行であったが、今日になって再び、しかも前日よりも大規模な部隊の侵攻準備が進んでいることを知り、緊急の作戦会議を開いていた。部屋の中には総司令官のマリア、各部隊を率いる志津香、ラン、ミリ、作戦参謀の真知子、現町長のチサ、そしてルーク、ランス、シル、かなみの計十人だ。

「お久しぶりです、ルークさん。救援に来て下さり、助かりましたわ」

「久しぶりだな、真知子さん。まさか作戦参謀とは驚いた。礼ならまだ早いさ。何とかしてヘルマン兵を退けないとな…」

「ええ：防衛軍も限界が近づいていますからね…」

昨日はバタバタしていて顔を合わせていなかったため、軽く挨拶を済ます。シルやかなみも周りと挨拶を交わしている。特にかなみは初めて会う顔も多いため、自己紹介も兼ねた挨拶をしていた。

程なくしてマリアが部屋の前に立ち、壁に掛けられた防衛軍とヘルマン軍の部隊配置図を手で叩きながら話を始めた。

「さあ、作戦会議を始めるわよ！」

「了解だ。とりあえず敵の規模は判るか？」

「真知子さん、お願い」

「ええ。次に攻めてくる敵の規模は約六千。内訳はヘルマン軍二千とリーザス軍四千といったところね」

「リーザス軍！？一体どうして！？誇り高いリーザス軍が、自主的に裏切るなんてあり得ない！」

マリアに促され、報告を始めた真知子だが、敵軍にリーザス軍が含まれていることにはなみか驚きの声を上げる。志津香がそれに応える。

「敵に洗脳を得意とする魔法使いがいるみたいね。でもこれだけの人数の洗脳、そう離れた場所からじゃ出来ないはずよ。多分、カスタム侵攻の司令部があるラジールにその魔法使いがいるはずよ」

「となれば、そいつを倒せばリーザス軍は丸々味方つて訳か？」

「でも、それも容易ではありません。敵は人だけではないんです」

「そう、敵の部隊にモンスターも結構な数が加わってるぜ。最初はモンスターがいる意味が判らなかったが、魔人が手を引いているなら納得がいくつてもんだ」

ルークの問いにランとミリが応える。昨日の内にヘルマン軍の裏に魔人がいることをルークたちは話していた。パニックになるのを避けるため、それを知っているのはここにいる面々と元町長カイゼル、それとミリがすっかり口を滑らしてしまったミルだけだ。チサが不安そうに呟く。

「魔人：私たちは勝てるでしょうか…」

「がはは、チサちゃん。俺様に任せておけ。魔人など相手ではないわ。マリア、カスタム防衛軍はどんな感じなんだ？」

「ミリとランが各100名を指揮、それと志津香の魔法部隊が30名ほどと私のチューリップ砲火部隊が約20名。総勢250名といったところね」

「相手は六千だろ。話にならない。よく持ち堪えてきたもんだ」

「250名全てが戦える訳でもないだろ？」

「ええ、今まで何とか防衛してきたけど、傷ついて戦えない人も徐々に出てきてるわ。実際に戦えるのは…」

「多分、100人もいないわ」

マリアが言いあぐねているのを見かねて、志津香がきっぱりと言う。恐らく、次の侵攻を持ち堪えることは出来ないだろう。だが、ミリがきっぱりと言い放つ。

「ふ、まだまだこれからさ。奴らにカスタムの町を侵略するには、高い血の代償がいることを教えてやるぜ」

「こんな所で死ぬ気はないけど、やるからには少しでも多くの敵を道連れにしてやるわ」

既に次の侵攻を完全に防ぎきるのは難しいことを皆悟っているだろう。死なば諸共とも取れるミリと志津香の発言を否定する者は誰もいない。この空気を切り裂いたのはランスの笑い声だった。

「がはは、天才の俺様には確実に勝てる作戦が閃いたぞ！」

「本当！？」

「マリア、どうせ碌な案じゃないわよ。聞くだけ無駄」

「何だと！志津香、やはりお前には一度その体に判らせる必要が…」

「ランス、時間がない。どうせこのまま戦っても勝ち目は薄いんだ。」

その案を教えてください」

「ちっ、まあいい。成功したら町の娘たちにはたっぷりサービスして貰うぞー！」

こうして、ランスが思いついたという作戦を聞く面々。数分後、部屋に非難の声が飛び交う。

「酷すぎるわ、ランス！そんな作戦、マリアさんが可哀想よー！」

「やっぱり碌な案じゃなかったわね。だから言ったでしょ、マリア」

「うっ……流石にそれはちよつと……」

「ランス様……私もマリアさんが危険だと思います」

ランスに非難が集中する中、顎に手を当てて考え込むルーク。真知子も何か思うところがあるのか、ルークに話しかけてくる。

「……ルークさん、この作戦……意外と……」

「……ああ、妙案だな。一か八か、やる価値はあるかもしれん」

ルークの意外な言葉に驚き、部屋にいた全員が一斉にルークの方を見る。ランスが上機嫌に笑い出す。

「がはは、この作戦の素晴らしさが判るか？」

「ちよつと、ルーク！本気！？」

「マリアに危険を強いることにはなるが……このまま戦っても勝ち目は薄い」

「俺も賛成だ。ランスの作戦に乗ってみるのも悪くない。マリアが一時防衛軍からはずれるのはきついが、このままじゃ負けるだけだからな」

「……これしか勝つ手段がないなら……」

「マリア！？」

ミリモランスの作戦に乗り、マリアも作戦を実行する決意をする。親友の事が心配なのか、志津香はやはりこの作戦には反対のようだ。声を荒げる志津香に、ルークが真剣な表情で口を開く。

「大丈夫だ。マリアは必ず守りきる」

「がはは、マリアは俺様の女だからな！任せておけ」

「……傷一つでもつけたら、承知しないわよ！」

「ああ、任せろ。それと、一時的に俺とランス、シイル、マリアの四人が戦線から外れる。かなみ、志津香、ラン、ミリ、苦戦を強いると思うが頑張ってくれ。真知子さんとチサちゃんは後方から援護を」

反対していた面々もルークが賛同したことで納得したのか、強く返事をする。

「任せて下さい、ルークさん！」

「マリアを頼んだわ。何ならランスくらい犠牲にしても構わないわ」

「こちらの事は心配しないで下さい」

「ふ、腕が鳴るな」

「後方支援は私のコンピュータに任せて」

「シイルさんも気をつけて」

「ありがとうございます」

こうして、一行は各々持ち場に着くため、作戦室を後にする。失敗すれば全てが終わる、一か八かの作戦。鍵を握るのはルークとランス、そしてマリアだ。

・ラジールの町 入り口・

占領され、街道を封鎖されたラジールの町。町の入り口にはヘルマン兵が数人立っており、出入りを固く禁じている。カスタム侵攻に向けて、町の中の司令部では着々と準備が進んでいる。でっぷりと太った兵がぶつぶつと文句を言っている。

「育ちが良い僕がなんでこんな下っ端の仕事を…」

「おら、オルグ！サボってんなよ！」

「……ちっ、あんな雑魚兵士、僕が本気になったら…ん、誰か近づいてくる」

オルグと呼ばれた門番が、カスタムの方向から四人の人影が近づいてくるのに気がつく。その内の三人はヘルマン兵のようだ。連れている少女を指差しながらオルグが尋ねる。

「待て、そいつは誰だ？」

「はっ、こいつは敵の司令官マリア・カスタードです。一人で油断して歩いているところを捕獲しました！」

「何？ぐふふ、それが本当なら、こんな面倒くさい仕事ももうすぐ終わるぞ」

「門を開ける、極悪指導者マリア・カスタードを捕まえてきたぞ！」

「…ちよつと、極悪って」

「捕虜が口答えするな！えーい、こうしてやる！」

マリアを連れていたヘルマン兵の一人がマリアの胸を揉み始める。マリアの顔を確認した門番たちは、特に疑う様子もなく、四人を中に招き入れ、司令室へと連れて行く。そう、これこそがランスの考えた作戦だ。マリアを連れてきたヘルマン兵はルーク、ランス、シイルの三人。カスタム防衛戦時に戦死したヘルマン兵の服を奪い、

カスタムの防衛軍でないため顔が割れていないこの三人がマリアを捕まえて事にしてラジールへと潜入したのだ。目的は司令官とリーザス軍を操っているという魔法使いの撃破。絶対に失敗することは許されない。

・ラジールの町 ラジール家・

ラジールを治めるラジール家の館に案内された三人。どうやらここを司令部として利用しているようだ。出迎えたのはちよび髭を生やしたオカマ言葉の中年男だった。

「ほほほ、でかしたわよ、確かにマリア・カスタード。このつやつやとした肌、間違いないわ」

「ちよつと、触らないでよ!」

これがこのラジールの司令官、ヘンダーソンだ。マリア曰く、以前からこの男から熱烈なラブレターが届いていたらしい。その数1099通にも及ぶという。

「うふふ、ヘルマンーの美形、みんなのアイドルであるこの私の誘いをあんなに断るなんていけない娘ね。さ、今からたっぷりと可愛がってあげるわ」

「誰がヘルマンーの美形よ、この変態じじい!」

「おほほほほ、この元気いっぱいなところがたまらないわ。貴方たち、お手柄よ!」

「はっ!ありがとうございます!」

その気持ち悪さから、今すぐにも斬りかかってしまいそうなら

ンスをルークとシルが抑える。まだこの部屋にはヘルマン兵が数名いる。ここで騒ぎを起こせば全て台無しだ。

「スプルアンス、スプルアンスはいる？」

「はっ、ここに！」

ヘンダーソンがそう叫ぶと、奥から甲冑を着込んだ太った男が現れた。先ほどのオルグといい、軍人とは思えないような体型だ。

「マリアのいないカスタム軍なんて赤子の手を捻るも同然よ。失敗は許されないわ、すぐに叩きつぶしておしまい！おほほほほほ！」

「はい、ヘンダーソン様！リーザスの洗脳部隊も投入されますか？既にナースが集団コントロールを出来る状態になっておりますが」

「当然投入よ！地下にいるナースにそう命じておきなさい。町の近くで反抗が続いている傭兵部隊に少し向かわせて、後は全て他のヘルマン軍と一緒にカスタムに向かわせなさい！これでカスタムもおしまいよ！おほほほほ！」

この言葉にルークが無表情ながら反応する。リーザスを洗脳している魔法使いは地下にいるらしい。それさえ倒してしまえば、カスタムに向かうリーザス軍は味方になるのだ。それともう一つ、町の近くで傭兵部隊が戦っているようだ。誰に雇われたかは判らないが、ヘルマン軍と戦っているということは味方になり得る可能性がある。出来れば合流したい。

「じゃあ私は奥の部屋でマリアとメイクラブしてくるから、二時間ほど誰も通しちゃ駄目よ。スプルアンス、後の指示は任せたわよ！」

「はっ、お楽しみを、閣下！」

そう言ってマリアを抱きかかえて奥の部屋へと下がっていくヘン

ダーソン。ご丁寧にも入らないように指示を出すおまけ付きだ。千載一遇のチャンス。スプリアンスに一礼をし、ヘンダーソンの後をこっそりと追うルークたち。その時、屋敷にいたメイドに声を掛けられる。

「……もしかして、ルーク様ですか？」

「！？ミーキルちゃんか！スマン、ちよつとこつちへ」

「おい、この美少女は誰だ？俺様に紹介しろ！」

「ランス様、騒ぐと周りのヘルマン兵に怪しまれてしまいます……」

声を掛けてきたのはラジールの町を代々治めるラジール家の娘、ミーキルだ。ラジールの町はラジール家と都市長が協力して治めている町だ。かつてギルドの依頼で何度かこの町に立ち寄ったことがあるルークは、ラジール家とも都市長のアムロとも知り合っていた。ミーキルに事情を話し、同時にあちらの事情も聞く。ヘルマン軍に占領された後、父と母は地下牢に閉じ込められ、自分はメイドとして兵の慰安をさせられていたという。そのミーキルをそつと抱きしめるルーク。

「もう安心していい。必ず、ヘルマン軍は倒す」

「そうだ！ヘルマン兵は残らず俺様が皆殺しにするから、後で精一杯サービスするように！」

「ありがとうございます。ルーク様、ランス様！」

「とりあえずあのオカマ野郎をプチツと殺してくるかな、がはは！」

「あつ、待って下さい。ヘンダーソンの部屋に入るには合い言葉が必要です。「うつきーまるまる」と尋ねられたら、「朝ご飯食べたいな」と応えて下さい」

「…随分と変わった合い言葉だな」

ミーキルに合い言葉を聞いたルークたちはヘンダーソンの部屋の

前までやってくる。部屋の前に立っていたヘルマン兵がこちらに尋ねてくる。

「ん？誰も通すなと言われているが？」

「警護を変わるようスプルアンズ様から仰せつかってきた。いざという時のために三人配置した方が安全だからな。あんたは休憩しに行ってくれ」

「そうか？では合い言葉だ。うつきーまるまる」

「がはは、知っているぞ。朝ご飯食べたいなだ！」

「よし、それじゃあ後は任せた」

扉の前で警護をしていたヘルマン兵が去っていく。これで邪魔者はいない。扉を開け、部屋の中に入ると服を脱がされ下着姿のマリアに今正に襲いかかろうとしているヘンダーソンがいた。こちらに気がついたヘンダーソンが不機嫌そうに言ってくる。

「貴方たち、入るなと言っておいたはずでしょう」

「マリア、何とか大事には至ってないようだな」

「がはは、もうちょい待ってから来た方が全裸になっていてよかったですかな？」

「もう、ランス！」

「…不愉快ですね。さつきから美しいこの私を無視するなんて…」「がはは、不男が何か言ってるぞ」

ランスがヘンダーソンを指差し笑う。ヘンダーソンが驚いている隙について、マリアが服を掴んでこちらに駆け寄ってくる。侮辱された事に腹を立てたのか、ブルブルとヘンダーソンが肩を振るわせる。

「ぶ、無礼な。この美しい紳士である私になんてことを…」

「美しいのを自負するのはいいが、自分になびかない女をこうして無理矢理犯そうとするのは紳士のする事じゃないな」

「紳士というのは俺様のような者のことを言うんだ！」

ルークとランスにそう言われ、怒りが限界に達したのかスツとヘンダーソンが立ち上がり、こちらに向き直る。表情は先ほどまでのものと違い、真剣そのもの。

「…どうやら私を甘く見ているようね」

「何だ？ただの変態スケベ親父だろ？」

「そうよ！絶対に許さないんだから！」

「ふふふ、ただの親父が、ヘルマン軍司令官になれる訳ないでしょうっ？」

そう言い放つと、ヘンダーソンの姿が少しずつ変わっていく。足と手の先が、岩に覆われていくのだ。

「まさか、リカーマンか！？生き残りがいたのか」

「そう！私はリカーマンの生き残り。ストーン・ガーディアンに変身するこの能力で、八つ裂きにしてあげるわ！！」

リカーマン。変身人間とも呼ばれる種族で、姿形を変える能力を持つ種族である。数年前、ゼスで実施された異文化撲滅政策により虐殺され、絶滅したと思われていたが、政策よりも前にヘルマン軍に所属していたヘンダーソンは虐殺から逃れていたようだ。

「普通のストーン・ガーディアンとは思わない事ね！数倍の強さよ
！！」

「ちっ……」

「ランス様……」

「そんな…」

ヘンダーソンの腕と足が徐々に岩に覆われていく。

「ラ ポタン ポタン ペロ…」

徐々に、徐々に覆われていく。

「ホシトマリノトヒソ ビイー」

「……………ふああ」

ようやく腕は肘の辺り、足は膝下まで岩で覆われた。シルがあくびを掻いている。

「……………ランス」

「……………うむ」

「おほほ、後十分ほど待ってなさい！この私の能力で…」

そう言った瞬間、ヘンダーソンの体にルークとランスの剣が突き刺さる。信じられないものを見るような目でこちらを見てくる。

「うっ…卑怯者…変身の呪文の最中に攻撃をするなんて…反則よ…」
「隙だらけだ、馬鹿」

「来世ではもう少し早く変身できるようになるんだな」

おびただしい量の出血をしながら、ヘンダーソンが崩れ落ち、程なくして息絶えた。これで目的の一つは果たした。後は地下の魔法使いを倒すだけだ。その時、部屋の窓から外の景色が見える。町の外、すぐ側で戦っている音が聞こえる。あれが先ほど話しに出っていた傭兵部隊。遠目からでも壊滅寸前な事が判る。

「ランス、マリア、シイルちゃん。地下の魔法使いは任せていいか。リーザス兵を操るのに精一杯で大した驚異ではないはずだ」
「ルークさんはどうされるんですか？」

シイルの問いかけに、窓の外を親指で指さすルーク。

「あそこでリーザス兵と戦っている傭兵部隊とやらの加勢に行つてくる」

「集団戦なんだ。貴様一人が行つたところで何も変わるまい」

「いや、戦力としてではなく、伝令だな。あと少し耐えればリーザス兵の洗脳が解け、戦いが終わるっていう事だな。戦いの終わりが迫っていると判れば、それだけで大分持ち堪えられるはずさ」

「ふん、まあ魔法使いは任せろ。ナースという名前からして、女だろう。ぐふふ……」

「頼んだ、出来るだけ早く片付けてくれ。俺もカスタムのみんなもあの傭兵たちもいつまで持ち堪えられるかは判らんからな」

「任せて下さい。ルークさんも気をつけて！」

そう言つて一時的にルークはランスたちと別れる。ランスたちは屋敷の地下を目指し、ルークはヘルマン兵に化けて屋敷を後にし、戦いが行われている町の外へと駆け出す。洗脳されているリーザス軍の手によつて、壊滅寸前にある傭兵部隊を救うために。

・ラジールの町周辺 荒野・

一人、また一人と傭兵が倒れていく。決して傭兵たちも実力がない訳ではないのだが、圧倒的な物量に押されている。そして、モチ

バージョンを下げているもう一つの理由がある。

「参ったねえ。まさか雇われたリーザス軍に襲われるとは……」

「こういうゲスな行動をする国ではないはずだが……ヘルマンに無理矢理やらされているのか？」

そう、この傭兵たちはリーザスに雇われたのだ。リーザス陥落後、国を救うための戦力増強のため、白の軍將軍エクスが雇ったのだ。しかし、仲介役を通して救援に駆けつけてみれば、そのリーザス軍が襲ってきたのだ。これではモチベーションが上がるわけがない。傭兵部隊を仕切るのは二人。モヒカンの男戦士と、赤い甲冑に身を纏った女戦士。ボロボロになりながらも、二人は必死にリーザス軍の猛攻を耐えていた。

「これじゃ、報酬は無しか？プル・ペット様になんて言やぁいいんだあ？」

「ふん、報酬よりも生き延びることが先決だな。しかし……流石に厳しいな」

「おいおい、俺はまだまだ殺したりねえぞ！」

1000名引き連れてきた傭兵たちも、既に1000名を切った。周囲を囲まれている為、逃げることも出来ない。年貢の納め時か。諦めにも似た空気が漂う中、ラジールの町の方から一人のヘルマン兵がこちらに駆けてくる。仲間であるためリーザス軍は手を出さず、その男は傭兵たちの前までやってきた。

「なんだい、新手か？」

「いや、違う。俺はヘルマン兵じゃない。加勢に来た。それと、あと少し耐えればリーザス軍は正気に戻るはずだ」

「どづいうことだ？」

「リーザス軍はヘルマンの魔法使いに操られているんだ。今仲間が魔法使いを倒しに向かっている。あと少しの辛抱だ」

突如現れたヘルマン兵の格好をした男の言葉に驚きを隠せない二人。

「どうする？信じるか？」

「ふ、わざわざこの状況で嘘を言いに来る奴もいないだろ。判った、救援感謝する！」

「あーあ、でも国がこの状況じゃ、報酬は期待できそうにねえな」

「いや、そんな事はないぞ。どうせこのまま帰ってもほぼ無報酬だろ？このままりーザス解放戦に協力してくれないか？成功したらりーザス王女からたんまりと報酬が出るぞ」

「何だ？随分と大口を叩くな？」

「ま、一応知り合いなんぞな。王女も侍女もそういうのにケチな性格でもないし、一応口利きをしてもいいが」

意外な返答に目を見開く二人の傭兵。モヒカンの男が問いかけてくる。

「おいおい、あんた思ったより大物か？」

「そんなんじゃないさ、ただの冒険者だ。偶然知り合う機会があったな」

「ふ、乗った。どうせこのまま帰ってもプル・ペットの奴に小言を言われるだけしな」

「まだヘルマン兵を殺し足りないと思ってたところだ。俺も乗るぜ！」

「じゃあこれからは仲間だな。短い間だが宜しく頼む」

そう言い合い、武器を握りしめ迫ってくるリーザス軍に向き直る

三人。リーザス解放まで約束を取り付けたんだ。ここで死ぬのは傭兵としても、口利きを約束した者としても契約違反だ。

「俺の名はルーク・グラント。リーザス解放のために動いている」

「ルイス・キートワックだ！しばらくの間世話になるぜ！」

「セシル・カーナだ。宜しく頼む」

- カスタムの町防衛線 -

「ルークさんに任されたんです！ヘルマン軍はそこまで迫っていますが、みなさん、張り切ってくださいますよー！」

トマトが部隊の仲間たちにそう宣言する。ルークに声を掛けられてから、明らかに張り切っている。誰がどう見てもルークに何かしらの感情を抱いているのはバレバレだった。かなみがため息をつく。

「やっぱりルークさんって…もてるんだなあ…アイスでもそんな事聞いたし…」

「かなみさん…で、よかつたわよね？」

後ろから声を掛けられる。振り返ると声を掛けてきたのは魔法部隊を指揮する魔想志津香。先ほど作戦室で自己紹介をした相手だ。その時はクールだけど優しそうな女性と思ったが、何故か今は、口は笑っているのに目が笑っていない。

「はい、かなみで合っています。志津香さん、何か用ですか？」

「いえ、ちょっと面白いことを耳にしたものだから気になってね。

今の話し、少し聞かせて貰ってもいいかしら？」

「今のは…ルークさんの事ですか？」

「そう。アイスの町でどんなことを聞いたのかしら？」

「その…ギルドの人に…よく告白されていたとか…ひ、一晩限りの関係をよく持っていたとか…聞きまして…」

「……………へーえ」

・ラジールの町周辺 荒野・

「…急に寒気が」

「おいおい、戦いの最中に倒れないでくれよ？」

第42話 変身人間（後書き）

「人物」

ミリ・ヨークス（3）

LV 20 / 28

技能 剣戦闘LV1

カスタムで薬屋を営む女戦士。実戦部隊第二軍指揮官。指揮官には向いていないとは本人の談だが、前線で颯爽と戦うその姿に他の者たちも引つ張られる形となり、中々に良い形に収まっている。

チサ・ゴード（3）

カスタム町長。父親の後を引き継ぎ、精一杯頑張っている。防衛戦では戦えないながらも、手当や炊き出しなど奔走している。

芳川真知子（3）

カスタムの町の情報屋。防衛軍作戦参謀。コンピュータを駆使した作戦は、素人とは思えぬ働きを見せる。ルークと久しぶりの再会を果たし、内心はかなり喜んでいいる。

ルイス・キートワック

LV 23 / 39

技能 剣戦闘LV1

腕利きの傭兵。プル・ペットという商人を仲介役としている。恩義があるようで、彼には頭が上がらないらしい。殺しに快楽を覚える危ない性格だが、義理堅く、受けた依頼を途中で投げ出すこともない。才能でこそセシルに劣るが、傭兵稼業はルイスの方が長く、経験でまだルイスの方が上回っている。

セシル・カーナ

LV 21 / 42

技能 剣戦闘 LV1

腕利きの傭兵。プル・ペットという商人を仲介役としている。紅の天使の異名を持つ実力者で、女としてではなく戦士としての評価を欲している。ミリとは親友の間柄。

ミーキル・デバ・ラジール

ラジール家の娘。ヘルマンに慰み者になり、人生を諦めていたが、ルークたちに助けられ希望を取り戻す。

ヘンダーソン

LV 12 / 18

技能 変身 LV1

ヘルマン第3軍司令官の一人。気持ちの悪いオカマだが、カスタムの町侵攻を指揮していた。絶滅したと思われるいたりカーマンであり、変身能力を有する。変身できていれば強敵であった。

スプルアンス

ヘルマン第3軍小隊長。ヘンダーソンの忠実な部下で、カスタムの町侵攻を前線で取り仕切る。豚のような醜い姿をしている。

アイザック

ヘルマン第3軍小隊長。パットンの護衛に残っていた下っ端の中では一番偉い存在。評議員のハンティに憧れており、いつかカラーの恋人が欲しいと思っている。

オルゲ

ヘルマン第3軍一般兵。スプルアンスに負けず劣らず、見にくい豚のような姿。生まれが良いらしく、自分の階級にいつも愚痴を言っている。

「技能」

変身

自分の姿を変身させる技能。自分より強い者に変身することも可能。変身出来る時間は対象の強さで変化。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5750x/>

ランスIF 二人の英雄

2011年11月18日13時05分発行